

第6章 赤壁の賦

—^{こう}黄州

■十二月二十八日蒙恩責授檢校水部員外郎黄州團練副使復用前韻二首

^{げんぼう}元豐2 (1079) 年、蘇軾 44 歳。

「困窮して後に人は詩に巧みになる」とは^{おうようしゅう}歐陽脩の言葉 (第4章 181 ページ)。^{ばいぎょうしん}梅堯臣の詩集に寄せた序文の中にあり、その直前に「^{けだ いよ きゅう}蓋し愈いよ窮すれば^{すなわ いよ たく}則ち愈いよ工みなり」とある。これはむしろ蘇軾のために記されたかのように (時間は前後するが) 思えもする。前の章までに見たように、蘇軾の詩はすでに巧みで、^{こうらい}高麗国にも聞こえるほどであった。しかし、もしもこれから後に見る詩がなかったならば、蘇軾は梅堯臣や^{おうようしゅう}歐陽脩と肩を並べる^{ほくそう}北宋の代表的詩人の一人という評価に留まったのではなからうか (その特徴は、難解な語句を自在に駆使し、次韻を異様に得意とし、時に人の意表を衝く警句もしくは諧謔の辞を吐く)。蘇軾が北宋のみならず中国を代表する詩人の一人とされるのは、^{いよ きゅう いよ}愈いよ窮して愈いよ^{たく}工みになったからで、本章からその過程をたどることになる。

^{ぎょし だい}御史台の獄での^{いよ}苛酷な^{しんそう}審理は4カ月間にわたった。最終的に^{しんそう}神宗皇帝が下した処分がいかなるものであったのか、それがこの詩題に記されて

いる。「十二月二十八日、恩を蒙り、こうむ 檢校水部員外郎、けんこうすいぶ いんがいろう 黃州團練副使こうしゅうだんれんふくしに
せきじゆ 責授され、前の韻を用いてまた二首を作った」。皇帝の御恩によって（死罪は免れて）官位を下げる処分となり、「檢校水部員外郎」という名目上の官位と、「黃州の團練副使」という実質的に仕事のない職を与えられた。詩題では省かれているが、正式の処分には、「黃州團練副使」の後ろに「本
しゅうあん ち ふとくせんしよこうじ 州安置不得簽書公事」の10文字があり、つまり、黃州で軟禁状態に置かれ、公文書に署名できない（つまり公の仕事を禁じる）とされた。

蘇軾を告発した人々（りてい じょたん かせいしん ちようそう 李定、舒亶、何正臣、張璪等）は何としてでも蘇軾を死罪にしようと手を尽くしたが、神宗皇帝が特に罪を軽くしたというのが、当時の人々の一般的な理解であった。しかし、宋代の法体系からして、蘇軾の罪状に対する罰としてはこの程度が妥当で、神宗皇帝が特別に優遇したわけではないという説もある。

（この事件で処分を受けたのは蘇軾だけではなかった。おうしん 王誥（第5章155ページなど）は先帝の嬖として特別の恩を受けていながら朝廷の機密を漏らした罪で全ての官職を停止され、弟の蘇轍は自身の官位をもって兄の罪を贖いたいと申し出ていることもあって、官位を下げられていん 筠州に移され、おうきやう 王鞏（第5章195ページなど）は遙か南方の賓州に流された。それ以外にも蘇軾と交流のあったちやうほうへい 張方平とりせいしん 李清臣は罰として銅三十斤を科せられ、しぼこう はんちん せんそう ちんじよう りゆうはん りじよう せんかく そうきやう こうていけん ごと 司馬光、范鎮、錢藻、陳襄、劉攽、李常、孫覺、曾鞏、黃庭堅、吳琯、周邠、顏復ら22人は罰として銅二十斤を科せられた（銅量の差は、張方平と李清臣が高い地位にあることによるのだろうか）。王鞏もこれらの人々と同レベルで、特

別に何かをしたようにには見えないのだが、なぜか群を抜いて重い処分となり、蘇軾は王鞏に対してすまないことをしたと後に述懐している。劉攽はかつて言葉が過ぎるのではないかと蘇軾に忠告していた（第5章66ページ）。それに素直に従っていたならこのようなことにはならなかったのかもしれないが、^{いよ}愈いよ^{きゆう}窮することがなくて蘇軾の詩文が熟す機会が失われてしまったであろう）

皇帝の詔が下ったのは12月26日、蘇軾は12月28日に獄を出て、すぐに2首の詩を作った。獄中で弟に向けて詠んだ詩（第5章402ページ）と同じ韻を用い、次韻の達人ぶりは健在であった。

其の一

獄中で百日……

娑婆に帰るのはちょうど春になろうというとき。

我が身に最も関わるのは、残された歳月の楽しみ事だ。

門を出て、まずはしゃつほうじょう便旋すると、春の風が顔に吹いてくる。

人々と馬をかろひ連ねて走ると、鶴かろひがにぎやかに祝ってくれる。

酒杯に向かうと、すべては夢——

試しに筆を執れば、すでに神技のように詩が湧いてくる。

このたびの災いのもとには必ずしも深く追求しなくてもよいのだろう。

前々から禄を竊みとっていたのだから、それが原因でないことはないのだ。

^{べんせん}（「便旋」の解釈は一つではないが、しゃつと立小便することだとするのがいかにも蘇

軾らしくて人気がある。しかし、その解釈だと、詩文のせいで死罪になりかけたのに、解放された途端いきなり品のない詩を作り全く懲りない人間だと、人を呆れさせる度合いはよりひどくなる。それにしても、同じ韻を使って、獄中での重苦しい詩と、この軽やかな詩が作れてしまうというのは、まさに神技なのだろう)

其の二

文字は、普段から私に災いをもたらすものであった。

これからはこれをやめ、私の評判が低くなってもよしとしよう。

どのみち「万事塞翁が馬」なのだ、今日の不幸が将来の幸福を導くと期待してみたり、

玄宗皇帝げんそうの好みに合わせて闘鶏の技を習って出世を目指した少年の真似をしてみたり、

そういったことはしないのだ。

官職を棄てた陶淵明とうえんめいは、貧乏で好きな酒さえなかった、

釈迦の弟子の維摩詰いまいまつは、病んで机にもたれながらも仏法を妻とした、

そういったことを我がこととしたいものだ。

それにしても笑ってしまうのは、

南京応天府なんけいおうてんの老役人だ、

僕のために意気がった文章を書いて江西こうせいに流されてしまったのだから。

(末句は、決死の覚悟で嘆願書(第5章404ページ)を書いた弟を「笑ってしまう」と

手荒く言い放ちつつ、実は深く感謝しているのである)

(蘇軾を告発した急先鋒の一人に李定が^{りてい}いたが、李定には次のようなエピソードが伝えられていることを補足しておきたい。

李定は蘇軾を獄中で尋問し、その勢いは激しかった。ある日、李定は崇政殿の門の外で同輩と語り、「蘇軾は奇才である」と言った。同輩は(意外であったので)返事ができずにいると、「二、三十年前のこと、蘇軾が詩文を作り、経典や史書から故事をいろいろに引いていた。それについて問うと蘇軾は即答し、一字の誤りもなかった。まことに天下の奇才ではないか」と、しばらく嘆息してやまなかった。

仇敵といえども蘇軾の才を認めないわけにはいかなかったのである。

これは邵博^{しょうはく}著『邵氏聞見後録』^{しょうし ぶんけんこうろく}という随筆にある。邵博の父は司馬光^{しばこう}とも深い交流のあった人で、ある程度信憑性がある話なのだろう。ここで蘇軾に問うたのが李定自身であるかどうかはよくわからない。「二、三十年前」とあるのは、蘇軾^{せいか}が制科を受けたころのことであろうか)

■文与可飛白贊

げんぼう
元豊3 (1080) 年、蘇軾 45 歳。

獄を出て3日後の1月1日に、蘇軾は都を^{こう}発って黄州に向かった。同行したのは長男の蘇邁^{そまい}だけ(もちろん馬正卿^{ばせいけい}のような身の回りの世話をする者は^{なんけいおうてん ふ}いただろう)で、その他の家族は南京^{なんけい}応天府の蘇轍^{そてつ}のもとに身を

寄せていた。

黄州は長江中流の小都市で、まず船で陳州を目指し、そこで文務光（字は逸民）に会った。文務光は親友文同（字は与可）の子で、蘇轍の娘の婿。文同は1年前に陳州で亡くなっていて（第5章325ページ）、息子は父の棺とともになおここに留まっていた。蘇軾は文同の遺品を見て、この短文を記した。逮捕直前の前年7月7日に文同の画についての文を記していたこと（第5章380ページ）を思うと、出獄後の最初の文章が文同の書について記したものであるのは感慨深い。

嗚呼、哀しいではないか。

文同には、好むものがこうたくさんあったとは。好むものがこうも奇しかったとは。孔子はこう言ったという。「私は世に用いられなかった。だから多芸となった」。文同もまたそうであったのだろうか。

私は始めに文同の詩と文を見た。それから、行書と草書と篆書と隸書を見て、これで全てであろうと思った。

亡くなって一年が経って、ここに飛白を見た。あまりにも美しい。まさしく万物のありよみがここにことごとく尽くされている。

文同の筆の痕を自然界の事物に譬えるなら――

罪罪として軽やかな雲が月を蔽うかのよう、翻翻として長やかな風が旆を巻くかのよう、猗猗として遊糸が柳の絮にまわりつくかのよう、裏裏として流れる水が苧帯

を舞わせるかのよう。

文同の筆の勢いは――

離離^{りり}として遠くどこまでも及んで断たれることなく、縮縮^{しゅくしゅく}として近くに溢れて滞ることがない。

文同^{たく}のエミがここにまで至っていたことを私は初めて知った。私が知っている文同はほんのいくばくでもなく、私の知らない文同は恐らく計りようがないのであろう。

嗚呼^{ああ}、哀しいではないか。

飛白^{ひはく}とは書法の一つで、筆に墨をあまり含ませないで、白い部分を多く残してかすれたように書く。霏霏、翻翻、猗猗、裊裊、離離、縮縮の6個のオノマトペで文同の書を表現している。オノマトペの意味するところは、それに続く語句に示されている通りで、無理に日本語に置き換える必要はないだろう。「哀しい」とあるのは、文同が「計りようがない」ものをさらに発揮させる機会が永久に失われたことをいうのだらう)

■陳州与文郎逸民飲別携手河堤上作此詩

陳州^{ちん}に滞在する間に、南京^{なんけい}応天府^{おうてんふ}から蘇轍^そがきた。陳州は9年前に蘇軾が杭州に赴任する途中でしばらく弟と過ごした場所でもあった(第3章 105 ページ)。今回は兄弟が一緒にいられたのはわずかに3日間で、1月14日、蘇軾は陳州の川のほとりで、弟と文務光^{ぶんむこう} (字は逸民^{いつみん}) と別れた。これは文務光に送った詩。

白く濁った酒は何もいわない。

静かに瀉そげば油のように滑らかである。

酔って堤の上を歩いて、我が愁いを発散させようとする。

春の風は料峭ひやひやとして、羊の角のように向きが定まらずにあれこれ転じる。

河の水は渺綿ゆるゆるとして、瓜の蔓のようにあてどなく流れゆく。

君はすでに帰ることを思い、巴峽はきょうを夢みているであろう。

私はまだ到っていないので、黄州について説くことができない。

人の世に生きる我等に、離合集散はやむことがない。

だからといって、

楚の囚人の悲しい歌を学ぼうとは思わない。

(1) 文務光も蘇軾しよくも蜀しよくの人で、故郷ちようこうは長江を遡った巴峽(三峡の一つ)の先にある。黄州はその巴峽の手前にある。文務光は父の棺を携えて近く帰郷するので、「帰ることを思い」と詠んでいるのである。(2)「楚の囚人の悲しい歌」とは次のような故事による。遠い昔のこと(紀元前582年とされる)、晋国の景公しん けいこうが、楚国から捕虜として連れてこられた囚人を見たところ、その中にきちんとした身なりの人物がいた。誰であるかと尋ねると、楚国で楽官であった鍾儀しゆうぎであった。景公が鍾儀に琴を与えると、楚国の音楽を演奏し、幾つか問うと、その答え方には仁、信、忠、敏が具わっていた。そこで、鍾儀を礼儀正しく扱って帰国させ、楚国との和議を進めた。それから900年ほど後に、晋朝しん(先の晋国とは全く別の王朝)は異民族の攻撃を受けて都洛陽らくよう

失い、一部の皇族、貴族は南方に逃れ、江南こうなんの見慣れない風景に涙を流した。王導おうどうは、「楚の囚人のように泣いてばかりでどうするのか」と、人々を励まし、晋朝の再興に向けて努力した。蘇軾は、これらのことを踏まえて、自分はまさに異郷の地に囚われの身となるけれど、それを悲しむような歌をうたおうとは思わないと言ったのである。「羊の角」や「瓜の蔓」のように先は見定めることはできずとも悲嘆はしない——この決意は黄州でのこれからの日々の基調となる)

■子由自南都来陳三日而別

陳州ちんでの別れに際して弟にも詩を送った。

夫子せんせいだって、朝廷おを逐われた身であるのに、

楚その囚人であるこの僕のことを、よくまあ哀しんでくれるものだ。

たちまち三百里をあたふた馳はしってきて、僕の憂ゆるいを寛めようとしてくれるとは。

君と逢うと、やはり得るところがあるとわかる——

君は道を修めた眼をしていて、清く澄み、あらぬところへ視線が流れたりすることがない。

この前別れてからまだ一年にならないけれど、

どうたい、僕の顔に浮かんでいた驕おごった気配は落ち尽したのではないかな。

だけど、僕は道みちを聞くことが晩おそくて、了見りょうけんのちっつけなことといったらかの孫休そんきゅうのようなものだ。

至言(最も大切なこと)をいつまでたっても自分のものとするのができないし、

放心(本来の場所から散ってしまった心)を自分で収め直すこともできないのだ。

やはり、善知識(良識のあるよい友)こそが、

妙薬を投じればただちに応じるところがあるのと同じであって、

君の言葉を、この憂い患うときに納れることで、

獄中で過ごした百日間の愁いも消し去ることができるというものだ。

僕は冥く頑なで教化し難い人間ではあるけれど、

君によって、その頑ななところが鑄られ、冥いところが発かれることが、

すでに周く全体に及ぼうとしている。

普段の心の種々の乱れも、次第に去って留まるものはなくなるであろう。

そして、無所還(還るところがあるとするのは、還るところがないとするのになお及ばない)のところで永く夫子と遊びたいと思う。

だから、今回の別れなどは言うに足りないものだ、

長江の東と西になるだけではないか。

煩惱を毒蛇に譬え、毒蛇の這う床を畏れて禪榻から下りないのがよいというけれども、

そのまま榻の上でたっぴりと眠れたなら、それ以上に求めるものはない。

つまり、僕は黄州を禪榻だと思ってそこに安んじるつもりでいて、

必ずしも故郷に帰りたいとは思っていないのだ。

((1) 最初に弟に向かって「夫子」(先生)と呼びかけているのは、弟を敬いつつ、

冗談ぽくもしているのだろう。(2) 自分のことを「楚の囚人」といっているのは、前の詩の続きとしてこれが詠まれているためだ。(3) 苛酷な獄中体験を経てこれからいかに生きたらよいか、蘇軾はいろいろな思索を巡らしていたのだろう。その支えとなったのは、儒学であるよりも、^{そうし} 荘子の哲学であり仏教であったようだ。孫休は『^じ 莊子』の説話に出てくる人物で、「善知識」「無所還」^{いじや} 「畏蛇」などは仏教用語で、それらを用いて何をいおうとしているのか、掴み取るのはなかなか容易ではない。脇道に逸れるようだが、蘇軾の思索に触れるために孫休の説話を見ておこう。

^{そんきゆう} 孫休という者がいた。^{へんけいし} 扁慶子先生の門を訪ねて、孫休はこのように言った。

「私は郷里にいて身が修まっていな^いといわれたことはありません。困難に臨んで勇気がないといわれたこともありません。しかし、田を耕して豊年に遇ったことがなく、君主に仕えて世の時流^あに遇ったことがなく、村からは排斥され、町からは追ひ払われ、そんなこんなで、私は何か天に対して罪があるのでしょうか、私はどうしてこのような運命であるのでしょうか」

扁慶子は答えた。

「君は聞いたことがないのかい、かの^{しじん} 至人(最高の道徳を具えた人)がどのように振る舞っているのかを。至人は自分の^{こころ} 肝胆を忘れ、自分の耳目^{わす}を遺れ、塵と垢にまみれた世間の外を悠々と歩きまわり、何事もしないという業に遊んでいる。これはいわゆる『為して恃まず、^{ちよう} 長じて宰せず』(何かをしても己を誇らないし、何かを^{かいく} 化育しても支配しない)ということなのだ。いまそなたは知識を見せびらかして愚かな者を驚かせ、身を修めて他人の汚点を明らか^なに

てみせ、あかあかと日月を掲げて行くように自分を目立たせようとしている。それでいながら、
 そなたは身体をきちんと保っていて、九つの竅あなを具えたまま人生の途中で聾、盲、跛、蹇
 になることがなく、人間の仲間の数に入っているのだから、それだけで幸せなのでは
 ないのかい。それでどうして天を怨んだりするのだ。さあ、もう往いってくれ」

孫休が出て行くと、扁慶子は部屋に戻って座り、しばらくして天を仰いで嘆息した。弟子が
 尋ねた。

「先生はどうして溜め息をつかれるのですか」

扁慶子は答えた。

「いま孫休なる者がきた。私はこの者に至人の徳を告げた。孫休が驚いてしまって、つい
 には惑いに至ることを私はいま恐れているのだ」

弟子は言った。

「そうはなりませんでしょう。孫休の言うところが正しくて、先生の言われることが間違ってい
 るのなら、間違いは正しいものを惑わすことができません。逆に、孫休の言うところが間違
 っていて、先生の言われることが正しいのなら、孫休はもともと惑っていたわけですから、
 先生に罪などありません」

扁慶子は言った。

「そうではない。昔、魯ろ国の郊外に珍しい鳥がきて留まった。魯の君主は喜んで、鳥のた
 めに正式の御馳走を用意してもてなし、古代の名曲を演奏して楽しんでもらおうとした。鳥
 は憂い悲しみ、目をきよろきよろさせて、飲食することがなかった。魯の君主は自分を養うの
 と同じようにして鳥を養おうとしたのだが、鳥は鳥を養うようにして養わなければいけないの

だ。人のいない林に棲まわせるなり、広い湖に浮かばせるなりして、泥鰌や蚯蚓を食べさせておけば安らかにしていられる。孫休は、小さな孔から覗いて、わずかなことしか聞いていない了見の狭い人間である。これに対して私は至人の徳を告げてしまった。これを譬えれば、鼠を載せるために馬の曳く車を用い、鶉を楽しませるために鐘や太鼓を叩くようなものだ。孫休は驚かすにはいないのだ」
(『莊子』達生篇)

蘇軾は、ここにある「知識を見せびらかして……」(知を飾って愚を驚かし、身を脩めて汗を明らかにし、昭昭乎として日月を掲げるが若くにして行く)というのは、(かつてはよもや自分はそうではないと思って読んでいたけれども)実はまさしく自分のことでなのではなからうかと、考えるようになったのだろう(蘇軾を嫌う人からしたら、これ以上にぴったりな形容はない)。制科にまで合格した超エリートとしては、むしろ「昭昭乎として日月を掲げるが若くにして行く」であらねばならないという意識があったかもしれない)

■正月十八日蔡州道上遇雪子由韻二首

陳州から先は陸路で黄州を目指したようだ。1月18日に蔡州に至る道で春の雪に会い、弟がかつて雪を詠んだ詩に次韻した。

(蘇軾は詩の題に時折日付を入れるので、いつどこで何をしたのかを知るよい手がかかりとなる。時には、何年も後の書簡などに、あの年のあの日に何をしたらといったことを書いていたりもしている。そうしたものを丹念に集めることによって、蘇軾の詳細な年譜が編まれている。この訳では、年譜の集大成である孔凡礼撰『蘇軾年譜』(1998

年)に依拠して詩文をできる限り制作順に並べている)

其の一

路傍の蘭や菊に生意せい い(生命エネルギー)がある。

微かな陽あたたかみによって、根が短いながらも張られつつあるのだろう。

蘭や菊は、

暮れ方には雪が己の身に集まってくるのを憂い、

明け方には朝日を迎えるのを喜ぶ。

憶うに、僕等の故郷の居室では、

朝の光は、南の軒端で揺れ動き、

雪の晩には、松や竹が傾いて雪を落とした。

いまごろの季節には、

まだ葵あおいや萱わすれぐさは数えることはできなかったけれど、

我が家に通じる道には様々な草が茂り、

早朝に酌む井戸水は温かかった。

かつて僕等が歩きつつ詩を吟じたところには、

きつといまも僕らの履の痕が残っているだろう。

あるときから僕等は故郷を出て官に仕えたので、

蜀の地を生涯出ることがなかった古代の賢人、李仲元り ちゆうげんに対してずっと愧はじなればならなくなった。

この年齢になってさらにますます^は差じなければならないのは、
雪を冒してこ^はして南へと奔らなければならないこと。

これから行く小さな町では、

廃れた農園でも買って、

僕は自分の手で枯れた枝葉を取り除き、

昔の東陵侯^{とうりやうこう}に習って瓜でも植えて、

あそこの畑の瓜は旨かったなあど、

あとあとまでも町に人々に言い伝えられるようにするつもりでいるのだよ。

(詩の末尾にあるのは、^{しょうへい}召平という人の故事。蘇軾はそのことを時々詩文に引いているので、ここで紹介しておく。召平^{しん しこうてい}は秦の始皇帝に仕えて高位に昇り、東陵侯に封じられたが、秦朝の混乱を見て一般庶民に自ら身分を落とし、漢^{かん}の世になると、長安^{ちやうあん}の東の農園で瓜を栽培して町に出て売った。その瓜は非常に味がよかったので評判になり、召平がもとの東陵侯であったことも知れて、「東陵の瓜」と呼ばれるようになった。召平の身の処し方は一つのよい手本とされた)

其の二

鉛^{あはら}の膏を使って白髪を染めたところで、

白く霜や雪のついた毛の根元はすぐに露わになってしまう。

そんなことをするよりは、目を閉じて座り、

^{こころ}丹府の夜に自ずから朝日が射してくるのを待つのがよいだろう。

いかなる憂患の中にあっても、方寸には太古の純朴さが寓されている。

大雪で家が潰れたってかまわないさ、

僕はわすれぐさ萱を見てめめめするような者ではない。

普段からかかと踵で息することを学んでいるので、

この雪の中でも、あぶみ燈に載せた両足が温かくなってくるのがわかる。

馬より下りてこの雪を詩に詠む。

見渡す限りのところに、人々が行き来した痕がある。

原野を望んで佇み、民衆のために悲歌する。

道で、弓を射る獵師に出逢う。

獵師は、遠く遥かに狐や兎が奔るのを指さす。

雪に残る足跡は尋ねることができただろう。

でも、その棲み穴までは見つけ出さずともよいのではないだろうか。

僕はここでかのり李宰相に謝らないとならない。

だって、僕は李宰相と違って、まだしも丘の園田に帰ることができるのだから。

（1）この詩には道教の術語が織り込まれていて、十分には理解できないところもあるが、このときの複雑な思いが詠まれているようだ。「踵で息する」とは、『莊子』に「真人の息は踵をもってし、衆人の息は喉をもってす」に基づく。自然と一体化した真人は気を全身に廻らせるということなのだろう。（2）「民衆のために悲歌する」（悲歌為黎元）は、厳しい境遇に置かれても、蘇軾は民衆の困苦を考えていたことを示す句として注目される。雪面に残る往来の跡を見て、それぞれに生きる苦勞が宿されて

いると感じ取ったのだ。(3) 末尾にあるのは、李斯^{りし}という人の故事。李斯も先の召平^{しょうへい}と同じく秦^{しん}の始皇帝^{しこうてい}に仕え、秦の天下統一に大きく貢献して宰相にまでなった。しかし、強引に富国強兵策を進めたために人々に憎まれ、始皇帝の死後、死刑となった。その最後のありさまを『史記』は次のように記している。「二世皇帝の二年七月、李斯は五つの刑（顔に入れ墨をする、鼻をそぐ、くるぶしから下を斬る、鞭で打って殺す、死骸を市場にさらす）を全て加えられ、咸陽^{かんやう}（後の長安^{ちやうあん}）の市場で胴斬りにされた。李斯が獄から出されたとき次男とともに繋がれ、李斯は息子を顧みて言った。『おまえと一緒にまた黄色い犬^ひを牽いて上蔡^{じやうさい}の東門から出て、兎を逐ってみたいものだ。だが、もうできやしないのだ』。父子ともに泣いた。そして、李斯の三族は皆殺しとなった」。上蔡は李斯の故郷で、李斯はそこでの狩猟を好んだ。上蔡は蔡州のすぐ北の町である。李斯を導き出すために、蘇軾は詩中に実際には見ていない獵師を詠んだのかも知れない。李斯に対して謝っているのは、李斯は無残な殺され方をしたけれど、蘇軾は獄を出て生きることを許されたからだ。(4) 2首の詩で、対照的な召平と李斯を引いて、蘇軾は自分のこれからを考えたのである。蘇軾を始めとして改革を批判する人々は、王安石のやり方は李斯の富国強兵策と同じく非常に危ういものであると指摘していたので、ここで李斯を引いたのは少々複雑な意味合いがあるのだろう)

■過新息留示郷人任師中

蔡州^{さい}から南に150里^{わい}で淮河^がに臨む^{しんそく}新息^{にんきゆう}県。同郷の任伋^{あざな}（字は師中^{しちゆう}）のことを思い起こし、この詩を作って土地の人たちに示した。任伋はその

兄とともに科挙に合格した郷里の大先輩で、いわゆる「小任^{しょうにん}」と呼ばれていた人。第5章205ページで任仮に送った詩を見ている。そこに「かつて蔡州にいたときに土地の人に慕われてよい農地を寄贈された」とあったように、任仮は官職を退いた後は蔡州に住むと決めていた。

昔、私は任先生を羨ましく思った――

新息県の淮河を臨む地に引退後の住まいを得ていると聞いたからだ。

先生は蜀の故郷を忘れてしまったのだろうかと怪しみましたが、

ここにきてみると、

稲がよく稔り、魚がよく肥え、まことに美しいところである。

竹林によって覆われた丘があり、

そこから雁が、天を真黒にして飛び上がる。

半ば霧に隠れて紫色に見えるのは、

漢^{かん}の時代の太守を祀った桐柏廟^{とうはくびょう}のある山だ。

聞くところでは、先生の家族はいま大変な苦しみの中にあるとか。

この清らかな流れのところ早くに帰っておかなかったことを、

先生は悔いておられるのだろうか。

私もまた塵埃^{じんあい}の中で我が身を収めるところを失い、

あたふたと最も鄙^{いや}しむべき旅をしている。

これからの私は、どこか僧侶のもとにでも寄寓するよりなく、

この手紙を先生に送るにして、犬にでも頼まなければならない。
先生のもとに行くことなどはとてもできないけれど、
新たな歲月なら私のところにもきてくれるだろうから、
いつしかお上の御恩を頂戴して帰郷が許されたりするのもかもしれない。
そのときは黄州ちゅうこうから長江を遡らずにむしろ下り、
黄州の特産である水牛を三百頭ほども連れて、
ここ蔡州で暮らそうと思う。

(1) 詩の中ほどに、「先生の家族は苦しみの中にある」(原詩は「君坐きみざして児女困じょこんを受うく」とあるのは、このとき任ろは廬州の知事であったが、不法行為があったとして取り調べを受けていたからだ。その告発をしたのが程てい之才しさいだった。程之才は蘇軾の母の兄ていしゆん程濬の息子で、つまり蘇軾の姉の結婚相手だった。蘇軾の姉は程濬等によって虐待死させられたとして、蘇軾の父そじゆん蘇洵は不道德極まりない程一家との絶縁を宣言し(第4章206ページ)、蘇軾はそれを守り続けていた。(2) 犬に手紙を届けてもらうというのは、晋しん陸機りくきの故事による。陸機は家族と遠く離れて音信も絶えてしまったときに、飼かうじい犬の黄耳に向かって、「おまえが手紙を届けてくれたらなあ」と笑って語りかけると、犬は尾を振って応えたので、首に手紙を括り付けるたところ、犬は走り出て、返事を持って帰ってきた。前に蘇軾が蝗退治で苦勞していたときに、弟に向けて詠んだ詩を犬にでも届けてもらわなければならないとぼやいた(第4章187ページ)のは、同じくこの故事に基づくものである。(3) 水牛は黄州の特産物といわれていたようだ。後に、その水牛を食べる話が出てくる(本章406ページ)

■過淮

わい が
淮河を渡ってこの詩を詠んだ。

しんそく みどり
朝に新息県を離れ、一本の碧の水を横切る。

せんざん
千山が早くも夕日に赤く染まりゆくのを見ながら、

暮れに淮河の南の村に宿る。

夜になると、傷んだ駅舎は霧雨に暗く閉ざされ、

とりで しか おきび
古い成で麿や鼉が叫ぶ。

りょうそ こうべ
古くは梁楚といわれたこの地で頭を回らすと、

ちゅうげん
中原(中華文明の中心地)とは、悠久の昔から遠く隔てられている。

こう
黄州はどこにあるのか、

まず想像されるのは、詩によく詠まれるうんぼうたく
雲夢の沢。

私の生は寄せるようなもの、

もとより適くところを選んだりはしない。

魚や稲さえあるのなら、

せいり ことわり
生理(生きる理、あるいは生きる道)はすでに十分なのである。

一つ喜ばしいのは、

あんいつ
我が息子は小さいときから安佚のうちに育ったのに、

かんなん
このたびの艱難の中に付き従ってきたことで、

かんはい てっせき
肝肺(心のありよう)が鉄石のようになってきたこと。

だから、息子が語るのは、

すいしつ
父親の衰疾をいたわる言葉だけではないのである。

(1) 雲夢の沢は、黄州とは長江をはさんで南にある有名な景勝地(そこそこ距離がある)。これから行くところには不案内であるために、思い浮かぶのはそこくらいしかないというのである。(2) 途中で「私の生は寄せるようなもの」(吾が生は寄せるが如き耳)といういつもの句がある。この句については、吉川幸次郎著『宋詩概説』(岩波書店、1962年)に考察が記されている。(3) 一人従う息子は長男の蘇邁で、このとき23歳。湖州で逮捕されてからの困難な日々を乗り越えてきたことで、目に見えて大人らしくなったのだらう)

■書磨公詩後

蘇軾はいついかなるときも蘇軾なのだろう。苛酷な獄中体験を経て、深い反省の内にあり、この先に大きな不安を抱いていても、目の前に興味を引くものがあれば、それに応じてかなり場違いな言葉さえも吐いてしまう。これは磨公という僧の詩を見て作った詩。次のような序文がついている。

からくちん だいきょてん き そうしやう げきりよ
加祿鎮を過ぎて南に二十五里の大許店で、祁宗祥の逆旅(旅館)で馬を休めた。

見ると、壁に一幅の紙があり次のような詩が記してあった。

満院秋光濃欲滴、(寺の中は滴るばかりの秋の光でいっぱいである)

老僧倚杖青松側。(青い松のかたわらで老いた僧が杖をたよりに立っている)

只怪高声問不応、(大きな声で尋ねても応じてくれないので、おかしいと思っていると)

曠余踏破蒼苔色。(私が蒼い苔を踏んでいるのを怒っているのだった)

その後ふすいに題して、ほうどん滙水の僧の宝磨とある。主人の祁宗祥が私にいうには、「これはこう光州とこう黄州の間を往来していた狂僧でありまして、きねい熙寧十年(三年前)に百三十歳で亡くなりました。いまになっても、この詩を見てこの僧のことを思い出し、おかしな語り草をあれこれいう人がおります」。そこでこの詩を作り、この僧のことをしる識す。磨公の本名はせいがい清戒、俗にはかい おしろう戒和尚と呼ばれていた。

まだせんげ遷化する前の昔、

どんこう磨公は、わいが淮河を囲む山々が曲がりくねるあたりを来往し、

その年齢は還暦を二度超え、

その気迫はいかなる尊い僧侶をも圧倒し、

じよくあく濁悪の世にあることをただただなげ嘆き、

りゆうどう竜象(学徳の高い僧)のしゅうどう蹴踏(教導)を受けることはなかった。

私はここに来たものの磨公に逢うことができず、

その姿を想っておなしくあたりを歩む。

磨公は、びやくこう眉間の白毫(光を放つ毛)を隠したまま亡くなり、

埋葬したとき、骨はぎよく青い玉を連ね、

後に達摩大師のように草鞋を履いて天竺てんじくに還ったのだという。

壁に清らかな詩を残し、その字は俗界から抜きん出た勢いがある。

磨公のために五字の偈げを吟じよう——

一洗いっせんせよ凡眼肉ぼんがんにく(凡人の浅い思慮を洗い流せ)。

(序文に引かれている磨公の詩を、蘇軾は「清らかな詩」(清詩)と形容しているが、どう見てもかなり俗っぽい。「白毫」は仏の眉間に生えている白く長い毛で、世界を照らす光を放つという。磨公が白毫を隠していたというのは過剰過ぎる贅辞であるが、己も磨公のような諧謔の僧として生きる可能性もあったのではなかろうかとふと思ひ、冗談ぽくこの詩を詠んだのであろう)

■遊浄居寺

光山県こうざんにある浄居寺じょうこじに立ち寄っての詩。次のような序文が付いている。

浄居寺は光山県の南四十里、大蘇山だいそざんの南、小蘇山しょうそざんの北にある。寺の僧こじんの居仁が私にいうには、

「斉の天保年間に、僧の恵思えしがここを過りまして、土地の老人らうじんを見てその姓を尋ねましたところ、蘇氏そとの答え。二つの山を大蘇山、小蘇山と呼ぶことを知って恵思は驚き、『私は師から「三蘇さんそに遇ったならばそこに生まれ」といわれておりました』
といて、そのままここに留まって庵を結びました。ところが、先の老人はどこにも姿がなく、たぶん山の神様であったのでしょうか。その後、僧の智顛ちぎんがこの山で恵思

に会い、仏法を得ました。これが世にいうところの思大和尚と智者大師であります。
 唐の神竜年間に道岸禪師が初めてこの地に寺を建て、唐末の広明年間の戦乱
 の際に寺は兵火で失われてしまいましたが、宋の乾興年間に再建して、お上より
 梵天の名を賜りました」

十年の間、私は各地の名山に遊び、山中で着る衣を自分で作りもした。
 息子たちを結婚させたなら、山に入って老いに至ろうと、そのことを願っていた。
 しかし、己がいかなる俗縁によって結ばれているかを悟らなかつたために、
 身を失う危機に陥ってしまった。
 法家の学を修めなかつたことから落とし穴にはまり、
 身に付けた学問を台無しにし、
 ついに死生を隔て、永久に山にも行けなくなると恐れなければならなかつた。
 ああ、今日はいかなる日であろうか、
 山に入って、我が草鞋は飛ぶように軽い。
 浄居寺に至って思大和尚と智者大師に稽首して、
 頭を再び挙げる我が両眼から涙が溢れ出る。
 いまなお智者大師が思大和尚に教えを受けた会合が続いていて、
 その弟子たちの輝きがここに満ちているかのようだ。
 願うのは、二人の師に従って、千劫にわたる非を一洗すること。
 月明かりのもと、竹林の中の溪流を歩けば、ほのかな霧が山に揺れ動く。

鐘の聲に送られて谷を出たけれど、心はなおも山に留まる。

こころ
首を回らして吾が家の名の付く大蘇、小蘇の山を見る。

我が晩年に至って、これから私はどこに帰ろうというのだろうか。

(1) 「法家の学」と訳したのは原詩では「刑名」^{けいめい}。法家は戦国時代に発展した学問の系譜で、人の内側にある規範^{じん}（仁）に則ることを重視する儒家に対して、法によって人を外側から規制することを重視する。秦の始皇帝はそれに基づく施策で国力を強め、天下統一を果たした。しかし、法によって厳しく民衆をコントロールする統治方法は長続きせず、「どうせ死刑になるのなら、国に反逆して死んだ方がましだ」と叫ぶ民衆反乱の嵐^{おうあんせき}によって瓦解した。王安石が主導する改革は「法家の学」に準じるものだとして反対した蘇軾は「刑名」を学ぼうとしなかったために、落とし穴を回避する知恵を持たなかったのである。(2) 蘇軾はここが「三蘇」の地であると聞いて、恵思のように人生の大きな岐路に立っていると強く感じたのだろう。なお後世、「三蘇」といえば蘇洵^{そじゆん}、蘇軾、蘇轍の父子を指すことになる)

■梅花二首

蘇軾は三蘇の地に心をひかれつつも前に進み、1月20日、黄州との境^{こう}に達する。黄州には黄冈県、黄陂県、麻城県が属し、麻城県の春風嶺^{しゆんぷうれい}で、峠に開く梅の花を見てこの2首の詩を詠んだ。

其の一

春がきて、奥深い谷にも潺潺さらさらと水が音を立てている。
 草や雑木に間に、的礫あざやかな梅の花が開くのは、
 昨夜の東の風が凍った石をも裂いたからなのか。
 ここの梅の花の半分が雪のように飛ぶのなら、
 私は一緒になって山を登って行きたいと思う。

其の二

何が、私の奥深くにあるものを慰めてくれるのか。
 酒ではないし、
 梅の花も、開けば落ち着かないし、散れば愁いがおこる。
 それでも、これから続く谷川の三百回の折れ曲がり、
 黄州に着くまでの間ずっと、
 梅の花が私を送ってくれるのなら辞退はしない。
 (黄州の町(州庁は黄岡県にある)まであとわずか。言い知れぬ不安に襲われもする
 が、折よく咲き出した梅の花にエールを送ってもらって、敢えて力強く前進して行こ
 うとしたのだろう)

■万松亭

まじょう ばんしょうてい
 麻城県にある万松亭で詩を詠んだ。次のような序文がある。

麻城県令であった張毅が、道を行く人の上を被うように、左右に一万本の松を植え、万松亭を建てた。それからまだ十年にもならないのに、残っている松は十分の三もしくは四しかない。後の者が張毅の意思を嗣がなかつたのを残念に思い、この詩を作る。

穀物によって一年の計を立て、木によって十年の計を立てるといふ。

張知事の計を受け継いで、助ける人はいなかったのか。

百年の計は徳をもって立てるといふ。

張知事の徳を好む心が受け継がれてゆくのなら、

ここの松も茂り、知事の子孫も枝を伸ばすであらうに。

天はどうしたことか、ここの松が斧で伐られてしまうことから救ってくれなかった。

野火までも、氷雪に痛めつけられたここの松を憐れんでいる。

木を大切にせよという古い歌がある――

それを心して歌って、残った松の幾本かは大きく育ててほしい。

■戯作種松

松の植樹には一家言ある蘇軾のこと（第3章75ページ、第5章327ページなど）、万松亭の松を見て前の詩だけではすまなくてこの詩も作った。「戯れに作った」と詩題にあるよう、言葉が言葉を呼んで次々に飛躍する。

(詩の冒頭で、少年の日に松を植えたといっているが、実際には父や妻の墓所のまわりに植えた松(第5章34ページ)のことを歌っている)

私は昔、少年の日に、
東の岡が松でいっぱいになるまで植えた。
最初に、
根が一寸ばかりしか伸びていない松を、
小さな稲の苗を植えるようにして移植した。
二年経って、
黄色い茅ちがやよりも低いまま、
一つ一つは尖った麦のぎの芒のようであった。
三年にして、
蓬よもぎの丈を超えるようになり、
山に牛や羊の群れを放ったようなありさまになった。
それから十余年の間、その松を見ていないが、
すでに竜を想わせるような姿となって、
夜の風に浪が砕けるような音を発し、
朝の露は根もとに宿って美しい珠のように輝いているであろう。
私は松あぶらの膏を煮て神薬を得たいものだと、
そのためなら百本の桑を伐ることまで考えていたのだが、

人の世の事はだいたいがうまくいかないもので、

その計画は泡と消えてしまった。

ところが、この地にきてみると、

路の両側に松があって蒼い髭のようによく繁っている。

茯苓ぶくりょう(仙薬になるきのこ)は得られないだろうけれど、

いい具合に亀の甲羅のようなひび割れがあれば、

斧きずで瘡まつやにをつけて松脂を取り、

釜で煮て冷水に投じることを百回繰り返すなら、

真白な霜のような物が得られ、

それを飲むなら五穀で汚れた腸が洗われ、

人の寿命を食う鬼かを槁かれさせ、

骨の髄まで緑色となって、丹田たんてんから幽かき光が発せられるようになるだろう。

白髪は消え、瞳が四角の仙人となり、

さらに五百年の後に、鶴に騎かって故郷こきょうに還るのだ。

(この詩の後半は、碩学せきがの注釈家も「仙家の事を説くに解すべからざるものあり」と嘆き、蘇軾の妄想には誰も付いて行けない。なお丹田は臍の下あたりきにあって、「氣」の廻りを司る極めて重要な器官とされた)

■張先生

麻城まじょう県の故郷こけんちん鎮で張先生と呼ばれる風変わりな人物に会ってこの詩を

詠んだ。次のような序文が付いている。

先生はその名を知らない。黄州こうの故県鎮こけんちんの人で、もともとの姓は盧ろであったが、張氏ちやうに養おもてわれた。陽に狂を装い、垢にまみれ、汚れがひどすぎて寒暑もその内側にある身を侵すことがない。昼間は市中を独りで歩きまわり、夜はどことどに止まるのか人は知らない。往来の者が張先生を見ようとしても、たいていはうまくいかない。ところが、私が試ししに人を使わして呼んでみたところ、先生は喜んで来てくれた。来たのはよいが、立ったまま何も言わない。私が尋ねても返事をしない。座るように言ってもきかない。駅舎の建物の中をじろじろ見て、しばらくすると行ってしまった。駅舎に普通はないようなものがあったのだろうか。一体何があったのか、先生の思うところのものを追認しようとしたけれども、まだそれはできないている。

何も無い建物を熟視してついに何も言わなかった。

きっと私が天全てんぜん(本性を完全に守っている)ではないのを先生は知ったのだろう。

人はこう言う。

「よくまあ駅舎に来てくれたものです。

張先生をそのようにさせた人もまた賢人でございましょう」

張先生は、履を脱いで糞小屋の中でも眠りにつき、

氷がやたらと流れる下る川でも水浴びをする。

かつて唐の時代しやとうついに、朱桃椎という名高い隠者がいて、

こうし れん

高士廉がその地の長官になったときに丁重に招いたところ、

朱桃椎はやってきたものの何も言わずに去ってしまった。

高士廉は朱桃椎の後ろ姿を拝し、

「あのお方は作為的なことは何もせずにここを治めよと教えてくださったのだ」

と言って、法規を簡便にし、税金を安した。

しかし、それはあくまでも高士廉の勝手な当て推量であって、

きっとそういうことではなかったのだろう。

(罪人として黄州にきた蘇軾は、張先生に認められるところとはなからなかったと、この詩でいっているのだろう)

■記張愍子

前の詩の張先生ちやうと同じ人物を描いたと思われる「張愍子ちやうかん しについて記す」という短文があるので、それも見ておこう。

黄州の故県鎮こう けんちんの張愍子ちやうかん しの振る舞いは狂人のようで、これを見る人は「火付け野郎」と罵る。いささか書道を心得ていこくっていて、紙を与えると唐の鄭谷の雪の詩を書く。人に使われて力仕事をし、一日中続けることができる。時には物乞いをするが、私が銭きものを与えようとしても受け取らなかった。冬も夏も一枚の褐きもので過ごし、三十年変わらないという。しかし、近付いても垢の臭いを感じることはない。実際にこのよいじんうな人物であるけれど、土地の人はなかなかの異人(人とは異なる次元に生きる人)

であるようにいう。本当にそうなのかどうかはわからない。

(ここにある「異人」がこれからの一つのキーワードになる。先に見た僧の^{どんこう}磨公(本章21ページ)も異人であり、次にもう1人の異人を見る)

■方山子

麻城^{まじょう}県と黄岡^{こうこう}県の境にある丘、そこを超えれば、あとは黄州^{こう}の町へと下ってゆくことになる。麻城^{まじょう}県側から丘への坂を登りつめたところで、奇跡の出会いが待ち受けていた。それによって黄州での日々が大きく変わり、さらには後に蘇軾の人生をも変えることになった。夢にも会うとは思っていなかった人が待ち受けていたのである。その場面を1年ほど後になって蘇軾自身が記したこの文章で見よう。

方山子^{ほうさんし}は光州^{こう}、黄州^{こう}の間で自在^{あたり}に生きる隱者^{かんだい}である。若いときは漢代^{かんたい}の有名な朱家^{しゅか}、郭解^{かくかい}といった男伊達^{おとこだて}の人となり^{まぢ}を慕い、閭里^{きやうど}の俠徒^かは皆この人^かを宗としていた。壮年になると、己の俠氣^あを折って書物^{おもて}を学び、表の世界^あで存分に駆けまわろうとした。しかし、ついに世とは遇^あわなかった。後に光州^{こう}と黄州^{こう}の間の岐亭^{きてい}というところに逃^いれ、庵^{いおり}を結び、野菜ばかりを食べ、世間にその動静^あが聞こえないようになった。かつて所有^あしていた車^あや馬^あを棄^あて、きちんとした衣服^あや冠^あを毀^あち、山中^あを徒歩^あで往来^あし、人^あが見ても誰^あであると識^あれることはなかった。その著^あけている帽子^あが、方^あくて高^あく聳^あえているのを見て、「これが古^あの方山冠^あのなごり^あの姿^あなのだ

ろうか」という人があり、それで方山子(方山冠の先生)と呼ばれるようになった。

私は黄州に 謫 居 れ、岐亭を通りかかり、たまたまこの者に出会った。

私はいった。

「嗚呼、あなたは昔 駒染の陳慥さんではありませんか。どうしてここにいるのですか」

方山子も 矍然 いて、私がどうしてここに至ったのかを尋ねた。私がわけをいうと、俯 いてしばらく答えなかったが、上を仰いで笑い、

「どうぞ我が家にお越しください」

と、私を招いてその家に泊めてくれた。

それはごく小さくてがらんとした家で、しかし、妻子や使用人は皆それぞれに満足しているようで、私は 聳然 してこれはなかなかのことであり入り込んだ。

さて、方山子は若いころは酒をやたらに食らって剣を好み、金を泥土のように使ったものだ。十九年前、私は岐山にいたときに、方山子が馬に乗った二人の従者を連れ、二本の矢を挟んで、西山に遊ぶのを見た。鵲がその前に起つと、従者に命じて逐って射させた。当たらなかった。方山子は馬を奮い立たせ、進み出ると、一発で仕留めた。そして、私と馬上で兵の用い方や古今の成功と失敗について論じた。方山子は己のことを一世の豪士であるといった。あれからどれほどの日数を経たのか、方山子の眉間にはなお精悍の色が現れている。これぞ山の中に隠れ住むような人物であるのだろうか。

方山子は、実のところは代々官僚としての実績があり、それをもって官職を得るこ

ともできたはずで、官の仕事に従事していたならば、いまごろはとっくに世に名が聞えるまでになっていたであろう。しかも、その家は洛陽らくようにあって、公侯に等しい壮麗な園宅を構え、黄河きわの北に農地があって、一年に帛きぬにして千匹分の収入がある。富んで楽しむのに十分であるのに、それを棄てて一切取らずに、独り山の中にきているのである。何かしら得るところがあるから、きっとそしているのだろう。

私は聞くに光州と黄州のあたりには異人いじんがたくさんいるという。陽は狂人おろちのように見せかけ、垢まみれで、会おうと思ってもなかなか見ることができない。方山子はあるいはこうした人々と会っているのだろう。

(方山子とは陳慥ちんぞう (字は季常あざな きじょう) の仇名である。陳慥の名はすでに第2章92ページなどで見ている。蘇軾の最初の任地である鳳翔ほうしょうで、いまでいえばパワハラで蘇軾を大いに悩ませた陳希亮ちんきりょう (字は公弼あざな こうひつ) 知事の息子である。陳希亮は、蘇軾が鳳翔での任務を終えた後に間もなく亡くなり、官職には就かなかつた陳慥のその後の消息を蘇軾は何も知らずにいた。蘇軾が黄州に至る直前に最後の峠にさしかかると、青い日傘を並べて待っている人がいた。それが陳慥であった)

(陳慥との驚くべき再会を、文章としての効果を高めるためであろう、ここに示した「方山子伝」ほうざんし でんでは、例によって鋪席みでくれを装って必ずしも事実のままには書いていない。

(1) 陳慥は自己の情報網を駆使して蘇軾の到着の日時を測って待ち受けていたのだろうが、方山子がたまたま岐亭を通りかかって偶然出会ったように書いている。(2) 陳慥は蘇軾が黄州に流された経緯を知っていたのだが、方山子は何も知らずにいたとして理由を尋ねている。(3) 岐亭にある方山子の庵はごく小さい(原文は幅が一丈、

高さが一丈としている)とあるが、実際は陳慥にはそれなりに財産があり、この後、黄州での蘇軾の暮らしを何かと支援している。また方山子の妻子がそれぞれに満足しているとあるが、陳慥の妻はかなり嫉妬深い人であったと、いらぬ詮索をしている考証家もいる。(4) 方山子の家は代々官僚であったとしているが、第2章71ページで見た「陳公弼伝」^{ちんこうひつでん}には、陳希亮の代で初めて官職に就いたと記してある。陳希亮の功績によって子弟は無試験で官職を得る恩恵を被り、三男まではそれによって官職に就いたが、四男の陳慥には及ばなかったと「陳公弼伝」にはある。一家が洛陽に豪邸を構え、莫大な収入があるというのも恐らくはかなりの誇張であろう。これらは方山子が謎めいた人物であると印象付けるために少々話を盛ったのである。方山子が「異人」と交流があったことは事実で、その幾人かを蘇軾に引き合わせたことで蘇軾の黄州での日々は奥行き深いものとなった)

■陳季常所蓄朱陳邨嫁娶図

蘇軾は岐亭^{きてい}にある陳慥^{ちんぞう} (方山子^{ほうさんし}) の家に案内され、そこで「朱陳邨嫁娶図」^{しゅちんそんかしょう} (朱家と陳家が互いに嫁を娶り合って、他の家とは一切姻戚関係を結ぶことがないという村を画いた図) を見てこの詩を作った。

其の一

いったい何れの年に、顧愷^{こがいし}之もしくは陸探微^{りくたんび}が絵筆を振ったのだろうか、画いたのはこの「朱陳嫁娶図」。

聞くところでは、

一つの村に朱と陳のふたつの姓しかなくて、

家の地位を高めるために名のある貴族の嫁を金で買ったりはしない。

其の二

私はこの朱陳邨のある徐州の元の知事。

かつて私は耕作に励むよう民を指導するために隣の杏花邨にまで行った。

現在の風物はとても画くに堪えない、

県の役人が金を徴収するために夜でも村人の門を叩きにくるのだから。

(朱陳邨は蘇軾が前に知事をしていた徐州の蕭県にあった。画に描かれた朱陳邨は遥か昔の理想化された姿で、現実とはまるで違う。改革政治は税金を錢で納めることを徹底させようとした。獄から出てまだ1カ月、早くもここで政事批判をしている)

■臨江仙

岐亭の近くに竜丘山がある。漢の時代の乱れに高い位を捨てて洛陽から逃れてここに隠れ住んだ竜丘先生という人がいたとの言い伝えがあった。竜丘先生と陳慥をないまぜにしたこの詞を作って陳慥に贈った。次のような序文がある。

竜丘先生は、二人の侍女に兵士の服を着せて駿馬に載せ、洛陽から蜀に行こ

うとした。溪山の景色のよいところがあるとしばらくそこに留まり、それを見る人は「異人」であると思った。それから十年ほどして黄岡の北に家を建てて住み、静安居士と号した。

細馬遠馱双侍女、(美しい馬に乗せて遠く二人の侍女)

青巾玉帯紅鞵。(青い衣、玉の飾りの帯、紅い靴)

溪山好处便為家。(溪山のよいところがあればそこが家)

誰知巴峡路、(まさか誰も思わないでしょう、蜀に至る道で)

却見洛城花。(洛陽の名花のようなこの美女を見ようとは)

面旋落英飛玉蕊、(振り向くとき、落ちる花びら、飛ぶ花の蕊)

人間春日初斜。(人間世界の春の日も斜めになり)

十年不見紫雲車。(十年の間、美女を乗せた車を見ることはありませんでした)

竜丘新洞府、(竜丘山は新たな仙人境)

鉛鼎養丹砂。(鉛の鼎で不老長生の薬を作るのです)

(陳造は蘇軾と同郷、眉州青神県の出身であるから、洛陽から蜀に行こうとして途中の竜丘山に留まったという竜丘先生の伝説が生きてくる。この詞の後、陳造は竜丘を号とするようになる)

■少年時嘗過一村院見壁上有詩云夜涼疑有雨院静似無僧不知何人詩也宿
 黄州禅智寺寺僧皆不在夜半雨作偶記此詩故作一絶

いよいよ黄州の町（黄冈県）に入る前の晩、禅智寺に泊まってこの詩を
 作った。長い詩題は次の通り。「少年のころにある村の寺に立ち寄り、見
 ると壁に詩が記してあった。『夜は涼しく雨が有るかと思ひ、院は静かで
 僧が無きに似たり』。誰の詩であるのかわからなかった。黄州の禅智寺に
 泊まったところ、寺の僧は皆不在で、夜半に雨が降り出した。たまたま
 この詩を思い出し、一首の絶句を作った」。

仏に供えた燈火が暗くなりかけると、

飢えた鼠が出てきた。

不意に雨が降り始め、竹が鳴る。

あの古い詩句を作ったのが何人であれ、

すでにそのときに、

いまこの私の情を知っていたのだ。

■到黄州謝表

2月1日、蘇軾は黄州に到着し、新たな職務を与えてくれたことに対す
 る感謝状（着任報告書）を記して皇帝に差し出した。

わたれ

臣蘇軾は申し上げます。

去年十二月二十九日、敕書けんこうしゅうしよすい ぶ いんがいろうによって、檢校尚書水部員外郎せきじょうに責授され、黃州こうしゅう 團練副使だんれんふくしに充てられ、本州安置ほんしゅうあんちとなり(黃州の外に住むことを禁じる)、かつ公おみやげの事ことに僉書せんしょ(署名)してはならないとされまして、臣わたれは今月一日に本所に到着し終わりました。

狂愚冒犯きやうぐ ぼうはん(愚かな私が恐れながら申し上げます)、固もとより刑罰は常に定まっているものでありますのに、陛下の御仁聖あわれみにより矜憐を頂戴し、特に軽い規定に従って、必ず死すべきところを赦してくださり、自ら新らたになることを許可してくださいました。謹んで訓辞に服し、ただただ感動なみだの涙が溢れるのを知るばかりです。

伏おもして念わたれいますに、臣は早くに科挙に合格し、誤かたじけなくって忝かたじけなくも官員の内に加えていただきえいてつ おこました。睿哲えいてつ おこの興る(賢臣が並んで世が盛んになる)のに逢って、自分自身も功名を挙げたいとの意おもいがありました。また、かつて陛下のお召しによって宮殿でそれまでに学んできたことを申し上げましたところ陛下の御評価をいただき、試しに三州の知事として実際に行うところをみ観わたれていただけることとなりました。しかし、臣は己の意を用いるところが過当で、日に日に迷いに趨はしり、天賦の運命は衰窮し、天は臣わたれの魄たらいを奪ってしまったのでしょうか、義理に叛違し、陛下の御恩ほんいに背き、茫ぼうとして酔夢の中にあるように、自分でわからないままに言語を出してしまいました。陛下しじんは至仁にしてしばしば赦してくださいましたが、衆議はそれを容赦せず、事情ただを糾して罪を調べるならば、固もとより都の門の前ふひつで斧鑕(処刑のための巨大な斧)の下に伏すべきであって、たとえ御恩ちみによって法を曲げしても、魍魅ちみが充満する辺境の地

に流されてしかるべきでありました。ところが思いがけず、散員さんいん(窓際の閑職)を汚し、さらには善地ぜんち(暮らしやすい土地)を叨むさぼることを許していただき、鹿や麋むきのような者を野に放ち、役立たずの独活うどくの大木のような者を生かしてくださることとなりました。

臣わたしは愚ぐの至りにありますが、幸いということを知らないわけではありません。皇帝陛下が徳と刑とを並び用い、善と悪を兼ねて容れ、法を行って恩を知らせようとするところに臣わたしは遇えたのであります。これは小さく懲らしめて大きく戒めるものであります。天地は臣わたしのような者でも大地の上に載せ天の下に置いてくれはしましても、天地の法則の外に出ることまでは許容してくれません。父母は臣わたしのような者でも生育してくれはしても、死ぬべきところから出してくれはしません。陛下の御恩を伏して惟おもいますに、何をもって報いたらよろしいのでしょうか。ただまさしく一生そしよくを蔬食して過あやまり、門を閉ざして愆あやまちを思い返し、深く積年の非を悟り、永久に百官の戒めとなるべきであります。臣わたしは聖世じんれんを貪恋するあまり、敢えて身を殺すこともできません。願うのは、これからの生涯が棄てられたもののままではないこと。もしも、刑余の身でもなお力を尽くすことを得られましたならば、必ず身を矢や刀の間に捐すてるものであります。天を指して心に誓います。死ぬともそれを変えることはありません。

(極めて真摯な反省文である。皇帝に差し出す文章であるから、何はともあれ体裁を整えたというわけではない。これらの言葉に真の裏付けがあるのかどうか、これから見てゆく詩文で明らかになるであろう)

■初到黃州

黃州に到着した直後の思いを記した詩。蘇軾はあくまでも蘇軾で、上の感謝状とは矛盾するような言葉をいきなり発する。

(蘇軾が与えられた職務は黃州こうしゅうだんれんふくし 団練副使。実質的な仕事のない散員さんいんで、ごく暇な身となった。そのため黃州にいる間にたくさんの詩文を作り、たくさんの手紙を書いた。それらは後世の研究家によって綿密に検討され、黃州における日々は日録とってよいくらいにまで復元されている。先に掲げた孔凡礼撰『蘇軾年譜』に加えて饒学剛著『蘇東坡在黃州』(1999年)も参照して、黃州の4年強(足掛け5年)を見てゆく。黃州での日々は蘇軾の人生の中でも特別な意味を持っているので、なるべく多くの詩文を読むようにしたい)

自分で笑ってしまうのは、

普段から口のために忙しくしてきたこと。

老いるに従って、やることなすことみんな荒唐でたらめになってしまった。

ここ黃州は、

城郭ちやうこうを繞るようにして長江が流れる。

——きつと魚がうまいに違いない。

美しい竹が山に連なるようにして生えている。

——きつとよい香りの筍が採れるに違いない。

だいたい朝廷から放逐された旅人は員外郎いんがいろうに置かれるものだし、

詩を得意とする者は水部すいぶの一員となるのだ。

ただ慚はづかしく思うのは、

糸の先ほども世に補うことができない身でありながら、

朝廷は酒を搾った後の袋を私のために費やしてくださることだ。

（この詩をどう見るかで蘇軾に対する好悪は大きく分かれるであろう。罪を得て流されたのだから、当地に着いての第一声は、深く悲嘆するものであってしかるべきで、唐代の人々はほぼ例外なくそのような詩を詠んだ。ところが、蘇軾はいきなり「自ら笑う」（自笑）と歌い出す。「口のために忙しくしてきた」といえば、当然、言葉数が多すぎて失敗したことを反省しているのだろうと思うわけだが、魚や筍を食いたいと、当面の問題はそちらの「口」であるとはぐらかすようなことをいう。生真面目な人は怒ってもおかしくない。一方で、自身の境遇を客観的に軽やかに歌うところに強靱な精神を見て、この詩に魅力を感じる人もいる。宋代の人々の一系列おうようしゅう（歐陽脩と蘇軾をその代表とする）はそのような士大夫像したいふを追求してきたのである）

■安国寺浴

上の詩に、城郭ちやうこうを廻るようにして長江が流れる（「長江繞郭」）とあった。黄州の町は、台地が長江をぐいと直角に折り曲げるようにして張り出したところに位置し、長江は町の西北から西南、東南の三方を廻って流れ下る。それに対して、町の北側と東側は小高い岡になっている。

黄州に到着した当初、蘇軾は町の南東側せいらいもん、清淮門じやうえいんの外にある定恵院とい

う仏教寺院に寓居した。恐らく、黄州知事の陳軾（字は君式）が手配してくれたのだろう。蘇軾が罪人であるにもかかわらず、陳軾はすこぶる好意的であった。定恵院には美しい竹林があり、奥の小山に一本の海棠があった（後にそれを詠んだ詩を見る）。近くに、やはり仏教寺院の安国寺があり、蘇軾はそこで入浴し、ここまでの旅の疲れを癒した。

（この詩の初句は「老来百事懶」（老い来れば百事懶し）。「老」といいつつも、このとき蘇軾は数えて44歳である。すでに見てきたように、蘇軾は詩文中に「老」や「病」という語をよく用いる。真に老いたわけではなく、本当に病気ではなくても、心理的あるいは身体的もしくは状況的に不如意であることを「老」「病」で言い表すのだろう。この詩では「謫居」の身であることをあからさまにはいわずに「老来」と表現しているのである）

老いた身には、何もかもが懶い。

それでも、体に垢がたまればやはり沐浴したいと、それくらいのことは念う。

髪は衰えて耳に達しないくらいしかないのだが、

面倒ながらも、月に一回は刈って洗わないとならない。

ここは山がちの町であるから、薪炭がたくさんあるのだろう、

湯を沸かす煙が谷を暗くするくらいに昇っている。

我が身に付いた塵と垢はいったいどれくらいあったのか、

儻然として羈や梏がはずれたかのような。

衣を緩くして小さな部屋に座り、
 髪をばらばらにしたままで竹を眺める。
 心を困くるませるものも、万よろずの縁ほだしもなく、
 身を安らかにするには小さな寝床があれば十分だ。
 これは単けがれに穢きよを浄めただけではなく、
 栄辱えいじよくとやらも洗い流したのであろう。
 あまり多くを語り過ぎないようにしよう、
 もう黙って帰ろう。
 ここにある理ことわりは要かなめのところが熟みすのを観る必要があるだろう。

(蘇軾は沐浴して何かを感じ取った。それが何であるのか。「要のところが熟す」のをこれからの黄州の日々で観てゆく)

■安国寺尋春

定恵院じょうゑいんにきてまだ日の浅いころ、早朝に目を覚まし、安国寺あんこくじのあたりを歩いて詠んだ詩。

寝もていると百舌もずの音がする、
 あれはきっと春風を呼んでいるのだらう。
 起きて花や柳を尋ねると、
 どの村も同じ春の盛りを迎えようとしている。

町の南の古い寺(安国寺)は長い竹に囲まれ、
小さな建物の蔭やら曲がった欄干のあたりに深い紅色がひよいと覗く。
花を見ると、老いを嘆いて年少のころを憶うのが常のこと、
酒に向かうと、家を思っかかも老翁となったのを愁うのが常のこと、
何しろ、眼は雲母がきらきら光るようなありさまだし、
髪は少なくなってまとめるのも簡単ではない。
遙かに知る、この二月、都は玉仙観やら洪福寺やらのあたり——
花が海のように開いて、我も我もとやってくるのは、
薄羅を霧のように纏って化粧したばかりの女、
風のように馬を速く走らせて腰に付けた玉を威勢よく鳴らす男。
そうした薄夫(軽薄児)を見て、唐の盧仝は、
「薄夫は銭があると楽しみに耽るが、わしは銭がないから淡泊を養っておる」
と嘯いた。
盧仝にしたところで、薄夫と同じ酒を食らって結局は一文無しになった。
私は病んだ(謫居)身で、もとより銭はなく、
春風の吹く九十日間を空しく過ごすはめになったのだが、
今日は息子を伴ってここに花が発くのを看ることができた。
(長い獄中生活と旅を経て、ひとまず定恵院の寓居に落ち着いた安堵感を歌っている
のだろう。息子は長男の蘇邁である)

■黄州安国寺記

「^{ことわり}理の^{かなめ}要」はどのようにして熟していったのか。これより4年後の元豊^{げん}7（1084）年4月に記したこの文章から窺い知ることができるので、先に見ておきたい。

元豊^{げん}二年十二月、私は湖州^こ知事であったときに罪を得た。お上は誅^{ちゆう}するには忍びないと、黄州^{こうしゅう}団練副使にし、過ち^{こうしゅうだんれんふくし}を思って自ら新らたになるようにという処分にしてくださいました。その明る年二月、黄州に到着し、しばらくすると、夜の住まいがほぼ定まり、衣食もやや足りるようになった。

私は、門を閉し、部屋の内を掃き浄め、世間から退いて謹慎し、ばらばらになってしまっていた我が魂魄^{こんぼく}を一つに収め、思い^{おも}念^{ねん}って、自ら新たにすることはどうしたらよいのかと考えた。これまでの己^きの拳意^{きょい}（思いの定め方）、動作（行動の仕方）を顧みると、全てが道^{みち}に中^{あた}らないものであった。今回の罪を得たことだけが問題なのではないのだ。

多々あることの一つを新たにすると、そのために二つを失うことを恐れなければならぬ。これからそれへ、それからあれへと順に考えて答えを求めても、悔いても悔いようのないところに行ってしまうのだった。

それで深く溜め息をつき、

「道^{みち}の知識^ちは氣（己を構成する物質とエネルギー）を制御するには十分なものではなく、性^{せい}（天より授かった本性）は習^{しゅう}（後天的に身に付いた習性）に勝つには十分なものではないのだ。」

い。根本から耕し直さないで草の先を刈るようなことをしたところで、改められたと思っても必ずまた草が茂るようにして元に戻ってしまう。ここは誠まことの心に帰って、仏の教えに帰依し、一切を洗ってしまうべきではないのか」

とつぶやいた。

町の南に寺を見つけ、それは安国寺あんこくじという。木々が茂り、竹が長く伸び、池があり亭あずまやがある。一日ないし二日ごとにそこに行き、香を焚き黙って座り、深く自ら省察した。すると、物も我も忘れ、身も心も皆空くうになり、罪の垢が生じてくるところを求めてもそれはもはや得られないようになった。全ての念が清浄になり、身を染めていた汚れが自ずと落ち、表も裏も儻然さっぱりとして、付き纏うものは何もなくなった。

私は竊ひそかにこれを楽しんで、旦あさに往き暮に還ること、これで五年になる。

寺の僧けいれんを継連かしろといい、僧の首となって七年で朝廷から衣を賜わり、また七年にして号を賜わるはずであったのだが、継連は僧の首から降りようとした。寺の僧や土地の父老が一緒になって引き留めると、継連は笑って言った。

「足ることを知っていれば辱めを受けない。とど止まることを知っていれば危ういことはない」

それですぐに辞めてしまった。そうした継連の振る舞いに対して私は我が身を愧はじなければならぬ。

元豊七年、私は汝州じよに旅することになり、継連は言った。

「この寺にはまだ『記』というものがありません。石は用意してあります。どうか一文を書いてください」

私は辞退することができなかつた。

寺は南唐国なんとうこくの保大二ほだい(944)年に立てられ、始めの名は護国寺ごこくじであった。嘉祐八かゆう(1063)年にいまの名を賜わり、本堂も離れも高殿も皆が新しくされた。巖麗深穩げんれいしんおんで、人の意おんを悦ばせ、ここに来る者は帰るのを忘れる。

毎年正月に一万人もの男女が寺の庭に集まり、飲食して音楽を演奏し、瘟神おんしん(疫病の神)まつを祠ちようこうる。これは長江わいがと淮河の間で行われている古い習俗である。

四月六日じよ、汝州だんれんふくし団練副使びざん、眉山の蘇軾記す。

(蘇軾は黄州にきて、新しい自分になろうとした。これは、蘇轍が兄の罪を軽くしてほしいと皇帝に願った文章(第5章404ページ)に「過ちを改めて自身を一新する」とあったのと一致する。具体的にどのようにしたのかがこの文章に記されている。蘇軾は時折軽薄ともいえるような言辞を吐くのだが、自身に向き合うときは非常に真剣で、深く思いを巡らした。しかし、「全てが道みちに中あたらず」、一つを変えてもかえって二つが駄目になってしまうという具合にたちまち行き詰まってしまった。ここで思い出するのは、かつて蘇軾は「道に達する」ということについて後輩に向かって教えを垂れていたことだ(第5章304ページ)。そのときは己のそれまでに歩みにある程度の自信があったのだろう。しかし、魂魄がはばらばらになるまでにその自信は打ち砕かれてしまった。蘇軾は詩文で朝政を批判したことが悪かったとはたぶん思っていなかった。改革派の一部の愚昧な連中によってあらぬ罪を着せられてしまったとも思っていなかった。我々には想像が付かないのだが、皇帝によって罪人とされたことで、人間として全否定されたように感じ、己を完全に一新しなければならぬと考えたのだろう。

蘇軾は、道、氣、性、習といった旧来の中国哲学の諸道具を駆使して考えたのだが、根本的な解決策は見出せなかった。そこでいまだ深くは親しんでいなかった仏教に解決の糸口を求めた。そしてたどりついたのが、空であった。何かにも原因を求めたり、何かを改めたりするのではなく、いったん全てを空にし、そこから新たな己になって行くのである。この文章を読んで、二つ前の詩「安国寺に浴す」に戻ると、実は同じことを詠んでいるのではないかと思えてくる。直観的に得たことを詩で表現すれば先のようになり、思索を巡らして行き着いてところを文で表現すればこのようになるのであろう)

■定恵院寓居月夜偶出

上に見た「こうしゅうあんこくじき黄州安国寺記」は一旦忘れ、己を新たにすることに思い悩んでいる蘇軾に戻り、時間順に詩文を詠んでゆこう。これは定恵院じょうゑいんに寓居して、月の夜にたまたま外を歩いたという詩。

(初句は「ゆうじん幽人無事不出門」(幽人は事も無く門から出ずにいる)とある。先の「ろうらい老来」が「幽人」に変わったわけだが、実情としては「罪人は門を閉ざして深く自省している」ということを言い表しているのだらう)

ゆうじん幽人(静かに暮らす人)はする事がなく、門から出ることもない。

たまたまこの良き夜に、春風を追って出歩くと、
木の枝の先から、寺の建物の屋根が高くあるいは低く飛び出し、

月の光のもと、香の煙が細くたなびいてくる。

長江の上の雲は清らかであるけれど、自分の美しさを誇るように姿を変え、

竹に宿る露は声を出しはしないけれど、ぼとりぼとりと瀉ぐかのようだ。

柳の枝が糸のように柔らかく垂れるのに触れて驚かされ、

まだ花を残した梅の一枝があるのを香りによって気づかされる。

独りで詩を吟じて自分で和し、

酒はとっくにないし、誰も借してくれもない。

酒を飲むなら、老いていよいよその真の味を濃やかに知るべきで、

酔っておかしなことを言ってしまったのではないかと、醒めてから怖るようではないけない。

春が忽忽過ぎ去るのは惜しままでもないと、訳知り顔につぶやいてみて、

春を歡ぶ意が年年凋んできたのかと残念な気になる。

たまたまここに仮の宿りを結んでいるのは、

この耳が松に風が鳴る音を愛するからだ。

門を閉ざして、客人の訪れを断り、

冠なんぞはさかさまにし、衣もそこらにうっちゃって、

家の者には何をしているのかと罵られながら、

米を炊く湯気がふわふわと甑から立ち昇り、

甘藷を搾った汁がぼたぼたと槽から垂れるのを見ている、

そういう暮らしでよいのだろう。

■卜算子

前の詩とほぼ同じ時期に、じょう せい いん定恵院で作った月の詞。

欠月挂疏桐。あおぞり（葉がまばらな桐に落ちかかる欠けた月）

漏断人初静。（時を測る水音が絶えて静まり返る人の世）

時見幽人独往來、（ここにひっそりと行き来する孤独の人）

縹緲孤鴻影。はるか ひどり おおどり（縹緲に孤行く鴻の影のようです）

驚起卻回頭、めぐ（驚いて起きて回らず頭）

有恨無人省。（恨みがあっても顧みてくれる人はいません）

揀尽寒枝不肯棲、（寒々とした枝を選んで選んで、でも棲もうとはしません）

寂寞沙洲冷。さびし さす（寂寞も沙洲は冷えびとしています）

（この詞で、蘇軾は己を、棲む場所を見出せない孤独な鴻になぞらえている。後世の好事家は、この詞から次のような物語を作った。これから14年後、蘇軾は59歳のときにけい惠州に流され、その地におんちようちよう温超超という十六歳でまだ嫁に行かない美しい娘がいた。超超は蘇軾がくると聞いて非常に喜び、「我が婿殿だ」といい、蘇軾の仮の宿に毎夜通い、窓辺で蘇軾が吟詠するのを聞いて、その詩詞を覚えると歩み去った。蘇軾はその様子を知って窓を開けると、娘はかき塙を超えて逃げた。蘇軾は人づてに「君のためによりかいなんとう婿を探してあげよう」と娘にいったのだが、間もなく海の向こうの海南島に流

されてしまい、3年後に戻ってくるとその娘はすでに死んで沙の下に埋められていた。蘇軾は「卜算子」の詞を墓に手向け、婿を選ぶ約束を果たせなかったことを、「寒枝を^{えら}揀び尽して肯えて棲まず」の句に詠み込んだ。むろん、牽強附会の作り話なのだが、根も葉もないわけではないという説がある。蘇軾が黄州に流されたとき、隣家にはなはた賢い娘がいて、毎夕、窓の下に忍んで蘇軾が読書するのを聞いていた。後に、その家の者が娘の結婚相手を選ぼうとしたときに、娘は「蘇軾のように書物がよく読める人でなければだめです」といい、とうとう誰もかなう者が見つからないままに娘は死んでしまった。このことから惠州の娘の話が生まれというのだが、実はこれも作り話であるようだ)

■ 寓居定惠院之東雜花滿山有海棠一株土人不知貴也

これも定惠院^{じょうゑいん}での詩。詩題は「寓居するところの定惠院の東の山にさまざまな花がある。なかに一株の海棠^{かいとう}があるのだが、土地の人はその貴さ^{とうと}を知らない」。海棠が貴いと感じるのは蘇軾^{しよく}が蜀の人間だからだ。海棠は蜀、とりわけ成都^{せいと}を象徴する花である。譬えるなら、日本人が異国の地に流されて、山に一本の桜を見出したと想像するとよいであろうか。

黄州^{こう}は長江^{ちやうこう}沿いの町、

湿気が満ちて草木の成長が盛んである。

山にあるのはどれもが世俗的な花ばかり、

そのなかで、名花がひそやかに孤独に苦しんでいる。

竹の籬まがきの間から、嫣然にっこりと笑みをもらす花——

それは佳人かじんを人気ひとけのない谷やに置くようなもの、
造物者こころにどのような深い意があるのだろうか。

天より出た姿は自然界の富貴ともいうべきで、
金の盤ばんに盛って御殿に献上するまでもなく貴い。

花びらは、朱あかい唇から酒が入って頬がぼっと染まったよう、
葉は、緑の袖を翻して紅をよりいっそう映えさせる。

朝には、林は深い霧きりに包まれて暗く、光の及ぶのが遅く、
昼には、日ざしが暖風が軽やかで睡りが十分に足り、
雨には、涙なみだにぬれて悽愴いたましく、

月には、人影しとやかがなくさらに清淑である。

ここに先生(蘇軾)はたっぷり食べて何もすることがないので、

ただ腹を撫ぜ撫ぜしながら、ぶらぶらと歩き、
民家たみかだろうか僧舎そうがだろうかおかまいなしに門をたた敲き、
杖つえに身を支えて竹を眺めるなどしていると、

たちまちこの絶艶ぜつえんの花によって衰朽すいきゆうの身を照らされ、
嘆息して言葉もなく目をぬぐって思うのは——

この辺鄙な土地に、どこからこの花を得たのか、

好事家が蜀の地から移したのか、

一寸の根の植物が千里を旅するのは容易ではない、

とすると、種子たねくわを銜おとりえて、鴻鵠おとりが飛来したのだろうか。

天はての涯はてに流落して、先生と海棠おもにはともに念おもうところがある。

酒を飲んで此の曲を歌おう。

明朝、酒が醒めてまた独りで来ると、

紛紛ふんぶんとして雪のように落ちかけて、

もはや触れるのも忍びがたい……。

■王齊万秀才寓居武昌劉郎洲正与伍洲相对伍子胥奔吳所從渡江也

黄州こうに流されなかったならば、先に見た陳慥ちんぞうとの再会はありえなかった。

そしてもう一つのありえなかった再会が黄州には待っていた。

蘇軾は24歳のときに都に向かう旅に出て、犍為けんいという町で王齊愈おうせいゆ あざな（字は

文甫ぶんほ）の書楼を訪ねた（第1章4ページ）。そのとき蘇父子を迎え入れたの

は弟の王齊万おうせいまん あざな しべん（字は子弁）で、王齊愈は何かしら言いにくい事情で不在

であった。その後、王兄弟の家は傾き、書楼も手放して犍為を離れ、長

江を下った武昌ぶしやう県に寄寓する身となった。武昌県は長江を挟んで黄州の

向いの地。蘇軾が黄州に着いて10日余り、王齊万がひょっこり定恵院じやうえいんに

現れて蘇軾を驚かした。詩題は「王齊万は武昌りゆうろうふく県の劉郎洲に寓居し、そ

こは長江の中州の伍洲ごしゅうの対岸である。遠い昔に伍子胥が吳国ごししょに奔ろうと

して長江を渡ったところだ」。

(伍子胥は、楚国の王位継承を巡る争いに巻き込まれて父と兄弟を殺され、一人だけ呉国に逃れた。そのとき、漁師の船に身を潜めて長江を渡った。後に伍子胥は呉国を強国に成長させ、呉国の軍勢を率いて楚国の都を占領して復讐を遂げた)

貴君の家の稲田は西蜀の地に冠たるものだった——

玉のような米を搗き、珠のような米を取り揚げ、その量は三万斛、

川を塞ぐようにして大量の木材を流して書樓を建て、

碧い瓦と朱い欄干が山谷に照り映えていた。

一家をあげての楽しみに、天命などは論じるまでもないと、

蠟燭を次々に灯すようにして黄金を使い尽くした。

残ったのは、百台の車に満載した蔵書だけ、

筏に載せて長江が曲がるころまでやってきて、

江のほとりに何があるかを見ると、

伍洲から遙かに望む劉郎藪だったのだ。

明朝はちょうと寒食、

君がいるその劉郎藪に行こうと思う。

牛を殺して秘蔵の酒を搾って待っていてくれたまえ。

貴君と酒を飲みつつ細かに文を論じ、

ほどよく酔ったところに、江のほとりで古を訪ねようではないか。

今回は三国時代の周瑜や孫権を弔うことはしないで、

ただ伍子胥だけに酒を捧げるとしよう。

(三国時代の周瑜や孫權に言及したのは、黄州に赤壁^{せきへき}があり、そこは孫權(周瑜はその軍師^{りゅうび})が劉備^{りゅうび}とともに曹操^{そうそう}の大軍を破った決戦場であるといわれていたからだ。そのことはまた後の詩文で何度が見ることになる。今回は特に伍子胥だけに酒を捧げようとするのは、伍子胥が逃亡した後に父や兄の仇を討ったように、王兄弟も家の再興を果たすであろうというココロであろう。この詩にある通り、蘇軾は寒食の日に武昌に赴いた)

■二月二十六日雨中熟睡至晩強起出門還作此詩意思殊昏昏也

これまで見てきた杭州^{こう}、密州^{みつ}、徐州^{じょ}、湖州^こでの詩の大半が官僚仲間とともに詠んだものであったのに対し、黄州に来てからは日常の瑣事を詠み込んだものが増える。詩題は「二月二十六日、雨の中で熟睡した。晩に至って強いて起きて門を出てこの詩を作った。意識が妙に昏昏^{はっきりしな}かつた」。

朝酒三杯をやらかしたせいで、
 昼の食事は一品だけでもうたくさん。
 後から後からやってくる雨音に引き込まれ、
 眠気がやってくるままに深く寝入ってしまった。
 昏昏^{こんこん}と眠って、覚めたと思ったらまた臥せ、

ごろごろ寝返りを打って、いつまでも眠りは足りない。

強いて起きて門を出てみたが、

夢はなおも続いているかのようだ。

泥の深いあたりで竹雞うずんが何やら語っているようで、

村の暗がりのあたりで鳩の御婦人が何やら泣いているようだ。

この詩を明日の朝になって見たなら、

寝ぼけたまま書いたのでさぞかし読みにくいであろう。

（「朝酒」と訳したのは原詩では「卯酒」で、もとの意味は卯の時（午前6時ごろ）の酒であるのだが、たぶん本当に朝酒を飲んだのではなく、調子が悪くて（詩題には「意思昏昏」とある）起きられなかった理由を朝酒によるという虚構を設けて詩にしたのだらう。2月1日に黄州に着いて、このころになって疲れが出たのだらうか。密州みつに赴任した後も半月余後に体調を崩したことが思い出される（第5章23ページ）。竹雞ちくは「泥滑滑」と鳴き、鳩は婦人の怒りの声のように鳴くというので、この詩の句が生まれている。後に鳥の鳴き声を主題にした詩を見る（本章74ページ）

■雨晴後歩至四望亭下魚池上遂自乾明寺前東岡上帰二首

上に続いてこれも日記調の詩。詩題は「雨しが晴れた後に歩いて四望亭しぼうていの下ぎよちの魚池けんめいじにまで行き、乾明寺とうこうの前の東岡の上をりゆうし通って帰った」。四望亭は、唐の時代にこの地の知事であった劉嗣りゅうしが再建したとの記録があり、黄州の町の北東にある竜王山りゅうおうざんの高台にあつて、その名の通り非常に見晴らし

がよい。蘇軾が寄寓する定惠院じょうゑいんからは、乾明寺を經由して北に行き、往復数キロほどの道のり。

其の一

魚池では、
 雨が降った後に、浮き草が合わさって水面を被い尽くし、
 蛙の声があたり一帯に満ちる。
 海棠の花はもはや夢となってしまったが、
 梅の実が新たに嘗められくらいにまでなっている。
 歩くついでにそこらの菜を摘み取る。
 フランコ鞦韆が目に留まるものの遊ぶ人はいない。
 心して応対してくれるのは木芍薬もくしゃやく(牡丹)だ、
 春の終わりの殿しんがめを自ら買って出てくれている。

其の二

四望亭の高い建物は廢墟となつてすでに久しく、
 下に魚を育てる池がある。
 あたりの山に暮色が迫ってくると、
 春風にいろいろな草の香りがより一層立ち昇る。
 町につながる橋に人の姿はなく、

通りかかる古い寺には竹が青々と伸びている。

夕陽の当たるところを鳴く声で満たしているのは一羽のこのとり鶴鶴、

それはいったいどこから来たのだろうか。

(蘇軾が四望亭までの道歩いたのがこれが初めてであったかどうかはわからないが、後にこのあたりを頻繁に行き来するようになり、ここに詠まれた鞞韃にしてもすっかり馴染の存在となる)

■与王定国書

黄州に到着してすぐに王鞞おうきょう (字は定国あぎな ていこく) から手紙が届いた。王鞞は蘇軾に連座して遙か南方の地に流され、移動の旅の途中にあった(本章2ページ)。王鞞の量刑が(理不尽に)重いのを蘇軾はとりわけ気に掛け、すぐに返事をした。さらに2カ月の間に3通の手紙を送っている。手紙は独特の文体で書かれ、残念ながら訳者には十分に読み解く力がない。計4通の手紙から読み取りやすい個所を適宜選び、繋ぎ合わせてここに訳出する。

(1)私は黄州ちやうこうに来てからは、長江の岸辺で船が行き来するのを眺めて過ごしていたところ、貴君からの手紙を頂戴し、すぐに憂いをときほくことができました。ここに来てから体も気持ちもますますであるのをよとしています。いまはある僧舎に寄寓し、僧に従って菜食し、私にはそれが非常によいようです。答を受けた身には有

り余り恩であると感じ、心を鎮め、口を閉ざすようにしています。記すべきことも、近くの寺での沐浴したこと、谷川を尋ねたこと、魚釣り、薬草の採取といったことくらいで、つまりはぼちぼち楽しんでいる次第です。

(2)私の罪は大きいのに、与えられた罰は軽く、幸いなことでありました。しかし、数十人もが私との縁で罪を得てしまい、とくに貴君は私のために最も深く累るいが及び、辺境の地に流れ落ちることとなってしまいました。このことを思うたびに、心肺しんぱいの間に火の熱さ、棘の痛さを覚えます。貴君からの手紙を見るに、棄てられたとの怨みはなく、自ら思いをコントロール遣しておられ、真にその人となりを知ることができます。

(3)揚州ようしゅうには侍其君じしがいて、気候の悪い地で十余年間官の仕事をし、帰って来られましたが、顔色は良く、悪いところは一点もありませんでした。侍其君が言うには、「磨脚心法まきやくしんぼう」を用いただけとのこと。貴君はすでにこの法を行っているわけですから、さらに続けて怠らないようにしてください。酒は少量にし、飲食を節制し、常に胃の状態をよく保ってください。私は張方平殿の「軟朱砂膏なんしゅさこう」を湖州で試したことがあります、はなはだ益があると知りました。貴君も服用するとよろしいでしょう。

(4)貴君がいま向かっている賓州ひんでは気候の悪さにきつと迫られるでしょうから、心と体をほどほどのところに安らかに保つことが大切でしょう。貴君は流落のため

に悲嘆に沈み込むようなことはきっとないでしょうけれど、節制せずにはよろしくありません。よく自愛し、すでに行っている「道引」^{どういん}「服食」^{ふくしょく}をさらに功を倍加するよう
にされるとよろしいでしょう。

（王鞏は名門の生まれで、ずっと都での贅沢な暮らしに慣れていたので、蘇軾はとりわけ王鞏の健康を気遣い、さまざまな健康法について述べている。「磨脚心法」「軟朱砂膏」「道引」「服食」の具体的な内容はよくわからないが、別の手紙でもう少しを詳しく健康法について述べているのを後に見ることになる（本章124ページ）

■与陳希常

^{ちんぞう} 陳慥（^{ほうさんし}方山子、^{あざな}字は^{きじょう}希常）（本章32ページ）から一つの提案があり、それに答えた手紙。

^{ぶしょう}武昌の一策を諭し示されまして、出費が少なく生計が立つ真に上々の策です。しかし、私が考えますに、世の好事家が粉飾を加えてあれこれ言うようになるのを恐れます。^{こう} 黄州^{あんち}安置の身でありながら、別の町に住まいを移したと都に聞こえましたなら、それは小さなことではすまないであります。常に黄州と武昌の間を往き来していることにしても、あれこれ詮索する者は何を言い出すかわかりません。皇帝陛下に示された御恩にいささか反することにもなりましょう。この策を採るべきかどうか、なお深く考えるべきであろうと思います。

（この手紙から、陳慥が対岸の武昌に（恐らく格安の）土地を用意したので、そこに

住まうよう蘇軾に勧めたと推測される。蘇軾は黄州安置（黄州以外の地に住んではいけない）の処分を受けているけれど、黄州に住まいを置きつつ、武昌に適宜通うという形を取ればよいのではないと陳慥は提案したのだろう。武昌には先に見たように王兄弟もいて、なかなか好条件の案なのだが、やはり黄州安置の禁を破ったと都で沙汰されるのを恐れて蘇軾は断った。陳慥がこの地で相当に顔がきき、蘇軾のために何かと手を打ってくれていたことがわかる)

■雨中看牡丹三首

3月になれば牡丹の花盛り。雨の日に牡丹を見ての詩。この牡丹は道教の寺院である天慶観てんけいかんでのものであろうと推測されている。天慶観は安国寺のすぐ近くにあった。

其の一

霧のような雨は点にもならない。
 空に映し見て、雨があるかないかを疑う。
 ときに牡丹の花についた雨は、
 ぽつんぽつんと明るい珠たまを走らせる。
 紅い化粧を洗い、ほのかな香りを生じさせる。
 黄昏たそがれになって雨はさらに静かに注ぎ、
 牡丹の頭たまは扶けなければと思わせるまでに重くなる。

其の二

明日になればきっと雨は止むだろう。
朝の光が松の枝に及ぶころには、
清らかな寒さが花の中にまで入り込んで、
しっかりと自分自身を保っていられるようになるだろう。
かくて、昼には濃い艶やかさを発揮し、
我が時を得たと牡丹は一笑するであろう。
そのまま暮れ方に至り、
自分の奥深い姿を、
いずれなきものとして敛^{おさ}めなければならないのを悲しむのだ。

其の三

牡丹の奥深い姿は惜しんだところで甲斐がない。
後に東の風が吹き出したなら、
酒が醒めた後で何を見るのかというと、
雌蕊に残る金粉だけなのか。
千種の花も百種の草も、
華やかなものも地味なものも、どれももうなくなってしまう。
泥に汚したくないのなら、

落ちる^{ヨーグルト}蕊を牛酥で煎じて食べるしかないだろう。

■次韻楽著作野歩

どの地に行っても、蘇軾はすぐに役人仲間と詩の贈答をするようになる。
これは黄州で酒税の管理をする^{がくけい}楽京が詠んだ詩に次韻したもの。

^{がく}楽君はこのようにいう。

「老いて、西も東もわからなくなりました。

林がひどく^{あか}紅くなったので、もう秋かと知ったのはよかったです、
あちこちに花があると見たのは、^{くも}眼が暈って本当は病気のためで、
耳の中では、からっぽなのにいつも蟻の音がしています。
酒が醒めたら、知らないうちに春は半分が終わっていました。

眠りから起きるのはいつも日中を過ぎてからで、

杖をついて野に出て、

たまたま^{きび}黍を作る人に会ったり、

衣を緩めて、おつな風ですなあと詠じてみたり、

仰ぎ見て松から粉が落ちるのを手に受けてみたり、

俯して^{くこ おれ}杞の叢から新芽が出ているのを摘んでみたりしています」

楽君がいるこの地に降るのは^そ楚国の雨、

かの^{うんぼう たく くら}雲夢の沢を昏く、

川を遡^こってくるのは遙か呉国の潮、

それでも武昌宮^{ぶしょうきゅう}にまでは至らない。

歴史の興廃を見てきたこの地には無数の詩があり、

窓辺より静かに見やるだけで運命について考えさせられる。

いずれ我等は官服を脱いで、

二人の老人として、風流をともする仲間となるであろうか。

(後半はこの地の歴史や名所を詠み込んで、樂京への挨拶としたのだろう)

■次韻樂著作送酒

樂京^{がくけい}が詩を添えて酒を贈ってくれたのでそれへの返事。酒税を管理する樂京が、どこから酒を入手したのかと妙に気をまわす必要はないだろう。

若いころの私は、

酒を飲むと調子が悪くなり、觴^{さうざき}を怯^{おそ}れたものだ。

老いてくると、長じつくり味わえるようになった。

故郷を離れている我が愁いのかさを計るならば、

きっと一万斛^{こく}はあるだろう。

春に届いたひと壺の酒はいったいいかなる湯なのか、

愁いは雪のようにたちまち消えてしまった。

■杜沂遊武昌以酴醾花菩薩泉見餉二首

と き ぶ しょう と び ぼ ぎ つ せん
 杜沂という人が対岸の武昌にまできて、酴醾の花と菩薩泉の水を贈ってくれた。酴醾はバラ科の植物で、香りのある白い花を晩春に咲かせ、文人に珍重された。菩薩泉は武昌の近くの山にある泉。2首あるうちから酴醾について詠んだ1首を訳す。

其の一

と び
 酴醾は、他の花と春に争いごとを起こしたりはしない。

最も遅れてひっそりと開くのである。

青い蛇、あるいは玉の骨のような蔓を延ばし、

羽根の蓋から珠を連ねた簾ように花を垂らす。

敢えて装うことなしに艶なることは絶世であり、

風がなくても香りが自ずから遠くにまで及ぶ。

ご そん けん
 呉の孫権が建てた故宮の址には、宮女の紅の粉がたくさん埋まっていて、

微かに月の光が射す晩には、どこかからか笙簫の音が聞こえてくるという。

あ て や か
 そこに残った妍さがこの花に入ったために、

千年の後にもなお清婉なのだろうか。

怪しむのは、杜君が呼ばれてもなかなか山から帰らずにいること。

ひ か
 きっとこの花に挽れているからなのだろう。

しかし、昨日の宵には悪い雷雨があったから、

花が終わってしまっ、杜君も返ってしまうのだろうか。

(杜沂がこのときに何か官職に就いていたのか、何かの用事があった武昌にきたのか、それらのことは知られていない。蘇軾は後の詩に見るように、杜沂やその子等と連れ立って武昌の西山せいざん（そこに菩薩泉がある）に登る（本章 78 ページ）

■与朱鄂州書

これは鄂州知事の朱康叔しゅこうしゅく あざな じゅしやう（字は寿昌）に宛てた手紙。鄂州は長江をはさんで黄州と向かい合う州ちやうこう（上の詩にあった武昌県はその中に含まれる）。

(饒学剛著『蘇東坡在黄州』は、この手紙は元豊 3 (1080) 年 3 月に書かれたと推測しているが、孔凡礼撰『蘇軾年譜』はそれより 2 年後としている。ここでは前者の説に従う)

近ごろ、春とはいえ寒さが続いています、いかがお過ごしでしょうか。

昨日、武昌に寄寓する王天麟おうてんりんさんが来られ、たまたまあることを話され、それを聞いてあまりの酸辛さに、食事も喉を通らなくなりました。貴公のような賢者であればわかってくださると思い、王さんをわずらわしてこの手紙をお送りいたします。

王さんがいうには、岳州、鄂州のあたりの農民は、およそ二男一女を養い、それを超過すると子供を殺してしまうのだと。とくに女を養うのを嫌い、そのために民間には女が少なく、妻のない男がたくさんいます。

生まれてすぐに、赤ん坊を冷たい水に浸して殺すのだとか。その父母は忍びなくて、目を閉じて顔をそむけ、しかし、手は赤ん坊を水の中に押さえつけ、泣き声やんではばらくすると死んでしまっています。神山郷しんざんごうには石揆せきぎという農民がいて、続けて二人の子を殺し、去年の夏にその妻は一度に四人の子を産みました。そのとき、母子ともに皆が死んでしまいました。これは犯した罪の応報によるものなのですが、愚かな民は天の戒めを知りません。

王さんは、近所でこのようなことがあると聞くと、すぐに走って行って赤ん坊を救い、衣服や食べものを与え、たくさんの命を助けてくれました。赤ん坊を殺そうとしていた者も、生まれて数日もすると、たとえ子を持たない人がその赤ん坊をほしいと言ってきても、与えようとしなくなります。親子の愛は天性として具わっていて、赤ん坊を殺すのは習俗に牽かれてしまっているだけなのです。

鄂州たいこうりょうには秦光亨という者がいて、科挙に及第して、いまでは安州あんで官僚となっています。秦光亨が母の胎内にあったとき、秦光亨の叔父ちんじゅんの陳遵は、夢の中で、一人の小児が衣を曳き、何かを訴えようとしているのを見ました。二晩続けて同じ夢を見て、その様子が甚だ切迫していました。陳遵は、姉が妊娠していきまに産むときになったけれども、これ以上子供が多くなるのを望んでいないのだと気づき、急いで様子を見に行くと、まさに赤ん坊は水を満たした盆の中に置かれようとしていました。陳遵が救い出し、秦光亨は死を免れたのです。鄂州の人はこのことをよく知っています。

法律によれば、子孫を殺した者は二年の徒刑となります。これは州知事が執行す

る法です。そこで貴公にお願いしたいのは、各地の役人に命じて村々の顔役を招集し、この法律のあることを告げ、良し悪しを諭し、必ずこの法を実行するようしていただきたいのです。顔役たちには村に帰って皆に話をさせ、さらに法律の条文を書いて壁に貼って示し、また、罪を犯したことを官に通報した者には賞を与え、その賞は罪を犯した者と隣組組織から徴収したものを充てるようにします。もし小作人が罪を犯したなら罰は地主に及ぶようにします。婦人が妊娠して月日が立てば、隣人や地主は知らないはずがなく、もし産んで後に殺せば、それがわからないはずはありません。黙認して官に告げないでいれば、当然罰金を科すべきです。法律によって数名を罰するなら、この風習も改まることでしょ。

人には人情があります。きっとこの定め楽しんで従うことでしょ。殺すことなく生まれて数日が過ぎれば、その後でたとえ殺すように勧められても、誰もそうようとはしません。貴公によって生かされる者がどれだけたくさんになるのか、きっと数えることもできくらいになることでしょ。

仏教は殺生を罪とし、卵を抱くものを殺すのを最も重い罪であるとしています。動物であってもそうなのですから、まして人の子を殺す罪は重いのです。俗に病氣となった小児を「無辜むこの者」(罪なく苦しめられている者)といいます。赤ん坊を殺すのはまさに「無辜の者」を殺すのです。法律では毫碌もうろくして人を殺した者だけは死刑を免れるとしています。罪のない子を殺して赦されるはずがないのです。貴公が一万の赤ん坊を死から救い出したならば、大人を生かすよりも十倍もの徳を積むことになりましょ。

昔、晋の時代に王濬が巴郡の知事であったときに、子を産んで殺した者を厳罰に処し、生かした者には徭役を軽減したところ、数千人が救われました。その後、呉と戦争になったときに、助けられた者は皆が兵士となり、その父母が息子を戒めて「王知事がそなたを生かしてくださったのです。そなたは王知事にために命を捧げなさい」と言ったそうです。昔の優れた役人にはこのような例はたくさんあります。いまの世において、昔の優れた役人のよさが残っているとしたら、貴公において他にあるでしょうか。

私がかつて密州に赴任したのは、飢饉の年に当たり、多くの方が子を棄てました。私は官の余剰米をもとに「勧誘米」を設け、数百石を集め、捨て子を養う者には月に六斗の米を与えるようにしました。一年後には、養った者と子は皆が互いに親子の愛を持つようになり、決して捨てられることなく、数十人が生きることができました。

これらのことは貴公なら簡単に実行できましょう。貴公とは深い契りがあると考え、敢えてお願いする次第です。この不躰な手紙を民衆のためにどうかお許しください。

（蘇轍は密州で「涙をこぼしつつ捨て子を拾う」と詩に詠んでいた（第5章66ページ）。そこでは捨て子を救う措置については何も言及していなかったが、「勧誘米」の仕組みを作って数十人の子を救済していたのだった）

■黄鄂之風

生まれたばかりの嬰兒を殺す習俗に対して、蘇軾は鄂州知事の朱康叔に手紙を送っただけでなく、自身でもできること考え実行している。この文章はしばらく後になって書いたものであろうが、関連するのでここに訳出する。

近ごろ聞いたところでは、黄州のあたりの庶民で貧乏な者は、子がたくさんになると、生まれても取り挙げないで、すぐに水を満たした盆たらいに浸して殺してしまい、とくに長江ちやうこうの南の鄂州がくでは最も甚だしいとか。これを聞いて忍び難く、鄂州知事がくの朱康叔しゅこうしゅくはたまたま知り合いであったので、手紙を書いて、賞罰をきちんと定めて、この風習を変えるように勧めた。

また、黄州には古耕道ここうどうという、椎魯どんくさくで大して長所はないのだが、すこぶる誠実で、善を為すことを喜ぶ者がいる。黄州の富裕な者に一年に十貫の錢を出資してもらい、もっと多く出したい者にはそうしてもらい、その錢を古耕道が管理して、米や綿や絹の類を買って、安国寺あんこくの僧の継連けいれんがその出納を帳簿に付け、村々の貧者で子を挙げ難くしている者を訪問して、物品を与えるようにした。一年の間にもしも百人の小児を活かすことができたなら、閑な身となった私にとって実に楽しいことである。私も貧乏ではあるけれど、手始めに十貫の錢を出資した。

(1) 密州では知事という立場で捨て子救済のための仕組みを作った。それと同様のものを、黄州では民間の力によって作った。(2) それを実際に運用したのは古耕道と

安国寺の継連で、継連の名は先に見ていて（本章 46 ページ）、黄州ではよく知られた高僧であるから、継連が関わっているのならと町の富裕層の賛同が得られたのだろう。

(3) 「^{ついろ}椎魯」とここでは評されている古耕道も実は一目置かれるような人物であったのだろう。古耕道について詳しいことはわからないが、科挙を目指したものの合格するには至らなかったようで、それなりの教養人であったようだ。何かのきっかけで蘇軾と親しくなり、後に蘇軾は古耕道のすぐ近くに住むようになる。古耕道が^{ちんぞう}陳造の交遊仲間、つまり「^{いじん}異人」の一人であったと推測しても、たぶん間違いではないだろう。

(4) さらに補足すると、この元豊 3 年 3 月にもう 1 人の異人として^{はんへい}潘丙が蘇軾のもとを訪れている。潘丙は、黄州の対岸の^{はんこう}樊口で大きな居酒屋を営む^{はんかく}潘革の息子で、潘一家の面々はいずれも個性的で、蘇軾は深く付き合うことになる、潘一家は古耕道とも親しく、さらに^{かくこう}薬屋を営む^{かくこう}郭遵も加わるならば、黄州の異人は芋蔓式にいくらでも繋がるということになる。つまり、蘇軾は黄州に到着してわずか 2 カ月にして庶民の間にしっかりとした足場を得たのである。制科にまで合格した超エリートでありながらそのようであるのは、蘇軾の天性によるのだろう)

■与李公択書

蘇軾は、古耕道を始めとして黄州の庶民との間に新たなつながりを構築する一方で、国家の上層部にある人々との交際ももちろん続いていた。李^り常（字は公択）から手紙が届き、すぐに返事をしたのがこれ。蘇軾が^{じょ}徐州知事であったときに李常が訪ねてきて詩を詠み合うなど（第 5 章 243 ペ

一ツ)、2人は極めて親密で、そのために李常は連座して罰として銅二十斤を科せられていた。

貴兄より新しい詩をいただきました。どれも遠く別れて悲しく、惘然ぼんやりしているという意味のことが詠まれていて、貴兄が私のことを厚く思ってくださいていることがよくわかります。しかしながら、私は「鉄心石腸てっしんせきちよう」をもって貴公と向かい合っているつもりです。

それはどういうことかといいますと、我等は老いてかつ窮しておりましても、正しい道理が心肝を貫き、骨の髄に至るまで忠義うめによって填められ、いざ死ぬというときであつても普段通りに談笑しているということであつてしかるべきではないでしょうか。もし私が困窮しているのを見て憐れと思うのであれば、それは道を学ばない者と少しも遠くないと言わざるを得ません。

貴兄は道に至ること深いわけですから、詩はかのようにあつても、貴兄の本心はきっとそうではなくて、友を好む心の篤あつさからかのようになつただけであるのでしょう。とはいえ、真の朋友の本義は、もつぱら道理に則して諫めることにありましよう。ちよつと言ひ過ぎかも知れませんが、貴兄の本来こころの意を敷衍して申すまでです。

私も時に悩んだり苦しんだりしますが、事に遇つて、お上を尊んで民を扱うらおすことができるのなら、我が身を忘れてそれを行い、自分自身の禍福や得失は造物者に任せるのであります。

貴兄でなければこのようなことは申しません。この手紙を御覧になつたならばすぐ

に火にかけてください。道理をわきまえない者は侮辱されたと思うかもしれませんがから。

(この手紙はかなり強い口調で書かれている。「鉄心石腸」(心は鉄のように強く、腸はらわたは石のように堅い)とは、蘇軾にはあまり似つかわしくないようにも見えるが、軟弱なようである。実はそうなのだろう。「民をうるおすことができるのなら我が身を忘れて行う」とは、すでに嬰兒救済で実行しつつある。どうしてこの手紙を火にかけるようにといったのか。蘇軾に対して監視の目を光らせている連中が見下されたと感じるのではないかと、蘇軾は気にしたのである。それは、湖州こに赴任してすぐに皇帝に提出した文章に「新進」の語を用いた(第5章357ページ)ことが、蘇軾が逮捕されるきっかけとなったことによるのであろう)

■五禽言

4月、季節は春から夏へと移り、蘇軾はこの詩を定恵院じょうえいんで詠んだ。次のような序文がある。

梅堯臣ばいぎょうしんはかつて「四種の禽の言とりことば」の詩を作った。私は黄州に流されて、定恵院に寓居した。僧舎をめぐって、林には丈の高い竹があり、池がまには蒲や葦あしがあつて、春から夏への変り目には百種もの鳥が鳴く。土地の人はその声に似せて鳥の名を付けている。そこで梅堯臣の詩をまねて「五首の禽の言とりことば」を作る。

其の一

かつて王禹偁が蕪州に放逐されたとき、
啼く鳥の声を聞くと、「蕪州鬼」と言っていた。
己が蕪州で死ぬことを暗示するのかと、それを非常に嫌った。
鳥はもとより王禹偁を知らないし、
ましてその死について知るはずもない。
人というものは、死んで鬼になることは免れようがない。
鳥の声で己の老いを知るようでは遅すぎるのではなからうか。

(王禹偁については、その肖像画を見た印象を記した文章があった(第5章268ページ)。そこでは王禹偁を偉大な先人として称えていたが、ここでは皮肉な言葉を吐いている。蕪州は黄州の東隣の地で、実際に王禹偁はそこで死んでいる。なお「鬼」とは日本語の鬼とは異なり、死んだ人を意味する)

其の二

昨日、南の山で雨が降り、
西の溪川は深くなって渡れない。
川辺の「布穀児」は、
「脱却破袴」(破れた袴を脱ぎなさい)と人に勧める。
ならばと袴を脱ぐと、溪の水は冷たい。
水に映して見るのは、租税の催促で叩かれてできた癩だ。

(「布穀兒」は鳥の一種で、その鳴き声は「脱却破袴」と聞こえる。蘇軾はここでも政治に対する皮肉な言葉を吐いている)

其の三

去年は麦は十分に稔らなかった。

人は我が肉(鳥の肉)を狙って弾丸を打った。

今年は麦の出来がよくて、

ところどころに粟の採り残りもある。

豊年の兆しはないとは昔からいうところ、

なのに、人は我が「快活」^{かいかつ}の声を聞いて豊凶を占おうとする。

(「麦飯熟即快活」^{ばくはんじゆくそくかいかつ}と鳴く鳥がある。その鳥がさかんに鳴くと豊年になると知って喜ぶのに、凶作の年にはその鳥を獲って食べようとするのはどうかと、これも皮肉な口調の詩)

其の四

頑張って作ろう、頑張って作ろう、

蚕紙^{さんし}を一百枚。

丘には麦の頭が高く伸び、

林では桑の実が落ちる。

あたしが願うのは一枚の蚕紙から一千両の糸、

かえ
蚕が孵って蛹になって、さらにその子が増えるように。

(4首目は「蠶糸一百箔」と鳴く鳥の詩)

其の五

こあく こあく
「姑悪」「姑悪」と鳥が鳴く。

しやうめ
姑に虐待されて死んだ嫁が、鳥になって鳴いているのだという。

しかし、鳥は言う。

「姑が悪いのではありません、妾が薄命だっただけなのです。

見てください、世には孝婦といわれる嫁がいます。

東海の孝婦は、夫が亡くなり、子もなくて、でも、家を去らずに姑を養いました。

姑は私がいるから嫁に苦勞をさせていると、自分で命を絶ちました。

姑の娘は、嫁が殺したと訴え、孝婦は死罪になりました。

それから三年、その地は早魃に見舞われました。

こうかん
広漢の孝婦は姑が好む水を汲みに毎日七里の道を川まで通っていました。

ある日、嵐に遭って定刻までに帰れず、隣りの家にまで来ると、

『喉が渴いた。あんな嫁はいらない。離縁だ』と叫ぶ姑の声が聞こえました。

孝婦は隣家に留まり、それからは昼夜働いて、隣家からということで姑にいろいろな物を届けました。

姑はそのことを知って、孝婦を呼び戻しました。

ああ、妾はどちらの孝婦にも及ばなかったのです」

（「姑悪」と鳴く水辺の鳥がいる。この詩を読んで、蘇軾は姉の死（第4章 200 ページ）を思わずにはいられなかっただろうと推測してもよいだろう）

■遊武昌寒溪西山寺

長江ちょうこうの対岸に渡り、先にとび酴醾と きの花と菩薩ぼさつせん泉の水を贈ってくれた杜沂と き（本章 66 ページ）とともに、武昌ぶしやう県の寒溪かんけいにある西山せいざん寺に遊んだ。

（西山には、「4月13日に杜沂、その子とでんの杜伝とご、杜俛とご、それこうえんに江縊と登った」と、蘇軾が記したものが残っていたという。江縊は武昌県の役人である）

対岸わたかまの武昌には連山が蟠り、

樊口はんこうの渡し場のあたりも緑の木々で鬱蒼としている。

私は黄州に来てすでに百日、

向こうに渡りたいと思いつつ、

鷓鴣ちやうこうが長江の水を出入りするのを座って眺め、

鹿が武昌の山を駟け巡るのを夢の中で追い掛けていた。

今朝はようやく、

衰え朽ちた身を一本の葦に寄せ、

強大な浪が襲ってきても平然と話し続けつつ長江を横切った。

重なる丘も、朝飯前はきものだと履を飛ばすようにして登る。

寒気がするばかりの絶壁に行き当たり、

その下を吼えるようにして谷川が流れる。

これまで幾人の者がここにまで来ただろうか。

おもむろに進むと、

心に得るものがあるのを^{よろこ}欣び、

あたりにあるのはいずれも靈草や藥草。

西山寺の^{きゅうきよくてい}九曲亭に上ると、

まわりの山々はどれもほんの小さな土の丘、

長江の北を見るなら、

都からここに来た路は全て雲水の彼方。

振り返って、^こ呉国の宮殿跡を求めればぼうぼうと藪があるだけ。

伝え聞くとこの歴史を偲ぶよすがとてなく、

尋ねようとする風流人もこのさすらいの^{おきな}叟くらいしかない。

よし、田を買って隠棲するのはこたえと決めようではないか。

よい水はあるし、結構な酒もある。

竹林を整えて、その奥深くに井戸を置こう。

さあさあ、もっと景色のよいところがあるだろうから、

さらに三日分の食糧をつつんで行こうではないか。

(詩の前半で初めて対岸に渡るかのように歌っているが、実際には先に^{おう}王兄弟の家を訪ねている。今回の小さな旅の印象を強めるためのちょっとした虚構であるのだろう)

■書杜君懿蔵諸葛筆

上の詩と同じころに、杜沂と きの父の杜叔元と しゅくげん あざな くん い（字は君懿）の所蔵品であった諸葛筆しよかつひつについてこの短文を書いた。諸葛筆とは、宣州せんの諸葛氏しじんが作る筆で、非常に優れていることで昔から知られていた。

杜叔元は書よを善りく、李建中けんちゆうの筆法しんぽうを学んだ。

宣州の副知事であったとき、その地で筆を作る職人の諸葛氏しじんを士人と同様に厚く遇した。それで諸葛氏は力を尽し、杜叔元はいつも善い筆を得た。

私が科挙を受験したとき、杜叔元は二本の筆を贈ってくれた。試験の間中使い続けてもその筆は駄目になることはなかった。

それから二十五年を経て、私は黄州にきて、杜叔元は亡くなって久しく、その子の杜沂と会った。杜沂はその父が宣州にいたときに得た筆をなお蓄えている。丈夫でいまも使うことができる。

杜叔元の特別な筆の保存方法がある。百本の筆に対し、水銀の粉を一銭分用意し、全てを沸騰した湯の中に入れる。筆に薄い糊が付いたようになる。そのようにしておくと、筆も硯や墨のように永く虫に食われることがなく、軟らかくかつ潤って乾燥しない。杜叔元の方法によらなければ、これほど長くもつことはない。

（李建中の筆法については、後に本章 148 ページで触れられる）

■与王定国書

おうきょう あざな ていこく

王鞏(字は定国)(本章 59 ページ)には引き続き頻繁に手紙を書いていて、4月に送ったと推測されているものの一部を見ておこう。

貴君にはもとより罪がないのに、私のために累るいが及んでしまいました。そのことをずっと想っています。きっともっと善い土地に移されるようになるでしょう。

私ははなはだ頑健で、住むところも、食べ物もなかなか結構です。ただ、平生から生計を営むことが不得手で、たちまち貧乏になり、どこから物を得たらよいものなのか、きっと孔子の弟子の顔回がんかい(顔淵がんえん)や原憲げんけん(子思しし)のような暮らしをして、この先を過ごすことになるのでしょう。私の命分めいわけはこのようなものだと思っ
てしまえば、憂うことはもうありません。

かつて私は徐州じょにいたときに黄樓こうろうをつくりました。そしていまは黄州にいます。また密州みつにいたときには獵をして勇ましい武官になりたいものだと歌いました。そしていまは団練副使だんれんふくしという武官です。みな先に兆しがあって、このようになっているのです。こう書いている間にも笑ってしまいます。

■石芝

5月。夢を見ての詩。序文がある。

げんぼう

きゆう

元豊三年五月十一日癸酉の夜、誰の家とも知れぬところに行き、堂の西の門を

開けると小さな庭があり、古い井戸があった。井戸のまわりは蒼い石で、石の上に紫の藤のようなものが蛇のようにわたかま蟠り、枝や葉が赤い箭のようであった。主人が「これが石芝せきしです」と言うので、私はいきなり一枝を折って食べた。人々は驚いて笑った。その味はしそ雞蘇のようで甘かった。その明るる日にこの詩を作った。

がらんとした部屋に明るい月が清らかに射し込んできて、
 独り眠っていた私は目覚める。

次第に呼吸が整ってきて、

これは夢ではないのやら、まだ覚めてはいないのやら。

人の呼ぶ声かしたので、ついて行き、

たま瓊の飾りの戸を開いて、朱い欄干、碧の井戸。

石の上に蛇が蟠っているのとかと驚けば、

紫の筍のような玉芝せきしが無数に生えている。

ぽきんと折り取ったのはまるで青い珊瑚、

味は甘い蓮根にしそ雞蘇を合わせたよう。

主人は私を見て手を打ち、満座の客人がころころと笑う――

仙人は生半可な脱俗の士を嘲笑する。

そんな我であっても、

気後れして仙薬を食べそこなった昔の人よりはむしろ。

何しろ、石髓せきずいを服せば身は鉄のごとく、寿命は天に等しくなるのに、

しんざん

神山が自ら開いてそれを取れるようにしてくれるのは、

五百年にたった一度だけなのだ。

(石芝とは仙薬のもととなるもの。それをいきなりぽきんと折って食べてしまうのが蘇軾らしい。詩の終わりの部分は、500年に1回しか採ることのできない石髓を目の前にしながら、ためらったために仙人になりそこなった人の話に基づく)

■武昌銅劍歌

古い銅劍を見て詠んだ詩。上の詩に続いて幻想的イメージの作である。序文がある。

ていぶん ぶしやう ちやうこう
鄭文がかつて武昌県の役人だったときに、長江の岸が裂けて古い銅劍が出てきた。鄭文はこれを得て、私に贈ってくれた。非常に精巧な出来で、並みの鍛冶職人が造れるものではない。

ちやうこう
雨が止んで長江の流れが静まり、

すな
沙を巻いて風が吹き過ぎたとき、

雷様は雲を踏んで黄色い蛇を捕えた。

蛇は矢のように空中を飛んでいたのだが、

雷様は電光でその尾を焼いてしまい、

丸めてからりと投げ捨てた。

雷様は飛んで天に上り、蛇は水に入った。

その途端に、鉄を削るような音がして、

水辺の山が裂け、神物しんぶつ(銅剣)が出現した。

その剣を仔細に見るなら、両側に朱い花模様がある。

かの蛇の血なのだろう。

ああ、凌雲閣りょううんかくにある唐王朝を樹立した功臣の像を見るよい。

高さは九尺、いずれの人物も顎にまで届く長さの宝剣を腰に掛けている。

私なんぞがこの剣を得て何をするのか。

ただ叩いておかしな詩を詠むだけだ。

(唐王朝を樹立した功臣のような活躍をする——それは8歳のときに4人のスーパー
スターに憧れて以来の蘇軾の願いであった。しかし、罪を得て、もはやその夢は断た
れてしまった。そこに、チャンスを与えようと手を差し伸べてくれた友がいた。それ
に対する返事を次に見る)

■与章子厚書

都から章惇しょうじゆん あざな (字は子厚しこう) の手紙が届いたのでそれへの返事。

章惇は鳳翔時代からの親友。湖州の飛英寺で章惇が書いた詩を見て、「蓮
の花が天にまで続くこの場所へと飛んで来るがよい」とのメッセージを
送ったのは、前年の夏であった(第5章377ページ)。蘇軾はそのすぐ後に
逮捕され、章惇は政治的立場を異にしながらも、蘇軾の刑が減じられる

よう諸方面に働きかけた。章惇はこのころまでに改革派の中心人物の 1 人となっていて、この年の 2 月に副宰相になった。章惇の手紙には、これまでの姿勢を改めて我々に協力しないかと記してあった。それに応じれば蘇軾には朝廷に復帰する道が開けるであろう。

去年、湖州でまたお会いできればと申しましたが、思いがけず逮捕され、ついにはいまに至った私が、副宰相殿からお手紙を頂戴し、不思議に思っております。私は罪を得てからは、世間の事とは関わりを持たず、親戚の者との間でさえ一文字の手紙の往来もありません。お手紙で温かいお心で近況を尋ねてくださり、友愛、親切に感動して言葉もありません。

貴殿が副宰相に任命されて大政に関わるようになりましたこと、世の全ての者が喜んでおります。私が貴殿と初めて長安ちやうあんで会って語り合いましたとき、私は「貴殿は世に抜きん出た優れ者で、一代の異人になるに違いない。功名を高く上げ、將軍でも宰相でも何にでもなるだろう」と思い、そのことを口に出して言ったところ、他の者は驚くだけでありました。今や副宰相になり、朝廷が人を得たのを喜ぶだけでなく、私の言ったことがまことになったのを喜んでおります。

私は罪を得まして、その悪かったことは一つや二つではありません。平生から、貴殿と我が弟だけが、口を極めて繰り返し強く私を戒めてくれましたが、私は自分の思うままに振る舞って、お言葉に従うことはありませんでした。獄に入れられるに及んで、いまさら後悔しても遅く、きっと死ぬであろうと思いました。はからずも陛下の

寛大な御心によって再び人間世界に出られるようになりました。これで身を改めなければ決して人とはいえません。

貴殿のお手紙には「過去の過ちを悔やんで自ら痛むのであれば、一度の失敗ですっかり捨てられてしまうことはない」とあります。これは才能があって、朝廷が惜むような人物にいえることでありましょう。私のごとき者は、瑕を削り垢を洗い、朽ちたところを刻み鈍ったところを磨いたところで、いったい何の役に立ちましょうか。一日に百回反省し、旧悪がありながらも命を保ち、いつしか後の世において父に仕えるようになることを天地の仁愛に願うものです。

私はまだ年若いときに、皇帝陛下にやや見知っていたき、そのときからもしも道理に従って分に安んじておりましたならば、どうして今日のことがありましたでしょうか。これまでに犯したところを思い返しますに、まことに義も理もなく、頭を病んでおかしくなった者が川を踏み海を歩いて渡ろうとするのに異なるところがなかったのです。そのような病がおこりましたときには、自分ではそれと知らず、何かに迫られて使われているかのようでありました。病がおさまった後で、ただただ恥かしく思うのです。私が再び過ちを犯すであろうと疑うのは理由があることでありますので、貴殿は前からの知り合いであることをもって私を称誉してくださるのは、けだし私を過ちに導くものなのであります。私が再び艱難に陥ってもう誰も哀れんでくれることはないでしょう。

貴殿は平生から私に薬を送ってくださり、また慰めの言葉をかけてくださっています。それだけで十分に世間の他の者とは異なっています。

黄州は僻遠の地で雨が多く、いつも暗い天気です。魚、稻、薪、炭は値が安いので窮乏の者には結構な場所です。それでも、私は平生から生活設計をしたことがないのは貴殿も知っているとおりで。俸禄が入るとすぐに使ってたちまちなくなっていました。いま弟のもとには娘と姪が七人いて、負債を山のようにかかえています。私の家族は皆ここにいる、いつこちらに来るのかわかりません。いま私は僧舎に寄寓し、粗末な衣を着て僧侶とともに野菜ばかりを食べ、質素な暮らしをしています。これで家族が来たならどうなるかと畏れています。窮乏と栄達の道理はまぼ了解しているとはいえ、俸給が絶たれましたために、一年もしないうちに飢えと寒さの内に陥るのではないかと、思わないではいられません。俗に「洪水がくれば溝ができる」といいます。そのときになれば、きっと何か処置できるであります。最初から心配して愁いに身を焦がしたところで何ともなりません。

黄州に到着してから一度だけ黄州知事にお会いしました。それ以外は門を閉ざして外に出ていません。閑居とはいえ、まだ儒学の經典は見ることなく、ただ仏典に向かって日を送っています。筆硯を近付けることもありません。貴殿とお会いすることはもうあるまいと思うと、紙に向かって茫然としてしまいます。

(文章の表面的な言い回しは丁寧であっても、章惇からの誘いはきっぱりと断ったのである。李常りじょうに対して「鉄心石腸てっしんせきちよう」と書いた先の手紙(本章72ページ)とはかなり調子が異なり、非常にへりくだった書き方をしている。李常への手紙には他人に見せないようにと記してあった。副宰相の章惇に手紙を送れば、それは必ず他の人も見ることになるであろうと意識しないわけにはいかない。それでそれなりの書き方をした

のだろう)

■黄州再祭文与可文

1月に陳州で会った文務光(字は逸民)(本章5ページ)は、父・文同(字は与可)の棺を船に載せて故郷に向かって長江を遡り、途中で黄州に立ち寄った。蘇軾は棺の前に文同を祭る文を読み上げた。文同の霊に捧げる祭文は前にも書いている(第5章325ページ)ので、題に「再び」とある。

嗚呼哀しいかな。

鳳翔で官職に就いたときに、私は初めて貴君と識り合った。大きな口に秀でた眉、忠信が言葉に現れ、志気は剛く、事をよどみなく論じていた。

ひとたび別れて五年、貴君の評判は日に日に聞こえ、貴君の徳はますます高く、自ずと周囲を洗ってよい薫りで包むようになった。芸学の豊かさは秋の果実が盛んに実るかのようで、言葉は口から出るままに直すところのない立派な文章となり、他の百家の文などはつまらないものにしてしまった。私も自分の文を恥じ、筆硯を焚いてしまおうとした。

二度目は都会で会い、貴君は黙って何も言わなかったが、杳として清く深く、華が落ちかかるほどに開き、あるいは黍を刈り取ってちょうど炊き上がったかのような趣があって、酒を啜って歌い合えば純粋な喜びがあった。貴君は天から力を得て自

然に振る舞って誤ることがなく、たちまち万事におさまりを付け、垢にまみれた世俗から独り抜き出ている。

貴君は知事として三つの州を廻りつつも、常に家郷を恋慕し、草や木にまで仁を施し、その信義は山の鹿にも及んだ。地方から都に帰っても人と群れをなすことなく、都から地方に出ても特に親しくする相手はなかった。

死と生は大きな事柄、^{せいそう}凄愴として貴君を祭る。

貴君はもう談笑することがなく、自然界はただ虚しく運行を続けている。貴君が西に帰って葬られるときに当たって、私は長江のほとりに流された。貴君のために捧げるものは何もなく、ただ川辺の芹を摘むばかりだ。天には日と月があり、朝があれば必ず夜がある。人は茫茫とした空間の内^{ぼうぼう}にあって、幾たびか会い、幾たびか別れる。この觴^{さかづき}の酒を尽くそう。安らかな土の内に帰らたまえ。

^{あ あ}嗚呼哀しいかな。

(近く弟の蘇轍がここに来るはずだからと引き留めたが、文務光は先を急いで西に去った)

■浄因院画記

同じ頃に文同^{ぶんどう}（字は与可^{あざな よ か}）の画についての文章を書いた。

私はかつて画についてこのように論じたことがあった。人間、鳥獸、建物、器物にはどれにも一定の形^{フォーム}、「常形^{じょうけい}」がある。山や石や竹や木、水や波や煙や雲には

一定の形フォームはないが一定の理ことわり、「常理じょうり」がある。画を描いて「常形」を失えば、人は誰でもわかる。「常理」が当たらないときには、画に通曉している者でもわからないことがある。だから、世間を欺いて画の名手であるとの評価を得ようとする者は、必ず「常形」がないものをもってよく描いたと思わせようとする。

「常形」を失った画は、ただその形フォームがなくなっているということだけに留まって、画の全てがおかしなことになってしまうわけではない。「常理」が当たっていない画は、画の全てがどうしようもなく駄目になってしまう。だから、形フォームが一定ではないときには、理ことわりがあることについて特に謹まなければならない。

世間の画工には、ものの形フォームを完璧に写し尽くすことができる者もいるが、もののごとわりことわりとすると、世俗を離れた「高人こうじん」や抜きん出た才能のある「逸才いつさい」でなければ、それを画において明らかにすることはできない。

文同の竹、石、枯木の画は、真にその理ことわりを得たものだといえる。その画を見ると、このようにして生まれ、このようにして死に、このようにして攀ねじれて拳まがり、瘡やせて癩ちぢまり、このようにして枝が伸びてよく繁るのだということがわかる。根、茎、節、葉、牙角とがり、脈すじめ絡りが千変万化し、同じものは一つもなく、おのおのがそのところを得ている。天が造った理ことわりに合致し、見るひとの意こころを十分に満足させる。これは「達士たつし」が心を籠めて画いたものであるからだ。

昔、文同は二つの竹叢たけむらを浄因院じょういんの方丈いんに描いた。その後で文同は陵州りょうしゅうの知事となって西に出た。私は文同が浄因院じょういんの道臻どうしん長老に別れを告げるのに同行した。そのときに、文同は浄因院じょういんの東齋とうさいに二本の竹の梢と一本の枯木を描いた。道臻

長老はちょうど法堂の四面の壁を修理していて、そこに画を描いてほしいと頼み、文同は承諾した。それはどうも描かれなかったがそのことをここに合わせて記しておく。

ことわり理に明察を巡らし、深く画をみ観る者は必ずいるはずだ。ここに記した私のことばがでたらめでないことがきつとわかるであろう。

（浄因院は都にあり、文同が陵州知事となって都を出て行く際に、そこに道臻長老を訪ねたことは第3章93ページで見ている。この文章は蘇軾の画論として非常に有名で、「常形」と「常理」を対比して、「常理」の方をより重んじるところに、精神性を重視する蘇軾および宋代士大夫の姿勢がよく表れている）

■今年正月十四日与子由別於陳州五月子由復至齊安未至以詩迎之

弟の蘇轍は1月に陳州で兄と3日間だけ過ごし（本章7ページ）、南京応天府なんけいおうてんに戻るとすぐに自分の家族と兄の家族を連れて配所いんの筠州に向かった。恩人の張方平ちやうほうへいは極めて悲しげに見送ったという。蘇轍は船で長江ちやうこうに出て、流れを遡って江州にまできた。筠州に行くにはそこで長江と別れて南に向かうのだが、兄のもとにその家族を送り届けるためにそのまま上流へと進み、5月末、黄州にあと少しのところまで至った。詩題は「今年正月十四日、弟と陳州で別れた。五月、弟は齊安（黄州）にやってきた。まだ至らないときに詩を弟に送って迎えた」。

（この詩は最初に陳州での別れを歌うが、実景というよりはイメージであろう。詩は

必ずしも事実をそのままに叙述するものではない。次に「邯鄲の一炊の夢」の故事を引いて、人間世界の榮枯盛衰の夢の内に再び入るのではなく、世間から切り離された流^る瀆^{たく}の身になったとして、夢の縁で「雲夢沢」(黄州の南にある名所)の地名を引き出す。終わりの部分は、蘇軾による注記があつて、唐の柳宗元の「劉禹錫と別れる」の詩に「皇恩によつてもしも田に帰り去くのが許されたなら、黄髮(白髮)となつて万事が^や休^みむのを見るであろう」の句によるとある。実は、上の句は確かに柳宗元の詩であるけれど、下の句は劉禹錫が返した詩にあつて、蘇軾は誤つて二つの詩を合わせて一つにしてしまったのだという)

僕^{てん}の貂^{コート}の裘は、

人を驚かせる世間の塵やら激しく降る雪やらでいっぱいになっていた――

宛丘(陳州)での君との別れに、

僕は涙を浅い春の風に^{そそ}灑いた。

かの「邯鄲の枕」の夢にまた向かうのかと思つたら、

かえつて雲夢沢のある南の地に僕は来てしまった。

これから君と会つても、

その後では三年間の別離は覚悟しないとならぬだろうから、

必ず十日間は滞在するよう引き留めようと思つている。

いつしか僕等の白髪が故郷の山の前に映えるときがきて、

何もかもが終わつたと見てとるようなことになるだろうか。

■曉至巴河口迎子由

蘇軾は弟が到着するのをじっと待っていることができなくて、朝早くに
黄州を発つて長江を下り、二十里先の巴河口まで迎えに出た。

去年、僕は御史台の獄にいた。

手を挙げても、体を動かしても、すぐに四方の壁にぶち当たった。

深い深い井戸の底にいて、

小さな小さな天を仰ぎ見ていたのだった。

垣根を隔てて歌声が聞こえてくると、

僕は生きる計を自分自身で失ってしまったのだと恨みもした。

詩を書き留めようとしたけれど、

忍び難さのあまり紙も筆も涙で濡れてしまった。

ところが、どういふ幸いであったのか、

なお生きることができて、

今日のこの楽しさがある。

長江の流れは鏡のように浄らかで、

煙のような雨が軽くただよっている。

僕の乗る一艘の舟はまるで水鳥だ、

千頃けいの広さの水の碧あおを、

一つの点から左右に分けて進んで行く。

聞けば、君は磁湖じこにあるという。

見ようとして、隔てているのはもうわずかな距離だけだ。

朝になって風光はまことによい。

竿に付けられた旗は、風によって西北に流れている。

まさにその風に乗って君はやってきて、

川の中ほどで会う、

君の笑っている目から、清らかな光が溢れ出るのを見るのだ。

僕はこの地で老いるのだろう。

黄州には柯氏かの林がある。

美しい竹があり、石のかたわらから泉が湧いている。

そこに土地を買うべきかどうか君と相談して、

ぜひそうすべきだと君がいってくれるのを待っている。

■遷居臨臯亭

上の詩の終わりで、柯氏かの林（定恵院じょうえいんの北の丘（柯山かざん）にある）を買うつもりでいると詠んでいたが、弟が連れてきた家族とともに住むのに適当な場所を探した結果、定恵院から西に少しだけ離れた臨臯亭りんこうていに移ることになった。臨臯亭は、黄州の州庁なんちんがある黄州城の南門のすぐ外側、長江ちやうを臨む高台にある。

天地の間に生まれた私は、
大きな磨^すり臼に身を寄せる一匹の蟻のようなものか。
蟻はよたよた右に行こうとするのに、
臼は止まることなく左に回る。
私は仁や義のために走ろうとしているのだが、
餓えや寒さの苦しみが追いかけてくるのから免れることができない。
我が身の危うさをいえば、
剣の先に釜を置いて米を炊くようなもの、
針をばらまいた氈^{むしろ}の上でくつろごうとするようなもの。
それでも天地の間には佳^よい山水があり、
風や雨とともに瞬時に変化するありさまが眼の内を通り過ぎる。
老いを待たずに故郷の田園に帰るのを決断できる人は多くない。
幸いにも、私は世間から棄てられた余りものとなり、
疲れ切った馬は鞍から解放された。
我が一家は長江を臨む駅舎を占拠し、
天が切り開いた絶境を自在に見ることができる。
そのことと、餓えや貧乏との得失を乗除計算するならば、
悔やみをいうべきことでも、祝いをいうべきことでもないものであろう。
かくて淡く生きて、憂いも楽しみもないとし、

苦しいとかの言葉はいささかも成さずにおこうではないか。

■書臨臯亭

りんこうてい

臨臯亭で記した短文。この文章も含めて執筆時期は必ずしもこの年の夏ではないかもしれないが、以下に関連するものを幾つかまとめて見ておこう。

私は、飯をたらふく食べ、酒に酔って机にもたれかかる。白い雲が左側からまどわりついてきて、清らかな江かわが右側から巡り来る。重なり合う門の全てをからりと開け放つと、丘の林が後ろからどっと入り込んでくる。このときに、私には思いがあるよううでいて、思うところはない。私もまた万物の一つとして、あるべきものが備わっているのだ。ありがたし 慚愧、ありがたし 慚愧。

(臨臯亭から南を見れば、長江が右側からカーブしながら目の前を通過し、背後にこう黄州の町とそれを囲む丘がある。そのことが前半に記されている。この文章の核心は終わりにある 5 文字「受万物之備ばんぶつ (万物の備そなわれるを受うく)」である。この意味は、(1) 天の道 (自然の基本法則) は万物に備わっている、(2) それは自身の内にも備わっている、(3) だから万物と自分は通じ合っている、(4) そのことを知る以上の喜びはない、ということである)

■南郷子

りんこうてい

臨臯亭で詠んだ詞。

晚景落瓊杯。(夕暮れの風景が落ちたのは瓊たまの杯の中)

照眼雲山翠作堆。(それが眼を照らし、雲のかかった山みどりの翠が堆うづたかく積ります)

認得岷峨春雪浪。(そうだったのです、岷山びんざん、峨眉山がびざんの春の雪が浪となって)

初来。(初めてここにまで来ているのです)

万頃蒲萄漲綠醅。(眼前の長江に漲るのは葡萄から搾ったばかりの故郷の酒なのです)

春雨暗陽台。(春の雨が暗とさす天上界の高楼)

乱灑歌楼湿粉腮。(歌宴の場に雨は乱れ注ぎけしゅう仙女の粉腮を濡らします)

一陣東風来捲地。(一陣の東風が地を捲くようして来て)

吹廻。(吹き廻ります)

落照江天一半開。(長江の上に、落日に照り映えた天が半ば開かれます)

(この詞はイメージが次々に飛躍して訳すのは容易でない。杯の中に風景が落ちてくるとというのが第一の飛躍。目の前に流れている長江の水は、故郷の山の雪が解けていまここに到着したとするのが第二の飛躍。杯の中の酒と長江の水を同一視するのが第三の飛躍。酒は故郷の葡萄を搾ったものだとするのが第四の飛躍。そして、後半でさらに飛躍して、自身は臨臯亭りんこうていにいながら、仙女の住まう「陽台」にいるかのようにイメージし、にわかに降り出した雨が、仙女に降りかかると想像して、最後に雨が上が

り出した実景を描写する。以上のような幾つもの飛躍を意識して、漢字の並びを眼で追うなら、この詞をよりよく味わえるであろう。なお、他の詞も同じように、字面から喚起されるイメージを補助線として鑑賞していただきたい。詞は字句が比較的平易であるからそうすることが可能であろう)

■書臨臯亭風月

臨臯亭から見る自然物について書いた短文。

臨臯亭から数十歩も行かずに長江の大河がある。川の水の半分は峨眉山の雪が解けたものだ。私が飲食に使う水も、沐浴する水も皆ここから取る。だから何も故郷に帰らなくてよいのだ。川と山、風と月、それらにはもともと決まった主がある。いるわけではない。そのときに閑な者が主になるのだ。

范百嘉君が近頃、邸宅と庭園を新しくしたとか。そことこの臨臯亭とどちらが勝るか、そこらあたりの人に尋ねたいものだ。こちらが及ばないのはたった一つだけ、土地と住人にかかるところの税金をお上に対して払っていないことだ。

(1) 長江の水の半分は峨眉山の雪解け水だというのは、前の詞と同じ発想である。

(2) 范百嘉は范鎮の息子。范鎮は蘇軾の大先輩で、かつて都の門の手前で足止めされたときに、しばらく范鎮の所有する東園に居候させてもらったことがあった(第5章 154 ページ)。范鎮は流罪をなつた蘇軾の身の上を心配し、たびたび手紙を送って、自分の近くに住まないかと誘ってくれていた。税金を納めないのが短所であるとひ

ねったユーモア。(3)「もともと決まった主がいるわけではない」という発想は後に大きく展開される(本章308ページなど)

■与子由同遊寒溪西山

弟とともに武昌の西山寺(本章78ページ)に遊んだ。

散人(束縛されない人)である君は、
都会の道も田舎も道も自在に出入りし、
朝には湖北にいたかと思えば、夕べには淮西にいる。
筠州の酒官になりはしたものの、まだ仕事に就いていないので、
両脚を泥に突っ込むもお構いなしと歩きまわる。
君と僕は、雲と雨のように集散定めなく、
ともにいられるこの日々を惜しんで手を取り合って行く。
長江の流れに一本の箭を放ち、水鳥の前に躍り出し、
一千回揺れての後に、向かいの樊口に至り、
一万回の上り下り、草木の重なり合う西の嶺に入る。
暗い溪に瀏瀏と鳴り響く水音、霜や雪の冷たさを思わせる。
人影のない山の古い寺に何があるかという、
眼下に広がる万頃の青い玻璃。
僕等はいま鴻や雁のような漂泊の身、

長江の南も北も常の棲家ではない。

身なりなど気にもしないので、

武昌ぶしやうの町に下りるのはよしにして、

新しい道筋を踏み開こうと思う。

不意に悲しくなる――

君と別れた後で、

独りでまたこの道にくることができるだろうか、

君とたどった跡にはどのような思いが残っているのか。

僕等がこのように流落したのはきっと天てんの意なのだ。

自らの迂闊によるのであって人に陥れられたのではない。

君は山水に行き逢うたびに羞はじらい嘆息する。

ここを去ればまだ官の仕事から免れずにいるからだ。

そういえば、我等しやくの蜀りにはむかし李八百という仙人がいて、

聞くところでは、君がこれから行く筠州で仙薬を練ったとか。

あまり嘆いてばかりいると、

すっかり真白になってしまった頭で、

李八百から薬を分けてもらうことになるだろうよ(もう手遅れだね)。

(黄州から武昌に行くには、前にも見たように、黄州の町の西側にある渡し場から船

で向かいの樊口はんこうに渡る。樊口はんすいは樊水が長江に注ぐ合流点にある。樊口の背後に樊山はんざん

簞はんざんえ、燔山とも書き、旱魃やの年に山を燔くと竜が起きて雨を降らせるという。あるい

は樊氏がここにいたともいう。樊山に並んで西山があり、西山の見晴らしのよい場所に九曲亭きゆうきよくていがあり、山の直下に長江を臨む。西山から長江とは反対側に流れ下る寒溪かんけいのほとりに西山寺せいざんじがあり、そこから降りて行くと武昌ぶしやうの町に到る。この詩では、樊山から西山を経て西山寺を訪れたものの、この身なりで町に入るのはやめておこうと、別の道から樊口に引き返したのである。詩には樊山の一万回まんこつの上り下り（万回）とあるが、実態としては樊山はさほど高い山ではなく、軽いハイキングコースくらいのだ。なお樊口から樊水を遡れば容易に武昌に行ける）

■次韻答子由

6月9日、弟は黄州を去って筠州いんに向かった。蘇軾おうは対岸の王兄弟（本章54ページ）の家に行き、弟を見送った。

僕の翼は弱いので、
とかく吹きくる風に任せて飛ぶだけで、
それによってどこに行くにしても、
そこがすなわち帰るところなのだ。
君の詩はいわゆる珠玉のことは、
一つ一つが核心を衝いて、
僕を覆う煩悩の膜を何枚となく剥がしてくれる。
山に住む高僧は味わい深い趣をわきまえてはいても、

君のことを十分に知ることはないだろう。

そこの小役人どもはまともなことは言わないけれど、

僕なんぞは笑うべきだとちゃんと知っている。

僧にとっても役人にとっても読書は清浄ぎょうな業ではあるが、

僕のような暇人の昼寝の価値には及ぶものではない。

(弟は蘇軾の家族を連れてきた。前年の7月に湖州で別れて以来の再会を果たし、さぞ深く感じるところがあったろうと推測するのだが、そのことを詩詞に詠んでいない。詠んでも人に一切見せなかったのでもいまに伝わらないという可能性は皆無とはいえないが非常に考えにくい。杜甫が、安祿山あんろくざんの反乱軍によって占領された都を脱出してようやく家族に再会したときに感動的な詩を詠んだのとは対照的である)

■陳季常自岐亭見訪郡中及旧州諸豪争欲邀致之戲作陳孟公詩一首

陳慥ちんぞう (方山子ほうざんし) (本章 32 ページ) が岐亭きていから蘇軾に会うために黄州にやって来た。町の伊達者だてものたちが争うようにして出迎えたのを見て、陳慥を漢代の豪傑ちんじゅん陳遵あざな (字は孟公もうこう) になぞらえて戯れの詩を作った。

孟公は酒を好み、一斗とか二斗どころではない。

酔うと客を帰らせまいと、門を閉ざしてしまう。

酒があるところなら、寡婦の家でも構わず上がり込むので、

規律違反で百回も罰せられたのだが、

優れた太守であるとの名声は変わることがなかった。

老いて裏町に住み、世の浮沈を淡然と眺めやり、

耐え忍ぶ苦節など阿呆らしいと笑い飛ばした。

酒の匂いがするなら忽然と路地奥にも現れ、

ようゆう
揚雄が作った酒を戒める文章を読んでも、

「酒そのものは悪くない」というところだけを喜んだ。

都の金持ち連中は孟公に来てくれるよう求め、

謝礼に千金を渡そうとしても笑って唾を吐きかけた。

私の住まいはとても孟公殿を客として迎えることはできない。

何しろ孟公殿は酔うと冠やら衣やらをぼいぼい投げ捨てるとか。

我が家にはそれを避けて逃げる広さがないのだ。

(ある人は、この詩をはなはだ軽薄と評している。黄州に流されて反省の日々を送る中でもこのような戯れの詩を詠んでしまうところが蘇軾らしいし、陳慥を迎える黄州庶民の非日常性も楽しく想像できる。黄州に着いて以来、陳慥とはしばしば手紙の行き来があり、その結果として今回の来訪が実現した)

■定恵院鬪師為余竹下開嘯軒

7月、定恵院の院主である鬪師じゅうしが、竹林の傍らに「嘯軒」と称する小さな建物を蘇軾のために作ってくれたので、この詩を詠んだ。

ふくろう 馱は天が明けるの促なそうと啼なき、

がやがや 喧そし喧そしと詆譎そし合うかのようだ。

こおろぎ 蛩は夜の永ながさに暗く泣なき続け、

しよくしよく 唧唧しよくしよくと己のおのことを弔なぐさうかのようだ。

蝉は風を飲のみむだけで至いたって潔けつく、

長く吟ぎんじてその調てう子が改かまることはない。

みみず 蚓みみずは土はらわたを食くらって腸はらわたがなく、

哀あはしがることなどあるはずもないのに、

夕ゆふべの間まずっと叫こゑんでいる。

とび 鶩とびの貪い欲やな声こゑは最もも鄙ひしく、

かさぎ 鶻かさぎの喜こゝろびのこゑは何なにのためなのか。

生なまきるものたちの慟なげ哭なげも嬉たの笑しみも同おなじこと、

みな何かしら平ひららかでないところから鳴なるのだという。

かの阮げん籍せきも平ひららかでないところが多おほ々ある麤がさつ率さつな人間にんげんでよく叫こゑび、

その友人ともの孫そん登とうも道みち術じゆつを学まなびながら妙めう所じよに至いたらずによく叫こゑんだ。

定じやう惠ゑ院ゐんの道みち人にんはこの軒のきを開ひらいてくださり

黙もくって座ざって自おの己ごを觀くわん照しやうせよと言いわれる。

どこやらの風かぜが海うみも河がはも震ふるわせて吹ふいてきて、

全あなての竅あなを共とも鳴なさせようとしようと、

それはできるものではない。

世間との繋がりの切れた私は何も言わないのだ。

風がくれば竹が自からうそぶ嘯くだけである。

(この詩をどのように読むのか。一つの解釈として、蘇軾を罪に陥れた人々に対する批判を窺めたと見ることも可能だろうか。世俗のがやがやに耳を貸さず、世間に同調するよう促す風にも応じず、沈黙を保って竹(脱俗の象徴)の嘯きだけを耳にするのである。阮籍は第1章59ページで見て以来、蘇軾がしばしば言及する晋しんの時代の人で、乱れた世に、政治向きのことを口に出さずに身の安寧を保った。それでも時に高台に上って叫ばずにはいられなかった)

(この詩のぐうし鬮師にしても、前の詩のちんぞう陳慥にしてもいろいろな人が罪人である蘇軾に好意を寄せてきてくれるところがおもしろい。捨て子について頼んだがく鄂州知事の朱康しゅこうしゅく叔(字はあざな寿昌じゅしょう) (本章67ページ) からはたびたび物が届けられ、そのつど返礼の手紙を書き送っている)

■秦太虚題名記

しんかん秦観あざな(字は太虚あるいは少游しょうゆう)だいいめいが書いた「題名」(訪問記録)に添えた文。秦観は第5章255ページ以来しばしば登場しているが、後に蘇門四そもんし学士の1人に数えられるようになる人物。

(始めに秦観の「題名」がそのまま掲げられ、その後蘇軾の文章が続く)

げんぼう元豊二年、中秋の一日後のこと。

私(秦観)は呉興(湖州)から杭州を通して、東に会稽に還ろうとしていた。

竜井におられる弁才大師から、お手紙で山に来るよう誘われ、杭州の城郭を出たところ、もう夕方になっていた。舟で西湖を渡って普寧の岸边に行き、僧の参寥師に出会ったので、竜井から遣わされているはずの藍輿について尋ねた。「あなたが刻限に来られなかったので帰ってしまいました」と参寥は言った。

この夜、天宇は晴れわたり、林の中は月の光で明るく、髪の毛が一本ずつ数えられるくらいであった。そこで舟を置いて参寥師と杖をついて湖に沿って歩くことにした。雷峰に出て、南屏山を越え、恵因の澗で足を濯ぎ、靈石の高まりに入り、分かれ道を取って風篋の峠に上った。竜井の亭で憩い、岩にもたれて泉の水を酌んで飲んだ。

普寧からおよそ十五の仏寺を経たが、どれもが静かで人の声を聞かなかった。道の傍らにある民家には燈火が見え隠れすることもあった。草木が深く繁り、流れる水は一度止まって悲しく音を立て、ほとんど人間世界の内ではないようであった。

そろそろ夜も半ばになろうとするころに寿聖院に着き、潮音堂で弁才大師にお会いし、その翌日に帰った。

高郵の秦観が題す。

秦観の「題名」を見ると、どこも私が昔遊んだところである。目を閉じてそれらを想うと、全てがくっきりと浮かんでくる。

私は弁才大師と別れて五年後に徐州から湖州に移った。湖州に向かう途中、高郵で秦観君と参寥師と会い、そこから一緒に舟に乗った。弁才大師は私が湖

州に来ると聞いて、小舟でやって来ようとしたが、九十日間の結夏けっか ぎょうの行に籠るために果たせなかった。秦観君と参寥師は「秋が終われば還ります」と言ってもに会稽に向かった。私は突如として湖州を去ることになり、それっきり会えなかった。その翌年、私は黄州に流され、弁才大師と参寥師は使いの者をよこして様子を問われ、この「題名」も届けてくれた。

時に中秋まであと十日足らず、秋の水が川に漲り、水面は千里にわたって広がる。月ぼうしゆくは房宿しんしゆく(星の名)と心宿の間であって、露を運びた風が天地を満たす。住まいから長江まで十歩もなく、息子の邁まいとともに小舟さおに棹せきへきさして赤壁に行く。西に武昌しやうの山や谷を望み、高い木々が青黒く並び、雲と波が天さわの際にまで連なっている。

そのことをこのように書いて参寥師に寄せる。弁才大師にも見せて、何かのついでがあれば、写しを作って秦観君にも寄せてほしい。

(杭州は、かつて赴任した土地では最も風光明媚で、蘇軾はその地を非常に愛した。秦観の「題名」を読んで強く心を動かされたのだろう。徐州から湖州に赴任する途中で秦観や参寥が加わったことは第4章 352 ページで見ている。後半で言及している赤壁については次の文章を見ていただきたい)

■記赤壁

上に文に出ていた赤壁せきへきについて記した短文。

(「赤壁の戦い」といえば、中国史上最も有名な合戦といっても過言ではないだろう。)

西暦 208 年、天下統一を目指す曹操そうそうの率いる大軍を、孫権そんけんと劉備りゅうびの連合軍が長江の赤壁で迎え撃ち、周瑜しゅうゆの指揮のもと曹操軍を潰走させた。黄州に赤壁といわれる場所があり、地元ではそこが古戦場であるとされていた。それは事実ではないと蘇軾は知りつつも、黄州の赤壁が名立たる古戦場であるかのようにして数々の文学作品を生み出した。この短文は赤壁についての最初の印象を綴ったもの)

黄州の官舎があるところから数百歩のところに赤壁がある。ある人は、周瑜しゅうゆが曹操そうの大軍を破ったのがここであるという。果たして本当かどうかはわからない。

切り立った崖が壁のように立ち、長江ちやうこうの水は深い碧色みどりをしている。崖はやぶさに鶻はやぶさの巢が二つあり、そこに二匹の蛇を見たという人がいる。

風と浪が静かなときに、小舟に乗ってその下にまで行き、舟を下りて岸に登った。徐公洞じょこうどうというのがある。洞穴というほどのものではなく、山のちょっとした穴だ。『本草図経』に「この徐邈じょげいはいつの時代の人かわからない。魏の徐邈とは別人だ」とある。

岸には小さな石がたくさんあり、玉のようにきらきら光るものもあれば、淡い紅や黄色のものもあり、人の指紋のような模様のあるものもある。何度か赤壁に遊ぶうちに二百七十枚を得て、大きなものは棗や栗の実ほどあり、小さいものは蓮の実ほどだ。古い銅盆の上に盛り、水を注ぐと美しく輝く。一枚は虎か豹の頭のようで、口や鼻や眼めのようなところがある。それを石の中の長おさとしている。

■西江月

8月15日の中秋の名月を見て弟に寄せた詞。

世事一場大夢、(世上の事はひとつの大きな夢でしょうか)

人生幾度秋涼。(人生において、秋の涼しさにあえるのは幾度あるのでしょうか)

夜来風葉已鳴廊、(夜になって廊下に鳴るのは早くも風に落ち始めた葉)

看取眉頭鬢上。(季節の衰えは眉に鬢にも看取ることができます)

酒賤常愁客少、(ここは酒が安いのに、いつも残念なのは客人の少ないこと)

月明多被雲妨。(月は明るいのに、しばしば雲によって妨げられてしまいます)

中秋誰与共孤光、(中秋の日に、この孤高の光を誰とともに見るのでしょうか)

把盞淒然北望。(君は盞を手に寂しく北を望み見ていることでしょう)

(弟がいる筠州は兄のいる黄州のちょうど南に位置するのでこの詞の末句がある)

■南郷子

9月9日の重陽の節句に、涵輝楼(棲霞楼という説もある)で催された

黄州知事の徐大受(字は君猷)が主催する宴で詠んだ詞。酒席の座興として詠まれもので内容は乏しいが、黄州での日々を知るよすがとなろう。

(徐大受は7月に前知事の陳軾と交替となって赴任した。徐大受も蘇軾に対してすこぶる好意的であった)

霜降水痕収。(霜が降るこの季節にさがりゆく水位)

浅碧鱗鱗露遠洲。(浅くなった水に碧のさざ波が立ち、遠くまで洲が現れ出ます)

酒力漸消風力軟、(酒の力も次第に消え、風の力も軟らかく)

颼颼。(たた^{しゅうしゅう}颼颼とやさしく鳴ります)

破帽多情却恋頭。(その風に飛ばされたらよいのに、帽子は頭をしっかり恋い慕っています)

佳节若為酬、(この佳き節句の応酬は)

但把清尊断送秋。(酒樽を空っぽにして秋を送るのです)

万事到头都是夢、(何事もつまるところは夢)

休休。(休めよう、休めましょう)

明日黄花蝶也愁。(明日には褪せてしまった菊の花を蝶が愁いでくれるでしょう)

(重陽の宴といえば、帽子を飛ばされた^{もうか}孟嘉の故事(第5章213ページ)。折よく風によって自分の帽子が飛んでくれたら宴も盛り上がるのに、あいにくと帽子は頭が好きだしがみついているというのがこの詞の前半の眼目)

■菩薩泉銘

先に本章66ページで見た菩薩泉^{ぼさつせん}についての銘を作った。その序文だけを訳す。

晋しんの時代とうかんの陶侃とうえんめい(陶淵明の曾祖父)が広州の長官こうであったとき、夜になると川の上に怪しい光が現れるのを漁師が見て、陶侃に報せた。陶侃が光のもとを調べさせると金の像が見つかった。そこに刻まれた文字てんじくに、天竺あいくの阿育王いが鑄た文殊もじゅ菩薩ぼさつの像とあった。そこで武昌ぶしやうの寒溪寺かんけいに納めた。陶侃は荊州けいに移るに際して、その像を持って行こうとしたが、人の力では動かすことができなかった。三十頭の牛を連れて車を曳いて船にまで運んだ。ところが船に載せると、船が覆って沈んでしまった。そこで、寒溪寺にまた戻した。

その後、惠遠法師えおんが廬山ろさんにその像を迎えた。そのときは何のさわりもなかった。廬山において二人の僧がそれを守り続けたのだが、唐ぶそうの武宗の時代に天下の仏寺を破壊するよう命令が下り、二人の僧は像を錦繡谷きんしゅうこくに隠した。仏教がまた許されるようになってからその像を探したが見つからなかった。しかし、谷の中には今でも時々光が射し、峨眉がびさん山こだいさんや五台山のような姿が浮かび上がるという。

惠遠法師に関する文集に載せられている張文逸ちやうぶんいつの文や山中の父老が語り伝えるところは以上の通りである。

現在では寒溪かんけいから西に数百歩ほどのところに西山寺せいざんじがあり、岩穴から泉が湧き出している。水は澄んでいて甘く、菩薩泉と名付けられている。人々はその由来を知らない。

建昌けんしやうの李常りじやうが菩薩泉に来て、「ここは昔、文殊菩薩像が置かれていたところではないのだろうか」と言い、そのことを銘に刻むよう私に勧めた。

(最後に言及されている李常(字は公沢)(本章 72 ページ)は蘇軾に連座して銅二

十斤の罰を科せられ、地方官となつて淮南西路わいなんせいろうの役人となつた。淮南西路はその管轄下に黄州を含み、公務を帯びて各地を巡る途中で蘇軾そしに会いにきた)

(このころに、弟から酒のために肺疾を發したという詩が送られてきて、それに次韻して返している。肺疾とは喘息であるかのようで、蘇軾の詩には、弟は若いときにもそれに苦しんだとあり、なかなか興味深いものなのだが、中国の古い医学用語がてんこ盛りであるので読もうとしてもまるで歯が立たない)

■ 菩薩蛮

蘇軾はいかなる遊び心からだったのだろうか、この時期にたくさんの回文の詞を作っている。その中から2首だけを見ておこう。

(回文とは、「たけやぶやけた」のように左から読んでも右から読んでも同じ字の並びになるもので、1文字が1音である日本語や中国語の特質を活かした言葉遊びである。この詞を見ると、最初の14文字は「柳庭風静人眠昼。昼眠人静風庭柳」と回文になっている。面白いことに、前の句では「風が静か」であるのに対して、後の句では「人が静か」と主体が入れ替わる。以下も同じ構造で詞全体が回文になっている。後半に「藕」の字が4回繰り返されていて、本来の「藕」^{はす}の意味と同音の「偶」^{ともなう}の意味を兼ねている。また「糸」も同音の「思」^{おもひ}の意味を兼ねている。とにかく言葉の遊戯をふんだんに盛り込んでいて翻訳には向かない。内容的には、詞が本来得手とする女性の愁いを歌っている。これら一連の回文の詞は李常りじょうへの手紙に、お笑い草にと添えて送られている)

回文夏閨怨

柳庭風静人眠昼。(柳の庭に風は静かで、人の眠る昼)

昼眠人静風庭柳。(昼に眠る人は静かで、風は庭の柳を吹きます)

香汗薄衫涼。(香る汗うわぎに薄うすい衫は涼ひやく)

涼衫薄汗香。(涼ひやい衫は薄うすくて汗うわぎが香かほります)

手紅氷腕藕。(手は紅あかをほどこし、氷こおりのような腕うでは藕いもの花はなのように白しろく)

藕腕氷紅手。(藕いもの腕うでは氷こおりのように涼ひやしげで、紅あかの手てを添そえます)

郎笑藕糸長。(かかの人は笑わらい、藕いもの糸いとのように思おもいは長ながく)

長糸藕笑郎。(長ながい糸いとはかかの人に藕いもううのです)

回文秋閨怨

井桐双照新妝冷。(井戸端いどの二本ふたの桐きりは照あらし合あって新あたらしい妝あぶらも冷ひやく)

冷妝新照双桐井。(冷ひやく妝あぶら新あたらしい照あらし合あつ双ふた本の桐きり井いどの水みづに照あり映うつります)

羞对井花愁。(羞はじらはって井戸いどに向むかうのは花はなが愁うれいよう)

愁花井对羞。(愁うれいを含こんだ花はなは井戸端いどで羞はじらはうのです)

影孤憐夜永。(影ひどつは孤ひとりだけ、憐あはれをもよおよつつも夜よは永ながく)

永夜憐孤影。(永ながい夜よに憐あはれをおおもう孤ひとりの影かげがあるのです)

楼上不宜秋。(楼閣の上は、秋にはよろしいものではなく)

秋宜不上楼。(秋によろしいのは、楼閣には上らないことです)

(深い反省の日々を送っているはずの蘇軾が、どうしてこのような戯れの詞を多数作ったのか。根拠の乏しい推測をすれば、^{おうちょううん}王朝雲が何かしら関わっているのかもしれない。杭州で妓女になる運命であった王朝雲を引き取ったことは4章199ページで見たが、王朝雲との再会に蘇軾の心は動かされ、回文という遊びに名を借りて、湖州で別れて以来の王朝雲の愁いを詞に詠んだのかもしれない。王朝雲はこのとき18歳になっていた)

■太守徐君猷通守孟亨之皆不飲酒以詩戲之

10月、黄州知事の徐大受(字は君猷)^{じょだいじゅ あざな くんゆう}らの宴席で詠んだ詩。詩題は「知事の徐大受も副知事の孟震(字は亨之)^{もうしん あざな きょうし}も皆が酒を飲まないので戯れに詩を作った」。「酒を飲まない」とあるのは、下戸で飲めないとするのが一つの解釈であるが、お上からの経費節減の号令に従って飲酒を自粛していたとする解釈もある。

昔むかしの孟嘉^{もうか}と徐邈^{じょびい}は大酒飲みだった。

孟嘉は、当代の姦雄の嘲笑をさらりとかわし、

徐邈は、当代の姦雄を冗談で煙に巻いた。

ところが、孟嘉、徐邈の子孫というべき知事も副知事も酒の興趣を知らず、

ここでは私だけが孟嘉、徐邈の仲間である。

孟嘉の風流(ものに捉われない振る舞い)は高人(高こう道義を具えた人)が識り、

徐邈つうかいの通介(斜に構えた言動)は薄っぺらな世俗に受けるものではない。

孟嘉と徐邈の霊がここにいますなら笑って言うであろう、

「我等の子孫どもは独り醒めた目で時勢を見ておるわい」

(孟副知事と徐知事の縁で同姓の孟嘉と徐邈を引いて即興の詩を作り、皆を笑わせたのだらう。孟嘉は重陽の節句で帽子を飛ばされ、当時の権力者の桓温かんおんの嘲笑をさらりとかわしたことは、これまでに何度か見ている。徐邈は三国時代ぎの魏の人で、当時の権力者そうそうの曹操おもねに対して阿らずにひねった言辞を吐いた。知事と副知事は酒は飲まないけれど、脱俗、反骨の精神は受け継いでいるというのだ。なお、先に見た『赤壁の記』に「徐邈とは別人」というのがあったが(本章 108 ページ)、これが本家の徐邈である)

■乳母任氏墓誌銘

蘇軾のそばにずっといた乳母にんさいれんの任采蓮が8月12日に亡くなり、10月にこうこう黄岡県の北に葬り、墓誌銘を作った。その序文を訳す。

ちよう趙郡の蘇軾の乳母の任氏、名は采蓮は、眉州眉山の人である。父は任遂、母は李氏である。先夫人(蘇軾の母)に仕えること三十五年、仕事を器用にこなし、勤勉で慎ましく、老いても衰えることがなかった。乳母として亡き姉と私を育て、私の子の邁、迨、過の面倒を見てくれ、思いやりがあった。私の任官に従って、杭

州、密州、徐州、湖州に行き、黄州に流されたときにもついてきた。

元豊三年八月壬寅に黄州の臨臯亭で亡くなった。享年七十二であった。十月

壬午に黄州の東の臯、黄冈県の北に葬った。

(任氏が育てた姉とは、第4章の終わりに見た、嫁ぎ先で虐待されて死んだ姉である
う)

■与秦太虚書

乳母が亡くなり、臨臯亭には、妻と息子3人、王朝雲、馬正卿がいて、
少なくともその6人（実際にはさらに数人いたようだ）を、俸禄のほぼ
途絶えた蘇軾が養っていかなければならなかった。陳慥や朱康叔やいろ
いろな人が時折贈ってくれる物があるにしても、それだけで生活できる
わけではない。蘇軾がどのように家計のやりくりをしたのか、秦觀（字
は太虚）（本章105ページ）に与えた手紙の中に記されている。この手紙は、
本文中の記述から冬至の直前、11月上旬に書かれたと推測される。

五月末に弟が来て、貴君のお手紙を受け取りました。温かな労わりの言葉にお
礼を申しねばと思いつつ、ぐずぐずしている間に、飛脚に託してお手紙を重ねて
頂戴し、はなはだ恐縮です。このごろは少し寒くなりましたが、いかがお過ごし
でしょうか。

私の寓居はほぼどうにかなりましたが、弟は筠州に着くなり一人の娘を喪い、私は

老いた乳母を喪いました。^{いた}悼む心が回復しないうちに、郷里からの知らせで九月中旬に従兄が亡くなったと聞きました。異郷の地にあつて、自分も病み、目に触れるものはもの悲しく、人の命のはかなさが思われてなりません。貴君も病を得てしかも軽くはなかったとのことですが、また健やかになられたのを喜んでます。我等も次第に衰え、少年のころのように元気に振る舞うことはもうできないものなのでしょう。^{どうし ほうし}道士や方士の言うことに速やかに用いて、厚く養生と鍛錬をすべきでしょう。私はこの地に^{たくきょ}謫居となつてから特にこれといつてすることがないので、その一つ二つを研究してみています。

黄州にある^{てんけいかん}天慶観に部屋を借り、冬至の後に入つて四十九日間籠ることにしています。追放の身にでもなつていなければこのようなことはきつとできないでしょう。貴君もいずれ仕官すれば、四十九日の閑を得ようとしてもできないでしょうから、いまこそやるべきです。普段から簡単で実践しやすいことを選んで、寝食のことの他には、それ以外のことは何もしないで日夜を過ごすことによつて、期が満ちたときには、根本から立ち直つていることでしょう。その後でまた世間の事に関わつても、事がすめば心は根本のところに戻るもので、再び駄目になることはもうないであります。この手紙が着くのは冬至には間に合はないでしょうが、貴君が始めるのは何も冬至からでなくてもよろしいでしょう。

貴君の詩文を寄せていただきました。どれも超然と優れていて、どんどん私の書くものに迫りくるかのようです。とはいえ、私なんぞに追い付こうと努力する必要はありません。貴君もきつと官職に就こうと、科擧を受けて合格しようとするでしょう。科

挙は必ずしもあてにはなりません。貴君のためにひそかに考えるに、もっとたくさん書くべきでしょう。見せてくださったなかに「兵を論じる」とか「盗賊を論じる」といった数篇の文章がありますが、それらが数十篇にもなれば、どれも卓然として、実際に用いるべきものとなるでしょう。ただ、いまの政治情勢を論じることはしなくてよろしいでしょう。そうした文章を書いたからといって、科挙に応じることを止めるべきではありません。文章ができたらまた見せてください。それによって貴君のことを知る人がきっと出てくるでしょう。ここに書いた意味はおわかりくださると思います。

先頃、李常君りじょうがここに來られて数日間滞在しましたが、もっぱら貴君のことばかりを話していました。孫覚君そんかくからはまだ手紙がきません。きっと書くだけの余裕がないでしょう。程師孟君ていしもうからは、御子息りちゆうの履中君が亡くなったことを悼む文章を書いてほしいとの依頼がありました。それはもともと私から書こうと言い出したことなので、果たさなければなりません。しかし、罪を得てからはもう文章は書かないと、自分自身を厳しく戒めています。もし一つでもまた作ったならば、垣根が壊れて、その後は止めどなく多言となってしまうことでしょう。

私は黄州に來てから収入が途絶え、しかし一家の人数は増え、はなはだ心配が募るばかりです。とにかく懸命に節儉に勤め、日に使うのは百五十銭を超えることがないようにしています。毎月一日に四千五百銭を用意して、三十の塊りに分け、はり梁から吊します。朝、二股の棒でひと塊りだけ取り、棒はのけてしまいます。その日使ってもしも余った銭があれば竹の筒の中に入れ、それは客が來たときに用いるようにします。これは実は賈耘老かうんろうさんから教わった方法です。囊ふくろの中にある貯え

を計算すると、このやり方で一年余りはしのげそうです。使い果たしたなら、「洪水になれば自然と溝ができる」のたとえの通り、そのときはそのときでまた知恵も出てくるのでありましょうから、あらかじめ考えすぎないようにしています。

このことさえどうにかなるなら、胸中に心配事は一つもなくなります。

住まいの対岸は武昌で、山水の美しさは絶品で、蜀の人の王兄弟があちらの村にいます。しばしば王兄弟を訪ね、浪風が激しくなると帰れなくなります。王兄弟は鶏を殺したり、黍を炊いたりしてもてなしてくれます。数日居続けても嫌な顔をさせません。

また樊口には潘君がいて酒店を営んでいます。小舟を仕立ててその店の下に行くと、土地の酒のよい香がします。

柑橘類も棗も柿もきわめてたくさんあり、一尺以上も長い芋もあって、それらの豊富なことは蜀の地にもひけをとりません。米は水路で他所から運ばれてきて、一斗二十銭と安価です。羊の肉も北方の地と変わらずにあり、猪、牛、鹿もたくさんいて土みたいに安い値で、魚や蟹はただ同然です。

岐亭の酒税監視官の胡定之は万卷の書物を所蔵し、その任地にも携えてきていて、喜んで人に貸しています。

黄州の役人のうち数人はしばしば御馳走に呼んでくれて、皆が喜んで集まる会を開いてくれます。

貴君はこれらのことを見て、私が何事もなく過ごしていると思うでしょうか。貴君に話したいことはたくさんあります。書けば紙がつきてしまうでしょう。ここまで読んで、髭を

ひねって少しでも笑ってくれたらと思うだけです。

せん うしん

鮮于侁君はもとより私の畏友ですが、その御子息もなかなかの人で、貴君は会ったことがあるでしょうか。

こうこう

ちようしんしん

ぎようしん

この地の黄岡県の副知事の張舜臣君とその兄の堯臣君は、貴君のことをよく知っていると言っています。

息子についていつもお気遣いいただいておりますが、たまたま乳母の葬儀があり、墓を作るのを任せておりますので、まだ御返事を差し上げる余裕がありません。

歳の暮れともなれば寒さが強くなります。ぜひぜひ御自愛ください。

りしぎ

李之儀君に手紙を届けてくださるようここに託します。

夜中に少し酒を嘗めながらこれを書きました。字が乱れています。どうぞお許ください。

(1) 手紙の前半で身内の者が亡くなったことを記している。郷里の従兄とは、伯父の息子の蘇不欺であるようだ。(2) その後に、秦觀と共通の知人について言及している。李常(本章111ページでこの地に来たことを見ている)と同様、孫覚(第4章47ページで墨妙亭の詩を詠んで以来の親しい友人)も蘇軾の事件に連座している。(3) 中間で述べている家計の遣り繰りは興味深い。銭を1日分ずつ小分けにする方法は賈耘老に教わったとあるが、それは賈添丁(号は耘老)のことで、湖州の隱者で、第5章363ページにその住まいを訪ねた詩がある。(4) 後半では黄州での新しい知人を列挙している。黄州の数人の役人とは、先の詩で見た黄州知事の徐大受、副知事の孟震、それに黄岡県知事の何氏、同じく黄岡県の役人の段氏、黄州の酒税官の楽京(本章63

ページ)らであるとされる。(5)最後にまた共通の知人について述べているが、鮮于
ごとうし
佐からはかつて呉道子の描いた画をもらっている(第5章149ページ)

■答李端叔書

上の手紙に李之儀(字は端叔)への手紙を託すとあったのがこれ。李
しんかん
之儀は秦觀と同じく蘇軾の弟子筋に当たる人で、このときはまだ直接の
知り合いではなかったということがこの手紙からわかる。

私は貴君の名を以前から耳にし、知人のもとで時折貴君の詩文を見ておりました。
数は多くはありませんでしたが、貴君の人となりをおよそ知ることができました。

これまでお手紙も差し上げることもなく、貴君がひどい病になられたときにも一字の
お見舞いも申し上げなかった怠慢の罪は、どうか寛大にお見逃してください。弟が
先頃来まして、貴君のお手紙を頂戴しました。やはりものぐさのために即答しませ
んで、ぐずぐずと礼にもとること、実にひどいものがあります。それでも貴君は私のこ
とを見捨てることなく、飛脚便にて再びお手紙を送ってくださいました。私に対してま
すますよけてくださいまして、顔が赤らみ汗が流れ落ちます。

貴君は才能があり高い見識がおありですから、軽々しく人と交わりを結ぶのはよろ
しいことではありません。黄庭堅君や秦觀君が言うのをそのまま真に受けるべきで
はありません。私は人に憎まれ、ただ二君だけが喜んで私のことを誉めてくれてい
ます。蓼食う虫も好き好きの例でありましょう。そのわけを明らかにするのは簡単で

はありません。二君がでたらめをいっているというわけではありません。二君がいうのに人が同調するのは大いによろしくないのです。

私が若いころに書を読み文を作りましたのは、もっぱら科挙を受験するためでした。すでに科挙に合格すると、その次を貪るようにして望み、制科せい かも受けました。制科に合格して私は何をしたのでしょうか。そのときの制科の科目の名は「直言極諫ちよくげんきよくかん」でありました。その意味するところは何かというと、古今の事例を参照して是非を議論することにあります。人というものは自分のしていることが知られずにいるのを残念に思うもので、私は制科に合格したからには、実際にそれにふさわしいことをしていると知られたいと思い、多くのことを論じて今に至りました。そのために罪を得てほとんど死ぬばかりとなりました。これはまさに昔漢かんの高祖こうそが「口先だけで官職を得た奴め」と罵った対象となった者と同じで、真に笑うべきことであります。

とは言え、世の人が、私がことさらに異論を唱えようとしていると評するのは間違いです。利害をやたらと論じたがり、得失を先んじて言い募ろうとするのは、制科に合格した者によくある癖で、譬えていうなら、季節の虫や鳥が自ずと鳴いて自ずとやむようなものです。自身の損得を考えてのことではないのです。

世間の人々はどうやら私のことを過重に評価しているのを不思議に思っています。貴君もやはり私を称揚し過ぎです。全くもって私はそうではないのです。

罪を得てから深く閉じ籠っております。小舟に乗り、あるいは草履を履いて、山水の間を放浪し、木こりや漁師の仲間に加えてもらっています。しばしば酔っ払って、人に怒鳴られることもあり、ようやく世間に知られない身になったと喜んでいきます。

以前からの友人からは一字の通信もなく、手紙を送っても返事はありません。それでこそ世間から逃れられたと喜んでいます。

貴君が初めて私に手紙をくださいましたのは、私としては実は望むところではありません。木にこぶがあり、石にくもりがあり、犀に白い筋があって、人はそこに面白みを見出します。それらはどれも物としては「病」^{やまい}に当たります。諦居して何もする事がなく、黙って自らを省みますと、この三十年間にしてきたことは多くは「病」でありました。

貴君が見知っているのはそうしたもとの私であって、いまの私ではありません。声を聞いてその真情を考えない、花を取って実を遺さないといいますが、貴君にはどうか真情と実に思いを巡らせていただきたいのです。

こうしたことは会ってお話するのでなければ十分には申し上げられません。罪を得てからは敢えて文章を作ることはありません。この手紙はきちんとした文章にはなっていません。筆に任せて綴るうちに、思わず紙数を重ねてしまいました。他の人にお見せすることは無用に願います。その意味をおわかりください。

一年の終わりが近づいてきています。寒さが厳しくなる折から、万万御自愛されますよう。

(制科に合格した者としての振る舞いについて述べているところは、『^{そうじ}荘子』に描かれた孫休^{そんきゅう}とよく似ている (本章11ページ))

■与王定国書

上の二つの手紙と相補うものがあるので、同じ頃に王鞏（字は定国）（本書 59 ページ）に与えた手紙も見ておこう。王鞏が流滴の地、賓州に到着したと報せてきたのに対する返事である。

またお手紙を頂戴し、すでに恙なくそちらに到着されたことを知りました。泰然と構えてくよくよされずにいるのがよろしいでしょう。知事代行としての貴君の英姿はそちらで評判となりましょう。それもよいではありませんか。

私の寓居はほぼどうにかなりましたが、ただ八月に老いた乳母がなくなりました。弟は筠州に着くなり娘を一人亡くしました。十二歳でした。悲しみがおさまらないうちに従兄が故郷で亡くなったと聞きました。異郷にあってこのようなことが続き、目に触れるものが皆悲しく、どうにもなりません。

近ごろ、養生についてかなり知るようになり、自ずと大切なところに迫りつつあると感じています。私に会う人は、以前とは風貌が異なると言います。これで数年もしたなら、仙人の仲間入りをするのではないのでしょうか。兼ねて、画は竹を描いてすでに神品となりつつあり、行書、草書も極めて巧みになりました。ただし、詩だけはひどく後退しています。どういわけなのでしょう。

張方平殿からお手紙があり、恙なくお暮しとありましたが、御子息が妻を実家に帰らせたために家の中のことでお困りであるとありました。

弟は筠州でひどく忙しくして、この兄が安逸にしているのをひどく羨んでいます。

す。

間もなく冬至です。すでに天慶観てんけいかんに部屋を借りていて、そこに籠って四十九日間を過ごすことにしています。客人も全て断り、たとえに張方平殿が来られても口をきくことはないでしょう。常に戸に背を向けて過ごすのです。きっと深い益があるでしょう。

先に貴君が寄せてくださった二冊の書物は、憂い患いについて詳しく反覆議論しています。読むだけですでに憂いが解け、また私の無知を洗い流してくれ、得るところがたくさんありました。しかし、いわゆる「知っただけは駄目で、実践しなければいけない」のです。この語は常に唱えるべきであります。

杜甫とほはひどく困窮しても、一飲一食のたびに、国君のことを忘れませんでした。詩人としてそのようであったのは杜甫一人だけです。いま貴君の手紙を見ると、毎回皇帝の恩を思い、自分を咎める言葉を連ねています。詩人の本意をはなはだ得たものであります。私は不肖といえども、貴君のようになりたいと願います。

私は文章も詩も作っていません。近頃、乳母を亡くしましたので、その墓誌銘だけは作りました。

今日は駅伝の馬の親方の李孝基りこうきが蔡襄さいじょうの石刻一卷を届けてくれました。それには貴君の題字がありました。それを見て思いが湧き出し、しばらくおさまりませんでした。数日前には沈達君ちんたつがここを過り、貴君をよく知っているというので、船の中で会ったのですが、夜遅くまでほとんど貴君のことばかりを話しました。

近ごろ、ある人ちようしせい(張師正)から大きな丹砂たんさをいただきました。とてもすばらしい光沢が

あります。敢えて服用はしていませんが、その人は火で丹砂を変化させることを教えてくれましたので、その様子を観察し、いささか楽しんで日を送っています。貴君のおられる賓州けいは桂州からさほど遠くないので、たやすく丹砂が手に入ることでしょう。できれば数両でも送ってもらえないでしょうか。難しければ、急に必要ということではないので結構です。

そちらは僻遠の地でありますから、変わったこともあるでしょう。冷静な眼で探してみるのがよいでしょう。多くの道士きんたんは金丹を用いなければ羽化うか(昇天)できないと言います。丹薬の材料は多く南の涯の地にあります。昔、葛洪が响かつこう樓くるの地の県令になることを求めたのもそのために、ついに廉州れんで仙人に化したといわれています。貴君もこのようなことは心に留めておくとうよろしいでしょう。

道士ちんさんの陳瓌が一カ月前に筠州で弟に会って、道術の要妙をあらかじめ伝えたそうです。陳瓌はじきにこちらに来るそうですが、この人は道術を得ているだけでなく、情義があり、大切な旧友として忘れることのできない人です。

道術にはいろいろとあり、その要かなめとなることを会得するのは簡単ではありません。私が観ますに、ただ静心閉目して、よくよく習熟することで、効果があると知れてくるものなのでしょう。静かな夜に、脈拍を百二、三十数え、次にまた脈拍が百二、三十を数えるまで息を止めます。これを何回も繰り返します。私の言うことを信じてくれるなら、体中きに気を行き廻らせることができ、体に病を近づかせないようにできるでしょう。……(後略)……

(この後に例の賈耘老かうんろうの法が述べられているが、重複を避けて省略する。(1) 最初の

あたりで、仙人になるとか画も書もうまくなったと書いているのは、親密な仲である王鞏相手の軽口であろう。(2) ここでも天慶観に箴と書いていて、それは実行された。(3) 「蔡襄の石刻一卷」とあるのは、蘇軾の先輩の蔡襄の書を石に刻んだ拓本である。蔡襄については本章 148 ページ以降で詳しく見ることになる。(4) 丹砂についての記述が興味深い。蘇軾は張師正が所蔵する辰州産の丹砂をわけてもらっていて、そのことを詠んだ詩もある(語句が難解すぎて訳せなかった)。丹砂は水銀と硫黄の化合物で、昔から仙薬の原材料であるとされた。丹砂を化学変化させて金丹を精製し、最終的にはそれを飲んで仙人になることを目指したのである。なお、道教に基づく養生は大きく「外丹」と「内丹」に分けられ、「外丹」は仙薬によって不老長生を得ようとし、「内丹」は自身の身体を鍛錬して健全な心身を養おうとする。黄州時代に蘇軾は「外丹」と「内丹」の両者に興味を持ち、この手紙にあるように丹砂の使った化学実験も行っている。唐の歴代皇帝の多くが道士たちの作る怪しげな仙薬を飲み、水銀中毒で神経系を害して若死にしたことは史実に明らかで、蘇軾は当然そのことをよく知っていたのだろう、妙な薬は実際には服用しなかったようだ。道士たちからいろいろ教わる中から、有用そうなものを選んで実践して「内丹」の方により傾き、ここに記述されている呼吸法は後に精密化される(本章 408 ページ)

■書蒲永昇画後

成都の勝相院の惟簡の弟子の悟清が秋にきてしばらく滞在した。惟簡は、唐の吳道子が描いたとされる四菩薩の画の保管を託した僧である(第 3

章20ページ)。蘇軾を慰め活力を引き出すためであろう、惟簡は文章の執筆を依頼してきた（それに応じた作品は本章215ページで見ることになる）。それとは別に、蘇軾は蒲永昇^{ほえいしやう}の山水画についての考察を記して惟簡に送った。蒲永昇は成都の人で、蘇軾より年長であった。

昔から水を画くときは、遠くまで平らに細かな皺を作ることが多い。善く画いたとされるものにしても、波頭の起伏をうまく作っただけのことであるのだが、手で画を撫ぜるようにしてみて、「窪みと隆まりがみごとだ」と感じさせるまでになると、「至妙^{し むよう}」（最高の芸）であるとされる。しかし、その技芸の品格の程度をいなら、印板水紙^{いんばんすい し}（型に押し波模様を浮かび上がらせた紙）とほんのわずかな巧拙の差を競うだけのものなのである。

唐の広明年間^{こうめい}（唐の末期）になって、孫位^{そん い}が初めて新たな工夫をした。奔るような湍^{はやせ}と巨大な浪が、山の岩とともに折れ曲り、物に当たって様々な形態になるのを画き、水の変化を尽くして「神逸^{しんいつ}」といわれた。その後、蜀の黄筌^{こうせん}と孫知微^{そん ち び}がその筆法を会得した。孫知微は、成都の大慈寺^{だいじ じ}の寿寧院^{じゆねいん}の壁の四面に「湖」「灘」「水」「石」の四つを画こうとして、何年も思案を凝らし、いつまでも筆を下さずにいた。ある日、慌ただしく寺に入ってくると、非常にせいて筆と墨を求め、風のように袂を奮い、またたくまに完成させた。輪よく瀉ぎ、跳び、感まる水の勢いを作って、洶洶^{きうきう}として建物を崩さんばかりであった。孫知微が死ぬと、その筆法は五十余年にわたって絶えた。

近ごろ、成都の人、蒲永昇は酒を嗜み、各地を放浪し、本性として画に合致している。初めて「活水」(本来の活きた性質を持った水)の画を作って、孫位と孫知微の真髓を会得した。画工として名をなした黄兄弟(黄筌の息子)や李懷素といった人々は皆それに及ばない。高位高官の者や金持ちたちが権勢をもって頼んでも、蒲永昇は冷ややかに笑ってまるで聞かない。たまたま画く気になると、相手の貴賤を問わず、たちまち画きあげる。

かつて蒲永昇は私のために寿寧院の孫知微の壁画のうちの「水」を模写して二十四幅の掛け物を作ってくれた。夏の日にこれを広間の壁に掛けると、たちまち冷たい風が人を襲い、毛髪が逆立つばかりになる。蒲永昇はいまや老い、その画を得るのはますます難しくなった。

世間には真の価値を識る人は少ない。かつての董羽とか、最近の常州の戚文秀の画いた水でさえ、世にはそれを宝物のようにいう者がいる。董氏や戚氏の類は、「死水」(本来の性質を失った水)というべきである。蒲永昇とはとても並べて語ることはできない。

元豊三年十二月十八日夜、黄州臨臯亭の西の書齋で戯れに書いた。

((1) 先に「常理」「常形」について論じた文を見た(本章89ページ)。「常形」のない水を「常理」によらずに画いたのが「死水」で、「常理」によって画いたのが「活水」なのだろう。(2) 唐の広明年間に孫位が初めて新たな工夫をしたとあるのは注目すべき記述で、このとき黄巢の大乱によって皇帝は都の長安から成都に避難し、孫位はそれに付き従った1人だった。その後、皇帝は都に帰還したものの唐はますます衰えて、

ついに亡んでしまう。文化の担い手たちは比較的静穏であった成都に集まり、唐代文化の伝統は成都において生き残った。孫位、黄筌、孫知微がまさにそうした人々で、それを継ぐ者として蒲永昇や惟簡や蘇軾がいる。宋朝は天下統一の過程で武力によって蜀を征服し、成都に伝わる優れた文物を都に持ち去った。その際、宋朝の軍団は蜀の人々を極めて手荒く扱い、多数の人々が命を失い、民衆は宋朝による強圧的な支配を嫌ってしばしば大きな反乱を起こした。それを教訓として江南の平定を任された曹彬は、融和的な戦略を用いて民衆の被害を最小限に留めるよう心を砕いた。そのことを獄中で詩に詠んでいた（第5章399ページ）のは実は深い意味があるのだ。(3) なお、孫知微が何年も画想を練った上で、短時間で仕上げたというのは、文同が「胸の内に成長した竹を得たなら、直ちにやり遂げる」と自分の画法について述べた（第5章380ページ）に通じるものがあるだろう）

（先に秦觀の宛てた手紙で冬至から49日間、天慶観に籠ると記していた（本章117ページ）。この年の冬至は11月9日であったから、この文章は天慶観から臨臯亭に帰った翌日に書いたのだろう）

■石氏画苑記

これは上の文章から2日後に記された。画と蜀文化の2点のつながりから石康伯のことを思い起こしたのだろう。

石康伯、字は幼安は眉州眉山の人である。かつて紫微舍人であった石揚休の

末子だ。科挙の二次試験を受けて不合格となり、受験資格を放棄し二度と受けなかった。父が高位にあったお蔭で官職を得ることもできたのだが、それに就くこともなかった。

石康伯は書物を読み、詩を作り、それを自分の楽しみとするだけで、人に知られることを求めない。名筆、名画、古い器物、珍しい物を好み、たまたまよい物を見ると、衣を脱ぎ、食べるのを止めてもそれを求め、家に銭があろうかなかるうが、そんなことはお構いなしだ。都にること四十年、町の道を行くのに馬に乗ったことがない。人ごみの中にも、耳と目は喧騒から抜きん出たところにあつて、もっぱら好むところを探し求めている。

背丈は七尺、色黒で髯^{ひげ}があり、よく画にあるところの道人や剣客のようだ。塵埃の中を歩き、何かいわくありげにしているの、知らない人は「異人^{いじん}」であろうかと思う。

滑稽を善くし、巧みに微妙なところを言い当てるので、傍らの人は腹を抱えて笑う。しかし、石康伯自身は静かにして顔色を変えることもない。人と交際してその危難を知ると、自分のためにする以上のことをする。都に滞在している間に病んでしまった者がいと、舁^{かこ}にのせて自分の家に運び込み、自ら飲食を与え、死んでしまったりすると棺に納めるまでしてやり、いやがる様子はない。

石康伯^しを識る者は皆がこれくらいのことなら知っている。私はいささか深く知っているだけだ。

石康伯^{おもんぼか}の知識と慮りははなはだ遠大であるのだが、口に出して言うことはない。

今年六十二歳で、顔かたちは四十ばかりに見え、鬚ひげは三尺もあって、白いものは一本もない。何のわけもなくこうなったのではないだろう。

ところで、亳州ぼくの官吏ふひつとなって富弼ふひつとともに罪を得たのは、石康伯の息子せきいの石夷こ庚である。

石康伯の家には書画の軸が数百あり、その中からごくさいな小品を集めて書画集を編んで『石氏画苑せきし がえん』と名付けた。石康伯は文同ぶんどうと交遊があり、兄弟のような仲であったことからその画をたくさん得た。また私も古木や竹を画くので、それを贈って『石氏画苑』に加えてもらった。

我が弟はかつてこのように言った。

「画で貴ばれるのは、描いて似ることだ。似ているだけで貴ばれるのなら、本物はもっと貴いはずだ。私は都会や田舎を歩き回って人や物を見る。どれもが本物であるから、我が画の収集物に加えて貴ぶべきなのだろう。見ないのは鬼神だけだ。それは画によって識るしかない。しかし、人は鬼を見たところで何の役にも立たない」

この言葉には道理がある。いま石康伯が画を好むのは、要するに一つの病のようなもので、記録するに足るようなことではない。だから、石康伯の人なりの大略を記したまでである。

元豊三年十二月二十日、趙郡ちやうの蘇軾が記した。

(1) 蘇軾の文章は、AならばB、BならばC、よってAならばCのように一直線には進まない。途中で曲折があり、時には矛盾するようなことが放り込まれたりもする。

石康伯の画のコレクション『石氏画苑』（その中には親友の文同の作品も蘇軾自身の作品も含まれる）を礼賛するのが主題であるかのように見えて、実はそうではない。弟の画論を真理を衝いているかのように持ち上げたりもして、しかし、全体としては石康伯の「異人」ぶりが読む人の心に残るようになっている。(2) 石康伯は蘇軾の故郷、眉州眉山県の出身である。罪を得てこれからいかに生きて行くかを考えるときに、頭に浮かんできたのが先の文章にあった蜀の画人や石康伯のような人々だったのだろう。文章の途中に「異人」の語があるが、これは何度が見ているようにこのころのキーワードの一つである。62歳でありながら40歳くらいにしか見えないのは何かしらわけがあるとあって、それ以上の記述がないのは、敢えて言及するまでもなく、石康伯のような自由人は道術と繋がりがあるということなのだろう。(3) 富弼とともに罪を得た石康伯の息子について言及しているのは、この文章の流れからすると場違いのようだが、書いておかずにはいられなかったのだろう。蘇軾が憧れた4人のスーパースターの中でこのとき唯一存命なのは富弼で、富弼が罪に落とされたのは要するに改革に反対したためであった)

■書南史盧度伝

先の秦觀しんかんへの手紙に岐亭きていの胡定之こていしが書物を自由に貸してくれると記してあった(本章119ページ)。公務から離れた蘇軾は、自分のための読書に好きなだけ時間を使うことができた。これは『南史』なんしという史書を読んでいたのメモ。『南史』は南北朝時代の南朝の宋そう、齊さい、梁りょう、陳ちんの4王朝の歴史

をひとまとめにした書物。

私は若い頃から殺生を喜ばなかった。しかし、それをやめることはできなかった。近頃はようやく猪や羊を殺さないですむようになったが、根っからの蟹好き、貝好きであることから、それらの殺生はまだやめられなかった。

去年罪を得て獄に下り、始めは死を免れないと思い、それから脱することができて、一切のものをもう殺さないようにしようと考えた。蟹や貝が食事に供されると、皆を川の水に放つことにした。いまさら水に入れたところで、ほとんど生きる道理がないのはわかっているのだが、それでも万に一つでもぜひ活かしたいと願うのだ。そしてどうしても活きなかったときには、いよいよ煮て食べるのである。活かすことで何か望みを得ようというのではない。私自身が経た患難は、鶏や鴨が厨房に置かれるのに何ら異なることがなく、それを食べて自分の腹を満たすことがどうにも忍び難いのである。生あるものにひどい恐怖や苦痛を与えたくないだけだ。それでも、私は残念ながら生き物の味を忘れることはできないので、自ずと死んだものは食べている。

『南史』の「隱逸伝」にこのようにある。

「始興しこうの人で盧度ろど、字は彦章あざな げんしやうは、道術を修めた。若いときは張永ちやうえいに従って北の魏朝との戦争に出たのだが、張永は敗れ、魏人に激しく追われ、淮河まできてそこを渡ることができなかった。盧度はそこでこのように誓った。『もしも死を免れたならば、これからは一切の殺生をしません』。するとたちまち二枚の楯が流れてきたの

で、それをつなぎ合わせて川を渡ることができた。後に廬陵郡の西昌県にある三顧山さんごさんに隠れ住み、鳥獸とともに暮らした。夜に鹿が壁を叩くと、盧度は『壁を壊さないでくれたまえ』と言い、鹿はその声に応じて去った。家の前には池があって、魚を養い、それぞれに名前を付けて呼び、餌を与えた。かねてからいつ死ぬかを知っていて、ついに寿命をもって終えた」

たまたまこの部分を読んで、自分とほぼ似ていると思い、ここに書きとめた。

(ここで思い起こすのは、蘇軾の母が庭に来る鳥を殺すことなく大切に話である(第1章70ページ)。母の影響を受け、なるべくなら殺生はしないという気持ちが育まれていったのだろう)

(黄州に来て最初の年はこのようにして終わる。自分を新たにするために、最初は安国寺にしばしば参禅し、冬至から49日間は天慶観に籠った。殺生戒を守るよう努め、読書に励み、節儉を旨とした。それによって蘇軾は新たになったのだろうか。一方で、弟の蘇轍は筠州でどのように過ごしていたか、それを知るために次の一文を読んでおこう)

蘇轍とうけん き：「東軒記」

私は罪をもって、筠州いんの塩酒税を管理する役人に左遷された。

筠州に着く前に大雨があり、筠水いんすいが溢れ、南の市場を水没させ、北の堤を超えて州庁の門を破壊した。塩酒税の役場は川を見下ろす岸辺にあり、水の被害が最も甚だしかった。

筠州に着くと、役場の建物は壊れていて住めなかった。そこで郡知事に、国の出先機関の役場を借りて住むようにできないかと頼んだ。郡知事は行き場のないことを憐れんで許してくれた。

その年の十二月、ようやく役場の傾いた柱を直し、倒れた壁を補った。その上で、執務室の東に小さな建物、東軒とうけんを作り、杉二本と竹百本を植え、休息の場にしようとした。

塩酒税の仕事はもともと三人で担当していたのだが、私が到着したときにはたまたま二人が辞めて去った後で、一人だけで仕事をこなさなければならなかった。昼間は市場に出向き、塩を売る者、酒を売る者、肉や魚を売る者と、わずかな利潤を巡って税を徴収して回る。夕方に帰ってくると、全身がぐたくたで、すぐに眠くなってしまい、いつ夜になったのかも知らないうちにもう朝になってしまう。朝にはすぐにまた市場に出て仕事をするので、東軒で休むことなどできない。毎朝、毎夕、東軒の横を出入りするたびに、それを見て肩をすくめて苦笑せずにはいられない。

私は昔、少年のころに書物を読んで、孔子こうしの弟子の顔回がんかい（顔淵がんえん）の振る舞いを不思議に思った。顔回は狭苦しい路地奥に住み、一つしかない竹の器に飯を盛り、一つしかない瓢ひさごで水を飲み、普通の人なら苦しくて耐えられない暮らしをしながらも、それを楽しいとして改めなかった。私が疑問だったのは、たとえ役人として仕えないにしても、門番とか夜回りとかの仕事をして、そこそこの暮らしができるようにしたところで学問の妨げにはならないはずで、どうしてそこまで貧乏をして自分を苦しめなければならないのかということだった。

筠州に来てからは市場で働いて一日の休みもない。このごたごたを棄て、束縛するものを断ち切って、学問の世界にこの身を解き放ちたいと思わない日はないのだが、いつも事

に迫られて現状に留まってしまっている。そうこうするうちに、顔回が貧賤に甘んじて、敢えてわずかな俸給すらも求めなかったのは、学問のためであったのだと知った。士がまだ大^{だい}道^{どう}(真理)を聞かないうちは、権勢とか利益とかに酔いしれ、美服や美女をよいものとし、それらを楽しみとする。正しい原理を教わって道を求めるに及んで、あだ華を落とし、確かな実を求めるようになる。そして、従容として自得し、天地の大小も、生死の変化も意に介しなくなり、ましてそれ以下のものには全心を動かされなくなる。その楽しさからしたら、困窮などはものの数ではなく、怨みごとを言うことはない。たとえ王の位と取り替えようといわれても、承知することはない。徳を具えるに至った者でなければこうはならないので、私は何とかして我が身にまどう汚濁を洗い流して、聖賢に万分の一でも近づきたいと思うのだが、自らの欠けているのを見るに、顔回の楽しみを得たい願っても、それは無理なのであろう。孔子は天下をあまねく巡って、高い地位では大臣になり、低い地位では倉庫の管理人になった。ただ遇うところに己を任せたのであって、それは道に達した者でなければできないことで、私のような平凡な学徒が希望してもできるものではないのだらう。

私は譴責されてここにきてから、束縛されていることの害を知りつつも、成り行きとしてここから去ることができない。もしも幸いにも遠い将来に、世間の人が私のことを憐れんで、故郷に帰らせてくれたならば、先祖の壊れた家を直し、小さながらんとした部屋を住まい^{ゆらゆう}たいと思う。そこで、顔回の楽しみを追い求め、東軒のことを思い出しつつ、優遊として老いを忘れるとしようか。しかし、それとてそうなるようにと敢えて望むものではないのである。

■子姑神記

げんぽう

元豊4（1081）年、蘇軾46歳。

黄州での謫居生活は2年目に入り、黄州の習俗にも徐々に親しむようになる。その一つとして、紫姑神しこしんという廁かわやの神に会い、神の求めに応じて詞「少年遊しょうねんゆう」を作っている。その序文だけを見ておく。

黄州の商人である郭遵かくこうは毎年正月に紫姑神を迎える。箕みをもって腹となし、箸をもって口となし、盤に盛った灰に字を書き、すばやく詩を作る。私が見に行くと、神は「少年遊」の詞を作ってほしいと言ったので、戯れにこれを作った。

それとは別に紫姑神しこしん（子姑神とも書く）について記した文章もあり、こちらは全文を見ておこう。

（これによると、蘇軾が子姑神に会ったのは元豊5年のようで、そのように考証している書物もあるのだが、『蘇軾年譜』と『蘇東坡在黄州』はともに元豊4年の作であるとしているので、ここではそれに従う）

元豊三年正月一日、私は都を出て黄州に向かい、二月一日に到着した。

その明くる年の正月に、潘丙はんぺいが私に言った。

「不思議なこともあるものがございます。先生がここに赴任せよとのお上の御命令を受けられまして、黄州の人々がまだ誰もそれを知らずにいましたときに、神様が

かくこう
郭遵さんの家に降りまして、あたりによく響く声で人に告げ、詩を賦したのでござい
ますが、神様がいわれるには『蘇公が間もなくここに来られます。しかし、吾はちょう
ど会うことができません』。先生が黄州に着かれたまさにその日に、神様は去って
しまいました」。

そのまた明るる年の正月、潘丙が私に言った。

「あの神様がまた郭遵さんの家に降りました」

そこで私は見に行くと、神というのは草木を衣として纏った婦人で、手の内に箒を
持ち、二人の小さな童子を従えている。箒で字を書いて私にこのように言った。

「吾は寿陽じゅうやうの人、姓は何氏か、名は媚び、字は麗卿れいけいです。幼いころから書物を読み、
文章を書き、立派な人の妻となりました。ところが、唐の垂拱年間すいきやうに、寿陽の長
官が私の夫を殺害し、吾を妾いとして納れたのです。その妻はひどく嫉妬深く、吾は
廁の中で殺されてしまいました。吾は死んでしまい、どこにも訴えることができず
おりますと、天の使いが吾のことを御覧になり、罪なく殺されたことをお知りになって、
人間世界において神として仕事をするようにしてくださいました。世にいうところの子
こしん姑神(廁の神)は大勢いましょうが、吾ほど優れた者はいませんでしょう。貴公はここ
にしばらく留まっておられますので、お慰みに詩を賦し、舞ってさしあげたいと思
います」

神は詩数十篇をたちまち作り、どれにも妙所があり、時に嘲笑を雑えるものだっ
た。

私が神仙鬼仏へん びの変化の理ことわりについて尋ねると、その答えはどれも人の意表を衝く

ものであった。

部屋にいた者が拍子をとって『道調梁州』の曲を歌うと、神は起って舞った。音楽にぴったり合い、曲が終わると私にお辞儀をして言った。

「貴公の名は天下に知られています。吾のことは世間に知られていません。どうか一寸ばかりの紙を惜しまないでください」

私は何氏の人生を聞き、酷い役人に掠め取られ、嫉妬深い妻に殺され、その怨みの深いことを知った。しかし、その悪い長官の姓名を言わなかったのは、慎ましかで礼に適うところである。自分の苦しみは知らせても、人が隠している悪事を敢えて暴露しないのは、知があるといえる。また、詩文をよくしながら、それが世間に聞こえるまでにならなかったのを恥としているのは、賢であるといえる。これらのことを記すなら、何氏の望みにはほぼ沿うことになるだろう。

(1) 淮河^{わいが}と長江にはさまれたあたり（そのなかに黄州も含まれる）には、廁の神（子姑神あるいは紫姑神）を正月に祭る風習があった。(2) この文章には潘丙と郭遵の2人が登場している。潘丙（原文は「進士潘丙」^{しんし}）。科挙の一次試験には合格したものの二次試験には受からなかった）は、樊口^{はんこう}で酒店を営む潘革^{はんかく}の次男で、三男の潘原^{はんげん}とともに酒店の仕事をしていた。郭遵（原文は「僑人郭氏」^{ぎょうじん}）は薬屋^{あるじ}の主である。(3) 郭遵らは入念に準備をして蘇軾^{そし}を子姑神に会わせたのだろうか。蘇軾は、たぶんまやかしいものであるとうすうす知りつつも、洒落でこの文章を書いたのだろう。だから、敢えて麗々しく礼、知、賢を兼ね備えていると記したのだろう。蘇軾のこの文によって神の評判が高まって郭遵らの懐を潤し、大がかりな準備をした甲斐が十分にあったか

どうかはわからない)

■正月二十日往岐亭郡人潘古郭三人送余於女王城東禪莊院

蘇軾^{きてい}は岐亭^{ちんざう}に陳慥^{ほうさん}（方山子）（本章 32 ページ）を訪ねようと思ひ立ち、1月 20 日の朝^{りんこうてい}、臨臯亭を出發した。道案内を買って出たのが、上の文章に登場した潘^{はんへい}丙^{かくこう}と郭^{ここうどう}遵、それに古^こ耕^{こう}道^{どう}の 3 人であった。古^こ耕^{こう}道^{どう}は赤^{じょおうじょう}ん坊^{とうぜんそう}救濟基金の実務担当者（本章 71 ページ）。3 人は道の途中の女王城の東禪莊院^{いん}まで蘇軾を送り届けた。

春の初めの寒さのために、

こ十日ほどは門から出ないでいた。

村々の柳がもう芽を吹いて、

川べりで枝を揺らしているのも知らずにいた。

凍りついていた谷^{さらさら}から、決決と水音が聞こえてくるし、

野焼きの痕を隠すようにして、青青と草が一斉に萌え出てきている。

東禪莊院の小さな庭が私を引き留め、

徳利に半分ほどの濁り酒を温めてくれる。

そういえば、去年のこの日、

私は峠の路で細かい雨に降られつつ、

梅の花に、魂を断たれるような思いをしていたのだった。

（「去年のこの日」とは麻城まじょう県の春風嶺しゅんぷうれいでのこと（本章 25 ページ）。間もなく到着する黄州にはいかなる日々が待っているのか、おぼつかない思いでいたのだった。そのときは全く知りもしなかった潘丙、郭邁、古耕道といった人々と親しくし、黄州とかなり馴染んできたことに、ある種の感概を覚えてこの詩を詠んだのだろう）

■黄州隋永安郡

少し寄り道をして、上の詩の題にあった女王城じょおうじょうについての考証を見ておこう。女王城は、黄州の町の北東5キロほどのところにあった古い町(城)の址。土地の人は、楚王そおうの娘が築いたので女王城と呼ぶのだと述べていたが、蘇軾は疑っている。

昨日ずいじょ、『隋書』の「地理志」を読んだところ、黄州は、当時は永安郡えいあんと呼ばれていて、いまの黄州の町から十五里ばかりのところに永安城があった。これを俗に「女王城」と呼んでいるのだが、その説ははなはだ怪しい。『図経』によると戦国時代の春申君しゅんしんくんの故城であるとするが、それも正しくないだろう。春申君が居場所としたのはもとの呉国のあたりで、いま無錫県の恵山の上にある春申廟のあたりではなからうか。

(1) 黄州は隋の時代には永安郡であったことから、蘇軾は詩文中で黄州のことをしばしば永安と呼んでいる。(2) 無錫県の恵山について言及しているが、蘇軾はかつてその山に登っていて、その詩を第5章 352 ページで見ている。(3) 黄州に来て以来、

蘇軾はいろいろな書物を読み、これまでは時間がなくてできなかった書物の執筆にも
励んだ。この年には『易経』と『論語』の研究書を書き上げる。とくに『易経』は父
の蘇洵も弟の蘇轍も深く研究し、いわば一家の学の集大成をここで成し遂げたので、
その点については黄州に流されたのは幸運であったともいえようか)

■ 応夢羅漢記

女王城の東禅荘院に泊まった翌日は団封というところで一泊し、不思議
な夢を見た。

元豊四年正月二十一日、私は岐亭に行く途中に団封で宿り、夢に一人の僧に
会った。顔から血を流し、何かしら訴えたいことがあるような様子であった。

その明るる日、岐亭に着き、一つの廟の前を過ったので、ふと立ち寄ると、中に阿
羅漢の像があり、左に竜、右に虎を従え、はなはだ古めかしい姿であった。しかし、
その顔面は人によって破壊されてしまっていた。それを見て呆然としたのは、昔もき
っと会っているような気がしたからだ。

そこでその像を車に載せて帰ることにし、修復して仏龕に収め、安国寺に置いた。
四月八日、我が母、武陽君の忌日に安国寺で仏事を行い、このことを記す。

(夢で見た僧は、破壊された羅漢像ということなのだろう。昔も会っていると思った
のは、何かしら母と関係があるのだろうか)

■王翊夢鹿剖桃核而得雄黃

蘇軾は、^{きてい}岐亭に関連して似たような夢の話を記録しているので、ついでながらここで見ておこう。

黄州の^{おうよく}岐亭に王翊という者がいた。家は富み善行を好んだ。

王翊はある日、夢に、誰かに殴られたのか、ほとんど死にそうになっている者を水辺で見た。その者は王翊を見ると叫び、王翊は助けてやった。

翌日、たまたま水辺に行くと、獵師に捕えられた一頭の鹿がいた。鹿には槍が突き刺さっていた。王翊ははっとして、数千銭を出してそれを買った。鹿は王翊につき従い、それからはいつも王翊と一緒に過ごし、一步も離れなかった。

王翊の住まいの背後に林があり、実の成る木があった。ある日のこと、村の婦人が林の中で一つの桃を見つけた。よく熟れた非常に大きな実がたった一つだけ木の枝にあった。婦人はそれを取って食べた。ちょうど通りかかった王翊はそれを見て大いに驚いた。婦人は食べ終わると種を捨てた。王翊はそれを拾い、割ってみると、^{じん}桃の仁の形をした「^{ゆうおう}雄黃」のかたまりであった。それを噛むとはなはだ美味であったので、すっかり吞んでしまった。それから王翊は生臭い野菜や肉を断ち、日に一食だけで、殺生をしなくなった。

これもまた不思議なことである。

（「雄黃」は光沢のある明るい黄色の鉱物で、神秘的な作用があると思われていた。実際はヒ素の硫化化合物で毒性がある。蘇軾は、夢に不思議な働きのあることや、ある

種の物質には特殊な薬効があるということは、かなりの程度信じていたようだ。しかし、未来を全て見通したり、永遠の命を得たり、超常現象を現出したりといった極端なことまで可能になるとは考えておらず、世人を惑わすいかさま道人、似非仙人に対しては手厳しかった)

■岐亭道上見梅花戲贈季常

岐亭きていへの道中に戻ると、岐亭に至る途中ちんぞうで陳慥あざな（字は季常きじょう）に会い、梅の花とともにこの戯れの詩を贈った。

季節の移り変わりとともに、

蕙けいは死らんに蘭は枯れ、菊もまたくだ摧かれてしまった。

しかし、魂を呼び返す靈薬へんこんこう「返魂香」が峠の梅に入ったのだろうか、

風によって緑が吹き尽くされた枝に、

雀がぐちばしで叩いたのに応じて、

一点かむの芳しい心が開いた。

花は長江の上を行く雲が落ちてきたかのようで、

その香りは野辺の店で嘗める美酒のようだ。

さあこれから行って貴君の奥方にお会いするなら、

すでに病より起って、梅の花は満開となっておられましょう。

（このとき陳慥の妻が病んでいたという説があり、詩の終わりの部分は、それに基づ

いてかなりの意識をした)

■蜀僧明操思帰書竜丘子壁

明操めいそうという蜀出身しよくの僧がいて、雲水の旅を重ねて黄州にしぼし足を留めていた。たまたまこの岐亭訪問きていの折に、蘇軾は明操に会ったようだ。蘇軾ちんぞうも陳慥ほうさん（方山子）も蜀の人であることから、明操は同郷のよしみで、故郷に帰ってみたいというようなことを語ったのだろう。それで蘇軾は戯れにこの詩を作り、陳慥の家りゆうきゆうの壁しに書いた。詩題には「竜丘子りゆうきゆうの壁し」とあるのは、本章36ページで見たように、岐亭の近くりゆうきゆうざんに竜丘山があり、漢の時代に竜丘子がここに隠れ住んだということから、蘇軾は陳慥を竜丘子になぞらえた詩を作り、以来、陳慥は竜丘と号するようになっていたからである。

生きるのは苦勞ばかりだとしても、
それはあと幾日ほどのことであるのだろうか。
帰りたいとの思いによって、
晩年を乱すのはよろしくないだろう。
貴僧はいかに見るのか——
あの一片の雲は無心を会得しているだろうか。
南も北も東も西の同じ一つの天である。

（「晩年を乱すな」とは明操だけでなく自分自身に向かってもいったのであろう）

■書所獲鏡銘

蘇軾は陳造ちんぞうに会った後、帰りは川に船を浮かべて黄州に戻った。その折の
ことを記した一文。

元豊四年正月、私は齊安せいあん（黄州）から岐亭きていに行き、舟を泛うかべて還こった。古黄州ここうしゅう
通り、そこで一枚の鏡を見た。周囲が一尺二寸ほどで、その背に銘が記され、
「漢代かんに白陽はくようから善い銅が出て、それを取って鏡を作った。澄んで明るく、左に竜、
右に虎を配してこれを守らせる」とある。その字は豆粒てんじょくらいで、篆書れいしよと隸書を交え
てはなはだ精妙である。白陽なんようとは南陽を流れる白水はくすいの北岸のあたりだろうか。その
銅は漆のように真黒で、その背は玉を刻むかのようだ。鏡の明るさはわずかに人を
照らすだけである。聞きくところの古代の鏡はだいたいこのようで、道家しゅうけいの「聚形しゅうけい
法」によるものである。

（別の文章から、この鏡りくは陸道士という人が所蔵していたものであることがわかる。

蘇軾の交遊範囲はこうして広がってゆくのだった）

■王文甫達軒評書

3月に長江対岸の王齊愈おうせいゆ（字は文甫）、王齊万あざま ぶん ぼ（字は子弁）兄弟の家（達
軒けん）を訪ねた。書しよや花について論じ合い、それぞれ文章を残している。

ここでは書についての文を見ておこう。

唐宋から五代の時代に、文章は品がなく、書も同様であった。そのころの人として
 は楊凝式(字は景度)の筆を雄として、唐代の顔真卿(字は清臣)や柳公権(字
 は誠懸)と肩を並べるといわれることが多いが、私はひどく怪しいと思っている。宋
 代になってからは李建中(字は得中)と宋綬(字は公垂)が特に挙げられるが、
 私はそうは思っていない。宋綬の筆は寒く、李建中の筆は俗で、二人はみだりに
 名を得ているだけではなからうか。最近の人では蔡襄(字は君謨)は天から与え
 られた資質からして高く、学んでさらに至り、まさに本朝第一とすべきである。

(ごく簡略ながら、五代から北宋前半の書家を蘇軾がどのように見ていたかがわかる。
 唐代までの書家の流れについては第4章47ページの詩で詠んでいるし、本章181ペ
 ージでも見るようになる)

■跋蔡君謨書海会寺記、論君謨書、跋君謨書賦、評楊氏所藏歐蔡書、跋 君謨飛白

上の文章で近年の書家として特に蔡襄(字は君謨)を第一としている
 ので、蔡襄の書について記した五つの文章をここでまとめて見ておこう。

(1)は杭州副知事であった熙寧7(1074)年に、(2)から(5)は黄州
 にきてから書いたもの。

(1) 蔡襄がこの「海会寺の記」を写したのは二十八歳のときで、それから三十二年後の熙寧甲寅に私は杭州から臨安にきてこれを借りて観た。蔡襄は亡くなってすでに六年となった(実際は8年)。海会寺の僧、明師は齒七十四にして耳はますます聰目もますます明らかで、寺はますます立派である。蔡襄の書に「竹林橋上、暮山依然、有足感嘆者(竹林橋の上、暮山は依然として、感嘆するに足る有り)」とある。明師に従って行きつつ、竹林橋から見る暮れゆく山を思い、絶勝の地であることを自ずと想見させられた。

(蘇軾が海会寺に立ち寄ったときの詩を第4章140ページで見ている)

(2) 歐陽脩は書を論じてこういった。「蔡襄の書は当世独歩である」。これは至論である。思うに、蔡襄は行書が第一で、楷書が第二、草書が第三である。その長ずるところからあえて短所をいうなら、大字の楷書は小字の楷書に劣る。蔡襄は天から与えられた資質からして高く、それを補うに篤く学んだことから、当世独歩となったのである。近頃、蔡襄の書を論じる者にはいろいろと異論があるので、とくにこのことを明らかにしておきたい。

(3) 私は近年の書を評じて蔡襄を第一であるしている。ところが、そうではないという論者もいる。それは何も知らない者とほとんど変わるところがない。書法はまず楷書に始まり、正しく楷書が書けなくて行書や草書がうまいわけがない。蔡襄は二十九歳で楷書の法をこのように会得していたのであって、ここにそのおおもとを

知ることができる。

(この跋文は蔡襄が29歳のときに書いたものに記したのだろう。上の「海会寺の記」はその1年前に書いたもので、「天から与えられた資質が高い」というのは、そうした若い頃の書を見たことに基づく評であろう)

(4) 顔真卿がんしんけいと柳公権りゅうこうけんが没してからは筆法が衰え絶えてしまい、加えるに唐末の喪乱で人物が雕落磨滅ちゅうらくまめつしたために、五代の時代には文芸や芸術は地を掃うようにして尽きてしまった。ただ独り楊凝式ようぎょうしきだけは筆跡が雄傑で、王羲之おうぎしや王献之おうけんし、そして顔真卿や柳公権の名残をとどめていて、まことに書の豪傑、時代の流れの中に沈み込まれてしまうことがなかったといえるだろう。

宋代の初めに李建中りけんちゅうは「能書のうしょ」と呼ばれたが、その格調は低く、与える印象は濁っていて、唐末以来の衰え卑しくなった風気にやはり染まっている。その他には、卓然として前の時代の人々を追うような者はいなかった。

ここに独り蔡襄の書は天資がすでに高く、学を積んで深くに至っている。心と手が応じあい、変化すること窮りなく、ついに本朝第一となった。そして、行書が最も勝れ、小字の楷書がそれに次ぎ、草書がまたそれに次ぎ、大字の楷書がまたそれに次ぎ、八分と隸書は少し劣る。また新たな意匠を出して飛白の書を作り、蔡襄本人は「天を翔ける竜、舞う鳳の勢いがある」と言い、識者はそれは言い過ぎであるとはしなかった。

欧陽脩おうようしゅうの書は学ぶ者が手本とするもので、まさに欧陽脩その人を見るに近いも

のがある。^{たく}エみではないとしても、なお宝として伝えるべきである。しかも精勤敏妙^{せい きん びん みょう}で自ずから一家を成している。

^{よう}楊君は蔡襄と歐陽脩の書を所蔵していて、黄州に立ち寄った際にそれを出して私に見せてくれたので、たまたまこれを評するものである。

(蘇軾に2人の書を見せた楊君がいかなる人であるのかはわかっていないようだ。蔡襄について蘇軾は「天資高し」と繰り返し記している)

(5)物の理^{ことわり}は一つである。その意^い(本質)に通じるなら、何をしてもまくいかないといふことはない。

専門の科を分けて医術を行うのは医を衰えさせ、画法を分けて画を描くのは画を卑しくする。古代の名医は老人も子供も分けずに診^みたし、古代の名画家は人も物も分けずに描いた。これに長じているといわれるのがよいとしても、これはできるがあれはできないといわれるのはよろしくない。世間の書家が、篆書^{てんしよ}はできても隸書^{れいしよ}はできないとか、行書が草書のように書けないとかいうのは、書の意(本質)にほとんど通じていないからである。

蔡襄は、楷書も行書も草書も隸書も思いのままに書けないということはなかった。その力^{ちから}と思いが余ったものが変じて飛白^{ひはく}となった。これは愛すべきではあっても、学ぶことはできない。その意に通じないでは、このようにはできないのである。

(最後のこの文章は蔡襄の飛白の書について記したものだ。飛白という書法については本章5ページで見ている。物の理は一つで、それに通じなら何でもできるようになると

というのは、蘇軾の根本にある考え方である。だから、親友の文同も蘇軾自身も、詩も文も書も画も本質は同じとして広く己のものとし、そのようにできないのなら、結局は何もわかっていないとしたのである)

■東坡八首

蘇軾には数々の号がある。自称するのは、東坡、東坡居士、老泉山人、鉄冠道人、戒和尚、玉局老、眉陽居士、雪浪齋。他称では、無邪公、仇池翁、▲陵先生 (▲は田+比)、泉南老人、水東老人、東坡道人、海上道人、蘇仙、坡仙 (以上『蘇軾年譜』による)。最も知られているのが「東坡」で、その号を用いるようになったのがこの年、元豊4年である。

東坡とは東の 坡 の意味で、先に見た四望亭のある 竜王山 (本章 57 ページ) のあたりの小高い場所 (黄州の町の中心から北東の方角にある) に対して、蘇軾自身がその名を与えた。この年の春の初めごろから、蘇軾は東坡の一角のかつて兵舎があった土地で開墾を始め、3月から4月のころに、東坡について詠んだ8首の詩を作った。序文がある。

私は黄州に来て二年目となり、日々に生活が苦しくなった。昔からの友である馬正卿は食べるものさえ欠乏しているのを哀れみ、郡中にあるもとの兵営地、およそ数十畝ほどの土地をお上に請い願ひ、私がそこで自ら耕作ができるようにしてくれた。

土地は長らく荒れ果て、茨が繁茂し、瓦礫がころがる場所となっていた。しかもこの年はひどい日照りで、開墾の労働だけで筋力がほとんど尽きてしまった。耒を投げ捨て、嘆いてこの詩を作り、自分で自分の辛い努めを哀れんだ。

切望するのは、来年からの収穫がこの労苦を忘れさせてくれることだ。

（蘇軾は、家計のやりくりに関し、賈耘老の法を実践することでこの先1年くらいは大丈夫だろうと書いていたが（本章 118 ページ）、行き詰まるのは目に見えていた。そこで、馬正卿が奔走し、わずかながらも耕作地を（恐らく無償で）手に入れることに成功した。いつかは役人生活から足を洗って自作農に回帰しようというのが蘇軾の初めからの願いであったから、はからずもそれが早々と実現したような格好になった。馬正卿と知り合ったのは最初の赴任地である鳳翔に行く前のことで（第2章21ページ）、それ以来20年になるが、詩中にその名が現れたのはこれが初めてである）

其の一

廢墟となった跡地は人に顧みられることがなく、

土の塚は顔れ、雑草が生え放題だ。

ここに筋力を投入したところで、無駄に捐るようなもの、

一年の終わりにその労力を償ってくれはしない。

そこに他郷から、

広大な天地にも逃れるところがなく、

行くに窮してさすらい来た独りの男——

最初に手掛けたのは瓦礫拾い、
 あいにくと日照りの年で、土は痩せている。
 男は草の中に埋もれながらも、
 ここからわずかでも収穫物を刮り取ろうとしているのだ。
 ああ——
 男は耒を投げやって嘆息する。
 「我が廩はいつになったら高く聳えるのだろうか」

其の二

この全くとりとももなく荒れた土地、
 それでも高い低いがあるのを見れば、
 それぞれに適した使い方があるだろう。
 低くじめじめしたところは稲を植えるがよろしかろうか、
 東の高まりには粟と粟を蒔くのがよろしかろうか。
 長江の南の岸辺には蜀から来た友人がいて、
 桑の種子をくれることになっている。
 姿のよい竹を植栽してもよいのだが、
 根があちこち勝手に張ってしまうのはちょっと心配である。
 いましばらく佳い場所を検討した上で、
 我が家族が安心して住める敷地を定めるとしよう。

そんな算段をしていると、

枯草を焼いていた家童^{かどう}(少年の使用人)が走って来て叫ぶには、

「隠れていた古井戸が出てきました」

ここから一食分の作物だって収穫できるかどうかもわからないが、

とりあえず^{びょう ひさご}一瓢(瓢で作ったひしゃく)の水を飲めることだけは確実にになった。

(蜀から来た友人とは王兄弟^{おう} (本章52ページ) のこと)

其の三

昔からここには小さなせせらぎがあって、

遠い峠の背後からきているという。

それは城壁を穿って黄州の町へと入り込み、

集落を通過する間に汚水が流れ込み、

草が高く生い茂るようになる。

ここから去って、流れは、

十畝ほどの広さの柯氏^かの陂^{たぬけ}となり、

そこには魚や蝦がいる。

今年は日照りで小川の水は尽き、

^{たぬけ}陂の浮き草も枯れて泥にべったりと付いてしまっている。

昨夜、南の山に雲が湧いたかと思うと、

雨が来て、犁^{すき}で一回盛った土を超えて降ってくれた。

水はもとの溝を尋ねてちよろちよると流れ、
 あたかも私が荒地を切り開いているのを知ってくれているかのようだ。
 溝の底の泥には去年の芹の根があり、
 見れば、一寸ばかりのが確かにある。
 白く芽が伸び出すのはいつだろうか。
 そのときには鳩の肉とともにあえたらよいだろう。

(1) ここにある柯氏たけいの陂しぼうていは、先に見た四望亭ぎょちの下の魚池ののことであろう(本章57ページ)。その近くにある柯氏の林を買うかどうか検討していると弟に語っていた(本章94ページ)。東の坡はそれよりも少し北に位置し、この詩にあるように北の峠から流れてきた小川が東の坡を経由して柯氏の池に注ぐのである。(2) この詩の最後には蘇軾自身の注記があつて、蜀の人は芹の芽を細く刻んで、鳩の肉と合えたものを好むとある)

其の四

(この詩にも蘇軾自身による注記がある。(1) 蜀の人は、細かい雨を「雨毛うもう」といい、
 稲の芽が伸び始めることを「水はりに鍼はりを刺す」という。(2) 蜀の地では、稲が稔るころ
 に蚱蜢さくもが田に群がって飛ぶ。形状は小ぶりの蝗のようで、稲を害することはない)

清明節せいめいせつの前に稲を種える。

私はすぐにそれから続く楽しいことを数え上げる――

春の沢辺を雨毛^{うも}が暗く覆うと、
「水に鍼^{はり}を刺した」との嬉しい言葉を聞く。
苗を分けて植え終わるのは初夏のころ、
稲の葉が風に翻るのは喜ばしい。
夏は、月の明りに照らされて、稲の穂に露が上り、
幾つもの珠^{たま}を連ねたように見える。
秋になれば、稲の穂が重くなり、
倒れかかるのを互いに支え合う。
そして畔道^{さくちう}のあたりからは、
蚱蜢^{さくちう}の飛び交う音が風雨のように聞こえる。
新たに舂^ついた米をすくに甑^{こしき}に入れて炊けば、
竹籠の中で玉の粒が輝きわたる——
私はお上から支給される米ばかりをずっと食べてきた。
それは紅く変色して泥のようなものだ。
ゆくゆくは収穫したばかりの米の本当の味わいを知ることができると、
いまから我が口と腹に約束しておこう。

其の五

良い農民は地力を惜しむという。
ならば、ここが十年も荒れ地であったのは幸いでなかろうか。

桑の木はなかなか成長しないにしても、
 麦くらいなら望みがありそうだ。
 種を蒔いてまだ一カ月にならないけれど、
 土の塊を覆ってすでに蒼蒼あおあおと出てきている。
 農夫は私に言う。
 「苗のうちから、葉ばかり繁らせちゃったらどうにもなりませんぞ。
 麦で団子をたんとこさえたかったら、
 牛やら羊やらを放し飼いにするとええがな」
 繰り返し教えてくれることに何度も礼を言う。
 腹を満たすためとあれば、
 助言を忘れることなどありはしない。

其の六

なつめ 粟を種えるのは、実を剥うち落とす時がくると思うから、
 松を種えるのは、材きを斫り出す時がくると思うから。
 そうなるのは十年以上も先であろうが、
 我が計画おろかは慥なまでにひたむきである。
 十年などどうということもない、
 千年だって雷が風によって吹き過ぎるようなものだ。
 学んたらよかろうと思っていたのが昔聞いた「李衡りこうの召使い」の話——

呉の国の李衡は千本の蜜柑を植えて子供らにこう言った、

「これでおまえたちの将来には何の心配もない、

ここに千人の『木の召使い』がいるのだからな」

よい塩梅に私にはその名もまさに李君という同僚がいて、

いまは舒州じょで官の務めをしていて、

たまたま三寸もの大きさの蜜柑を贈ってくれた。

その輝きといたら、見る者皆を驚かせるほどだ。

もしも、春の氷がまだあるうちに、

その苗木を百本ばかりももらえたらと思ひもする。

竹の籬まがきの先、軒端のあたりに、

青い実、黄色い実が垂れるのがもう目に見えるようだ。

(同僚の李君とは李常りじょうのことであると、蘇軾自身の注記がある(李常が近くにいることは本章 111 ページで見ている)。三国時代の李衡の故事と李常が贈ってくれた蜜柑とを結びつけたのである。米、麦、蜜柑と次々に収穫物を想像してゆくのである)

其の七

潘河君はんへいは、長らく官の仕事にありつけないために、

長江ちやうこうの南の村で酒を売っている。

郭溝君かくこうは、もともとは將軍を輩出してきた家柄だが、

町の西側にある市場の城壁の際で薬を売っている。

古^こ耕^{こう}道^{どう}君は、人とは変わったことを好み、
 たぶん唐代の侠客、古^こ押^{おう}牙^がの子孫なのだろう。
 古耕道君の家には十畝の広さの竹林があり、
 いつでも門を叩いて訪れてよいことになっている。
 私は生きるに窮して旧くからの交わりを絶ったのだが、
 この三君だけはたえず声をかけてくれ、
 東^{あか}の坡での労苦も私と一緒にしてくれ、
 せめてものねぎらいにとささやかな弁当を用意して共に食べる。
 気の毒なのはかの杜^と甫^ほである、
 何^{しゅ}しろ朱^{しゅ}のじいさんと阮^{げん}のにいさんしか相手をしてくれないと嘆いたのだから。
 私^しはかの子^こ夏^かを師匠とすると決めたのだ、
 「四海の内、皆、兄弟なり」なのだ。

(この詩に詠まれたことで、潘丙、郭邁、古耕道の名は千年後の我々にも伝わり、いかなる人物であったのだろうか和快乐い想像を膨らませることができる。潘丙はお上の仕事に就いていたこともあったのだが、何かしら問題があつていまは父親の酒店で働いているということであるらしい。後に弟がお上からお咎めを食らうような事件を起こしてもいるので(本章 189 ページ)、潘一家は品行方正というわけではないのだろう。郭邁は、先に見たように(本章 138 ページ)、厠の神様のいかさま芝居を打つようなところがある一方で、武官の家柄であると思わせる側面もあった。古耕道は、どんくさくて大して長所もないと先に蘇軾は書いていた(本章 71 ページ)が、ここでは唐

代の侠客のようだとっている。古押牙は伝説の人物で、約束したことは必ず果たし、己の命を犠牲にしてある人の許嫁を救出している。このようになかなかこしたたかそうな庶民と蘇軾は気安く付き合い、そこまで突き抜けることのできなかつた杜甫を哀れんでいる。杜甫は安祿山あんろくざんの乱をどうにか乗り切った唐の朝廷の一員に加えられものの、己の信念に忠実に従ったために周囲と馴染めず、職を辞して浪々の身となった。杜甫は蘇軾よりも思い切った行動をとったのだが、前に見たように（本章 125 ページ）、常に国家のことを考え、自身は庶民とは一線を画す士大夫層に属するとの意識と責任感を強く抱いていた。それは極めて尊敬すべきことであると蘇軾も考える一方で、蘇軾には意識の底層に自身は本来は農民であるとの思いがあり、荒れ地を耕し、潘、郭、古の3人と付き合うなかでそれを強めのだろう。孔子の弟子の子夏の言葉「四海の内、皆、兄弟なり」を實踐できるとのこの詩の末の句は、黄州に来て1年余りで、蘇軾の精神が力強く蘇ったことを示すものであろう。それを導いたのが、東の坡の地を得た馬ば正卿であるので、最後の8首目は馬正卿のことを歌う）

其の八

馬正卿君は士大夫としてもとは苦しい境遇にあった。
私に付き従って二十年、
馬正卿君は、日夜、私が高位に昇ることを望んできた。
それは、隠棲するための土地を買う錢を私からもらうためである。
ところが、私は馬正卿君に何もしてやれず。

かえって馬正卿君に面倒をかけ、
 この土地を借り受けて、ここで農耕ができるようにしてくれた。
 馬正卿君は自身の人生設計を放棄して、
 ここで収穫することを目論んでいるのだが、
 それは亀の甲羅から毛を刮り取って毛氈を編もうとするようなものだろう。
 馬正卿君が癡なのはそれだけではなく、
 いまもって私が賢人であるかのように誇らしげに人に吹聴しているのだ。
 誰もがそれを笑うのに、いっかな改めようとしない。
 憐れなことに、
 私に一つ施せば、千倍になって返ってくるといまもって思っているのだ。
 (馬正卿がいかなる考えから 20 年もの間蘇軾に仕え、流罪になってもなお離れずに
 いるのか。この詩に詠まれている通りではないことだけは確かである)

■馬正卿守節

蘇軾を「蘇東坡」にした最大の功労者は馬正卿である。馬正卿について
 記した二つの短文を見ておこう。

杞の人の馬正卿は都の太学の年長の組の学生だったが、はなはだ潔癖で気骨
 があり、学生仲間からは好かれず、教授連中からは敬遠されていた。私は若い
 ときにたまたまその下宿を訪ねたところ、壁に杜甫の『秋の雨の嘆き』の詩が書い

であった。それを見ても、そのときは特に何も思わなかったのだが、馬正卿は間もなく太学を辞めて、二度と世に出ようとしなかった(よって、都の人々に己が理解されない苦さを杜甫の詩に託したのだと知れた)。馬正卿はいまや白髪で、やはり困窮しているが、^{せつ}節を守ることはいまも変わらない。馬正卿の字は^{あざな}夢得^{ぼうとく}である。

(宋代には各地に官営の学校があり、都の太学は高位高官の子弟の学び場となっていた。学生のほとんどが科挙を目指し、特別に熱心な教授がいるところ以外は、教育機関としてそれほど役目を果たしていなかった。だから、^{おうあんせき}王安石は学校制度を大々的に変え、いずれは科挙を廃止しようと考えたのだった。馬正卿は両親を早くに失ってひどく貧乏であったが、恐らく親類の支援によってであろう、都の^{たいがく}太学^{たいがく}に入学し、国家有用の人物になろうと励んでいた。非常に真面目であったために、周囲から浮き上がり、とうとう退学してしまった。その直前に、蘇軾は馬正卿の下宿を訪ねた。当時、蘇軾は制科の受験を控えて勉強に励んでいたのだが、どこかで馬正卿の評判を聞いたのだろう。会って2人がどのような話をしたのかわからないが、その翌年、馬正卿は蘇軾の従者になって^{ほうしょう}鳳翔^{ほうしょう}に行き、以来ずっとそのまま蘇軾のもとにいた。太学で学んでいた馬正卿であるから、蘇軾は前の詩の序文で馬正卿を使用人ではなく、古い友人と呼んでいる)

■馬夢得同歳

^ば馬^{せい}正^{けい}卿^{せい} (字は^{あざな}夢得^{ぼうとく}) についてのもう一つの短文。

馬正卿は私と同じ年の同じ月の生まれで、私よりも八日だけ若い。この年に生まれた者で富貴な者はいない。私と馬正卿はその中でも困窮の冠たる者である。そして、私と馬正卿を比べてみるなら、やはり馬正卿を首位として推さなければならぬだろう。

■与王定国書

新たに土地を得て耕作を始めたことを、この頃に王鞏（字は定国）（本章 59 ページ）に送った手紙に記している。2 本の手紙から該当の箇所を抜き出して訳す。

(1) 私は荒れ地数十畝^はを得ました。牛を一頭買い、自分でそこを耕しています。今年は日照りの歳に当たり、米の値段が非常に高くなっています。近ごろ折よく雨が降りましたので、日夜開墾し、麦を植えようとしています。苦労ではありますが、かえってそこに味わいがあります。近隣の人々と顔を合わせればわいわいがかや賑やかにやっています。自分では「麴糵^{くも}陂裏^{へり}の陶淵明^{とうえんめい}」との号を思いついたのですが、どんなものでしょうか。

(2) 荒れ地を耕して詩を詠んでいます。その中に、「枯草^{かそう}を焼いていた家童^{かどう}が走って来て、／叫ぶには、／「隠れていた古井戸^{こせいど}が出てきました」／一食分の作物だってここで採れるかどうかもわからないが、／一瓢^{ひょう}の水を飲めることだけは確實

になった」(家童焼枯草、走報暗井出。一飽未敢期、瓢飲已可必)。とか「亀の甲羅から毛を刮り取って毛氈を編もうとするようなこと」(刮毛亀背上、何時得成氈)といった句があります。万里の彼方で笑ってくださることもあろうかと、紙の余白を埋めておきます。

■与章子厚書

自分で土地を耕すようになったことは、章惇(字は子厚) への手紙にも記している。

(先に章惇からの誘いを断った手紙(本章 84 ページ)は、他の人(ことによると皇帝)の目に触れる可能性が大きいと意識して書かれたものであった。これは2人だけの間の全くの私信として書かれている。これによって、立場は異なっても友人としての関係は変わらないと自分は考えていると、蘇軾は伝えようとしたのだろう)

私は東の坡おかに住まいし、棚田を作り、稲を植えています。田は五十畝はあり、自ら耕し、妻も自ら蚕を飼っています。それによって一年のやりくりをしようとしています。

昨日は一頭の牛が病気のためにほとんど死にかけました。牛の医者はその病状を識しりませんでした。老妻はそれを識しっていて、「この牛は豆斑瘡とうはんそうです。治療法は青い蒿よもぎを粥にして食べさせることです」というので、その通りしてみると効果がありました。

私は謫居たくきょの後、すっかり村の翁おきなのようになった気でいたのですが、まだまだです。

老妻の方がよほど黒牡丹こくぼたん(牛のこと)の扱いを知っています。

千里の向こうで、貴公に笑っていただきたく思います。

(元来自分は農耕をする民であると考え蘇軾であっても、農事の実体験は少年の頃に少々あった程度で、ここにあるように妻や、あるいは馬正卿や近隣の人々の手助けを必要とした。蒿を粥にして食べさせるとは、要するに下剤を施したのだろう)

(前の章までには訳出した蘇軾の手紙が一つもなく、この章ですでに幾つもの手紙を見ているのは、黄州にきてから急に多数の手紙を書くようになったというわけではない。手紙は独特に文体で書かれていて、これまで訳者は敬遠していたからだ。黄州での日々を深く知るために非力を顧みずに訳しているために、これまで以上に珍解釈があってもお許しいただきたい)

■題織錦回文三首

これは回文の詩。右から読んでも左から読んでも同じというタイプの回文ではなく、終わりから逆に読んでもちゃんと意味が通じる詩になるというタイプの回文。3首のうち1首だけを書き下し文にして示す。言葉を操る名手である蘇軾は、荒れ地を耕しながらこうした遊びに耽ったりしたのだろうか。

春晚落花余碧草、
夜涼低月半枯桐。

人随遠雁辺城暮、
雨映疏簾繡閣空。

左上から読めば、

「春く晩へきれて落花そは碧草そうに余し、夜涼こしくて低ない月げつは枯桐ことうに半なばす。人ひとは遠雁えんがんに
随へんうじょう辺城へんの暮くれれ、雨あめは疏簾そに映れんじて繡閣しゅうかく空むなし

右下から読めば、

「空閣くうかくの繡簾しゅうれんは疏そにして雨あめに映れんじ、暮城へんに辺雁へんがんは遠とく人ひとに随ずう。桐とうは枯かれて半月はんげつ
は涼夜りやうに低たれ、草くさは碧あざにして余花よ晩春ばんしゅんに落おつ

■書鶏鳴歌

先に「女王城じょおうじょう」についての考証（本章 142 ページ）を見たが、黄州の自然、
歴史、習俗に関していろいろな考察を加えている。これは民謡について
記したもの。

私は黄州に来て、二月、三月のころに、黄州の人々が群がり集まって歌うのを聞
いた。その詞はわからないし、その音律は正しい音階に合っていない。その声は
なめらかに高くなったり下がったりし、鶏が鳴くのにも似ている。

遠く周の時代に、祭祀しに携けいわった「鶏人けいじん」が廟堂びやうどうにおいて時を告げた声が、もし
やこうであったかと思わせるところがある。ただしひどく田舎臭い。

後漢時代の応劭ごうかんが書いた『漢官儀』には「宮中では鶏を飼っていない。汝南郡じょなんには長く鳴く鶏けいがいて、宮殿しゅじやくの朱雀門の外を守る兵士は、その鶏の鳴く声を伝える」とあり、「これはいまの『鶏鳴歌』のもとである」と言っている。晋の時代の『晋太康地道記』には「後漢のときに固始こし県など四県では、宮中の護衛兵がこの曲を習って天子の御前で歌った。いまの『鶏鳴歌』のもとである」とある。唐の時代の顔師古がんしこは事の本末を考慮することなく、みだりにこの説を否定した。

いま私が黄州で聞くのは『鶏鳴歌』のなごりなのではなからうか。土地の人はこれを「山歌さんか」といっている。

(古い文化が、都から離れた辺縁の地に残るという現象がある。周の時代の祭官や漢の時代の衛兵が鶏の声を真似た名残が、黄州に今も伝わっているのかも知れないと蘇軾は考えたのである)

■水竜吟

章しょうほう◆(字は質夫あぎな しつふ) (◆は次の下に呆という字) (第5章 235 ページで登場) から送られた楊やなぎの花を詠んだ詞に次韻したもの。

(作品の優劣は読む人の判断に任せるべきであるが、これは蘇軾の詞の中でも特に優れた作品であることは記しておきたい。次韻の達人である蘇軾は、むしろ制約があつてこそ計り知れない力を発揮するようだ)

似花還似非花、(いったいそなたはなにもの、花のようですけど、でも花ではないみたい)

也無人惜從教墜。(だから、落ちたら落ちたで、惜しむ人はいないのでしょ)

拋街傍路、(すみかをすてて、道ばたをころげゆくのは)

思量卻是、(どいうこと?)

無情有思。(そなたには情がないからなの、それていて、思わせぶり)

縈損柔腸、(わたしのはらわたをきりきりとねじり)

困酣嬌眼、(わたしの目を疲れさせ)

欲開還閉。(開こうとしても、きっと閉じさせてしまうのです)

夢隨風万里、(そのままわたしは夢に誘われ、そなたとともに風に乗って)

尋郎去處、又還被、(万里の彼方を尋ねようします、てもでも目覚めなさいと)

鶯呼起。(ういすが呼ぶのです)

不恨此花飛盡、(花であって花ではないのですから、そなたが飛び尽きてしまっても恨みはし
ません)

恨西園、落紅難綴。(恨むのはわたしの紅(れない)が落ちてしまって、もう枝にはもどれないこと)

曉來雨過、(朝がきて、雨が通りすぎたあと)

遺蹤何在、(そなたのなごりはどこかで見れば)

一池萍碎。(池一面の浮き草がそれなのでしょう)

春色三分、(いまや春の色は三つに分かれ)

二分塵土、(二つは塵となって消え)

一分流水。(一つは水とともに流れてしまいました)

細看来、(もう一度こまやかに見るなら)

不是楊花、(そなたと思った浮き草は、もとよりそなたではありません)

点点是離人淚。(わたしの紅のなごり、ひとしずくずつの涙だったのです)

(楊の花は一見すると花らしくない。だから「花に似てまた花にあらざるに似る」と詠み出し、その花にこそ無限の情趣があると連綿と歌いあげる。蘇軾の詩は往々にして理屈が勝る印象を与えるのだが、この詞を見れば、天性の詩人であると知れるだろう。詞の後半にある「紅」を自分自身のこととして訳しているが、あくまでも一つの解釈である)

■少年遊

黄州知事の徐大受^{じょだいじゅ}が主催する端午の節句の宴で詠んだ詞。座を盛り上げるための作。

銀塘朱欄麴塵波。(朱い欄干から臨む池^{こけ}には麴の色のよな波)

円緑捲新荷。(蓮の緑の葉は新たに円^{こけ}になったばかりです)

蘭條薦浴、(蘭の茎が誘う沐浴)

菖花釀酒、(菖蒲の花が旨くさせる酒)

天氣尚清和。(天気もまことに清(和やか)です)

好將沈醉酬佳節、(さあ、この佳節に酔いつぶれましょう)

十分酒、(酒はたっぷり)

一分歌。(歌はちょっぴり)

獄草煙深、(獄は草に深く埋もれ)

訟庭人情、(訴訟をする人もいませんから)

無吝宴遊過。(遠慮せずにこの宴遊を徹底しましょう)

(1) 5月5日には、蘭(いわゆるランではなくキク科の香りのよい草)を入れて沐浴したり、菖蒲の花を漬けた酒を飲んだりする古くからの習わしがあった(2)「獄は深い草に埋もれ」とあるのは、黄州はよく治まって獄に入れなければならない者がいないということで、徐知事を讃えたのである)

■武昌酌菩薩泉送王子立

弟の娘の婿である王適おうてき(字は子立あざな しりゅう)が黄州にきた。王適は、蘇軾こが湖州で逮捕されたとき(第5章389ページ)、その家族を蘇轍なんけいおうてん ふのいる南京応天府に送り届け、その後はずっと蘇轍のもとにいたらしく、蘇轍の左遷先いんの筠州にも付いて行った。そして、この年の秋に行われる科挙の一次試験を徐州じょで受けるために筠州を発ち、途中で黄州に寄ったのである。この詩は武昌しょうの西山にある菩薩泉せいざんで水を酌ぼんで王適に別れを告げたもの。菩薩泉については本章110ページなどで見ている。

君は行く。

私には酒もなく錢もない。

君に勧めるのは菩薩泉で酌んだ一杯の水。

君は頭こぶを垂れ、私を見るができない。

そう悲しむでない——

別れてどこに行こうとも、

四方の全てはこの水に映る天の内にあるのだから。

■雑書琴事十首

6月、陳慥ちんぞう ほうさんし（方山子）（本章 32 ページ）が再び黄州に来た。蘇軾は琴に関する 22 篇の短文「雑書琴事十首」、および「雑書琴曲十二首」を書いて陳慥に贈った。まず「雑書琴事」から 3 篇を訳す。序文が付いている。

元豊四年六月二十三日、陳慥きていが岐亭から訪ね来て、精巧な筆、佳たえい紙、妙な墨を携え、私しよに書を求めた。たまたま客人の中に琴を善くする者がいて、私が所蔵する琴を求めて弾じた。それで全て琴に関する十の事柄を書いた。

（「琴棋書画」は文人の嗜むべきものとされた。囲碁について蘇軾が語ることはあまりないようだが、書や画については頻繁に語り、琴についても深い知識があった。訳者は「琴棋書画」の全てに無知で、ここの訳文もまたはなはだ心もとない。蘇軾が琴にも通じていたということを明らかにするために掲げる）

家蔵雷琴

我が家に琴がある。雷文らいぶんが造ったので雷琴らいきんという。琴の全ての面に蛇の皮が張られている。上池じょうち(琴の部位の名称。以下の下池、嶽山も同じ)にある銘に「開元十年かいげんに雅州靈関村で造る」とあり、下池の銘に「雷家、八日合ようかごうに記す」とある。「八日合」とは何の意味かわからない。嶽山には指を入れられず、そのために弦を収めることができない。これがこの琴の最大の特徴で、雷文の琴だけがそのようになっている。その理由がわからないかと家蔵の雷琴で探してみた。琴の声は上池と下池の間から出る。琴の背面はやや隆たかくなっていて、薤にらの葉のような形をしている。琴の声はその隘せまいところから出ようとして徘徊して去らないので、余韻が残る。これが雷琴の最大の妙所であろうか。

(かつて蘇軾は舟の上で父の蘇洵そじゆんが弾く琴を詩に詠んでいたが(第1章10ページ)、そのときの琴がこの雷琴であったのだろうか。「八日合」は数字の判じ物であることを考証している宋代の随筆がある)

欧陽公論琴詩

唐の韓愈かんゆの詩に「穎師えいしの琴を聴く」があり、

昵昵兒女語、(ぺちやべちやと兒女がしゃべるかのようであり)

恩怨相爾汝。(愛と怨みがかもごもであるかのようでもある)

画然變軒昂、(にわかになくなったり、勢いついたり)

勇士赴敵場。(勇士が戦いの場に赴くかのようでもある)

とある。

かつて欧陽公(欧陽脩)は私に「琴を詠んだ詩で最も佳いのはどれだろうか」と尋ねられ、私はこの韓愈の詩を挙げた。

欧陽脩はこのように言った。

「この詩は確かに巧みである。しかし、これは琵琶を聴いての詩で琴の詩ではない」

後に私は「杭州の僧の惟賢の琴を聴く」という詩を作った。

大弦春温和且平、(琴の大弦は春のように温かて、和らかく平らである)

小弦廉折亮以清。(小弦は高く折れ、亮かして清らかである)

平生未識宮与角、(私はもとより宮の弦とか角の弦とかの区別さえつかなくて)

但聞牛鳴盎中雉登木。(牛が盎の中で鳴いたり、雉が木に登って鳴いたりしているようだ
と聞くだけである)

門前剥啄誰扣門、(惟賢師が弾く琴を聴いていると、門をほとほと叩く者がいた)

山僧未閑君勿嗔。(師は山にあっても閑がなく、琴は中断されてしまった)

歸家且覓千斛水、(それを残念に思う前に、私は家に帰って千斛の水を求め)

淨洗従前箏笛耳。(箏や笛の音に慣れてしまった耳を洗って出直さないとならない)

詩ができて欧陽公に寄せたいと思ったが、公はすでに亡くなっていた。いまに至っても残念でならない。

(惟賢の琴を聴いたのは蘇軾が杭州の副知事であったときのことで、欧陽脩の訃報が届く直前だったので)

文与可琴銘

文同ぶんどうの家に古い琴があり、私はそれに銘を記した。

攫つま之幽然ゆうぜん、(これを攫むなら幽然として)

如水赴谷。(水が谷に赴むかのような)

醒はじ之蕭然しょうぜん、(これを醒なら蕭然として)

如葉脱木。(葉が木から脱するかのよう)

按あん之噫然いぜん、(これを按じれば噫然として)

応指而長言者似君。(指にに応じて長く言うところは貴君に似ている)

置之枵然きょうぜん、(これを置けば枵然として)

遺形而不言者似僕。(形は遺っても、もうものを言わないのは僕に似ている)

文同は楚詞そじ(古風な詩)を好んで作ったので、「長く言うところは貴君に似ている」の句がある。

「醒えさ」と「釈はじ」は同義である。

昔むかし鄒忌そうきは琴を論じてこのように言った。

「これを攫つまむこと深く、これを醒はじこと愉たのし」。

この言葉は指の使い方の妙所を言っている。

(親友の文同あざな (字は与可よか) が所有する琴のためにかつて作った銘についての一文。「攫かく」

「醒かく」 「按かく」 「置かく」 は弦の操作法をいう。銘の最後にある、演奏を終えて琴を置いたさまは無口の自分のようだというのはユーモアである)

■雑書琴曲十二首 瑤池燕

ちんぞう陳慥ようちえんに与えた「雑書琴曲十二首」からは「瑤池燕」の曲について記した一文だけを訳す。

琴の曲に『瑤池燕』があり、その詞はあまりよろしくない。怨み咽ぶ声調である。ある人(実は蘇軾)はこの詞を改めて、女性の悩ましさの歌とした。

飛花成陣。(花が一斉に飛ぶと)

春心困。(春の心の苦しみは)

寸寸。(ずたずたに)

別腸多少愁悶。(別れてからの愁い悶えはどれほどでしょうかと)

無人問。(尋ねてくれる人もなく)

偷啼自搵。(忍び泣きを抑えて)

残妝粉。(化粧が崩れてしまうのです)

抱瑤琴、(琴を抱いて)

尋出新韻。(新しい曲を尋ね)

玉纖趁。(指が音を追います)

南風未解幽愠。(南からの風もこの思いをといてはくれません)

低雲鬢、^{こうべ}(頭を垂れ)

眉峰斂暈。(眉の間を曇らせ)

嬌和恨。(なまめかしも恨むのです)

この曲の妙なるところは、人に与えないでくれたまえ。

■祭任師中文

陳慥^{ちんぞう ほうさん し}(方山子) はふらりとやってきたのではなく、その訪問を待つて蘇軾は大切な祭祀を行った。

ここまでに何度か登場してきた郷里の大先輩である任佖^{にんきゆう あざな し ちゆう}(字は師中) が3月24日に蜀の遂州^{しよく つい}で亡くなり、その霊を遠く離れたこの地で陳慥らとともに祭った。その祭文^{さいぶん}をみておこう。

(任佖^{てい し さい}が程之才の告発によって嫌疑をかけられたことは本章 17 ページで見た。任佖は譴責処分^ろを受けて瀘州から遂州に左遷となり、その間の心労がたまったためか、遂州に到着後間もなく亡くなった)

眉州^びの陳慥と蘇軾、犍為の王齊愈と弟の王齊万、黄州の潘丙と古耕道は先の瀘州知事の任佖を祭り、その霊に申し上げる。

貴公はまことの知事として蜀の地の偉人^{し きゆう ろうせい}であった。『詩経』にいうところの「老成」であり、『易経』にいうところの「丈人^{えききやう じやうじん}」であった。私と別れてから十年、その徳は日

々に新たになり、いま一度お会いしたいと思っていたのだが、ついに元の身ではなくなってしまった。

陳慥と蘇軾と王齊愈と王齊万は貴公の友であるか親しい者であり、潘丙と古耕道は貴公が治めた州の民である。

貴公が郷里を離れた地で亡くなったことを哭し、その酸辛を痛ましく思う。禍福の来たる所以は誰も知らない。長生きしようとも若死にしようとも、貴公は己の道を歩んだ。天が為すのでも鬼神に左右されるのでもなかった。生きている間に誉れがあり、死んで後に哀れまれるのは昔から難しいとされる。貴公ばかりは立派な名を持って彼方の世に行くのだ。

(任佖がかつて黄州に赴任したことは第3章25ページで見ている。だから、潘丙と古耕道は任佖に縁のある者として祭祀に加わったのである)

■任師中挽詞

任佖にんきゆう（字は師中あざな しちゆう）の挽歌。任佖は兄の任孜にん し（字は遵聖あざな じゆんせい）とともに科挙に合格し、郷里の人々から兄は「大任だいにん」、弟は「小任しょうにん」と呼ばれた（第3章25ページ）。先に亡くなった「大任」の挽歌を第5章168ページで、また蘇軾が若い頃に見た「小任」の印象を歌った詩を第5章205ページで見ている。この詩はこれまでに任兄弟を歌った数々の詩の総まとめに当たる。

大任ほど剛烈な人は世にまたとなかった。

強いて挙げるならば、

後漢ごかんの時代にの「悪にくを疾しむこと風のごとし」といわれた朱震しゅしんが匹敵ひつてきしようか。

小任は温雅おんがにして剛毅こうぎ、老おいいてはさらに恵めぐみ深い徳とくに満みちた。

比べるならば、

前漢ぜんかんの時代にに聰明しやうめいかつ慈愛じあいと讃ほえられた小馮君しょうふうくんが似にているだろうか。

兄弟けいだいの才行さいこうが優すぐれていたことは説せつくまでもない。

敢あえて付け加くえるなら、

昔むかし、我が父ちちが二人ふたりを友ともとしたことを言いっておこうか。

父ちちの友ともは暁あけぼのの星ほしが消きえゆくように次第しだいにいなくなり、

哀あはしいことに、いつしか月つき(大任たいにん)に金星きんせい(小任せうにん)が対たいするだけとなった。

その大任たいにんが先まづに亡なくなって墓はかを覆おった土つちがまだ乾かわかないうちに、

小任せうにんが続つき、呼よんでももう声こゑが還かえってこなくなった。

一樽いちすんの酒さけを生死せいじの別わかれに寄よせようとする、

樽すんの中なかに涙なみだがこぼれ、酒さけの味あじが酸すっぱっぱくになってしまう。

貴賤きけん、賢愚けんぐ、いかなる人も命いのちが尽つきないということはない。

しかし、任君にんくんの家いへは賢子けんしが続ついたことで尽つきることはない。

人間世界にんげんせいの得失とくしつにはこれに拠よればよろしいというものはない。

ただ、賢子けんしを生なじさせる天公てんこう(造物者ぞうぶつ)だけに拠よることができるのであろう。

(任にん俛びんと黄州こうしゅうとのつながりは、弟あにの蘇轍しゅちゆうの「黄州こうしゅう師し中庵ちゆうあんの記き」に詳しく記きされてい

る。参考までに見ておこう。

蘇轍：「黄州師中庵記」

師中しちゆうの姓せいは任氏にん、諱いみなは伋きゆうである。先祖代々眉山びざんの人である。私の父の友人であることから、私はその人となりを知っている。

かつて齊安せいあん(黄州)の副知事を務め、去って後にも黄州の人々は任伋のことを思って忘れなかった。黄州の人々は任伋が立派な役人であることを知っていたのである。

任伋は普段から書物を読むのを好み、大義(本質)に通じると、細かな字句にはこだわらなかった。本性として任侠の人で、勇ましいことを喜び、役人としては融通をきかせつつたらしなくなることはなく、厳しいけれども暴虐になることはなかった。人々は恐れつつも任伋のもとで安んじていられ、また任伋を欺くことはできなかった。

始めに新息しんそく県の知事になったときに、その民衆から愛されていること知って、そこに土地を買って家を構えた。新息の人々は「我等こくんの『故君』(もとからの主君)である」と言った。互いに親しみ合って変わることはなかった。

黄州にきてからは、任伋じゆうえいはいつも定惠院に遊んだ。黄州を去ってからは、人々は任伋が遊んでいた亭あげまやを「任公亭にんこうてい」と呼ぶようになった。我が兄の蘇軾が罪を得て黄州に遷ってから、兄と任伋が親しいことを知って、任公亭の西しちゆうあんに「師中庵」を作った。土地の人がいうには、「任伋はきっと蘇軾を訪ねにここに来るはずだ。だからここに庵を建てるとだ」と。

その翌年の三月、任伋は遂州で亡くなった。黄州の人はこれを聞いて、定惠院に集まって哭するものが百人を超え、任公亭で飯僧はんそう(読経)し、師中庵で霊を祀った。任伋が黄州を去

ってすでに十余年が経っていた。

そもそも役人と民衆の関係は、役人が民衆から取るだけで民衆に与えるものがなく、罰を加えるだけで恩を恵まないのなら、役人が去った後に民衆はその人を忘れる。せめて怨むところがないのなら、まだしも善い役人であるのだろう。しかし、任仮だけは、十年以上後になっても民衆はそれを思い、皆が声を失って哭したのである。これは普通にあることではないのだ。

かん しゅう どうきやう
漢の時代に朱邑は若いときに桐郷の村長となり、その民に徳があった。朱邑は死に際して息子にこう言った。「必ずわしを桐郷に葬ってくれ。後の世に我が子孫が我が墓を守ってくれるのは、桐郷の民が厚く奉仕してくれるのにきっと及ばないだろう」。朱邑は桐郷に葬られ、その祠は後々絶えることがなかった。

任仮は生きている間に新息に家を構えた。亡くなってから黄州の人は亭と庵で任仮を待っている。もしも死んで後にも知ることがあるのなら、任仮はきっと新息県と黄州の間を往き来しているのではないだろうか。私はそれを知りたいができない。

元豊四年十二月、眉山の蘇轍記す。

■書唐氏六家書後

とうとう おぎな りんふ ぜい とう
唐垆（字は林夫）からの依頼で、隋から唐の時代の6人の書家についての評論を書いた。

おうあんせき
（唐垆は政治的には王安石に近く、朝廷の重要な役を勤めたこともあったが、このころは職から退いていたようだ。筆法に詳しく、蘇軾の書を愛し、長く交流が続いた。

書を言葉よって的確に論評するのは、恐らくかなり困難であろう。蘇軾は漢字を駆使して視覚的イメージを伝えようとしているかのようだ。それでこの訳文では幾つかの漢語は訳さず生のままにしておく)

智永ち えいぜんじ禪師の書は、骨気こつ きは深穩しんおんで、体たいは集妙しゅうみょうを兼ね集め、精密な技能が極ってかえてそたん疎淡どたんとなっている。陶淵明とうえんめいの詩を觀るかのようだ。初めて見ると散漫で締めみまりがないようだが、反覆して何度も見ると、その奇趣きしゆが識しれてくる。今に伝ほうわる法貼ちようの中に「不具釈智永白」と文末にあるものがあって、「(「具せず」をよく用いていた)王羲之おうぎしの作品群の中に誤って收められたりもしているが、智永禪師の書ではない。また「謹此代申きんしだいしん」と文末にあるのは唐末五代の俗語で、その書は下手くそである(やはり智永禪師の書ではない)。

歐陽詢おうようじゆんの書は群を抜いて引き締まって美しく、小字しょうじの楷書かいしよに最も巧みである。高麗国こうらいこくからの使者がその書を買かうい求こうめたとき、唐の高祖皇帝は嘆息してこう言った。「高麗国かいごこくの人は歐陽詢の書を見て、その人はさぞ魁梧奇偉かいごきい(堂々の偉丈夫)であろうと思っただろうな。これは書を知る者の言葉ではない。書といものはその人なりに似るものだ。歐陽詢の容貌はさえないけれど、頭の切れは圧倒的であった。いまその書を觀ると、強く陰く削いだような厳しさがあって、まさしくその風貌に合致していたのだ。

褚遂良ちゆすいりやうの書は清遠しやうえんにして蕭散せうさん、いづらか隸書体れいしよたいが雑ざっている。昔の書を論じる人は、兼ねて平素の暮らしも論じた。もしもそれなりの人でなければ、書が巧みで

あっても貴ぶことはなかった。褚遂良はもとより忠臣であったが、劉洎りゅうきを讒言で殺したという事件があり、人の心を曇らせる。私はかつてその事件の実情を検討したが、きっと劉洎が晩年には片意地で怒りっぽくなり、天子の廃立について実際に口にしたのであって、褚遂良が讒言したわけではないのだ。もしそうでないのなら、馬周ばしゅうが劉洎に有利な証言をしていながら、太宗皇帝が劉洎だけを罰して馬周の罪を問わなかったことを辻褃が合わなくなる。つまり、褚遂良が讒言したというのがそもそも後の人がでっちあげたことであって、歴史家がそれを見破れなかったのである。

張旭ちやうきょくの草書そうしょは頽然たいぜんと酔って天に放たれたよう、点や画はどうにかそのところにある程度だが、意のおもむくところを十分に示している。号して神逸と称せられる。今の世で草書を善くするとされる者は楷書ぎやうしょや行書が上手に書けなかったするのだが、これは大きな間違いである。楷書が行書を生み、行書が草書を生むのであって、楷書は人でいえば立つ姿、行書は行く姿、草書は走る姿である。立つことも行くこともできないのに走れる者はいない。いま長安ちやうあんに張旭が楷書で書いた『郎官石ろうかんせき柱記ちゅうき』があるが、その字は簡素で俗っぽさを超え、南朝時代の人を書いたかのようである。

顔真卿がんしんけいの書は雄にして秀で独り突出している。古法を一変させたことでは詩における杜甫と同じだ。その力は天を縦横に翔け、漢、魏、晋、宋(南朝)以来の風流を超えている。後の作者はほとんど迫ることすらできない。

柳公権りゅうこうけんの書はもとは顔真卿から出たもので、自身の工夫で新意を出した。柳公

権の書を見るなら、「一字百金」という言葉も虚しいものではない。皇帝に筆法を問われて「心が正しければ筆もまた正しい」と答えたのは、皇帝を遠まわしに諫めただけでなく、道理としてまさにその通りなのである。世間のつまらない人間どもは、字がたとえうまく書けても、その心持ちはいつも睚眦として側媚の態があるものだ。そのように思うのは、私の思い込みであるのかもしれないが、その書を見て心持が悪くなるのでは、やはりそれを書いた人のありようが知れるというものだ。

私は黄州謫居となり、唐垌が湖口から手紙をくれた。そこに「吾が家にこの六人の書があります。私のために六人を短く評して、書の後ろに書いてください」とあった。唐垌の書は私よりずっと優れているのに、かえって私に書を求めるのはどういふことなのか、私には全く理解ができない。

元豊四年五月十一日、眉山の蘇軾、書く。

■書淵明酬劉柴桑詩

蘇軾は東の坡を耕す日々を送るなか、陶淵明により深く共感するようになった。夏と秋の境に陶淵明の詩の感想を記した。

夏から秋にかけて、毒熱が七、八十日もゆるまなかった。炮り灼く理が極まって、もはや清涼の時はないと思わせるくらいであった。今日、たちまち涼しい風が吹き、細かな雨が降り、ついには重ね着をするようになってみると、今年も指折り数えれば終わるばかりになってきたのを思うのである。

陶淵明の詩に云う。

今我不為樂、(このときに楽しまなければ)

知有来歳不。(来年もあるかどうかわからない)

この言はまことにはと思わせるものがある。

(ここに引かれているのは、陶淵明の「劉柴桑に酬^{りゆうさいそう むく}ゆ」の中にあり、その詩の全体は次の通り。

窮居寡人用、(田舎暮らしには人としての用事が少なく)

時忘四運周。(時には四季のめぐりも忘れてしまう)

閭庭多落葉、(庭に落ち葉が多くなって)

慨然已知秋。(ああもう秋になったのだと知る)

新葵郁北牖、(北の窓辺で新たに植えた葵^{あおい}が咲き)

嘉穗養南疇。(南の田圃で稲穂が美しく稔る)

今我不為樂、(このときに楽しまなければ)

知有来歳不。(来年もあるかどうかわからない)

命室携童弱、(妻に命じて子供たちを連れて)

良日登遠遊。(良い日に遠く登って遊ぼうではないか)

劉柴桑は廬山^{ろざん}に隠棲した人で、官職から離れた者として陶淵明とともに知られていた)

■跋陶潜詩

もう一つ陶淵明^{とうえんめい}の詩に感想を添え書きしたものを見ておこう。まず陶淵

明の二つの詩を写し、それに短い文章を付した。

種豆南山下、なんざん（豆を南山のふもとに植えた）

草盛豆苗稀。（草ばかりが盛んに伸びて、豆の苗はわずかしかない）

晨興理荒穢、（朝早く起きて荒れた土地の世話をし）

帶月荷鋤歸。（月明かりのもと、鋤を担いで帰る）

道狹草木長、（道を狭くして草や木が生え）

夕露沾我衣。（夕べの露が我が衣を濡らす）

衣沾不足惜、（衣が濡れるのは構わないけれど）

但使願無違。（ただ我が願いは裏切られないほしい）

人生歸有道、（人の生も一つの法則のもとにある）

衣食固其端。（衣食足ることがまずは第一である）

孰是都不嘗、（そのことを嘗まずして）

而以求自安。（安らぎの境地を得た者はいない）

開春理常業、（春の初めからいつもの仕事をきちんとして）

歲功聊可觀。（一年の終わりにその成果をいささか見ることができる）

晨出肆微勤、（朝早くに出て我が力を尽し）

日入負耒還。（日が落ちてから鋤を荷って帰る）

山中饒霜露、（山の中は霜や露の気が多く）

風氣亦先寒。(風もまたよそよりも先に寒くなる)

田家豈不苦、(田家の暮らしは苦しいものだが)

弗獲辭此難。(この難しさから逃れることはできない)

四体誠乃疲、(身体はまことに疲れ切ってしまうが)

庶無異患干。(願うのは戦災や天災がないことだ)

盥濯息簷下、(手と足を洗って軒下に憩い)

斗酒散襟顏。(酒を手にして胸と顔をほころばせる)

遙遙沮溺心、(遙か昔の隠者の心が)

千載乃相關。(千年を経て我が心と通い合う)

但願常如此、(どうかいつまでもこうであってほしいものだ)

躬耕非所歎。(自ら耕すことは少しも嘆くことではないのだ)

陶淵明は、晩年は節を守って躬耕(自ら耕す)した。いつも詩を作って自分の心をと
きほくした。思うに、その心の内は平らなものではなかった。私は黄州に流寓して
二年、たまたま困難な歳に当たり、往々にして食べる物は乏しい。耕すべき田を
自分では持っていない。陶淵明のようになりたいと思ってもなれない。この二篇の
詩は最も善く、親しく録した。

元豊四年八月十六日。

(ここに蘇軾が写した2篇の詩のうち最初のは「園田の居に帰る」という作品の第三
首。陶淵明が官職を棄てて郷里に帰った翌年の作とされる。このとき陶淵明は42歳。

次の詩は「庚戌かのえいぬの歳の九月中、西の田で早い稲を穫った」という作品。その歳、陶淵明は46歳で、まさに黄州2年目の蘇軾と同じ年齢だった。ここのキーワードの一つは「躬耕きゆうこう」である。俸給を得て生きるのではなく、自身で耕して食物を得て生きることをいう。陶淵明の詩の終わりの方にある「遙遙ようようたり沮溺そできの心」とあるのは、『論語』に登場する長沮ちようそと桀溺けつていという古代の隠者のことを詠んでいる（本章466ページで詳しく触れる）。2人は隠者の理想とされ、陶淵明から千年ほど昔の人である。そして蘇軾からすれば、「遙遙ようようたり陶淵明の心」ということになるだろう）

■ 楽全先生生日以鉄拄杖為寿二首

恩人の張方平ちようほうへい（字は安道あざな あんどう）の誕生日（9月23日）に間に合うように鉄の杖を贈った。張方平ちようほうへいが楽全堂らくぜんどうを作つて「楽全堂居士らくぜんどう こじ」と称したことは第5章63ページで見ている。2首の詩から1首を訳す。

（蘇軾は前の年に一本の鉄拄杖てつしゆじよう（鉄製の杖）を得ていた。その鉄拄杖を詠んだ詩（ここでは訳さなかった）があり、その序文に次のようにある。「柳真齡りゆうしんれい、字は安期あざな あんきは閩びんの人である。家に鉄拄杖が伝わり宝としていた。榔栗木ろうりつぼく（ヤシの類）のような形状で、突起や節があり、中は空洞こうで簧こ（笛のリードのようなもの）があつて歩み行くといささか共鳴する。柳真齡りゆうしんれいがいうには、これは折中せちゆうで得たもので、伝承によると、唐の終わりに王審知おうしんちが錢鏐せんりゆう（呉越国を興した人物）に贈つたもので、錢鏐はある僧にこれを賜つた。たまたま柳家が得て私に贈ってくれた。その鉄拄杖を張方平に贈つて長寿を祈つたのである）

其の一

楽全先生はまさに地上の仙人というべきお方、
この世に住まってかれこれ五百年になる。
いつも銅人どうじんに向かって昔話をし、
この鉄拄杖と清らかさと堅さを競っている。
先生の胸には氷雪が入って透徹した思想が生まれ、
先生が昼寝をするときには四方の壁を竜が守る。
遥かに想像するのは、
天の方丈に仙人たちが集まり、
先生が語り出すや、一同の者が驚倒するありさま。

(張方平を500年よりも長く生きる仙人に譬えた戯れの詩であるが、張方平に対して、普通の言葉ではとても言い表せない思いがあるので、このような表現になるのだろう)

■与潘三失解後飲酒

潘丙はんぺい (本章72ページなど) の弟の潘原はんげん (潘三はんさん) は法に触れることをしたようで、しばらくの間拘束されて官の取り調べを受けていた。この頃になってようやく解放されたので、蘇軾はこの詩を贈った。

(潘原の取り調べ関し、蘇軾は前年の6月に鄂州知事の朱寿昌しゅじゅしょう に送った手紙の中で次のように触れていた。「ささいなことで貴公を煩わせなければなりません。聞くところ

ろによれば、潘原は売仆のことで禁に触れたとか。私はその兄の潘丙と親しくしておりますが、最も行い正しい者で、弟の潘原もよい人間で、学業を修めています。貴公の全面的な庇護を得て、この夏のうちに獄から出られますことを望んでおります」。潘原はそれから1年余り後になって赦されたのだった)

我が家に伝わるおんぼろほうきの箒、
それには千金の価値があると思ひ込んでいたところで、
誰も買ってくれはしない。

ひたい額の半分ほども長く引いた眉、
それがいまの流行だからといって、
本当に美しいわけではない。
私自身を顧みるなら、
どの箒がよいのか、どの眉が美しいのか、
鈍い頭で何もわかっていない。

それでも、貴君がちっほけなせんけん嬋娟(美点)を争うのを残念に思っている。
青雲の上に昇る志を果たすことができるのかどうか、
将来のことはいまはわからない。
黄色い菊は去年と同じように咲き、
長江を満たす風と月の光には値段が付いていない。
さあ今日は酔って、

人生の得失など忘れるがよい。

(この詩を読んで、潘原には思い当たるところがあるのだろう。われわれには詳しい意味を汲み取ることはできないが、要するに、目の前のことにひかれて法に触れるようなことをしたりせずに、大きな目標を持つてというのであろう)

■飲酒説

上の詩では、堅苦しい訓戒に終始するのは蘇軾にふさわしくなく、とりあえずは酒を飲めと勧めていた。ついでながら、酒に関連する小文をここで見ておこう。

飲酒を嗜む人は、一日酒がないと調子が悪くなり、酒を断つと居ても立ってもいられなくなる。そして、「酒は断ってはならないのだ。酒で死ぬなら本望だ」という。

酒を断って病むのは、それはすでに病があるからだ。常に飲んでいるから病にならないという者は、一つでも病があると死んでしまう。

私は平生から「おっやく熱薬」を服し、飲酒は多くないとはいえ、盃を手にしない日はない。ところが、去年から「熱薬」を服さず、今年になってからは飲酒も至って少ない。すると、日に日に病んでしまい、大きな害にはなっていないものの、飲酒をし「熱薬」を服して無病であったころとはまるで違っている。

いま眼に痛みがある。よく考えてみれば、それはこのような理由によるのではないだろうか。

(要するに、酒は飲んだ方がよいと言いたいのだろう。「熱薬」の語は意味がよくわからないのでそのままにしておく。熱くして飲む薬なのか、熱を上げるか下げるかする薬なのか。とにかくいつも飲んでる薬があったのだろう。獄に入って以降はそれを飲めないでいるのだろう。なお、後に見るように(本章352ページ)、元豊^{げんぽう}6年1月に蘇軾が眼を患っていたとわかる記録があるので、この文章が書かれたのはその頃であると考証している本もある)

■聞捷

対岸の王齊愈^{おうせいゆ}(本章54ページ)を訪ねたときの詩。序文がある。

元豊^{げんぽう}四年十月二十二日、長江^{ちやうかう}の南で王齊愈^{おうせいゆ}に会ったところ、ちょうど陳慥^{ちんそう}から
の手紙が届いていて、「この月の四日、種諤^{ちゆうがく}が兵士を率いて敵地に深く入り、西
夏^かの兵士六万余人を破り殺し、馬五千頭を獲た」と報せてきていた。一同は喜び、
勝利を祝う楽^{がく}を唱え、おのおの大きな觥^{さかづき}を飲み干した。

聞くところでは、

官軍^{とくぐん}は敵の塞を取ったと。

將軍の軍団の速さは鬼神のようである。

よっていますでにわかるのは、

かの地^{むていが}の無定河の柳も、我が都の柳とともに、

来年は同じ一つの春の内において、

白い絮わたを飛ばすであらうこと。

(蘇軾は、西方の西夏国せいいかとの戦争を始めることに強く反対していた(第5章170ページ)。皇帝はこの年の6月、西夏国との開戦を決定し、ただちに种諤ちゆうがくらが攻撃を始めた。宋軍は連戦連勝で、ここにあるように10月4日に大勝利をおさめたとの報せが都に届き、皇帝は大いに喜んだ。陳造は独自の情報網を持っていたのだろう、いち早くそのことを王齊愈に知らせた。そもそも戦争には反対であった蘇軾も、捷報を聞けば嬉しいもので、座興でこの詩(蘇軾の作とは思えないほどひどく拙いと評じられる)を作った。しかし、緒戦の勝利は実は西夏側の計略で、宋軍は敵地に深く誘い込まれて補給が困難になり、反撃に遇ってたちまち瓦解してしまう)

■杭州故人信至齐安

杭州こうの知人たちから手紙や差し入れが届いての詩。

昨夜は風月が清く、夢で西湖せいこのほりに行った。

朝になると、戸を叩く者があり、

杭州からの好い言葉が聞けただけでなく、

呉この地の食べ物ももたらされた。

円く軽やかな白曬荔はくしらい(果実)、

濃くてまろやかな紅螺醬こうらしょう(調味料)、

さらには西庵さいあんちや茶もあって、
 それらで江瘴かうしやう(川べりの地の風土による病)を洗えと勧めてください。
 昔の友人は情義が重く、
 一年雇用の二人の召使を従えて、
 千里の彼方から西に向かって必ずお訪ねするであろうと言ってくれる。
 そして、詩文の集まりを結ぼうとの提案であるのだが、
 詩帳を編んだりしたならまた罪を蒙りかねないのがわかっておられない。
 私はまた夢に魂を飛ばし、
 次の夜は杭州こうちやうきやうの江漲橋かうしやうきやうに到るのである。

■ 侄安節遠来夜坐三首

11月に郷里から蘇安節そあんせつがきた。蘇安節は、伯父そかんの蘇渙そふきの次男そふきの蘇不疑そふぎの子である。

其の一

蜀しよくを離れて南の地に来てから、
 思わぬうちに、流れた月日が山のように積み重なってしまった。
 今夜は君と坐し、
 冷くなった灰をかきまぜながら雨音を聴いている。
 私はもはや眼に文章をさらして読むようなことをしていない。

人に伴う燈火にしみじみ情があると感じるだけだ。

私は自身の出鱈目のために郷里に帰ることができない。

君はここまでの人生で何もかもがうまくいかないと言う。

それでも、燈火が短くなるまで君と話し込んで、

白髪になったことをただただ嘆いてばかりでなくすんでいる。

其の二

私も君も心が衰え、顔貌も改まり、ひどく痩せてしまった。

しかし、会って語り合えば声は互いに昔と変わらない。

私は秋の夜長に遙か故郷のことを思っていたのだが、

一年の終わりのときに、君が遠く来てくれたその情の深さを知る。

私は人を畏れて癡鈍おろかものだのように黙んまりを決めてきた。

君に旧知の人々のことを次々に尋ねて、

その半ばが死生を異にしたことに驚かされる。

人生の夢は断たれ、酒は醒め、雨も絶たれた。

笑って看ようではないか、

飢えた鼠が燭台の上に登って行くのを。

其の三

落第した君に、酒はいかなる味なのか。

私は詩を吟じて、ただ飢えが耐え難いと嘆く声しか出ない。

思うに、穀類を絶って仙人になろうとするのはよい方策でないだろうし、

郷里に帰って田を耕せばよいと、そればかりを説くのは、

人の情として物足りないものがある。

それでも、昔、剣を売って牛を買うことを勧めた賢者がいたように、

牛にまたがるなら心はのどかでいられるし、

川洲に勝手に成長する水草を採っても生きられないことはない。

君の弓はひとたびは緩んでしまったようにみえても、

何もそっくり作り直さなければならないというものではないのだ。

(蘇安節が遠く訪ねてきた事情はこれらの詩から推測するしかない。3首とも重い雰囲気である。蘇安節は科挙の地方試験に失敗し、恐らく精神的に追い詰められ、逃げるようにして蘇軾のもとにきたのだろう。郷里の一族は官職にある蘇軾兄弟をこれまで頼りとしてきたのだが、蘇軾が罪を得て以来何かと不自由になり、蘇安節は一族の期待を一身に集めるようにして科挙に挑んだのであろう。なお、蘇軾は一族の墓の管理など郷里のことは蘇不欺^{そふぎ}と蘇不疑の兄弟に託していたのだが、蘇不欺は1年ほど前に亡くなり(本章120ページ)、蘇安節は次代のホープと目されていたのだろう)

■冬至日贈安節

蘇安節^{そあんせつ}が来たのは冬至の直前で、この詩を冬至の日に贈った。

私の人生で幾度の冬至があったろうか。

少年の頃のことがいまでも昨日のように思い出される——

長寿を祝うために、膝をむき出しにして、当時の年長者に拝礼した。

私はこの十年間を官舎で過ごし、

白髪は衰えと疾やまいを催すばかりだ。

かつて私の前には不欺、不疑、不危ふきの三人がいて、

私の後には轍わだちが一人だけかいた。

いま、近い者ちやうこう(弟)も長江を隔てているし、

遠い者(従兄たち)は天の向こう側の壁のあたりにいる。

今朝は何の幸いか、

万里の向こうからきた君を見ることになった。

憶い出すのに、君はまだ子供の髪をしていて、

泣くといえば、梨や栗をほしがってのことだった。

今来た君を見れば、

天下のことを慨嘆し、志気は鉄石のように堅い。

蘇の家の子孫がみな君のようであるなら、

我が一族はいつまでも続いてゆくであろう。

この詩ができてみると、

超然として涙など滴り落ちるようなことはないのだ。

(「前には不欺、不疑、不危の三人、後には轍が一人だけ」とあるのは、蘇軾の従兄弟

が5人だけであることを示す。父の蘇洵には兄の蘇煥が1人いただけで、蘇煥には不欺、不疑、不危の3人の息子が、蘇洵には軾と轍の2人の息子がいた。当時としては決して多い方ではなかった)

■記与安節飲

同じ日に蘇安節と飲んだことを記したごく短い文もある。

げんほうしんゆう
元豊辛酉、冬至の日。

私は黄州にいて、蘇安節は千里の道も遠くはないとして訪ねてきた。酒を飲んで
はなはだ楽しく、蘇安節は黄鐘こうしゅうで『梁州』りょうしゅうの曲を吹いた。少年がそれに合わせて
舞った。酔いから醒めてこの一時の楽しさしるを識す。

(黄鐘は管楽器である)

■伯父送先人下第帰蜀詩云人稀野店休安枕路入靈関穩跨驢安節将去為誦

此句因以為韻作小詩十四首送之

蘇安節が短い滞在の後に帰ることになり、この一連の送別の詩を贈った。
詩題は「我が父が科擧に落第して故郷に帰ったとき、伯父の蘇煥が詩を
送ってくれた。その中に『人稀野店休安枕、路入靈関穩跨驢ひとまれにし
ひとま (人稀れにし
やてん まくら やす な みち れいかん はい おだ ろ また
て野店で枕に安んずる休し、路は靈関に入って穩やかに驢に跨がる)』という句が
あった。蘇安節が行くにあたって、この句を誦し、それぞれの文字を韻

にして小詩しょうし十四首を作って送った」。この詩は六言四句という珍しい形式で作られていて、それで「小詩」といったのだろう。

(かつて兄が弟を慰めた詩を引いて、今度は叔父が甥を慰めたのである。一族の情誼の厚さを感じさせる)

其の一

ここ黄州は、
昔から放逐された官員が住むことになっている。
ただでさえ索漠としているのに、
風雪のなか、
独り帰る人を見送る。

おう しょう (王禹偁がこの地に左遷されたことは本章 75 ページで見ている。にんきゆう しょうにん 任伋 (小任) がこの地に来たのは (本章 178 ページ)、当時の権威者に好まれなかったからだ)

其の二

我が瘦せた骨は、寒さのために断たれるばかり、
我が衰えた髯ひげは、摘まんでいよいよ稀れである。
これが死別となるとも、
それに甘んじようとまでは思わない。
しかし、生きて故郷に帰れまいとの恐れはある。

其の三

日が上るとき、

ちやうこう長江の上に満きちるしやうこう氣にまず曙光がくる。

雪が晴れるとき、

おか東の坡の野に目が眩むほどの光がくる。

君が家に帰ったとき、

きっと思い出してほしい——

ここで私が鋤を手にしていることを。

其の四

君の破れたコート裘に、月の明るさが注ぎ、

君の剣は、寒気の厳しさのために鈍ってしてしまうだろう。

私は家に戻って戸を閉めて座し、

君がこれから経て行く道筋の宿を黙々と数える。

其の五

故郷の人々に寄せるべき言葉、

そのようなものはいまはない。

いつかきっと自分の口から言おう。

すっかり白髪になった者どしが顔を見合わせて、
「全てもう終わったのだ」と。

其の六

故郷の人々かもしも私のことを念^{おも}ってくれるのなら、
君はこのように言ってくれたまえ。
「とにかく痩せていました。

身には患いがあり、
心を安らかにすることもできないようでした」

其の七

吾が兄(従兄の蘇不疑^{そふぎ})は酒を喜ぶ人だ。
君もまたよく飲む人である。
帰ってから一緒に一杯やりながら、
兄にこう言ってほしい、
「万事、邯鄲^{かんたん}の枕である」

其の八

あの東の道……
寒食の日に君とたどったあの川べりの路……

その先にある魏城君^{きじょうくん}(蘇軾の妻)の墓、

哀しいことに、

真新しかったあの墓もいまでは草に埋もれていることだろう。

(蘇軾の最初の妻の王弗^{おうふつ}を夢に見て詞に詠んで(第5章34ページ)から7年になる)

其の九

いよいよ別れに臨んでまたしおしおとなるのは、

互いに道に窮していることを泣くのではない。

あの東の道を思うからだ。

君がまたそこに行ったならば、

牛や羊が我がもの顔で出入りすることがないようにしてくれたまえ。

其の十

夢に私は君の後を追って行く……

東の道では松が青々としているであろうか。

そして我が父が住まいとしていた門に入るなら、

先祖の霊に対して永く恥入らなければならないだろう。

其の十一

どれほど旨いものでも、

人からの施しものなら羨むに足りない。

自ら得た米を背負い、

百里の道を親のもとへと運ぶのは、

少しも苦勞ではない。

身の栄華を飾る車馬がないのを取じて、

私は故郷への道を取らないでいるのではない。

其の十二

私は実態よりも評判ばかりが高くなって、

そのために騒動を起こして身を損なった。

君がまだ世間に知られていないことこそ幸いてはないか。

穏やかな気持ちで故郷に帰ることができるのだ。

それ以上にすばらしいことがあるだろうか。

其の十三

竹の笥と練り絹の着物、

佳き時を得て婚を終えた後に、

私が無事にいるだろうかと気になったりしたならば、

また旅の鞍にまたがって来てくれたまえ。

(この詩から推測するに、蘇安節には縁談が進んでいたのだらう)

其の十四

万里の向こうから、
 君がまたやって来る日にも、
 私はなおここで同じわび住まいだ。
 君は笑わずにはいられないだろう、
いしうす
 石磨を回す驢馬と同じく、
 私がいままでぐるぐるしているのを。

■記游垂虹亭

かつて杭州で過ごした日々は蘇軾にとって格別であったのだろう。折に触れて思い出されるのだった。

私は昔、杭州から密州に移ったときに、楊絵と同じ舟に乗って杭州を発った。そして、陳舜俞と張先とともに湖州の李常を訪ねた。さらに、劉述とともに松江に至ると、夜半に月が出て、垂虹亭の上で酒を置いた。このとき張先は八十五歳で、歌詞で天下にその名が聞こえ、「定風波令」の詞を作った。その中に、

見説賢人聚吳分、(いま賢人が呉の分野に集まっているとか)

試問、(ちょっと聞いてみましょう)

也応傍有老人星。(星々のかたわらにあるのはきっと老人星でしょうね)

坐客は非常に喜び、酔い潰れる者もいた。このときの楽しさはいま忘れることができない。

あれからわずかに七年であるのに、張先も劉述も陳舜俞もこの世の人ではなくなってしまった。そして松江の橋のたもとにあった亭^{あづまや}も、今年の七月九日に海からの風で水位が上がって平地上に一丈余りの水が溢れたために、跡形もなく消えてしまったという。

昔を思えばまさに一つの夢である。

元豊四年十二月十二日、黄州臨臯亭^{りんこうてい}で夜に坐して書く。

(蘇軾が杭州を離れるに当たって、知事の楊繪が送別の宴を開いてくれたことは第4章 193 ページで、張先らとともに湖州知事の李常のもとを訪ねたのは第4章 194 ページで見ている(李常とはこのころから親密になった)。松江の垂虹亭で酒宴を開いたことは第4章では見なかったが、後に蘇軾が湖州に赴任する際に、松江にかかる垂虹橋^{すいこうきょう}を渡ったことを第5章 356 ページで見ている。垂虹亭は垂虹橋の近くにあったのだろう。張先の詞にある「呉分^{ごぶん}」とは星座のことで、実際にいま呉の地にいることの意を兼ねている。老人星は西洋でいうカノープス。垂虹橋を渡った後で、張先の祭文を書いている(第5章 361 ページ))

■送牛尾狸与徐使君

徐大受^{じょだいじゅ}黄州知事から牛尾狸^{ぎゅうびり}の肉が送られてきたので、それに応えた詩。牛尾狸とはハクビシンのことであるらしい。この日は大雪であったと、

蘇軾の注記が添えられている。

風が飛花(雪)を巻いて帷から入ってくるなかで、
貴君が杯を手にしつつ、

この詩を見て笑ってくれるであろうか想像している。

この雪のために泥が深くなるのが心配である。

なんとも意地悪く鷄頭鶻が鳴いている。

酒の方は浅く飲むくらいにして、

牛尾狸を喜んで嘗めてみる――

天下に旨いものといえば、「通印の子魚」に「披綿の黄雀」されるが、

子魚は骨が多くていけないし、

黄雀はやたらと脂ぎっている。

心を籠めて送ってくださったこの牛尾狸は、

繊細な腕前の人が刀を磨き、

白玉を削るようにして調理してくれたまたとない絶品である。

(要は、珍しい肉を送ってくれたことへの謝礼であるから、もとより味わい深い詩というわけにはいかない。「鷄頭鶻」やら「通印の子魚」やら「披綿の黄雀」やらを持ち出して、知的興味を誘おうとしたのだろう。鷄頭鶻はシギの一種で、蜀の人々はその声を「泥滑滑」と聞きなしていると、蘇軾の注記がある。「通印の子魚」とは、子魚という美味な魚があり、とりわけ額に印を押したように見えるのが旨いという。「披綿の

黄雀」とは、白い綿を被ったように脂身がたっぷりの鳥の肉である)

(このころに蘇軾きていは岐亭の陳慥ちんぞう (方山子) の家に行き、李常りじょうも来て、3人で大いに飲んだようだ。3回目の岐亭訪問である)

■雪後乾明寺遂宿

この冬は雪がよく降ったようだ。これは雪の日に乾明寺けんめいじを訪ねて一泊した翌朝の詩。乾明寺は本章 57 ページにあり、東の坡おかからさほど遠くないところにあった。

乾明寺の門の外は、

馬も驚くほど光に満ちている。

階段から先は下駄の痕もなく、

私が一番先に行く。

皇城の庭園に誤って入ったかのように、

一面に白い花が咲き、

皇城の宮殿をとこしえに照らすかのように、

月の光が満ちている。

この純白の至上の潔癖さを牛も羊もまだ損なっていない。

新たに晴れ上がったのを鳥たちが喜んでいる。

今朝私がここでこうしているのは、

軒端の竹から雪解けの水が滴り落ちる音を聴いてみてはと、
寺の僧が勧めてくれたからである。

■次韻陳四雪中賞梅

ちんぞう ほうさん し
陳慥（方山子）が雪の中で梅を賞玩する詩を送ってきたので、それに次韻した。

歳の終わりには、
雪と梅が新たな装いを競い合い、
酒が熟するにつれて貴君の詩も熟してゆく。
梅だけが独り咲くありさまは人の目を驚かせ、
花びらが地に落ちれば、隠者が臥す趣がある。
とほ
杜甫も老いを嘆くだけでなく、
春に先んじて咲く梅を見るときには詩を詠んだ。
三度雪を見ると、翌年は豊作になるとか。
ならば、人生の安楽を高らかに歌ってもよいであろう。

■浣溪沙

雪にまつわる詞。序文がある。

十二月二日、雨の後にわずかに雪が降った。じょだいじゅ徐大受知事が酒を携えて訪ねてくれた。その場で『浣溪沙』の詞三首を作った。かんげいさ翌日に酒が醒めると大雪になっていて、また二首作った。

(最初の3首から第一首、第二首を、後の2首から第二首を訳す。始めの2首は知事の訪れを歓迎する詞、終わりの1首は翌朝の思い)

其の一

覆塊青青麦未蘇。(まだ蘇ってはこない——土くれを覆って青々と伸びる麦)

江南雲葉暗隨車。ちようこう(知事殿の車についてくるのは、長江の南からのひとひらの雲)

臨臯煙景世間無。りんこうてい(臨臯亭からの煙のような景色は、世間にまたとはないのです)

雨脚半收簷断線、のき (半ば線が断たれた簷から落ちる雨脚)あめあし

雪床初下瓦跳珠。たま(雪雲の床が下ってきて、瓦に飛ぶ珠)

歸来冰顆乱黏鬚。ひげ(知事殿が帰るときには、鬚に氷の粒がくっつくことでしょ)

其の二

醉夢醺醺曉未蘇、(まだ蘇ってはこない——酔っての深い暁の夢)

門前轆轤使君車。(門前でごとごとと音がするのは知事殿の車)

扶頭一盞怎生無。(一杯の酒くらいならないことはありません)

糜圃寒蔬挑翠羽、(小さな畑からつまんできましょう冬野菜の翠の羽)^{みどり}

小槽春酒滴真珠。(小さな酒の槽から滴るのはあたかも真珠)^{おけ}

清香細細嚼梅鬚。(梅の鬚(花蕊)からの清らかな香りをよくかみしめましょう)^{ひげ}

(其の一で使った蘇、車、無、珠、鬚の四つの韻をそのまままた用いている)

其の五

万頃風濤不記蘇、(まだ蘇ってはこない——酔って見た長江一面の波の記憶)

雪晴江上麦千車。(雪が晴れ上がった長江のほどりに想見するのは、麦を満載した千台の車)

但令人飽我愁無。(人々が飽くまで食べられるのなら我が愁いはないのです)

翠袖倚風縈柳絮、(昨夜の宴——柳の絮が風にめぐるように翻る妓女の袖)^{わた}

絳唇得酒爛桜珠。(酒 闌にして桜桃の花に見まごう赤い唇)^{たげなわ}

尊前呵手鑷霜鬚。(私は凍えた手で白い髭をひねっておりました)

(最初の句は、大雪で激しく波立ったのが思い出せないほどにきれいに晴れ上がったことをいう。雪は豊作の吉兆ということから、麦を満載した車が川べりに道に連なるありさまを想像したのが第二句。そして後半は、昨夜の宴席を回想して、自分だけは鬚をひねって思案に沈んでいたという。どのような思案かという、東の坡を開拓してきたこの1年間の自己の労苦に、民衆の労苦を重ねて合せて考えていたのだろう。それで第二句の空想を呼んだのである)

■書雪

このころに書いたと思われる短文があるので見ておこう。

今年、黄州では大雪が降り、一尺以上も積もった。私は東の坡おかにちょうど麦を植えたので、この雪を得ておろん喜んだのだが、他所の家を見れば、薪もなく米もなく、雪に苦しんでいる者がいる。そのためにあれこれ思案して夜も眠れなくなった。悲しいことである。

（この一文は、黄州に赴く途中で雪に会い、「民衆のために悲歌する」（悲歌為黎元）と詠んだ（本章16ページ）のを思い出させる）

■江神子

鄂州知事がく しゅじゅしやうの朱寿昌（本章67ページ）に送った詞。短い序文が付いている。

大雪のときに朱寿昌知事おらのこと懐おもった。それはきっと知事が私のことおもを念おもってくださっているからだこうしん しと知り、「江神子」の詞を作って寄せる。

黄昏猶是雨纖纖。（まだまだしとすと雨が降っていた黄昏どき）

暁開簾。（そして簾を開けた暁すだれ）

欲平檐。（檐のきまで平らになろうかとしていました）

江闊天低、(広い江、低い天)
かわ

無処認青帘。(どこにも認めることができない酒店の青い旗)

孤坐凍吟誰伴我、(独り座って凍てつく声で吟じれば、誰も伴う者はなく)

堦病目、(病んだ目をこすり)

燃衰髻。(衰えた髻をひねるのです)

使君留客醉厭厭。(知事殿は客人を留め静かに酔い続けます)

水晶塩。(水晶のような澄んだ酒)

為誰甜。(知事殿のためのよい味わい)

手把梅花、(手に取る梅の花)

東望憶陶潛。(東を見て思うのは陶淵明とうえんめい(すなわち蘇軾)のこと)

雪似故人人似雪、(雪が人に似るのか、人が雪に似るのか)

誰可愛、(愛すべきなのでしょうか)

有人嫌。(人を嫌うのでしょうか)

(終わりの三句は、雪は愛すべき存在でありつつ、人の行き来を妨げる存在でもある
 ということから、人の心理にも二面性があるということを含意しているようだ)

■記夢回文二首

夢の中で回文の詩を詠んだ。その序文だけを見ておく。

十二月二十五日、大雪が晴れ上がった。雪を解かした水で小団茶しょうだんちゃを煮て飲ませてもらった夢を見た。傍らで女性が歌っていた。私は回文の詩を作って女性に示した。夢から覚めると「乱点余花唾碧衫らんてん よ か へきさん だ」(乱点して余花 碧衫に唾す)の句を記憶していた。袖に誤って唾をかけられた趙飛燕ちやうひえんが、さりとりなした故事を用いたものである。これに続けて二首の絶句を作った。

■陳太初尸解

この年には、道士りくいちゆうの陸惟忠が黄州を訪問している。陸惟忠りくゐしんは眉州眉山県、すなわち蘇軾と同郷の人。陸惟忠は自作の詩を示したり、丹薬の作り方や養生の法について教えてくれたりした。そのことについて 15 年後に記した文章があるので見ておこう。

私は八歳で小学に入り、道士ちやういかんの張易簡を師とした。童子およそ百人がいたが、師は私と陳太初ちんたいしよばかりをいつも褒めていた。陳太初は眉山の市井の子であった。

私は成長するにつれて学問がますます進み、ついには科挙にも制科にも合格した。一方で陳太初は田舎の小役人になった。

その後、私は黄州に流され、そこに眉山の道士の陸惟忠が蜀から訪ねてきた。あれこれ話すなかで、「道を得た者に陳太初がいます」というので、詳しく尋ねてみると、我が同学の陳太初その人であった。

昨年(紹聖3(1096)年)、私は惠州でまた陸惟忠に会った。陸惟忠はこのように言った。

「陳太初はすでに尸解しました。蜀の人の呉師道が漢州の知事であったときのことです、陳太初は初めて知事に会いにきて、しばらくその客人となっていました。ちょうど元日の朝に、陳太初は知事に衣食と餞別の錢を求め、別れを告げました。陳太初は受け取ったもの全てを町の貧しい人に与え、城門の下に座り、そのまま死んでしまいました。それを聞くと、知事は役場の小使いに、亡骸を担ぎ出して野原で焼くよう命じました。小使いは亡骸のもとに行き、『このクソ道士め。なんだって元旦からこの俺さまに死人を担がせたりなんぞさせるのだ』と罵りました。すると、陳太初はにやりと笑い、『おまえを煩わせたりはせん』と言って、門から金雁橋のたもとまで歩き、そこで座り、改めて死にました。小使いがそれを焼くと、もうもうと立ち昇る焰と煙の中に、くっきりと陳太初の姿が浮かびあかりました。見物に出た町中の者がそれを見たのです」

(この文章は幾つかの興味深い内容を含んでいる。(1) 蘇軾が8歳で張易簡の寺子屋に入ったことは、すでに第1章39ページなどで見ている。(2) そこに陳太初という優秀な同窓生がいて町の庶民の子であった。眉山県の人々は子の教育に熱心だったのだろう。(3) 蘇軾が湊科にも合格する一方で、陳太初は小役人(原文は「小吏」)になった。科挙に合格した高級官僚は地方官となっても原則3年の任期で各地を転々とする。一方で、一般の役人(吏人)は同じ土地に留まる。庶民にとって吏人になれば実に結構なことであるのだが、高級官僚と吏人とでは社会的地位に雲泥の差がある。

陳太初には何かしら不満があったのだろう、せつかくの職を棄てて道士になった。(4) 道士は社会のしがらみの枠外に出て、陸惟忠のように黄州に行ったり、遙か遠い惠州に行ったり、自由に移動することができた。(5) 道士の最終的な目標は、生死の枠外に出て仙人になることだ。それを達成する一つのやり方として、現世に死骸を遺して自分は昇天する尸解しかいというものがある。尸解に関する古い伝承は数えきれないほどあるが、宋代においても衆人の目の前で尸解が行われたというのはおもしろい。(6) 陸惟忠は蘇軾が罪を得て流されたときに必ず訪ねてきて、陳太初の話をしたというのは何を意味するのだろうか)

■中和勝相院記

前の年の秋に成都せいとの勝相院しょうそういんの惟簡いかんの弟子ごせいの悟清ごせいがきたことは先に見ているが(本章 127 ページ)、そのときに依頼された文章がこのころになって完成したようだ。勝相院について記した「中和勝相院記」と、勝相院に納められた經典について記した「勝相院経蔵記しょうそういんきょうぞうき」の二つの文章である。後者は独特の形式で書かれ、意味を取るのがかなり難しく、前者だけを訳す。

(「勝相院経蔵記」によると、勝相院は成都だいしょうじの大聖だいしょう慈寺じにあつて、もとは中和院ちゅうわいんといい、後に勝相院の名を賜り、仏典を納める大宝蔵を設けた。中和院の名は、唐の中和年間に当時の皇帝きそう(僖宗皇帝)が黄巢こうそうの乱によって都ちやうあん(長安)を失って成都に逃れたことに由来する。そのときに画家の孫位そんいが皇帝にとともに成都にきたことは本章 128

ページで見ている)

本来、仏の道は成り難いものである。それについて聞くと、何ともすさまじいものだと
 思わずにはいられない。

初めて仏の道を学んだ者(釈迦)は、深い山林に入り、荊や毒蛇を踏み、裸体に
 霜や雪を被り、我が肉体を裂いて焼いたり煮たりして虎や鳥や虫に食べさせも
 した。そのような苦しく辛いことを百千万億年も続けて後に仏の道は成ったのであ
 る。

そこまではできない者でも、家族と絶縁し、麻の布をまとい、草木の実を食べ、日
 中は薪や水を運んだり糞便の掃除をするなどの労働をし、夜には火を焚き、香を
 薫じてその師に仕えた。その身をもっぱら痛めつけ、自身の思いを口にすることは
 厳格に禁じられた。これはごく一部を述べただけで、詳細はとて書ききれない。生
 涯このようにしてようやく出家して沙門比丘の一員になれたのである。

僧は農耕をせずに食べていられるとはいうものの、その労苦と人から卑しめられる
 ことでは、農工に携わる者の遠く及ぶところではない。その利害を計るなら、庶民
 が喜び楽しんで為すようなものではないのだ。ところが、いまでは家を棄て、衣服
 を毀ち、毛髪を損なう者が多いのはどうしてなのか。仏の道が安直で簡便である
 とでも思っているのだろうか。

寒さの中で耕し、暑さのもとで草刈りをし、官に徴集されて労働するのは、庶民の
 患い苦しむところである。私はそれを全て免れている。私は仏教を知ろうとして、師

に尋ねたところ、「戒」とは、まだものわかっていない凡人のために設けられたものである。ならば、私は何を用いたらよいのかというと、患うところのものを削るのだ。しかし、自分にとってよいことばかりを取ろうとしてもそれはできるものではない。よい評判ばかりを求めるだけになってしまうのではなからうか。

荒唐無稽な説を正し、堂上で自由自在に問答をする人を長老という。私はかつて長老の語ったことを研究してみたが、そのほとんどが理解できなかった。「械かいを設けて敵に應じる」「形かを匿はいして敗に備える」「窘ゆきづまったなら広い水おに墮ちよ、捉えられないだろう」。このような類である。

私は四方を旅して、このようなおかしい説を繰り返し聞いて困り果て、それから逃れようとして袋小路に閉じ込められてしまった。長老たちは往往にして顔を真っ赤にして説き、仏の道が成ったかのように言うのだが、かえって間違っているように思えてしまう。そこで、私は笑って、「これが外道げどうの魔人まじん(仏道の妨げをなす者)なのか」とつぶやくである。

これほどまでに私は僧まんを慢侮まんぶし、信じていないのである。

ところが、いま宝月大師ほうげつだいし惟簡しいかんは、その居るところの寺院の本末について文章に記すよう私に求めてきた。全くのお門違いではないだろうか。

しかしながら、私は昔初めて成都に遊んだときに、文雅大師せいと惟度ぶんがだいしに会った。度量が大きく、純朴で愛すべき人柄であった。唐代の終わりから五代の時代について詳しく、史書には載っていないことをいろいろと話してくれた。惟度とはそれから深く付き合うようになった。惟簡はその同門の友である。惟簡の人となりは、緻密で明

敏なところは他の人の及ぶものではなく、仏に仕えることでは衆人と等しくまことに謹厳である。私は惟度、惟簡の二僧と非常に親しくしてきた。

この寺院には、唐の僖宗皇帝と、皇帝に仕えた文官、武官七十五人の像がある。僖宗皇帝が都を失って成都に逃げ、いまにも唐が亡びようとして、しかしまだ滅亡はしなかったことを想うと、深い感慨を覚えて嘆息せずにはいられない。その画はまことに精妙で、称賛に値するものであることから、特にここに記しておく。

この寺院に最初に居たのは長安の人、広寂大師希讓であった。それから伝わること六世で惟度と惟簡に至った。惟簡の姓は蘇氏、眉山の人で、私の遠い親類である。惟簡はいまの院の主であり、惟度はすでに亡くなった。

(1) 蘇軾の別の文章には、「宝月大師惟簡は、字は宗古、姓は蘇氏、眉州眉山県の人である。私にとっては同世代の遠い親族である。9歳で成都の中和院の慧悟大師に仕え、19歳で得度し、29歳で紫の袈裟を賜り、36歳で大師号を賜った」とある。(2) 惟簡の依頼に応じて書いたにもかかわらず、蘇軾は現在の仏教者のあり方を厳しく批判している。これまで蘇軾は幾人もの僧侶と親しくしてきたし、とりわけ黃州に流されて自身を一新しようとしたときに仏教を一つの指針とした(本章46ページ)のであるから、かなり意外な感じがする。しかし、仏教そのものを批判しているのではない。東の坡の開墾に汗を流し、庶民の労苦を我が物としてきたことから、本章210ページで見た「浣溪沙」の第五首やこの文章が生まれたのだろう。仏教は個人を救済することはできるのかも知れないが、社会を救済するものではないとするのが儒学者の伝統的な捉え方で、唐の韓愈などはその観点から仏教を全面的に否定した。蘇軾は遙か

に柔軟であるが、墮落した仏教者は許すことができず、大寺院で小難しいことを言う「長老」よりも、本章21ページで見た^{どんこう}磨公のような「^{いじん}異人」をよしとしたのだろう。そして、惟度や惟簡は「異人」側の僧であると蘇軾は見ていたのだろう)

■三朵花

この年の終わりに「^{いじん}異人」を詠んだ詩の序文だけを見ておこう。

^{ぼう}房州の副知事^{きよあんせい}の許安世からの手紙にこのようにあった。

「吾が州に異人がいます。常に^{さんだか}三朵花(三本の花の枝)を頭に戴いています。その姓名を知る者はなく、郡の人々は『三朵花』をもってその名としています。よく詩を作り、^{こころ}どれにも神仙の意がこめられています。また自分の姿をよく画に写します。それをある人から得ました」

許副知事はその一枚を送ってくれるというので、この詩を作った。

(その詩は碩学の注釈家も理解不能としている。例えば、対句を成り立たせるために、「三朵花」のペアになる語として「^{いちしゆくがく}一宿覚」という仏典にある特殊な用語を引っ張ってきているのは、蘇軾の恐るべき語彙力に脱帽するしかないのだが、「一宿覚」をどのような意味合いで使っているのか、いくら頭をひねってもわからないのである)

■書歐陽公黃牛廟詩後

^{げんぼう}元豊5 (1082) 年、蘇軾47歳。

蘇軾の黃州生活は3年目に入った。年明け早々の1月2日に訪問客があり、話が歐陽脩おうようしゅうに及んだ。そのことを記した文章。

右は歐陽脩が峽州の夷陵きょう いりょう県の知事になったときに作った「黃牛廟こうぎゅうびょう」の詩である。

この詩について、私はかつて歐陽脩からこのように聞いたことがある。

「私が西京留守推官せいけいりゅうしゅすいかんならびに館閣校勘かんかくこうかんであったとき、私と同じ年に科挙に合格した丁宝臣ていほうしん あざな けんちん（字は元珍）がたまたま都みやこにきていて、こんな夢を見たと言った——丁宝臣は私と一緒に舟に乗って長江ちやうかうを遡り、ある廟の中に入り、本堂の下で拝謁した。丁宝臣が先で私が後から付いて行こうとしたので、丁宝臣はひどく遠慮した。私はそのまま押し通した。堂上で拝すると、神像が立ち上がり、私を近くに召寄せ、神は私の耳元でしばらく語った。丁宝臣は心ひそかに、神もまた世間と同じく歐陽脩を特別扱いするのだろうと思った。廟の門を出ると、そこに片耳しかない馬がいた。

そのような夢を丁宝臣は見たと言ったのだが、私も丁宝臣もそれが何を意味するのかわからなかった。それから数日足らずで、丁宝臣は峽州推官きしゅうすいかんに、わたしは夷陵りりやう県知事に、ともに左遷となった。

私と丁宝臣は一緒に任地に向かい、先の夢のことは忘れていた。ある日、三峡を遡っていて黃牛廟に詣でたところ、門に入って丁宝臣は何やらぼんやりとした気分になった。そして、以前の夢と少しも変わらないことが起こった。私は県知事であったから立場として丁宝臣の後に従わなければならなかった。門の外に石を彫

った馬があり、耳が一つ欠けていた。それを見て二人は大いに驚いた。

私は廟に一つの詩を書き留めた。その中に『石馬繫祠門』(石馬は祠門せきば しもん つなに繫がれる)の句があるが、片耳のない馬がいることは夢ですでに知っていたのである」

元豊五年げんぽう、私は黄州たくきょに謫居していると、宜都県の知事ぎととなった朱嗣先しゅ し せんが立ち寄ってくれた。二人で(これから朱嗣先が行くことになる)三峡の風景について語っていて、たまたま話がこのことに及んだ。朱知事は(欧陽脩の)「黄牛廟の詩」を書いてほしいと私に言い、

「それを石に刻んで黄牛廟に置き、進退出処は人の力だけによるものではないということ、人に示したいと思います。耳が一つしかない馬のごときが欧陽公の事に関わっているはずありませんが、事は大きく前から定まっているものなのであります。公は神に対して礼を尽くしましたが、それでも詩の中ではその廟いん しを『淫祀』であると言っています。公は信念の人で、神に対しても決して阿おもねらないことがわかります」。

その言葉の味わい深さに感じてこの文章を記すことにした。

正月二日、眉山びざんの蘇軾書す。

(1) 宜都県も夷陵県もともに峡州きやうに属し、朱嗣先はこれからの旅の途中で黄牛廟を通る。それで、蘇軾の書を石に刻んで廟に置こうと言ったのである。(2) 欧陽脩が夷陵県に左遷されたのは、46年前の景祐3(1036)年で、30歳だった。左遷の原因は范仲淹はんちゆうえんを弁護したことだった。范仲淹は当時の宰相を強く批判したことで都から追放され、范仲淹の行為を擁護よせいした余靖いんしゆと尹洙も左遷となった。本来ならこのようなど

きに朝政を正す役目を担っているはずの高若訥こうじゃくとつが宰相の顔色をうかがって沈黙を決め込んでいるのは卑劣であるとして、歐陽脩は激しく高若訥を批判し、宰相の怒りを買って放逐された。こうした情勢さいじょうを見て、蔡襄さいけんいちふしやうは「四賢一不肖の詩」(四賢は范仲淹、余靖、尹洙、歐陽脩の4人、一不肖は高若訥)を作り、天下に大いに流布した。蔡襄は蘇軾が本朝第一の書家とした人(本章148ページ)である。この一連の追放劇は奇しくも蘇軾が生まれた年の出来事であった。なお、蘇軾が夷陵県にある歐陽脩の旧居を訪ねて詠んだ詩を第1章29ページで見ている。(3) あやしげな民間伝承の神を祭った祠いんしを「淫祀」といい、その神が民衆を惑わせるようなことをした場合(もちろん神がするのではなく、神を利用する人間がするのだが)には、神の祟りなどを恐れず、「淫祀こぼ」を毀つのが社会に責任のある士大夫の役目であるとされていた。その実例ちんを陳慥ちん(方山子)の父の陳希亮ちんきりやう(字は公弼こうひつ)に見ることができる。陳希亮ちんしやうは鳳翔時代にそのパワハラに悩まされた知事であるが、若い頃に地方の長官であったとき、数百の「淫祀」を壊して70人余りのまじない師を追放したと、蘇軾は「陳公弼伝」(第2章71ページ)の中で記している。なお、蘇軾が「陳公弼伝」を書いたのは黄州にいた間のことであったと推測されている)

■祭堂兄子正文

元豊3(1080)年9月に亡くなった従兄の蘇不欺そふぎ(字は子正あざな しせい) (本章120ページ)を祭る文を1月3日に作った。郷里に帰って蘇不欺の葬儀の列に加われなかったことを残念に思い、遠く黄州の地で蘇不欺の霊に捧げた

のである。

元豊五年、歳は壬戌、正月の三日、弟に当たる貴授黄州团練副使蘇軾は謹んで酒と果物を供え、亡くなった蘇不欺大兄の靈に申し上げる。

昔、我が伯父(蘇渙)は身を修め家の内での振る舞いは郷里の手本とされた。剛ならず柔ならず、武功あり文徳あり、喜びも愠りも外に出すことがなかった。十一の官職を歴任し、伯父が治めた土地の民衆は、今に至るも伯父のことを思って泣くという。伯父の立つありさまを見るならば、仁者は勇敢で雷にも動揺しないというが、まさにそのままであった。伯父の長男である我が大兄は優にして毅で、甚だ伯父に似ていた。人の中にあつて嚴肅でありつつおっとりとして、慎み深くて汚点がなく、顔に喜びが見えていた。人にはそれぞれの心があり、酸っぱさと塩辛らさは好みを異にし、赤と白は合わないものであるが、我が大兄は鷹揚で、衆人から賢者として尊ばれ、よろしくないといわれることがなかった。天は鼯肩をしないというけれど、富貴も長寿も我が大兄には無縁であった。それは不幸とはいまい。我が大兄がそのようであったのは疑いもなく定めであったのだ。

私は黄州に移り、老いと病に見舞われ、ここで土地を耕す身となり、我が大兄の棺を撫で、葬列に加わることができず、残念に思い続けている。いずれ私も先祖伝来の墓所に眠り、木々の高く聳える下で、我が大兄と墓を並べたいと思う。

もろもろの祖先、平生から好としてきた人々は年々我が大兄とともに亡くなり、私だけが生きて異なる場所にいる。このように言えば悲しくてならず、千里の向こうに

一樽を捧げる。我が大兄の靈よ、この酒を辞退しないでくれたまえ。

あ あ
嗚呼哀しいかな。

■水竜吟

かつて黄州の知事であった閻邱孝終（字は公頤）のことを夢に見ての詞。序文がある。閻邱孝終とは蘇州で会っていた（第4章175ページ）。

閻邱孝終はかつて黄州の知事であった。棲霞楼を作り、それはこのあたりで優れた景勝地となった。元豊五年、私は黄州にいて、一月十七日、夢に小さな舟で長江を渡った。流れの中ほどで見回すと、棲霞楼から歌と音楽が聞こえてきた。舟の人がいうには、閻邱知事が客人と酒宴をしているのであると。覚めて、不思議なことと思い、この詞を作った。閻邱知事はすでに退官して蘇州にいる。

小舟横截春江、（小さな舟で横切る春の江）

卧看翠壁红楼起。（卧して見るのは翠の壁と紅い楼閣）

雲間笑語、（雲の間からの笑い声）

使君高会、（それは知事のすてきな集まり）

佳人半醉。（佳い方々が半ば酔っておられるのです）

危柱哀絃、（高いところからの哀しげな絃）

艷歌余響、（艶やかな歌の余韻）

遏雲滌水。(雲が止まり水が巡ります)

念故人老大、(思うのは、かの人は老いても)

風流未減、(変わらぬ風流)

独回首、(独り首を回します)

烟波裏。(霧と波の内)

推枕惘然不見、(ぼんやりと推したのは枕)

但空江、(空しく見えません——江も^{かわ})

月明千里。(千里にわたる月の明かりも)

五湖聞道、(聞くのは)

扁舟歸去、(舟に乗って湖のほとりに去ってしまったと)

仍携西子。(美しい人も携えて)

雲夢南州、(雲夢^{うんぼう}の南^{しま}の州)

武昌南岸、(武昌^{ぶしょう}の南の岸)

昔遊忘記。(昔遊ばれたところを覚えておられますか)

料多情夢裏、(きっと、情の深さのあまり夢のうちに)

端來見我、(私に会いに来てくださったのでしょう)

也參差是。(たぶんそうなのでしょう)

(夢に人が現れるのは、その人が自分のことを深く思ってくれているからだ、昔の人々は考えていた。あたかも恋する人を夢に見たかのような気分で歌った詞である)

■正月二十日与潘郭二生出郊尋春忽記去年是日同至女王城作詩乃和前韻
 蘇軾は毎日のように長江ちょうこうに近い臨臯亭りんこうていから東の坡おかへと通い、土地の人々
 にとってその姿はごく見慣れたものとなり、潘丙はんへいや郭邁かくこうや古耕道ここうどうといっ
 た人々と連れ立って歩くのも、水戸黄門みとこうもんと助さん格さんすけかくではないけれど、
 すっかり黄州の風光に溶け込んだものとなった。この詩の題は「正月二
 十日、潘丙、郭邁の二人と郊外に出て春を尋ねた。たちまち思い出した
 のは、去年のこの日も同じようにして女王城じょおうじょうに至って詩を作ったのだっ
 た。そこで同じ韻を用いてその詩に和した」。1年前の詩は本章 141 ペー
 ジで見ている。

東の風(春の風)はまだ町の東の門から入ってきていない。

我等は去年尋ねた春をまた尋ねようと、

東の門から馬を走らせた。

我等は秋の渡り鳥のように、

義理堅く同じ日にまたきたのだけれど、

事は春の夢のようなもの、

去年のことは痕あとかたもなく消え去ってしまっている。

江沿かわいのこの田舎町の酒は濁っているが、

春風のもと、三杯も呑めば十分に酔うほどの濃さがある。

村の老人たちは何だか蒼^{あお}い顔をしているけれど、
ひとたび笑うと温かな表情になる。
すでに私は皆と約束をした、
毎年毎年ここでこの日に会おうではないかと。
だから、都の友人たちよ、
どうか私を呼び戻そうなどとはしないでくれたまえ。

■是日偶至野人汪氏之居有神降於其室自稱天人李全字德通善篆字用筆奇妙而字不可識云天篆也与予言有所会者復作一篇仍用前韻

前の詩の蒼^{あお}い顔の老人とは、浅黒く日焼けし、一見するとやつれた陰気臭い感じの農民をいうのであろう。その1人、汪若谷^{おうじやくこく}の家に案内され、あやしげな神様に会って詠んだのがこの詩。詩題は「この日、たまたま野^や人^{じん}の汪氏^{わんし}の家に至ると、その一室に神が降り、自ら称するに、天人李全^{てんじんりぜん}で、^{あざな}字^{とくつう}は徳通であると。篆^{てんじ}字^じが書けるとして、奇妙に筆を用い、しかし、その字は判読できない。神はこれは『天篆^{てんでん}』であるという。私と話をし、なるほどと思うところもあった。前の韻を用いて一篇の詩を作った」。

(前に厠の神「紫姑^{しこしん}神」に会っているが(本章 138 ページ)、土地の人々は蘇軾を驚かせようと、神との面談の場を設けることにいそしんだのだろうか)

酒を飲んで喉の渴き覚え、

茶がはしくて適当にそこらの門を叩いてみた。

よもや竹の林の中にある村が、

仙人の住まうところであるとは知りもなかった。

神から聞かされのは、

亀の甲羅を使って占う天の言葉にも通じていると。

筆から竜が躍り出るような墨の痕も見せてもらった。

笑うべきは、

都から追放されてすっかり憔悴してしまったという昔の人。

何もあれこれ思うことはないのだ、

ここに神がいて正しい道があることは確かなのだから。

帰ってから、私は独りでがらんとした部屋に寝そべり、

天人の意味深長な言葉が夢にまで入ってくるのではないかと、

いささか心配になったりもしている。

（「すっかり憔悴してしまった」というのは王禹偁（おううしゅう 本章 75 ページ）のことだろう。

このような「天人」がいる土地なのだから、くよくよする必要などないというのがこの詩であるが、蘇軾が「天人」の真偽についてどのように考えたのか、主人の汪若谷に配慮したせいなのか、かなり曖昧である。次の文章でもう少し深く蘇軾の考え方を
知ることができる)

■天篆記

上の詩にあった「天篆」^{てんでん}について記した文章。

長江^{ちやうこう}と淮河^{わいが}の間の習俗^きは鬼(亡くなった人の霊が神となったもの)を尊ぶ。

正月^{ほうき}に、箒^しに衣服^{こしん}を着せて子姑神とし、時に字を書くような子姑神もいる。黄州^{かく}の郭氏の子姑神が最も他と異なっていることについては去年記した。

今年^{おうじやくこく}は黄州の汪若谷の家の神が最も変わっていた。箸を口とし、口の中に筆を置き、人と問答をして響くように応じた。

神が言うには、

「吾^{てんじん}は天人である。名^{ぜん}は全、字^{あざな}は徳通、姓^{とくつう}は李氏^り。汪若谷が再び世の人になったので、その縁で吾はここに降ったのである」

神^{てんじ}は篆字を書き、大した筆の勢いであったが、その字は判読できなかった。

神は言った。

「これは天篆^{てんでん}である」

私に三十字を示し、

「これは天蓬^{てんほう}(星の名)の咒^{じョ}(まじないの言葉)である」

と言った。隸字でわかるように書いてもらおうとしたが、してくれなかった。

神は黄州の進士^{ちやうへい}(科挙を受験したことのある者)、張炳を見て言った。

「しばらくぶりであるが、恙^{つつが}なく過ごしておるのか」

張炳は、

「私のことをご存知なのですか」

「そなたは劉苞^{りゅうほう}を覚えていないのか。吾はまさしく劉苞である」

神はそう言って、張炳がかつて劉苞と親しくしていたときのことを詳しく語ったので、張炳は驚いて私に言った。

「昔、私は都で劉苞と知り合いになりました。青い頭巾^{モのコート}を被り、裘^{せう}を着て、体に入れ墨をし、酒が好きで、齊州の人であると言っていました。いまだここにいるのか知りません。本当に天人になったのでしょうか」

ある人が言った。

「天人が箒となって子姑神として汪若谷のところに現れたりするものでしょうか」

私もそのようには思わない。しかし、鬼とか仙とか、もとよりよく知れるものではない。その全てをいかさまであると疑うべきではないだろう。天篆は判読できないが、神の言うことには古^{いにしへ}の趣きがあり、盗み食いをするような愚かしい田舎の鬼ができるようなことではない。

昔、漢の時代に、長陵^{ちやうりやう}に住む女が子を産んで間もなく死に、神となって兄弟の妻のところ^{ぶてい}に現れた。靈験があったので民衆はそれを祀った。武帝の祖母もそこに参詣して子孫が栄えたことから、武帝はその神を宮中に祀って「神君」と呼び、天下に大評判となった。このことをそっくり疑うのはやり過ぎというものであろう。

世の人が見るところのものは常に少なく、見ないところのものの方が常に多い。自分の耳や目の及ぶわずかなところのものをもって、「世外^{せがい}の事」(世に普通ではないこと)までを量り知ることはできないであろう。

天篆のことはとりあえずここに書いておいて、よく知る者を待つとしよう。

(漢の武帝の「神君」のことは『漢書』の「郊祀志」に記され、「郊祀志」には不可思議なことがたくさん記録されている。『漢書』に限らず、権威ある書物の数々に摩訶不思議な事例が多々記載されていて、その全てを疑うことはできないと蘇軾は考えていたのだろう。人を惑わし社会に害をなすような「淫祠」は許さないが、「天篆」のようなものについては、孔子の「怪力乱神を語らず」に習って、判断を保留しておくということなのだろう)

■ 浚井

春の初めの頃に井戸を浚った。井戸は東の坡で童僕（少年の使用人）が発見したもの（本章 155 ページ）であろう。

荒れ地の雑草の中に埋もれていた古井戸。

その水が飲まれないままであったのを残念がる人はいなかった。

二本の縄に括り付けて罍をおろすと、

百尺の深さから蚯蚓が飛び出してきた。

泥とともに腥い風が吹き上がり、

空洞の奥で水の滴り落ちる音が響いた。

井戸から始まる水路の上の方で、青く伸びた芹を取り除き、

下の方で、石をきれいに洗いあげた。

私はびしょ濡れになって童僕に笑われ、
 冷え切った体を酒で温めようとした。
 青い空に凍えるような碧色みどりが落ちてくる夕方になって、
 ようやく澄んだ水をたっぷり汲み出せるようになった。
 それにしても、
 もとからあったあの汚れが消滅して、
 どこからこの新鮮で清潔な水が出てきたのだろうか。
 井戸の深い深いところの、
 それこそあるかないかのようなところで、
 来るものもなければ失うものもなく、
 水が湧き出てきているのだろうか。

(詩の終わりの部分は、奥深い暗闇の底から澄んだ水が得られる不思議さを、仏教の「無」の概念を使って表現してみたのだろう)

■紅梅三首

紅梅を見て詠んだ詩。3首のうち2首を訳す。

其の一

何かをおそ恐れ、何かを愁えていたのか、
 それともねむり睡を貪っていたのか、

紅梅の開くのは遅い。

そうか、

自身の清らかな姿が時節に合わないのではないかと、

恐れていたのか。

だから、桃や杏の花の色を作って小さく開いたのか。

それでも、

独り雪や霜に耐える梅の姿がやはりそこにある。

梅の心は、春にすっかり溶け込もうとはしていないのだ。

紅いのは、

玉の肌^{はだえ}が端無くも酒のためにほんのり染まったためであるのだろうか。

ある詩の大家は、紅梅を見て、

「桃かと思えば緑の葉がなく、杏かと思えば青い枝がある」と詠んだ。

葉や枝を観察するまでもなく、

梅には梅の格があるのを知らなかったのだ。

其の二

雪のうちに紅梅は開くけれど、

梅としては遅いのは、

春の初めの時期を、自分だけが我が物としてしまわないためであろうか。

造物者にはいかなる深い意^{こころ}があって、

紅梅には特に朱あかを施してこの妙姿を作ったのか。

しかし、

寒さが花の肌はだを一分ずつ損ない、

雨がいつしか花を千粒の涙に変えてしまう。

そして、桃や杏ではないことが明らかになる——

点々と「微酸びさん」がもう枝についているのだから。

(末句は、花の終わった後に残った小さな実にも早くも酸味を感じて、やはり杏や桃ではない知るというオチ)

■定風波

上に見た紅梅の詩の第一首を詞の形式に作り直した。より抒情性に富んだ作品になっている。

(キーワードは梅の「格」である。白かろうが赤かろうが、梅には梅としての風格があるという。そこに蘇軾自身の思いが籠められているのだろう)

好睡慵開莫厭遲、(眠るのが好きなよ、開くのがだるいのよ、それでぐずぐずしていたのをど

うか怒らないで)

自憐冰臉不時宜。(困ったことに、まぶた瞼に氷なんかをつけていたら、いまの時節に合わないわ

よね)

偶作小紅桃杏色、(それで、たまたまですけど、桃や杏と同じ紅の色になってみたの)

閑雅、(どうかしら)

尚余孤瘦雪霜姿。(でも、やっぱり痩せて雪や霜に独り耐える姿は残ってしまっているわよね)

休把閑心随物態、(奥深い心までを物のありように従わせてはダメなのよね)

何事、(でもどうしたことか)

酒生微量沁瑤肌。(お酒のせいでわずかな曇りが白い肌を染めてしまったの)

詩老不知梅格在、(詩の大家のおじさんは、梅には梅の格があるのをご存知なかったのてし

ょうね)

吟詠、(詠んでみせたのは)

更看緑葉与青枝。(緑の葉や青い枝もよく見よう、ですって)

(紅梅の開く時期に、2月22日に、王^{おうせい}齊^{せい}愈^ゆ、潘^{はん}丙^{へい}、それに武昌^{ぶしやう}県の役人の呉^{こり}亮^{りやう}らと武昌^{せいざん}の西山に登ったとの記録が残されている)

■二虫

「水^{すい}馬^ば児^じ」と「鷓^{あん}鴒^{らん}堆^{たい}」という2種の虫を詠んだ詩。どちらも種名は不明であるが、「水馬児」は水上を移動し、「鷓鴒堆」は風に乗って飛ぶ虫であるようだ。

(前に守宮^{やもり}を詠んだ詩があった(第5章197ページ)。あまり美的ではない小動物をも詩の対象とするのは、先輩の梅堯臣^{ばいぎやうしん}が切り拓いた宋詩の新分野である)

さあ、水馬児^{すいばじ}を見てくれたまえ。

一步また一步と流れに逆らっている。

ちようこう
長江は東に向かって一日に千里流れるのに、

この虫は跳んで跳んでずっとここにいる。

あんらんたい
さあ、鸚鵡濫堆を見てくれたまえ。

ひとたび決起して、追い風に乗る。

風に随ってひとたび去ってどこを宿とするのやら。

逆風に遇うと、草の中にぼとりと落ちる。

この二種の虫が賢いのか愚かなのか、私は知らない。

川べりに立って私は虫を笑うが、

人は私のことを知らない。

■満庭芳

小さな虫の関連でこの詞を見ておこう。蝸牛かたつむりの角の先にあるちっぼけな国で超有名人になっても、あるいは蠅はえの頭の上にあるちっぼけな国で莫大な利益を得ても意味がないと、黄州に流される以前の己を笑うかのよように歌っている。戯れの詞である。

蝸角虚名、(蝸牛の角の国で大評判)

蠅頭微利、(蠅の頭の国で大儲け)

算来著甚幹忙。(あれこれ忙しくて何になるのでしょうか)

事皆前定、(名利などはどうせ前から定まっているのだし)

誰弱又誰強。(誰が弱くて誰が強いなどいうことはありはしないのです)

且趁閑身未老、(まだしばらく老いる前の閑なこの身で)

尽放我、(自分をすっかり放り出して)

些子疏狂。(好き放題をしようではありませんか)

百年裏、(人生は百年)

渾教是醉、(すべて酔っ払ったら)

三万六千場。(酔いは三万六千回)

思量。(考えてみたら)

能幾許、(人生がどれくらいでも)

憂愁風雨、(憂愁やら風雨やらが)

一半相妨。(交互に邪魔し合うのです)

又何須、(意味がありませんよね)

抵死説短論長。(命をかけて、何がよい、何が悪いと論じるのは)

幸対清風皓月、(よいではありませんか、清らかな風と白い月があって)

苔茵展、(草の敷物に)

雲幕高張。(雲の天幕がありさしたら)

江南好、(江南こうなんよいとこ～)

千鐘美酒、(酒は旨いし～)

一曲満庭芳。(歌いましょうよ、「満庭芳」の曲にのせて)

(この詞の前半の終わり、「百年裏、渾教是酔、三万六千場」(百年の裏、渾て是をし
て酔わ教むなら、三万六千場)は蘇軾らしい楽しい句である)

■柏石図詩

陳慥(方山子)(本章 32 ページ)が所蔵する画に添えた詩。短い序文がある。

陳希亮の家「柏石の図」があり、その息子の陳慥に伝えられて、家宝としている。
私は詩を作り、この画の銘とした。

二つの石の間から、柏の木が生え出した――

天は生まれたばかりの柏にいきなりこの運命を与えたのだ。

生きるのがいかに困難であっても、

柏は決して石から離れることができない。

唐の韓愈は世を俯瞰する賢人であったが、

平地で自在に伸びてこそ美しいとして、

柏を移植する詩を詠んだ。

しかし、土が肥えているか、瓦礫まじりであるか、

それによって柏の成長にどれほどの差があるというのか。

見るがよい、

石から生えたこの柏の複雑な姿を。

移し替えるべき理由などどこにもありません。

あお蒼い竜が身をくねらせ、黒い虎がわたかまっているかのようではないか。

この画師はなかなかの人で、

私の毛髪を逆立たせるほどの迫力がある。

きっと画いたそのときに、

韓愈なぞは何もわかっていないと言おうとしたのだらう。

(韓愈は詩に「二つの石に挟まれた柏は百年経っても大きくならない。平地に移してやるなら千丈の高さにまでなるだらう」といった趣旨のことを詠んでいる。のびのびと本来の性質を遂げさせるのがよいというのが韓愈の主張である。一方、蘇軾は「愈いよいよきゅう窮すれば則ち愈すなわいよいよ工たくみなり」の方を貴いとしたのだらう。蘇軾は時折、韓愈の考えに楯突くことがある。そうするのは韓愈を尊敬し、その詩文に深く通じているからである。韓愈は華美に陥りがちであった詩文を改革した文学の革命児であった。それから 200 年余りを経てその精神を受け継いだのが歐陽脩おうようしゅうである(そのことを本章 470 ページで見る)。だから、蘇軾は広い意味で韓愈の門弟といつてよい。門弟であるからこそ敢えて反発してみせるのである)

■謝人恵雲巾方舄

うんきん雲巾(雲のように高い頭巾)と方舄ほうせき(底が方形の靴)をプレゼントして

くれた人がいて、その謝札に、雲巾と方舄に関連する故事をてんこ盛り
にした二つの詩を作った。雲巾の方だけを訳す。

其の一

頭巾えんびを燕尾と呼ぶのはあまりぴったりした語句ではない。

雲巾うんきん——雲の端きくれを剪り取ったとするのはなかなかにかうまい。

雲は無心せいざんで青山(靈妙な霧田気のある山)の付き物である。

それを頭に載せるなら、仙人の気分になれようか。

現代の頭巾はかつては俗っぽいと評された新様しんモードだが、

いくら古雅を求めるとしても、

濁り酒を頭巾で漉して飲んだ陶淵明とうえんめいの真似はさすがにできない。

唐代の終わりに鹿門山ろくもんざんに隠棲した人が、

人に頭巾を贈って添えた詩に、

「黒い霧を裁ち、霜のように軽い」とあるが、

実はこの頭巾こそがそれではなかるうか。

■次韻子由寄題孔平仲草庵

江州ごうの役人である孔平仲こうへいちゆう (字は毅甫あるいは毅父) が草庵を作り、蘇轍きほがそれについて詩を詠んだ。その詩に次韻した。

私は人に逢えば「安心あんじんの法」を問い求め、
新しい任地に着くと、すぐに道士の草庵を訪ね歩いた。
昔むかしむごう盧教という人は、
仙人を探し当てて教えを受けたのだけれど、それに従うことはできなかった。
私がむしろ思うのは、
かつて蓋公こうこうが自分から曹参そうさんのもとを訪れたようなこと。
羨むのは、
貴君ききん(孔平仲)の美しい玉(汚れぬ心)は三度の火を潜り抜けて少しも焼けないこと。
私の精神は蚕に八回も食べられた桑のようにもはや一枚の葉も残っていない。
しかしながら、
この長江は嬉しいことにまさに「同一味どういちみ」であるのだから、
千里を隔てても貴君と清く甘い味を共にすることができるのだ。

(盧教や蓋公は道家の人(蓋公については第5章124ページで詳しく見ている)。「安心」「同一味」は仏教の用語(同一味とは、水はいかなる器にも入り、その味は変わらない、人の心も同じである、という意味)。蘇軾は仏教と道教を混ぜこぜにしてこの詩に詠み込んでいる。全体として何が言いたいのか、実のところはよくわからない)

■雪堂記

蘇軾は、春の初めのまだ寒さが残って雪が降る頃に、東の坡おかに小さな建物を建て、「雪堂せつどう」と名付けた。それについて記した文章。

(訳者の力不足によるのだろうが、この「雪堂記」はいささかわかりにくい。雪堂が完成して間もないころに、潘大臨はんだいりん (字は邠老) と交わした問答をもとに書かれたとされ、恐らくまだ思索の途中段階であったのではないだろうか。潘大臨はんたいは潘丙はんの兄の潘鯁こうの子で、潘鯁は蘇軾と同年の生まれであるから、ちょうど息子のような存在であった。潘大臨は科挙を目指していて、蘇軾に詩を教わるなどしていた(昨年秋に行われた科挙の地方試験を受けたともされる)。潘の家は酒店を経営しつつ子弟の教育に熱心で、その点で、絹を扱う商人であったとされる蘇軾の家とよく似ていた)

私は東の坡おかのかたわらに廃れた畑を得てから、土塀を修復し、堂を作り、「雪堂」と名付けた。大雪の中でそれを建てたからだ。四方の壁に隙間なく雪景色を画き、立って見ても、座って見ても、あたりを顧みて雪ではないものが目に入らないようにした。私は雪堂にいと、真にいるべきところを得ていると感ずることができる。

あるとき、私は机にもたれ、昼間に目をつぶっていると、どこかに栩栩よろこんで然行こうとして、はっと気が付いた。まだ意識がはっきりとはしていなくて、何かに触れた感じがあって、すっかり目が覚めた。そして、心は十分に満足しておらず、何かを失ったような感じがした。掌てのひらで目をこすり、足に履くつをつけ、のそのそと堂から下った。

そこに客人が来て、私にこう尋ねた。

「君は、世間でいう『散人』(世間の束縛から解放されている人)なのかい、それとも『拘人』(世間に強く束縛されている人)なのかい。散人にしては天性が浅すぎるようだし、拘人にしては嗜欲しよくが深すぎるようだな。繋がれた馬にも似て、どこかに行きたいの

に行けずにいるのではないのかい」

私には思うところがあったが、それを口にはまだ出さないで、ゆっくり考えてから答えようと、客人に挨拶して、堂上に招いた。

客人は言った。

「ああ、わかった。君は散人になりたくても、まだなれずにいるのだな。だったら、散人の道について君に教えてあげよう。

洪水を治める名人や牛を解体する名人のすることを見ると、その知恵を散らして、敢えてさまざまな障壁に立ち向かうようなことはしていない。それを避けるのだ。だから、最も柔い水をもって最も剛い岩に当てながらも、岩をその定紋じょうもんに従って割ってしまうし、最も剛い刀つよを最も柔い肉に当てて、たちどころに牛をばらばらにしてしまう。知恵を使って剛い岩や骨をどうにかしようかといったことはしないのだ。自分の知恵を散らすことができるのなら、対象となった物(岩や牛)は己を縛っておくことができなくなるのだが、自分が知恵を散らすことができなければ、物は己をときほどくことがない。

君は知恵があるらしいな。それを自身の内側で働かせている分にはまあまあよいだろう。それはいわばはりねずみ 狷が袋の中にあるようなもので、時々その身体を動かしたところで、外で見ている者には、ただ一本か二本の毛があるようにしか見えない。あるいは、風は縛れないし、影が捕えられないのは、子供でも知っていることだ。名声というものは風とか影のようなものだ。どうかな、君はそんなものに心を懸けているのではないのかな。だから、君ははりねずみ 狷が毛をいっぱい立てるようなことをしてみ

せている。愚かな者はそんな君を見て驚く、知恵のある者は君を見て悔しく思いもするのだ。[ここまでで、散人になるには知恵を散らすこと(無心になること)が必要条件であるといっているようだ]

だから、私は君が今日のようにするのはむしろ遅かったと不思議に思っていたくらいだ。まあ、君は私に会えたのは幸いであったな。私は君を籠かごの外の遊びに連れて行こうと思うのだが、どうかな、行ってみるかいい]

私は言った。

「私はここで、ずっと籠かごの外にいますと思っていました。あなたはどこに行こうというのでしょうか」

客人は言った。

「ひどいものだ、君はまったくわかりが悪い。

権勢なんぞは籠かごというほどのものでなく、名誉も籠かごというほどのものでもない。天候の順不順も籠かごというほどのものでなく、世間の道徳も籠かごというほどのものでない。私が籠かごといっているのは、ただ知恵である。

知恵は内にあって、それが外に出ると言葉になる。言葉は指し示すものがあり、それは行為として形になる。行為にも指し示すものがある。君は知恵があるために、黙ってしようとしても、黙ってまいとし、やめようとしても、やめまいとする。それは、譬えるなら、酔って怒った人が怒声を発しようとしているのにも、頭のおかしくなった人が明後日の行動をとうろうとしているのにも似ている。その口を覆い、その腕をつかんでも、もごもごうめき、じたばたしてやめないのだ。知恵が人にとっての籠かごにな

っているとは、このようなことである。

人にとって患いわざらとなるのはその身体であり、身体にとって患いわざらとなるのはその心である。君が畑の中に堂を構えたのは、君の身体をそこで安らかにしようとしてのことであろう。堂に雪を描いたのは君の心をそこで安らかにしようとしてのことであろう。堂があれば身体は安らかになれるけれど、人としての形からはもとより解放されるわけではない。心は雪によってすっきりしても、精神がもとより完全な充実を得るわけではない。

君は知恵たを焚いて、もう燃もやてしまったと思ったりしているかも知れないが、知恵は燃やし尽くしてもまた燃え出してしまう。この堂を作るのはただ無益であるばかりでなく、君をさらに迷妄のうちに陥れてしまうのではないのかな。君は雪の白さを見ると、ぼんやりと目が眩み、君は雪の寒さを見ると、ぞっとして毛が逆立つ。五官に害になることでは、目から来るのが最もはなはだしい。だから、聖人はそのようなことはしない。

ここはなんと雪ばかり。君の知恵と、君が目にしてるものを見ると、君は実に危ういものだな」[ここまでで、客人は雪堂を建てた蘇軾の考え方を徹底的に批判してきたのだが、次の言葉はその流れからずれるようだ]

ここで客人は杖を挙げて壁を指して言った。

「ここに凹地があり、ここに凸地がある。雪はここ全体に同じように降り積もる。そこに強い風が通りすぎるとどうなるか。雪は凹地には留まり、凸地からは散じてゆくだろう。天は凹地を好み、凸地を嫌うのか。そうではあるまい。勢いとしてそのようになる

だけなのだ。勢いのあるところでは、天もそれと違うようにすることはできない。まして人にはどうにもできない。君はここに居て、人から離れているとはいっても、烟に堂を建て、堂に名を付けて、実は人に対して目障りなことをしているのではなからうか。雪が凹地にあるのには及ばないではないのかな」

私は言った。

「私がしているのは、『適然』(適^{でき}た^{ぜん}ま^たま^らん、成り行きでこうなった)というだけのことであって、特に考えがあったわけではありません。危ういとはどういうことなのでしょうか」

客人は言った。

「君はたまたまこうしたと言う。たまたま雨であったのなら、君は雨を画いたのかい。たまたま風が吹いていたなら、君は風を画いたのかい。雨を画くのはよろしくないだろう。雲が激しく湧き立つのを見るなら、君には怒りの心が起こるだろう。風を画くのはよろしくないだろう。草木が揺れ靡くのを見るなら、君には懼^{おそ}れの意^{こころ}が起こるだろう。雪を見ても、君の内側で何も動かないわけではない。雪の下にだって水や石がある。だから、雪の絵画によっても怒りや懼れが誘われられないわけではないだろう。

徳は心にある。心には眼がある。眼が物を見て、それによって徳が左右されてしまう。雨も風も雪も異なりはしないのだ」

私は言った。

「あなたのおっしゃることは正しいと思います。その教えを聞かないわけではありません。しかし、十分には尽くしていないようにも思われます。どうやら私はまだぐうの

音も出なくなるまで承服するには至っていないようです。それはちょうど訴訟をおこして、理屈ではすでに屈しても、なおまだ言辞を絶たずにいられない者のようです。

あなたは、春台^{しゅんたい}(華やかな高台)に登ると雪堂に入るのとでは異なるところがあると思われるでしょうか。春と雪を比べるなら、雪の方が静かです。台と堂を比べるのなら、堂の方が静かです。静かであるのならは得るものがあり、動かならば失うものがあります。

黄帝^{こうてい}は太古^{しんじん}の神人^{せきすい}です。赤水^{こんろん}の北に遊び、昆侖^{こんろん}の丘に登り、南を望んで還ると、その「玄珠^{げんしゅ}」(貴重な宝物、すなわち自分自身)を忘れてしまったといひます。遊ぶとは意^{こころ}に適^{かな}うことをいひます。望むとはそこに情を寓することをいひます。意に適って遊び、情を寓して望むなら、意^のは暢び、情は出て、その本身を忘れるのです。そのときに何か貴重な物があっても、それを宝であるとはしません。だから「玄珠」も忘れてしまったのです。[ここでは「適然」の一例として黄帝伝説を取り挙げたのだらう]

しかし、意はずっと同じところに留まるものではなく、情は出続けるものではありません。必ずまた最初のところに戻ります。そして驚いて失ったものを探し求めます。[これは蘇軾の現在の複雑で矛盾する思いをいうのであろう]

私のこの堂は、遠くにあるものを近くに、近くにあるものを内に収めるものです。つまり、天地の涯を眉毛の先に置くのです。[つまり黄帝の遊び、すなわち「適然」を実践する場として雪堂があるといっているのだらう]

もののわかった人がこの堂に上がるなら、逆風でなくても息が詰まるような思いがし、寒くなくてもぞっとして肌が凍え、それによって煩わしさがすっかり洗われ、手を灸^{あぶ}

ような人の譏^{そし}刺はなく、また飲食^{やま}の疾いから免れられることでしょう。利害のからむ途^{みち}にぐずぐずして、憂患のなかに気持ちをおかしさせている者は、熱湯の中に手を突っ込んで洗おうとするのに少しも異なることはありません。

あなたのおっしゃることは『上^{じょう}』で、私のいうのは『下^げ』です。私はあなたがおっしゃることができののかも知れませんが、あなたには私がいうことはきっとできないでしょう。それを譬えるなら、御馳走をたらふく食べている者に、糟糠^{かす}を食べさせたならきっと怒るでありましょう。美しい衣服を着ている者に武人の帽子をかぶせたならきっと恥たとするでしょう。あなたの説^{せつ}道は御馳走や美しい衣服の方で、『上』を得ようというものです。[客人が示す散人の道は辿り難いので、いまは「適然」でよししようといっているのだが、本文とは裏腹に「適然」を「上」とするかのような口吻がないわけではない]

私はあなたを『師^し』とし、あなたは私を『資^し』（導くべき相手）とします。人は衣食を欠くことはできません。私はあなたと遊ぼうと思います。今日のことはしばらくおいて、また後に論じ合ひましょう。

私はあなたのために歌を作ってみました。聞いてください」

雪堂之前後兮、（雪堂の前でも後ろでも）

春草齊。（春の草が一斉に出てきている）

雪堂之左右兮、（雪堂の右にも左にも）

斜径微。（斜めに細い径がある）

雪堂之上兮、（雪堂の上では）

有碩人之頎頎。(大きな人が嬉しそうにしている)

考盤於此兮、(それは賢い隠れ人で)

芒鞋而葛衣。(身に付けるのは草鞋に葛の衣)

挹清泉兮、(清らかな水を酌んで)

抱甕而忘其機。(甕を抱えたままそこに水を入れるのを忘れて)

負頃筐兮、(小さな籠を背負って)

行歌而采薇。(歩きながら歌って^{ぜんまい} 薇を採る)

吾不知五十九年之非而今日之是、(五十九年は間違っていて、いまが正しいのやら)

又不知五十九年之是而今日之非。(五十九年が正しくて、いまが間違っているのやら)

吾不知天地之大也、(結局何もわかっていない、天地の大きさも)

寒暑之變、(四季の変化さえも)

悟昔日之臞、(わかっているのは、かつては瘦せていたのに)

今日之肥。(今は太っていることくらい)

感子之言兮、(あなたの言葉に感じて)

始也抑吾之縱而鞭吾之口、(初めて勝手なことを言うのをやめて我が口を鞭で打った)

終也釋吾之縛而脱吾之鞵。(ついに我が束縛を解き、我が縄目から逃れられるのか)

是堂之作也、(この堂を作ったのは)

吾非取雪之勢、(雪の勢いを取るためではなく)

而取雪之意。(雪の意^{こころ}を取るため)

吾非逃世之事、(世の事物から逃げるためではなく)

而逃世之機。(世のからくりから逃げるため)

吾不知雪之為可觀賞、(雪は観てめでるべきであるとも)

吾不知世之為可依違。(世は反復してやまないものであることも、私は知らない)

性之便、(性情ののびるところ)

意之適、(意の適^じところ)

不在於他、(それ以外のところではない)

在於群息已動、(そこではもろもろのものが動き出し)

大明既升、(日がすでに昇っている)

吾方輾転、(私はまきに行こうとして)

一觀曉隙之塵飛。(暁の中に塵が飛ぶのを見る)

子不棄兮、(あなたが見捨てないのなら)

我其子歸。(私はついて行こう)

客人は嬉しそうに笑い、よしと言って堂より出て行く。

私とその後に従うと、客人は振り返ってうなずき、

「そなたはそなたであるな」

と言った。

(1)「雪堂記」がわかりにくいのは、蘇軾がこのころ大きな矛盾を抱え、矛盾を無理にときほどくことなく、からまり合ったままに書き記したためではなかろうか。(2)

キーワードの一つとして提示されているのが「適然」という概念だ。「適然」とは、適^{てきぜん}然^{たま}

たま然^{しか}、適^ゆくままに然^{しか}る、なるようになる、よろしいようになる、自然と最もよろしいようになってゆく……、といったような意味であろうか。「適然」は矛盾を超えるためのあくまでも暫定な解なのだろう。(3) 蘇軾は黄州に来て以来、数多くの詩文を記している、心の内は日々複雑に変化し、理解するのは実は容易でない。そもそも罪を得たことが蘇軾にとってどれほどの重大事であったのか、現代の我々には窺い知れないものがある。蘇軾は自分を新たにしようと真剣に取り組んだ。しかし、そうしなければならぬ理由が本当のところはわれわれにはわからない。詩文によって朝政の問題点を指摘するのは士大夫の義務^{したいふ}であると蘇軾は確信していたのだから、その信念を貫けばよいだけで、変わる必要性などないではないかとわれわれは考えてしまう。

(4) この「雪堂記」では、「散人」と「拘人」の間でもがいている。そもそも、蘇軾は8歳のときに4人のスーパースターに憧れ、科挙と制科に合格して超エリートの道を歩んできた。国と民のために尽くすことを生涯の目標としてきたのであるから、その意味では徹頭徹尾「拘人」である。だから、「散人」と「拘人」を対比させていたのでは蘇軾は前に進めないはずである。(5) 東の坡で農作業を始めてから陶淵明^{とうえんめい}に急接近した。蘇軾も陶淵明も、自己の平安だけを求めるのをよしとはしない。常に民衆の労苦を必ず思わずにはいられない。退隠した陶淵明も罪を得て蘇軾も社会に働きかける術^{すべ}を持たない。「適然」は究極的な解答にはならない

■陳季常見過三首

2月のある日、陳慥^{ちんぞう}（方山子^{ほうさんし}）（本章32ページ）が訪れ、すぐに立ち去つ

た。これが3度目の訪問である。

其の一

仕宦の身である間は常に人に対して畏れを抱かねばならなかった。

退居してからは、人目を気にせず、喜んで客人を迎えることができる。

貴君は黄州に来るときは私の家を宿としてくれ、

何ら馳走ができないのも気に留めることがない。

私はいう。

「東おかの坡ですばらしいことがありましたよ、

十ぼ畝にわたって麦を種えたのですよ」

貴君の目の内にある悦びの光をさらに増すためなら、

貴君の使用人にも、なけなしの白飯を振る舞ってしまいたくなる。

（「人目を気にせず、喜んで客人を迎える」という蘇軾のもとには頻繁に来客があった。

ここ1カ月ほどの間に、詩や文や手紙に記録されていることからわかるだけでも、陳

慥ちようの他に毛滂もうぼう、董鍼とうえつ、楊世昌ようせいしょうといった人々が来ている。毛滂は雪堂が完成した直後

に来て、その父毛細詹もういせんの依頼しよで書を所望し、董鍼とは詞を和した。楊世昌は蜀しよくの綿竹めんちく

の出身の道士で、このときは廬山ろざんから来てしばらく黄州に滞在した。この3人との交

流についてはすぐ後で見ることになる。「なけなしの白飯」については本章 284 ページ

に記述がある)

其の二

貴君を送って行く四十里の道は、

帆を吹く風に任せればよい。

川べりにならぶ千本の柳、

その影が順に酒杯の中へと落ちてくる。

この行は遠い別れではない……

この楽しさは窮まりがない……

ただ願うのは、長くこのようであって、

往き来が一生同じように続くこと。

（陳慥の住む岐亭と黄州は水路でつながっていた。先に岐亭から舟で蘇軾が帰ってくる
ときの詩を見ている（本章 147 ページ）。この詩の終わりに「来往一生同じからん」
と詠んでいるが、むろん一生続くものではなかった。陳慥が黄州に蘇軾を訪ねたのは
7回、蘇軾が岐亭に陳慥を訪ねたのは5回であったという）

其の三

聞くところでは、貴君は龜軒きけんを開いたとか。

龜軒の東側の欄干からは、高い木々が見おろされるという。

どうして龜軒なのか。

ある人はいう——貴君は事を畏れて、亀のように頭を縮めるのだと。

私は知っている——貴君はそうではないことを。

龜は太陽の気を嚙んで永遠の生を養う、
 貴君は朝飯ごとに東側の欄干から入る朝日を食らうのである。
 よかったら、その朝の光の余りを私にも分けてほしい。
 長寿を独り占めしてはいけませんぞ。

■次韻孔毅甫久早已而甚雨三首

こうへいちゆう あざな きほ きほ
 孔平仲（字は毅甫あるいは毅父）（本章240ページ）から送られてきた「久しく日照り続いたけれど、たくさん雨が降った」という詩に次韻した。

其の一

餓えた人は夢に見る——

おお、甑こしきに飯めしが溢れている……

ああ、たらふく食べられる……

いままでの百の憂いがすっかり消える……

夢の中での満腹——それはまさしく「空くう」である。

そんな夢を見ているくらいでは、

まだ真の餓えが何物であるのかを悟っていないのだ。

私の半生は農地を持たずに、硯すずりから飯を磨り出してきた。

ここにきて硯が枯れ、磨っても何も出なくなった。

去年は太歳たいさい（木星）が酉の方角とりにあったので、

そいう年は、酒食に事欠かないといわれているのに、

隣家に乞い願ってもなお得るところはなかった。

今年はといえば、日照りの趨勢がまだ続き、

この一年、我が竈かまどにどうやって煙を上げたらよいのやら。

青天せいてんに向かって叫んでも、天は遙か遠く……

答えはない。

泥の仏に頭を下げて……

やはり何ともならない。

笑ってしまうのは甕かめの中の蜥蜴とかげだ、

雨を降らせる仕事の見返りに天から秩禄ちつろくをもらっているはずなのに、

手脚を伸ばしたり縮めたりして這いまわっているだけではないか。

陰陽の入れ替わりにはその時節があり、

雨が降るべきときにはその定めがあるはずだ。

そもそも民は天が生んだものなのだから、

天は民あわを恤れみ、正しく自然を運行させるべきではないのか。

私はいま窮まり苦しんでいるとはいえ、

人より特にひどいわけではない。

要するに自分もまた民の一人であるだけだ。

私の姿は飼い主を失って途方に暮れている狗いぬのようではあっても、

誰かれ構わずに耳を垂れて我が身を委ねようとはしない。

冠は逆さま、頭巾は落としてしまって、
 蚊とともに襤褸家に暮らしているさまは、
 人に見せられたものではない。
 昔からの知り合いは、
 私が門を閉ざして開こうとしない^{いか}と嘖るであろうが、
 貴君に見てもらえばすぐにわかる通り、
 我が門は歪んで開かないだけなのである。
 有り難いことに、
 月の光は我が門からも入ってきて、
 私が部屋を水が撥ねるような明るさしてくれる。
 南からは風が入ってきて、
 疲れ切った私のおしおとした気分をさっぱりと洗ってくれる。
 衣の裾をたくし上げてその風を入れ、
 貴君が送ってくれた「快哉の謠」^{かいさい うた}に和そうと思う。
 餓えと寒さの心配で、
 これまでは明日のことを思う余裕もない私であったのだけれども。

（孔平仲の詩「快哉の謠」は恵みの雨によって旱魃の危機を脱した喜びを歌っていて、
 それを読んで明日への希望を得たというのがこの第1首。蜥蜴に水をかけて雨乞いをする
 ことは第5章197ページでみている。途中にある「要するに自分もまた民の一人
 である」^{ようするにまたおのすからたみのいち}の句は蘇軾の平等主義を示す貴重な句であろう）

其の二

去年は東の坡おかに瓦礫を拾い、

三百尺にわたって自ら桑を種え、

今年は草を刈せつどうって雪堂を建てた。

私は日あぶに炙られ風に吹かれ、

顔は日焼けと汚れで墨のように真黒である。

かつては怠けてばかりだったのを後悔している。

農耕に励むなら、天もその実直さをちゃんと認めてくれるのを、

いまになってようやく知った。

造化ぞうか あるじの主は無心なのかどうか、

そこのところは測り知れないとしても、

天は三尺にもなろうという雨をざあっと降らせてくれた。

雨を降らせる竜にはそれぞれに持ち場があると聞くが、

いまは四方も上も下も同じ一つの雲のうちだ。

草の下の土が潤ったならば、

明け方を待って耕しに行こう。

夜は燈火のもとで機織りをしよう。

そのように思いつつも、

老いた私は疲れてごろんと横になってしまう。

腐れ儒者であるこの私も、自ら精出して耕すなら、
 人々の憐れみを受けることなく、
 乏しいながらも百年の暮らしを支えることができるであろう。
 そうこうしていると、垣根の東から履音を響かせてくる人がいて、
 「奔流がやまなくて、長江の谷は水でいっぱいです。
 折れた葦やら枯れた荷やらが恣はに漂はっています」
 と言う。

この雨でこらの陂つづみが破れてしまったならば、
 水が漏れて、次の日照りのときには大変なことになる。
 人力のまだ及ばないところは、
 天がよしてくれるのを求めるしかないのか。
 西北側に千歩の長さにわたって塘つづみを作り、
 山からの水を遮るようにしたらよいであろう。
 人々は私には銭がないのを知っているけれど、
 近所の人々はたぶん連れ立って助けにきてくれるだろう。
 そうなれば、来年は水路を勢いよく流れる雨を、
 何の心配もなく眺めていられるはずだ。
 餓えるか飽くかは自分自身の努力にあって、
 天が関与することではないのだ。
 豊作を祝って、一緒に田の中で誰が飲んでくれるだろうか。

酔って倒れても、我が腕枕さえあれば事が足りるだろう。

其の三

天公てんこう（天帝）は号令てんていを一度しか出さないという。

雨が降ったら降りっぱなし、

十日も続けば長雨を愁うようになる。

貴君の家には田圃があるから、田圃は水びだし、

私の家には田圃はないが、家が水をかぶることを心配しないとならない。

ここに蜀人しよくじんの楊道士ようどうしがきたのだが、

己の両膝だけに従って万里を気ままに旅し、

ひとひらの葉っぱのような小舟があれば、

流れに沿うのもよし、遡るのも悪くはない、

草でも麦でも、食べるものに頓着しない、

泥の中を行こうが地面に寝ようが疾やまいになることもない。

私とはいえば、夜になると餓えた腹がぐうぐうと雷のように鳴るし、

ここに身を寄せる愁いは酒がなければ開くことができない。

杜甫とほは、秋の長雨の下で苔むす白骨を見るときは、

酒を飲まずに哀しむのがよいと詩に歌った。

楊道士ようどうしが洞簫とうしょう（笛）を手にして清らかに吹く曲は、

それだけですでに十分にもの哀しい。

(楊道士とは先に本章 252 ページで名を挙げた楊世昌ようせいしょうである)

■書淵明飲酒詩後

東の坡おかで農耕に励む蘇軾そうえんめいはよりいっそう陶淵明とうえんめいに接近する。この年に作られたとされる詩文をまとめていくつか見ておこう。

陶淵明の詩を書き、その感想を記した短文。

顔生稱為仁、(孔子こうしの弟子の顔回がんかい(顔淵がんえん)は仁者と称えられ)

榮公言有道、(その昔の隱者そいけいきの榮啓期は道を得た人といわれた)

屢空不獲年、(顔回がんかいはしばしば食べ物あじが得られなくて若死わかしに)

長饑至於老、(榮啓期えいけいきはずっと餓うえたまま老おいいた)

雖留身後名、(死後しご、その名を残のこしたもの)

一生亦枯槁、(二人の一生は枯れ果くてたものであった)

死去何所知、(死しんでしまえば、名が残のこったところで知しることではない)

称心固為好、(もとより生きていて心こころこかなうのがよいのだ)

客養千金軀、(千金の価値かちがあるととしてその身体を養やしなって)

臨化消其宝、(死しに臨まんででは、その宝たからを消くさなければならない)

裸葬何必惡、(裸はだかで葬くわられるのも必ずしも悪わるくない)

人当解意表、(人は生死せいじの本当の意義いぎを理解りかいしなければならぬ)

これは陶淵明の「飲酒」の詩である。飲酒の最中に、どうしてこれだけたくさんことを記すことができたのか、私にはわからない。

げんぼう

元豊五年三月三日、私は客人と酒を飲み、客人がこの詩を書くように言った。それでその後ろにこのように記す。

(1) 蘇軾お酒は好きでもあまり強くない。酔中にこれだけ味わい深い詩は作れないと素直に感心したのだろう。(2) 中国では伝統的に死者を厚く葬ることをよしとし、「らそう裸葬」を嫌った。豊富な副葬品があることで、死後の世界で豊かに暮らせると信じていたのである)

■書淵明乞食詩後

次は、とうえんめい陶淵明の「こつじき乞食」(食を乞う)の詩への感想。

陶淵明は一回の食を得て、恵んでくれた主人に、「せめて冥土から恩返しをいたします」と詩中に詠んだ。これはおこもさん丐者のたいい言い草の類である。

私は実に哀しいと思う。私一人が哀しむのではなく、世を挙げて哀しまない者はいないだろう。

飢えと寒さは常に目の前にある。名声は死んで後に定まる。この二者は互いに矛盾し、それによってひと士は苦しまなければならない。

(陶淵明の「乞食」の詩は、官職を得ようと懸命だったころの作。人の恩顧を得るために、わずか一食の恩に対しても、身を屈して卑屈な言葉を並べなければならない辛

さを詠んだ)

■題所書帰去来詞後

毛維瞻もういぜん あざな こくちん（字は国鎮）の依頼とうえんめいで陶淵明とうえんめいの「帰去来の辞ききよらい じ」を書き、それにこの短文を添えた。「帰去来の辞」は陶淵明が官職を棄てて帰郷したときの心情を記した作品。

（毛維瞻は弟の蘇轍いんが流された筠州の知事。蘇軾しよが7歳のときに科挙に合格した官界の先輩で、筠州では轍と多数の詩を唱和した。この年で退官することになり、息子の毛滂ぼう（本章252ページでその名を挙げた）を黄州に寄越して蘇軾しよに書を求めた）

毛維瞻は私に書を求め、「林下りんかにおいて眺めて楽しむものを」ということであった。それで陶淵明の「帰去来の辞」を書いて贈ることにした。

毛維瞻は果たして林下の人なのだろうか。譬えていうなら、扇の絹地に、冬の林や雪の竹を画く——世間において得難い高潔さを画く——それこそが毛維瞻で、本当は朝廷の中央におられるのを観みるべきなのである。

■江城子

陶淵明とうえんめいの斜川しやせんでの遊びを想っての詞。序文がある。

（陶淵明が若い頃に斜川で遊んで詩を詠んだことについては第5章330ページで見ている）

陶淵明は正月五日に斜川に遊び、人々と流れに臨んで並んで座り、南阜(廬山)
を眺め、また曾城山の特に秀でた姿を愛で、斜川の詩を作った。その詩によって
いまもその場を想い見ることが出来る。

元豊壬戌の春、私は東の坡を躬から耕し、そこに雪堂を築いた。南に四望亭の
後ろの丘、西に北山の小さな泉がある。ふと嘆息して、これもまた斜川の遊びと
同じであろうと感じ、「江城子」の詞を作って歌った。

夢中了了醉中醒。(夢の中でこそはっきりっきり、酔った中でこそ醒めています)

只淵明、(きつと陶淵明は)

是前生。(我が前世なのでしょう)

走遍人間、(人間世界を遍(あ)る)

依旧卻躬耕。(旧にもどって自ら耕します)

昨夜東坡春雨足、(昨夜は東の坡に雨が足り)

烏鵲喜、(鳥も鵲も喜んで)

報新晴。(新たな晴れを報せてくれます)

雪堂西畔暗泉鳴。(雪堂の西のあたりで秘かに泉が鳴っています)

北山傾、(北の山が傾き見え)

小溪横。(小さな溪流が横に流れます)

南望亭丘、(南に望む^{あずまや}亭と丘)

孤秀聳曾城。(ひとつ秀でて聳えるのはかの曾城山)

都是斜川当日景、(すべてこれはあの日の斜川の景色)

吾老矣、(私は老い)

寄余齡。(ここに余生を寄せるのです)

(蘇軾は我が前世は陶淵明であるとまで歌う。(1) 最後の句に「寄余齡」(余齡を寄せる)とあるのは、「我が生は寄せるが如きのみ」としばしば歌ってきた末に、最後に寄せるのはここであると思いついたのであろう。こことは、黄州の東の坡に限定されるのではなく、斜川を想見できるところならどこでもよい。陶淵明の心と蘇軾の心は数百年の年月を隔て共鳴し、そして2人の心はまた誰かの心と共鳴し、宇宙のどこもが斜川であり東の坡となるのである。(2) この序文から、雪堂が四望亭(本章57ページ)の北側に位置することがわかる)

■ 哨徧

陶淵明の「^{ききよらい}帰去来の辞^じ」を改作してこの詞を作り^{とうえつ}董鉞^{あざな}(字は^{きふ}毅夫)に贈った。短文が添えてある。

(^{はよう}董鉞の名はすでに本章252ページで挙げたが、^{はよう}鄱陽の人で、何らかの罪によって失職し、帰郷する途中で黄州に蘇軾を訪ねた。この詞を贈ったのは5月のころであったようだ)

陶淵明は「^{ききょらい}歸去来の辞」を作った。その詞はあるがその声はない。

私は東の坡で耕し、^{せつどう}雪堂を建てた。人はその陋^{ひなびて}いるのを笑うのだが、^{はよう}鄱陽の董鋌だけはここに来て悦んでくれ、隣に住みたいとまで言った。そこで、「^{こじば}歸去来の辞」の詞を使い、やや改変して声律に合うようにして、董鋌に贈った。

東の坡に行って、家の者にこれを歌わせ、^{すき}耒を手にとり、^{ふし}牛の角で節を取ったなら、きっと楽しいであろう。

為米折腰、(米のために腰を折りました)

因酒棄家、(酒がましくて郷里を棄めました)

口体交相累。(口と体がこもこも^{わずらい}累となりました)

歸去来、(帰りましょう)

誰不遣君歸。(誰が君を帰らせてくれないの)

覺従前皆非今是。(わかりましたよ、これまでは全部が駄目、いまがよいのです)

露未晞、(露はまだ乾きません)

征夫指予歸路、(旅人は私の帰り道を指してくれます)

門前笑語喧童稚。(門の前で子供たちがにぎやかに笑っています)

嗟旧菊都荒、(ああ、もどからあった菊はみんな枯れてしまいました)

新松暗老、(新しい松がもう立派に暗い蔭をつくっています)

吾年今已如此。(私の年齢はすでにこうなのです)

但小窓容膝閉柴扉、(小さな窓のある部屋に膝を入れて門を閉じましょう)

策杖看孤雲暮鴻飛。(杖をついて、ぼつんと雲が暮れ、鴻が飛ぶのを見るのです)
おおどり

雲出無心、(雲は無心より出て)

鳥倦知還、(鳥は倦めば還るのを知っています)

本非有意。(もとより何の意もないのです)
こころ

噫歸去來兮、(ああ、帰りましょうよ)

我今忘我兼忘世。(わたしはいま我を忘れ、世も忘れました)

親戚無浪語、(親戚とも無駄口はたたきません)

琴書中有真味。(琴と書物の中に真の味があります)

歩翠麓崎嶇、(山の翠の高低を歩き)
みどり

泛溪窈窕、(谷川の奥深い流れに舟を泛べます)

涓涓暗谷流春水。(暗い谷からこんこんと春の水が流れてきます)

觀草木欣榮、(草木の伸び栄えるのを見るのです)

幽人自感、(ひっそりと生きる人は自分で感じます)

吾生行且休矣。(我が人生はこゝで終わってゆくのだと)

念寓形宇内復幾時、(思うに、宇宙に自分の形を寓するのはどれほどのことなのでしょうか)
くう

不自覺皇皇欲何之。(遠く遠くどこに行くとも知れません)

委吾心、(自分の心に任せればよいのです)

去留誰計。(行くもの留まるもの)

神仙知在何処。(神仙がどこかにいるかは知れません)

富貴非吾願。(富貴も私の願いてはありません)

但知臨水登山嘯詠、(ただ水に臨み山に登って吟唱するだけです)

自引壺觴自醉。(自分で酒を注ぎ自分で酔うのです)

此生天命更何疑、(我が人生はかくあれとの天の定めに疑いはありません)

且乘流、(さあ、流れに乗って)

遇坎還止。(止まるところに遇ったら止まるだけです)

(ある伝承によると、董鍼^{りゅう}は柳氏という女性と再婚してすぐに免官となった。董鍼は、にわかには地位を失ってしまうような男のもとに嫁いだのを、妻が後悔するのではないかと心配した。ところが、妻は帰郷する董鍼に喜んで従い、あたかもこれから富貴の道が開け行くかのような心持ちであるのを見て、董鍼ははなはだ安心した。そのような夫婦であるなら、この「帰去来の辞」の替え歌はまことに似合う)

■集帰去来詩十首

これは陶淵明^{とうえんめい}の「帰去来の辞」^{ききょらいじ}の語句を使って 10 首の詩に編集し直したものだ。短い序文がある。

私は陶淵明の「帰去来の辞」を読み、その字を集めて十の詩にした。いま子供らにこれを吟唱させている。題して「帰去来集字」という。

(この 10 首の詩は、職を棄てて故郷に帰ると決意と、その結果として得られた自由な心境を繰り返し歌っている。参考のために「帰去来の辞」の原文を後に掲げ、両者

に共通する文字を赤色で示す)

其の一

- 命駕欲何向、(私はどこに行こうとしているのやら)
- 欣欣春木栄。(春の木が喜んで栄えているこのときに)
- 世人無往復、(もはや世間の人と関わることはない)
- 郷老有逢迎。(故郷の老人たちが迎えてくれるであろう)
- 雲外流泉遠、(雲よりも遠くで流れる泉)
- 風前飛鳥輕。(風に誘われて鳥は軽やかに飛ぶ)
- 相携就衡宇、(さあそこにある我が家に帰って)
- 酌酒話交情。(酒を酌んで心置きなく話そうではないか)

其の二

- 涉世恨形役、(世渡りの奴隷となっていたために)
- 告休成老夫。(やめると告げたときにはもう老人になっていた)
- 良欣就歸路、(よこんで歸路につき)
- 不復向迷途。(迷いの途みちに向かうことはもうない)
- 去去徑猶菊、(去り行く道に以前通りに菊が咲き)
- 行行田欲蕪。(行き去る田は荒れてしまっている)
- 情親有還往、(これからは心親しむ者とだけ行き来し)

清酒引罇壺。(酒壺からうまい酒を飲むでしょう)

其の三

与世不相入、(私は世間とはうまくいなくて)

膝琴聊自歎。(膝に琴を載せてせめてもの歓びを味わってきた)

風光歸笑傲、(自然の風光は帰ってきた私を笑って迎えてくれ)

雲物寄遊觀。(雲を眺めて自由に遊ぶ気持ちを寄せる)

言語審無倦、(自然との包まぬ対話は飽きることがなく)

心懷良独安。(心おもいにうちの懷はまことに安らかである)

東臯清有趣、(東おかの臯はことに清らかな趣おもむきがあり)

植杖日盤桓。(杖をついて日に何度も行きつ戻りつする)

(この詩に終わりにあるように、蘇軾とうばは東坡=陶淵明とうこうの東臯に、臨臯亭りんこうていから毎日のように通っていた)

其の四

世事非吾事、(世間のあれこれは私には関係がない)

駕言歸路尋。(いざここにと帰る路を尋ねる)

向時迷有命、(これが我が定めかとの迷いもあったが)

今日悟無心。(今はもうきっぱりと無心でいられる)

庭内菊歸酒、(庭の内の菊のもとに帰って酒を飲めば)

窓前風入琴。(窓辺の風が琴の音に入りこむ)

寓形知己老。(形をこの身に寓してすでに古い)

猶未倦登臨。(高いところに登って臨むに倦むことはない)

其の五

雲岫不知遠。(雲の立つ峰は遠くにあり)

巾車行復前。(車は前へ前へと行き進む)

僕夫尋老木。(伴う僕夫は老いた木のもとへ)

童子引清泉。(伴う童子は清らかな泉のもとへと行く)

矯首独傲世。(頭を上げて世の中を見回し)

委心還樂天。(天の与えてくれた運命に心を委ねて楽しむとする)

農夫告春事。(農夫が春の農作業を教えてくれたので)

扶老向良田。(老いの身を助けて田畑に向かうとしよう)

其の六

富貴良非願。(富貴などはもとから願っていないかった)

鄉関歸去休。(故郷に帰ればよいだけなのだった)

携琴已尋壑。(琴を携えて谷を尋ね)

載酒復經丘。(酒を載せて丘を巡る)

翳翳景將入。(日が蔭って沈もうとし)

涓涓泉欲流。(泉はいつまでも流れ続ける)

農夫人不樂。(農夫の仕事は楽ではないけれど)

我独与之遊。(私は独りそれに遊ぶのである)

其の七

觴酒命童僕。(童僕に酒を命じ)

言歸無復留。(帰ると己に言って、もう留まることはない)

輕車尋絕壑。(車を軽やかに走らせて谷の奥を尋ね)

孤棹入清流。(舟を清流に浮かべよう)

乘化欲安命。(自然の変化に任せて運命に安んじ)

息交還絶遊。(世間とのつまらない交わりは絶ってしまうのだ)

琴書樂三満径。(琴と書物の楽しみだけで十分で)

老矣亦何求。(老いてはそれ以外に求めるものはない)

其の八

歸去復歸去。(帰ることだけがある)

帝鄉安可期。(神仙の世界も期待しない)

鳥還知已倦。(鳥が帰るのはもう十分であると知っているから)

雲出欲何之。(雲は出てどこに行こうとするのか)

入室還携幼。(部屋に入るときには幼い子を伴い)

臨流亦賦詩。(流れに臨んで詩を賦す)

春風吹独立。(春の風に独り吹かれて)

不是傲親知。(何かを人に誇るわけでもない)

其の九

役役倦人事。(ごたごたとした世間の事がいやになり)

来歸車載奔。(車を走らせて帰って来た)

征夫問前路。(この先の道を問いつつ来ると)

稚子候衡門。(幼い子供たちが門で待っていた)

入息亦詩策。(家に入って詩を吟じ)

出遊常酒樽。(外を出歩くときには酒樽を携える)

交親書已絶。(親しい者からの手紙も絶えて)

雲壑自相存。(雲と谷があるのを見るだけだ)

其の十

寄傲疑今是。(心豊かないまがたぶん正しくて)

求榮感昨非。(栄えを求めていた昔は間違っていたのだ)

聊飲樽有酒。(樽にいくらかの酒があるのを喜ぼうではないか)

不恨室無衣。(着るものがなくてもどうということはない)

丘壑世情遠。(丘や谷は世俗から遠く離れ)

田園生事微。(田や園にはささいな事柄しかない)

柯庭還独盼、(庭の木々は実に美しく)

時有鳥帰飛。(帰り行く鳥がその上を飛ぶ)

陶淵明:「帰去来辞」

帰去来兮、田園将蕪胡不归。既自以心為形役、奚惆悵而独悲。悟已往之不諫、知来者之可追。實迷途其未遠、覺今是而昨非。舟遙遙以輕颺、風飄飄而吹衣。問征夫以前路、恨晨光之熹微。

乃瞻衡宇、載欣載奔。童僕歡迎、稚子候門。三徑就荒、松菊猶存。携幼入室、有酒盈樽。引壺觴以自酌、眄庭柯以怡顏。倚南窓以寄傲、審容膝之易安。園日涉以成趣、門雖設而常閑。策扶老以流憩、時矯首而遐觀。雲無心以出岫、鳥倦飛而知還。景翳翳以將入、撫孤松而盤桓。

帰去来兮、請息交以絶遊。世与我而相違、復駕言兮焉求。悅親戚之情話、樂琴書以消憂。農人告余以春及、将有事于西疇。或命巾車、或棹孤舟。既窈窕以尋壑、亦崎嶇而經丘。木欣欣以向榮、泉涓涓而始流。善万物之得時、感吾生之行休。

已矣乎、寓形宇内復幾時。曷不委心任去留、胡為乎遑遑欲何之。富貴非吾願、帝鄉不可期。懷良辰以孤往、或植杖而耘耔。登東臯以舒嘯、臨清流而賦詩。聊乘化以歸尽、樂夫天命復奚疑。)

((1) この一連の詩は陶淵明の「帰去来の辞」の字句を編集し直したものであるから、蘇軾の作品とは見なされないのかもしれないが、「陶淵明は我が前世」というのである

から、正しく蘇軾の作品であろう。(2) 先人の詩句を借りて別の詩に組み立て直す「集句」という行為は、宋代に入って行われ始めたようで、王安石にもその作例があり、約150年後の文天祥の『集杜詩』が最も有名である。文天祥は宋が元(モンゴル)によって滅ぼされたときに最後まで抵抗した宰相で、北京で獄死したのだが、獄中において、杜甫の様々な五言詩から句を抜き出して約200首の五言絶句に組み替え、そこに自分の思いを託すということをした。言葉の遊戯だとの批判もあるが、文天祥の考えは、杜甫は人間の代表として詩を作ったのであるから、それは人間の共有財産として普遍的な価値を持ち、それを並べ直したものは人間の一人である自分の作品になるというものであった。集句に対する蘇軾の見解は後に本章353ページで見ることになる)

■寒食雨

冬至から105日目の寒食の日に詠んだ詩。

(この詩は、蘇軾自身が書いた真筆(行書黃州寒食詩卷)が残っていることで非常によく知られている。その「詩卷」は数奇な運命をたどり、元の時代には皇帝のもとに納められ、明の時代には民間の収集家のもとを転々とし、清の時代には再び皇帝のもとに納められた。後に円明園で保管され、英仏連合軍の攻撃によって円明園が全焼したときに、(幸いにも?) 略奪され、一部が焦げたものの生きながらえることができた。そして、再び民間の収集家のもとに渡り、日本人の入手するところとなり、関東大震災であわや焼け失せるというところを奇跡的に免れた。現在では、台北の故宮博

物院の所蔵物となっている)

其の一

黄州に来てから、

三度の寒食がすでに過ぎ去ろうとしている。

年年春を惜しもうとしているのに、

春はその気持ちを容れてくれずに去ってしまう。

今年はこのいやな雨、

ここニカ月間は秋の寂しさである。

雨音の下に臥している間に、

なめらかな雪の肌(かいどう)(海棠の花びら)も泥に汚されてしまったと聞く。

誰かが言ったように、夜というものはまことに力がある——

暗い中で時間を偷ぬすんで背負って行ってしまうのだ。

春とは少年のようなもの——

ふと病んでようやく起きられたと思ったら、

すでに頭は白くなってしまっているのだ。

(1) 陶淵明とうえんめいと時空を隔てた心の交流をする蘇軾は、それによって心が安定したように見えて、実はそうではなかった。この詩は重く苦しく、蘇軾の心の基底には常にこうしたものがわだかまっていた。この詩や「花に似て花にあらざるに似る」と楊を歌った詞(本章 168 ページ)が元来の蘇軾なのではないだろうか。(2) 「いやな雨、秋

の寂しさ」とは、秋の長雨の下で苔むす白骨を悲しむ杜甫とほの詩を引いて歌っているのを本章 259 ページで見ているが、それと通じている。待望の雨であっても、あまり続くと憂いとなる。(3) 蘇軾は黄州にきてすぐに定恵院じょうゑいんの東の山に海棠の花があるのを見つけていた(本章 52 ページ)。海棠は蜀を代表する花で、蘇軾自身の象徴でもある)

其の二

雨の勢いはやむことがない。

戸口から春の川が入り込んで来そうだ。

もはや我が小屋いかりびとは漁人の舟のよう、

濛濛もうもうとした水と雲の中にある。

がらんとした台所、

しなびた野菜を煮ようとしても、

竈かまどは壊れているし、燃やすべき葦は湿っている。

ただでさえ火を使えないのだから、

今日が寒食であると感じるのは、

墓しせんに手向けた紙銭くわを烏が銜えて飛ぶのを見てのこと。

ああ、我が先祖の墳墓は万里の彼方、

そして、皇城は九重の門の奥深く。

途みちに窮したと、瘦せ我慢をせずに、泣いたってよいのだらう。

火の消えた灰はいくら吹いてももう燃え上がらない……

(寒食の日には火を使わずに食事をし、紙で作った銭を墓に供えて祭る。蘇軾は逆境にあっても、悲嘆する詩を詠まないのだが、この2首は違う。終わりの部分は、杜甫が、途に窮したと泣きはしないと、詩に詠んでいるのを踏まえている)

■徐使君分新火

寒食節^{かんしょくせつ}には火を使わず、一夜明けて最初につける火を新火^{しんか}という。その新火^{じょだいじゆ}が徐大受知事から届けられた。寒食節の翌日は清明節^{せいめいせつ}。

臨臯亭^{りんこうてい}に独りぼつんと座り、

黄州^{きやうしゆ}にきて三度目の清明節^{せいめいせつ}、

新火を見ようとしていた。

私なんぞは笑うべき身、

溝の中に落ちた枯木同然で、

折って火をつけようとしたところで、

燃え立ちはしない。

長く病の内にある私を憐れんで、

黄州の知事さんは、

紅く燃える一本の枝を明け方に分け与えてくれた。

我が家の破れた釜はいつもからっぽなので魚が泳ぎ、

飯なんぞは食わなくても、痩せ我慢の詩を詠んでいる。

戴いた火を手にして、がらんとした部屋の内を見てまわると、

煮炊きするものが一つもない。

そうか、そうか、知事さんがくださった新火は煮炊きの火ではなく、

仏教でいうところの「無^む尽^{じん}燈^{とう}」であるのだろう。

こんあん
昏^{こん}暗^{あん}のうちにいる人々を順に明るく照らすのである。

〔「無尽燈」とは仏典にあり、ひとつの燈火が百にも千にも増えてゆくように、仏の教えによって明るく照らされる人が無限に増えてゆくことをいう〕

■定風波

黄州の東南百十里に蘄^き水^{すい}鼎^{てい}城^{じやう}があり、その途中に沙^さ湖^こがある。3月の始めに蘇^そ軾^{しやく}はそのあたりを往き来した。それに関連する幾つかの詞と文を見る。最初に詞から。短い序文がある。

三月七日、沙湖に向かう道中で雨に遇った。雨具は先に行ってしまったので、同行の者は皆狼狽したが、私だけは気にもしなかった。しばらくすると晴れた。そしてこの詞を作った。

莫^う聽^{たい}穿^{せん}林^{りん}打^う葉^{えつ}聲^{せい}、（聴くまでもありません、林を穿ったり葉を打ったりする音は）

何^{なん}妨^{ぼう}吟^{いん}嘯^{せう}且^{かつ}徐^{じゆ}行^{かう}。（何の妨げにもなりません、吟唱しつつ徐に行くことに）

竹^{すずき}杖^{わらじ}芒^{ぼう}鞋^せ輕^{けい}勝^{しょう}馬^ば、（竹の杖に芒の草鞋——これは馬に勝る軽やかさ）

誰怕。^{おそれ}(私は怕れません)

一蓑烟雨任平生。(煙る雨に蓑で包んだ身、そういう暮らしてよろしいのです)

料峭春風吹酒醒、^{ひやひや}(酒を醒ますのは料峭と吹きくる春風)

微冷、(うっすらと寒く)

山頭斜照卻相迎。(山のあたりが斜めに照らされて迎えてくれます)

回首向来蕭瑟處、^{こころ}(首を回せば、^{ひっそり}ここまで来たのは蕭瑟としたところ)

歸去、^い(帰り去こうか)

也無風雨也無晴。(風雨もなく晴れもないところへ)

(1) この詞から、蘇軾は草鞋履きで歩いていたことが知れる。かつての州知事時代には概ね馬にまたがるか駕籠に乗るかしての移動であった。(2) 前半の終わりにある「一蓑烟雨、平生を任せる」は一種の自画像。ゴッホといえばあの耳を切った自画像を想うように、後世の人々は蘇軾といえばここにある姿をイメージするようになった。(3) 後半は、これまでの歳月は雨の中にあつたが、これからは晴れて行くであろうということを暗示し、かつ、雨でも晴れでも構いはしないと結んでいる。先の「寒食の雨」の詩から「新火」の詩を経て軽やかな気分を歌っている)

■遊沙湖

蘇軾は何のために沙湖に向かっていたのか。この文章に記してある。

黄州の東南三十里に沙湖がある。螺師店ともいう。

私は黄州と沙湖の間に田を買おうと、その田の様子を見に行き、疾やまいを得てしまった。麻橋まきょうの龐安時ほうあんじが善よい医者で、かつ聾者ろうしやであると聞き、行って治療を受けた。

龐安時は聾者であるけれども、人より遥かに知恵の回りが速い。紙に字を書いて話をするのだが、数文字書いただけで、すぐに深く人の意こころがわかってしまう。私は戯れて、「私は手をもって口と為し、あなたは眼をもって耳と為す。どちらも現代の『異人』でありましょう」と言った。

疾やまいが愈えたので、龐安時と一緒に清泉寺せいせんじに遊んだ。寺は蕲水きすいの町の門から二里ばかりのところにある。昔ここで王羲之おうぎしが筆を洗ったという泉があり、その水は極めて甘い。寺から下に蘭溪らんけいを臨み、蘭溪の水は西に流れる。私は歌かんけいさ（「浣溪沙」の詞）を作った。

山下蘭芽短浸溪、（山の下の溪川に短く伸びた蘭の芽）

松間沙路淨無泥、（松の間は泥のない沙の道）

蕭蕭暮雨子規啼、（蕭蕭と夕暮れの雨が降る中、子規ほとぎすが啼いています）

誰道人生無再少、（誰が言うのでしょうか、人生に若いときは再びないと）

君看流水尚能西、（見てください、流れる水だって西に向かっているではありませんか）

休將白髮唱黃鶯、（鶯が鳴くから白髪が増えてしまうなどと嘆くのはおやめなさい）

この日は劇飲して帰った。

(1) 東の坡おかは高台なので、稲を作れるような低い土地を得ようとしたのだろうか。蘇軾は家計が苦しいことを前に述べていたが、具体的にどのような経済状態であったのかはよくわからない。田を買う蓄えくらいはあったのだろうか、使用人は何人くらいいたのだろうか。沙湖には何人かの同行者がいたと推測され、別の詩には「童僕どうぼく」という語が散見されるので、幾人かの使用人がいたのは間違いない。(2) 田を見に行き、病気になる(次の文などから左肘が腫れたとわかる)、麻橋まきょう (蕪水きすい県に属する村)の医者ほうあんじ、龐安時あざな あんじょう (字は安常)の治療を受けた。「手をもって口と為す」とあるのは、筆談の情景であるのだが、思うことをたちまち詩文にしてしまう日頃のあり方(それが罪を蒙る要因となった)をもいっているのだろう。(3) 詞の後半で「流れる水が西に向かう」とあるのは、中国において川は基本的に東に流れるからで、川が西に流れるなら時間も逆転するだろうというのである)

■書田

蘇軾は田を欲しがったことは次の短文にも見える。

私には世の中にこれといって求めるものはない。ただ二頃けいの稲田があればよい。それで十分に粥が食べられるだろう。あちこち訪ねまわっているのだが、全くもって得ることができずにいる。私が進む道に艱難が待ち受けるときには、どこに行こう

としてもまいかないものなのだろうか。そもそも人が生きるには、自ずから定まって持ち分があって、ささやかな満腹といえども、名声や富貴と同じくらいに、軽々しくは得られないようになっているのだろうか。

(一見すると絶望しているかのようだが、実はそうではない。ここにある「人の生には自ずから定まった持ち分がある」(人生自有定分)とは、運命によって決まっているのだから諦めるしかないという意味ではない。そのような大局観を得ることで、先の詞に見た「風雨もなく晴れもない」(也無風雨也無晴)という境地になれるのである)

■単龐二医

これはほうあんじ龐安時ともう1人の医者について記した短文。

しよく蜀の人のたんじゆう単驥は、科挙を受けたものの不合格となり、その後、医術をもって高い評判を得た。その術はなんきよう『難経』そもん『素問』といった古い医学書に基づき、そこから新たな工夫を出し、しばしば巧みな技を發揮してみごとに治した。ただ完璧というわけではなかった。じんそう仁宗皇帝が病気になったときに、そんちゆう孫兆とともに単驥が治療に当たった。しかし、よい効果がなくて皇帝は亡くなってしまった。二人は(治療に失敗したことから)死罪になるところを、こうたいごう皇太后(仁宗の曹皇后)の優しさをたのみとして、医者そうこうごうの罪ではないとされ、数年間の官職停止ですんだ。単驥はいま朝廷の官僚となり、孫兆はすでに亡くなった。

私は黄州に来たところ、隣の町に龐安時という評判の医者が出た。その医術は

単驥に似ていて、それに加えて鍼はりの術が絶妙である。ただ、聾ろうを患いそれを自分で治すことはできなかった。人の病を愈やすことでは神のようである。古の人も目を見張り、称賛するであろう。

単驥も龐安時も治療代を厳しく求めることはなく、様々な事物や歴史にもひろく通じていて、それも人より優れている。

元豊五年三月、私はたまたま左腕の腫れを患ったところ、龐安時は鍼ですぐに治してくれた。それでこのことを記しておく。

(仁宗皇帝の病気は症状から推測するに脳梗塞ないしは脳出血であったようで、何度か発作を繰り返し、後遺症による言語障害や身体麻痺もあった。いかに名医であっても、宋代の医術でそれを治すことは不可能であったろう。朝廷内の権力抗争もからんで、孫兆と単驥が死罪になりかけたのを曹皇后が救った。曹皇后が優れた人であったことは、蘇軾が獄中で詩に詠んでいる(第5章397ページ))

■西江月

同じ時期に詠んだ詞。短い序文がある。

春の夜に、蘄水きすいのあたりを歩き、酒家しゅかに寄って飲んだ。酒に酔い、月に乗じてある川の橋の上にもで行き、馬から下り、肱ひじを曲げて休み、しばらく眠った。目が覚めるともう暁に及んでいて、たくさんたぐさの山が並び立ち、水が音を立てて流れていた。人の世ではないように思えた。それでこの詞を橋の柱に書き付けた。

照野弥弥浅浪、(野を照らすのは弥弥と流れる浅い浪(によって反射する月の光))

横空隱隱層霄。(空に横たわるのは隱隱と重なる雲)

障泥未解玉驄驕。(泥除けをまだ解かない白い駿馬は元気いっぱい)

我欲醉眠芳草。(でも私は酔って草の上で眠ってしまうのです)

可惜一溪風月、(愛すべきはこの川べりの月)

莫教踏碎瓊瑤。(美玉のような光を踏み潰してはなりません)

解鞍欹枕綠楊橋。(鞍を解いて枕とします、緑の楊の橋で)

杜宇一声春曉。(杜宇が一声鳴けばもう春の暁です)

(橋の上で眠って朝を迎えたのが事実であったかどうかはわからない。3月の中ごろはいまの暦で4月後半だとしても、橋の上で夜明かしできるほどに暖かくはないだろう。先の詞にあった「一蓑烟雨、平生を任せる」の一つの姿としてこのように己を描いてみせたのだろう)

■二紅飯

上の詞のように、蘇軾は詩文の中でしばしば酒を飲んでいるが、普段はどのような食事をしてたのかということはあまり言及されない。この短文は貴重な作。

今年、東の坡で大麦二十石余りが収穫できた。これを売ったところで非常に安い値にしかないし、ちょうど粳米がなくなるうとしていたので、使用人に課してこれを舂き、飯として食べることにした。大麦の飯は嚼むと嘖嘖と音がし、小さな子供たちは歯を食いしばって、「虱子かみかみ、かみかみ虱子」と声を合わせる。それでも、午後の腹が減っているときには、水でひたしてふやかしてやると、甘酸っぱくてさらさらと食べることができ、西北の田舎村の風情がある。今日は、料理人に小豆とまぜて炊いてもらったところ、これは最も味がよかった。老妻は大いに笑って、「これは新発明の『二紅飯』でございますね」と言った。

(1) 東の坡を開墾して2年目で大麦20石が収穫できたのは特筆すべきことであつたのだろう。(2) 「西北の田舎村」とあるのはかつて赴任した鳳翔のあたりを指すのだろうか。水田は中国の南東側(淮河、長江の下流域)に多く、その米を洛陽や長安に運ぶために隋の煬帝は大運河を建設した。鳳翔は長安よりもさらに西で、米は貴重品であつた。(3) どうやって大麦を食べたらよいのか工夫し、小豆と混ぜて炊くのが最もよいと発見した。大麦は薄い紅色を呈するので、小豆と合わせて「二紅飯」というのである)

■次韻答元素

楊繪(字は元素)から送られてきた詩に次韻した。序文がある。

(楊繪は、蘇軾が杭州を離れる寸前に知事として赴任してきた人(第4章186ページ)で、短い期間に多数の詞を贈答し合った)

私がかつて楊絵に贈った詞に「天涯同是傷流落」(天涯同じ是れ流落を傷む)という句があった。楊絵は、(送ってきた詩のなかで)この句は今日のありあさまをあらかじめ示すものであったと言って、そのとき一緒だった六人の存亡を悲しんだ。六人とは、張先(字は子野)、劉述(字は孝叔)、陳舜俞(字は令挙)、李常(字は公択)、そして楊絵と私である。

(上に言及している6人が集まった酒宴については本章204ページで見ている。張先、劉述、陳舜俞の3人は先に亡くなり、楊絵、李常、蘇軾の3人は健在であったが、それぞれに官界では不如意な状況に置かれていた。かつて詠んだ「天涯……」の句を含む詞は感傷過多の凡作に思えたので第4章では訳さなかったのだが、時間の経過によって句が重みを得たのであろう。しかしながら、以下の詞はこうした感傷を笑い飛ばすものである)

愁うことでもないのでは――

春が終り、柳絮が風に随って飛んだりしても。

喜ぶことでもないのでは――

仙薬の効果があって頬に紅が増したりしても。

あらかじめしるしがあったりするのだろうか――

天の涯に流落することに。

たまたまうまくいってしまうこともあるか――

銅の像とともに数百年の歳月を見るようなことも。

はっと覚めたら何もかもが夢であった——

というわけではないだろう。

はたと悟ったら全てが空^{くう}であった——

そういうわけでもないだろう。

生きるか死ぬか、六人の者をあれこれ悲しむ必要などない——

地獄も浄土も結局は同じなのだから。

（楊繪は、きっと感傷的な詩を返してくると期待していたのだろう。それがわかるから、蘇軾は諧謔的な言辞を敢えて並べたのだろう。楊繪はそういう洒落が通じる相手であるからよいのだが、場合によっては気分を害することもあろう）

■臨江仙

この詞は、上の詩と同じころにやはり楊繪（字は元素^{ようかい あざな げん そ}）に贈ったものであるらしい。

詩句端来磨我鈍、（貴君の詩句がきて鈍い私を磨いてくれましたが）

鈍錐不解生銛。（鈍い錐である私は袋の中にあっても鋭さを見せるようなことはできません）

飲顔為我解冰霜。（貴君の飲みの顔は私を閉ざす氷を融かして下さり）

酒闌清夢覺、（酒たけなわにして夢はさっぱりと覚めて）

春草満池塘。（池のほりは春の草でいっぱいになるでしょう）

応念雪堂坡下老、(東の坡の雪堂で老いるこの私は)

昔年共采芸香。(昔ともに宮中の書庫の香の内にありました)

功名遂早還郷。(貴君は功成り名を遂げて郷里に帰ることでしょう)

回車來過我、(車を回らせて私を訪ねてくださるのなら)

我喬木擁千草。(私は庭の木、庭の草とともにお迎えしましょう)

(1) 後段にある「共采芸香」は、宮中の「芸閣」(書庫)でともに仕事をしたことを意味し、この詞が楊絵に贈られたと推測する根拠となっている。(2) これは楊絵が黄州に立ち寄った際の送別の詞であるという説もある。楊絵はこのころに黄州から数十キロ下流の興国軍の知事(「軍」は行政単位の呼称。州と同レベル)となったので、赴任する際に黄州にまで足を伸ばしたのかもしれない。ここの訳は、楊絵がこれから黄州を訪問するという詩を寄越した返事であるという解釈に基づく)

■怪石供

蘇軾は赤壁で美しい石を拾っている(本章 107 ページ)が、これはその後日談。

『書経』の「禹貢篇」に「青州に鉛、松、怪石がある」と記されている。これを解釈する者は「怪石とは石で玉に似たものである」という。

いま齊安(黄州)の長江のほとりて美しい石がよく得られる。玉と区別しにくく、紅、

黄、白が多い。石には、人の指にある螺しもんのような、精妙で愛すべき模様がある。巧みな者こころが意を尽くして描こうとしてもこれには及ばない。これが昔の人のいう「怪石」なのだろうか。

物が醜よいか好よしいかは、その形や見栄えから生じるのだから、私は醜しゅう、好こうのもとがどこにあるのかいまだにわかっていない。もし世の中の石がおしなべてこの美しい石のようであったなら、いまは平凡とされる石がかえって非凡な怪石となるのではなからうか。

世界には形態でものを語り合う国があるという。口ではものが言えなくて、身体からだの形態で伝え合うのだ。形態で語るのは口で語るより速いというけれど、我々がそれをしようとしても非常に難しいであろう。

天あめの機が動くときには、美しい石だろうが形態でものを語る人だろうが、たちまちできあがるのだが、人はそれをひどく巧みであるとする。そうしたものでありながらも、怪石は、「禹貢篇」の書かれた時代から「怪かい」であるとされてきた。

齊安の子供等は長江で水浴をして時々この怪石を得る。私は遊びで餅餌へいじ(小麦で作った平たい団子)と石を交換し、すでに二百九十八枚を得た。大きいものは二寸、小さいものは棗、栗、菱、芡はすのみの大きさである。虎や豹の首のようで、口、鼻、眼らしいところがあるのも一つあり、それを群石の中の長おさとしている。

古い銅の盆(鉢)が一つあったので、そこに石を盛り、水を汲んで注ぐと、きらきらと輝く。

廬山ろざんの帰宗寺の仏印きそうじ禅師ぶついでんの使者がたまたま黄州にきたので、この怪石を禅師

に供えることにした。禪師はもとより道眼(悟りを開いた眼)をもって一切を観ている(世界の本質を得ている)。その観点からすれば、世界は混沌として空虚、一切の物は実は存在していない。夜光の一尺の璧(古来有名な宝玉)も瓦礫と同じである。ましてこの怪石などは取るに足りないものである。

しかし、禪師におかれては、これを供えることをどうか受け入れていただきたい。硯に注ぐ水をこれにかけて、無理にでも一つ笑っていただきたい。そしてこれからは、山の僧や野の人が禪師に何かを供えようとするときに、衣服や飲食や寝具をまかなう力がない者は、浄らかな水を怪石に注ぐということにしてはどうだろうか。私からその慣習が始まったということになるであろう。

元豊五年五月、黄州の東の坡の雪堂で書く。

(最後は、物として何も供えることのできないような人でもこれならできるという蘇軾のやさしい思いである)

■後怪石供

仏印禪師ぶついでんに供えた怪石かいせきの後日談。翌年の初めに参寥師さんりょう(道潜どうせん)が黄州にきて、4月頃に交わされた会話を記した。参寥は第5章299ページ以降しばしば登場している。

私が怪石を仏印禪師に供えたところ、仏印禪師は私の文を石に刻んだ。私はそれを聞いておかしく感じ、参寥さんりょうに向かってこのように言った。

「そもそも怪石がどこからきたのかといったら、子供たちから餅ぺいと交換して得たのです。食べられるものと、何の用にもならないものを交換したのです。それだけで十分に笑えます。仏印禪師は私の文をわざわざ石に刻みました。それもまた笑えます。もしも仏印禪師に初めから餅を供えたのなら、仏印禪師はそんなことを石に刻んだりしませんでしょう。石と餅はどこが違うのでしょうか。これでさらにまた笑えます」
参寥は、

「そうそう。供えるのも幻、受けるのも幻、言葉を刻むのもやはり幻であります。幻で結構ではありませんか」

そして、腕を挙げて私に示し、

「この腕きょうを拱きょうして(両腕を胸の前に組んで)人に挨拶しますと、人はきっと喜びます。この腕げきを戟げきして(腕を曲げて肘を突き出す)人を罵りますと、人はきっと怒ります。同じ腕でも喜ばせたり怒らせたり、異なったことになります。世の中はこういったことばかりです。拱も戟もつまりは幻で、喜びも怒りもあるようにいて根には何も無いのです。石に刻もうが刻むまいが、どうでもよいではありませんか」

私は大いに笑い、

「あなたはどれが正しいですか」

怪石およそ二百五十を示したところ、参寥は二つを手にとった。

■蜜酒歌

道士である楊世昌ようせいしょうから蜜酒みつしゅ(蜂蜜を水に溶かして発酵させた酒)の製法

を教わり、そのことを詩に詠んだ。楊世昌しよくが蜀みづかみの人で廬山ろざんからきたことは本章 252 ページなどで触れている。序文がある。

西蜀せいしよくの道士楊世昌みつしよは蜜酒みつしよを上手まじりけなに作る。極めて醇こい醜こい酒で、私はその製法を教えてもらったので、この歌を作って贈る。

六カ月もの間、農夫が汗を流し、

真珠まじゆにも玉たまにもたとえられる米ができて、

それからよい酒が作られる。

その香りは、春のうちから自かめずと甕かめに生じるこの酒には及ばない。

これは蜂が耕し、花を米とした酒だ。

作り始めて一日目には、魚が吐くような小さな沫あわが出て、

二日目には、きらきりと光が生じ、

三日目には、甕を開くとその香りが町中に満ちる。

十分に発酵するのを待たなくて銀の瓶びんに注ぐと、

いわゆる甘露かんろの少し濁ったもの、

あるいは醍醐だいごの少し澄んだもの、

一斗に百銭を払ってもよいくらいのこまやかさに声も出ない。

見るがよい、

畑の野菜の花に雨が降るように集まる蜂を。

天は蜂に酒を醸^{かも}すことを教え、
先生(私)を酔わせてくれるのである。
先生はこのところ骨の髄まで困窮し、
人に米を乞うても全く得られずにいた。
世間の万事は先生とは無関係に移り行く。
ただ蜂だけが大いに先生のことを気に掛けてくれているのだ。

■又一首答二猶子与王郎見和

前の「蜜酒」の詩に、蘇軾の2人の息子と王適^{おうてき}が和し、それに対してさらにもう1首詠んだ。蘇轍の娘の婿である王適^{じょ}は徐州で科挙を受けた(本章171ページ)のだが不合格となり、筠州^{いん}に帰る途中で黄州に立ち寄っていた。

青い苔が乾し肉に、青い蒲^{がま}が焼肉に、
瓠^{ひょうたん}の実が鴨の肉に、豆の煮汁が乳に、
肉の脂^{ヨードルト}が酥^{ろうそく}に、菜種の油が蠟燭に、……、
昔から種々の発明は、
貧乏な家に何もなくて、困り果てた人がひねり出してきた。
蜜酒もそのひとつだ。

とはいえ、何でもかんでも代用品でまかなうのでは自然の摂理を乱すであろう。

私は詩書を酒に代わる楽しみとしてきた。

それによって、田舎親爺が**いっばし**の先生のようにってしまったのだが、

しかし、根本がなっていないのだから、

いつまでも化けの皮を保ってられなくて、

冠をぬいで、^{すき}犁に助けられる親爺にまた戻ってしまった。

蜜酒はたとえ代用品でも、暑かろうが寒かろうが味は変わらないので、

ころころ変わるこの田舎親爺はととも及ばない。

田舎親爺の詩の味いは薄いのだが、

愛すべきは諸君三人が作った詩で、本物の酒のようにうまい。

そいえば、昔むかしある貴族の娘が王君とかい**おう**う人のもとに嫁いたところ、

ひどく浮かぬ顔でいるので、

一族の長が「^{おさ}夫君に何か^{おとぎみ}不満でもあるのかい」とその娘に尋ねた。

娘がいうには、

「我が一族の**ほう**某君、某某君、某某某君……は、

幼いころから見てきましたけれど、いずれも優れた男子です。

世の中の殿方とは全てそういうものだと思っておりましたのに……」

ああ、我が家では全く逆で、

息子どもを見ていたのでは、

^{おうてき}王適君のような人が世間にいるとは想像もできない。

(この詩の終わりは、同じ王姓の男児でも、昔の婿殿は期待はずれだったが、いまの

王適は非常に優れているとして、試験に落ちた王適を励まそうとしたのだ)

■ 帰来引送王子立帰筠州

おうてき あざな しりつ 王適 (字は子立) が とうえんめい 黄州を去るにあたって、き きょらい 蘇軾は陶淵明の「き きょらい 帰去来の辞」に基づく詩を作って見送った。この詩は、最初は王適が詠み (緑字で示す)、次に蘇軾が詠み (青字で示す)、それを繰り返すという体裁で訳す。

帰ろうではないか。

世間に求められなかったのだから、

帰ればよいだけなのだ。

北を見れば水がひどく溢れて流れ、

西を見ればひどく濁った塵に覆われ、

野には馬が乱れて走り回っている。

幸いにも我が首は馬のように繋がれていない。

じゅう 徐州を出て南に走り、

丘陵が続くのを見て、ためらいが増した。

わい がい 淮河の流れに乗って、

水面を俯き見て、自分の姿が以前と変わってしまったことに驚かされた。

そして、おか 東の坡に取り残されている老人のことを想い、

千里の道も軽いとして、
老人の家の扉を叩いた——
私は君と雪堂せつどうで清らかな夜をともに過ごし、
明月の光を身に浴びる。
かつて君がここに来たとき、
何の馳走もできず、
がらんとした部屋にあったのは虫の声だけだった。
私は君の袖を曳いて引き留めるのだが、
君の僕夫は早く帰ろうと促す——
帰ろうではないか。
道は遙かへと窮まることがない。
ここからどこに行くのか、
北の川から南へ、
南の川から北へ——
ここにいる君を見れば、
厳しく聳え立ち、豊かにして大きい。
貧窮のうちにあっても君が堂々としているのは、
糠を食らっているからではなく、
身の内に道を抱いているからだ。
君がますます穏やかであるのは、

己に打ち克っているからだ。

私はいま荒れた浪の中において、

視ても昏昏^{こんこん}として暗く、聴いても默默^{もくもく}として音がない。

君でなければ私の過ちを救うことはできない。

君をしばらく見ないしていると自分が損なわれてゆくのを恐れる。

私は君とともに行きたいと思う。

しかし、私が行く道はないのだろうし、

君もまた何かに畏れて私と一緒にいようとはしない。

そうだ、君には我が弟がいる。

君は宝玉の原石、弟はそれを磨^{こうじん}ぐ工人である。

(ちなみに、蘇軾^{しんかん}の弟子に当たる秦觀はこの春に都で科擧の二次試験に挑んだものの不合格となった)

■与李公択書

親友の李常^{りじょう あぎな こうたく}（字は公択）は黄州の近くにいた（本章 111 ページ）が、朝廷に召されて都に行くことになり、この手紙を送った。

行動を治め、用いるところを控えることについて、昔から変わるところがないと知りました。私は五十歳になって、それを初めて実際に活かせるようになりました。

大ざっぱにいうと「慳^{けちる}」に尽きます。飾って美しくいうなら「儉約」です。私かこれをす

るのはそこの俗人とは少しばかり異なって、まことに淡いといえますか、味のあるものです。古い詩に「不戢不難、受福不那(苦難が集まると、たくさん福を受ける)」とある通りです。口や体が欲しがるとは窮まることありません。いつもいつもそれを節制するならば、福を惜しみ、寿命を延ばす道となりましょう。これはごく俗なことのように、やむをえないところから出てくるものです。

私が思いますに、これは優れた策で、私独りで用いるよりはと、貴君にも献じたいと思います。貴君はこれから都に行かれるわけですが、ぜひこの策を用いられませう。お笑いだされよ。

(蘇軾は黄州にきて経済的に逼迫し、賈耘老かうんろうの法を用いるようになったことは本書118 ページで見ている。それは単に銭の遣り繰りにとどまらず、一つの哲学となったようだ。それを都に行く李常に授けたのである。この手紙は言葉足らずのようであるが、李常にはこれで通じるのだらう。なお鄂州知事の朱寿昌しゅじゅしょうも同じころに知事を辞めて、遠くに去っている)

■謝陳季常惠一掬巾

5月に陳慥ちんざう (方山子ほうざんし) (本章32 ページ) がまたきて、深く被るタイプの頭巾あんきん (掬巾) を土産に持ってきてくれたので、それへの謝礼の詩。

陳先生ちんせん (陳慥) の胸の内は一万斛こくの荷を積載する船を容れるほど広いのに、この丸っこい頭巾はどうしてなかなか小ぶりである。

とうえんめい こ
陶淵明は頭巾で酒を漉したというが、

この頭巾ではたった半升しか入らないだろう。

と きん
杜欽という人は(目の不自由さを嘲るあだ名で呼ばれるのを嫌って)、

別のところを目立たせようとして、わずか二寸のちんちりんの冠を被ったというが、
この頭巾はそれくらいの大きさしかない。

陳先生は、本来は武勲を挙げて黄金を頭に戴くべき人で、
いつまでも書生のような服を着て過ごしてはいないだろう。

いつかきと、

弓を手にや箭を腰に付け、異国の山を登って、そこの王を捕えることだろう。

(先にうんきん雲巾を贈られた謝礼の詩を詠んでいる (本章 239 ページ)。頭巾は贈答品として
用いられたのだろうか。蘇軾にはより似合う頭巾を被らせたいようなところがあ
ったのだろうか)

■贈黃山人

この詩を贈られたこうざんじん黃山人がいかなる人であったのか、この詩のほかにはわ
かるものはない。例によって蘇軾の「いじん異人」好きである。

黃山人の頬は赤くて人を照らすほど、

黃山人の眉毛は長くて眼を覆うほど。

みち う
道に遊ぶのに倦み、もはや道教の奥義を語ることもなく、

菩薩の教えを説くよりも、鬚ひげをせっせと伸ばしている。

学問を絶ってこそ真の知恵、

禅を説く坊主などお笑い草。

この東の坡おかで先生とともに、

爐でことごと三年の間、仙薬を煮つめるとしよう。

■贈人

都の知人から送られてきた詩に対する返事。あまり親しくしたくない相手だったのだろうか、ごくおざなりな詩。

別れてから手紙が稀だとかは言わずもがな。

「仙せん」と「凡ぼん」とは昔から別々の途みちを行くと決まっている。

仙人のいる山(貴公のいるところ=都)は遠く到り難く、

間の道には木々が威儀高く立ち塞がっている。

かつて江南こうなんの地でともに遊んだことは忘れてはいないが、

いまは貴公の新しい詩が皇都こうとで大評判であるのを聞けばかり。

沢辺を吟じつつ歩く者が、

げっそりと痩せた顔で都の方に目をやったところで、

誰も哀れみはしない。

■問大治長老乞桃花茶栽東坡

東おかの坡だいやちやうろうに茶を植えようと、大治長老とうからやに桃花茶という品種の種子を求めた詩。興国軍大治県こうこくに桃花寺だいやがあり、そこの泉とうかじのまわりで栽培される茶（桃花茶）は絶品だという。大治長老は桃花寺の僧なのだろう。

（興国軍は本章 288 ページで見たように楊絵ようかいの赴任地で、黄州から長江を少し下ったところの南側なので、詩中に「江南こうなん」と詠まれている）

古しゅうく周の時代の詩では茶は苦いものとされ、

茗飲めいじん（茶を飲む）の習慣は近世（南北朝時代）に始まったという。

初めは御馳走を食べすぎたときに、

茶によって腹の滞りすすを雪ごうとするものだった。

私の畑はちっほけて、

麦や桑だけもういっぱいいっぱいであるのに、

わずかの隙間も無駄にはしまいと、

なんとまあ、さらに茶の種子をもらって植えようとしている。

飢えから免れられるかどうかはまだわかっていないのに、

たらふく食べた後の算段をしようというのだ。

農業をするのも商売と同じように、

新しい取り引きが成り立つかどうかまず試すべきで、

茶の種子をいただけるか否かのお尋ねをする。

春が来ると、凍っていた地を裂いて、
 紫色の茶の芽が鋭く出てくるようになるだろう。
 牛や羊がその芽を踏まぬように叱りつけ、
 茶道具を用意するのはまだまだ先のこと。
 江南の老いた道人(大冶長老)は、
 齒や髪が年々抜けてゆくわけだが、
 ここ東の坡では年々茶が増えていって、
 いつしか「雪堂茶」は名品であるとして知られるようになったりするだろうか。
 その願いは空しく、やはり桃花茶の後裔だと伝えられるのだろう。
 (雪堂の近くで栽培するので「雪堂茶」の名を得ると空想した)

■魚蛮子

詩題の「魚蛮子」は蘇軾の造語なのだろうか。字面は魚獲りをする少数民族の男子という意味。「漁父」や「漁翁」(第5章62ページ)よりも野性味が強い。

魚蛮子にとっての畑は長江や淮河、
 魚蛮子にとっての居室は舟の楫、
 魚蛮子の糧は魚に蝦、
 耕さなくても、もとより、ふんだんにある。

世間の人とは異なる魚蛮子であっても、
他国から来た人間ではない。
舟を連ねて川をすみかとし、
竹の瓦の下に三尺の蘆を結び、
長く子々孫々をここに伝えてきた。
背中の曲がった者やら、背丈のごく低い者やら、
風変わりな連中が水を切り開いて、
道で拾うよりもやすやすと魚を手づかみにする。
釜は破れて塩もないので、
魚を刻んで青菜と混ぜて食べる。
腹が膨れたらごろっと寝るだけ、
かわらやざると異なるところがない。
人間界の生きる道は困難ばかりで、
地べたの上に立つなら賦租を納めなければならない。
魚蛮子が波に乗って空虚に浮かぶ暮らしに及ばない。
私がかうっかり、
「その空虚というやつも、いつまであてにできようか。
昔の大臣様は舟や車からも税金を徴収することを発案したのだから」
と言ったものだから、
魚蛮子は頭を地面に打ち付けて泣きながら、

「どうかどうか、そのことはお役人さまの耳には入れないでくださいまし」

(蘇^そ_{はん}は罪を得て黄州に置かれているのに、時にはこのような政治批判の詩を作ってしまう)

■題伯父謝啓後

かつて伯父の蘇^そ_{かん}が記した手紙を手に入れたので、この一文を添えて蘇^そ_{かん}の息子^そ_ふの蘇^そ_ふ不^ふ_ぎ疑に送った。

天^{てん}_{せい}聖年間に伯父は眉^び州での科挙の地方試験に合格した。時に二十三歳だった。このころの試験は規定がまだ緩く、答案用紙に記された受験生の名を採点するときには隠すということをしていなかった。

眉州副知事^{しやうどう}の蔣堂は、試験が終わって受験生が提出した文を見て、伯父の賦したものに至ると、それが精妙で群を抜いていることに驚き、伯父に向かって「首席となるのは君以外にはいない」と言った。伯父は「私はまだまだ若く、もっと年長の者がいます。私は決して選ばれるような者には当たりません」と強い調子で応じた。蔣堂はそれを聞いて、「これはまさしく『論語』にある『君子は人の美を成す』(君子は人の美点を挙げる)であるな」と言って、伯父は実に賢いとした。そして伯父を第三位にした。翌年伯父は科挙の最終試験にも合格した。

この手紙は合格後に蔣堂に送った礼状である。伯父が亡くなって十三年後に単^{たん}錫^{しやく}の家に伝わった。単錫が蔣堂と同じ宜興^{ぎこう}の人だからだ。それから八年にして

私の手元にきたので、自ら表装して、伯父の次男(蘇不疑)のもとに帰すことにした。これを家の宝として、伯父の徳が盛んであったことを忘れずにいてほしいと思う。

元豊五年七月十三日、伯父の甥である貴授黃州團練副使軾が謹んで詠るす。

(科挙では情実や不正の入る余地が一切ないよう、答案用紙に記された受験生の名が採点者に知られないようにした。これを「糊名」というが、伯父の蘇洵の頃にはまだそれが行われていなかったことがこの文章からわかる。蔣堂(字は希魯)は眉州の副知事の後に泗州の知事となり、朝廷に召されたり地方の高官を務めたりして、長く官界で活躍した。単錫(字は君賜)は蘇軾と同じ年に科挙に合格し、蘇軾の親類の娘を娶った)

■洞仙歌

唐と宋の間の五代十国時代に、蘇軾の故郷、眉州眉山県の属する蜀の地には、蜀国(前蜀と後蜀)の独立政権があった。後蜀の2代目にして最後の皇帝が孟昶だった。蘇軾は7歳のとき、孟昶の宮中に入出入りしていたという尼僧に会ったということが、この詞の序文に記されている。蘇軾が7歳というと1042年で、後蜀が亡んだのが965年であるから、77年を経ている。

私は七歳のときに眉山で老いた尼を見た。姓は朱で名は忘れたが、年齢は九十
 余りだった。「かつて師匠に従って蜀主孟昶の宮中に入りておりました」と言い、
 「あるとき、ひどく暑い日に、蜀主と花蕊夫人が摩訶池のほとりで夕涼みをなさり、
 蜀主が一つの詞をお作りになりました。いまもよく覚えております」。

それから四十年が経ち、朱氏はずっと前に亡くなり、その詞を知る者はいまや誰も
 いない。私は始めの二句ばかりを覚えているだけだ。ある暇な折に、その句を吟
 味し、「洞仙歌」の曲ではなかるうかと思い、それに継ぎ足してみた。

冰肌玉骨、(氷の肌に玉の骨)

自清涼無汗。(自ずから清く涼しく、汗をかくことはありません)

水殿風来暗香满。(水辺の高殿に風がくるとひそやかに香りが満ちます)

繡簾開、(刺繍のある簾が開かれています)

一点明月窥人、(ちらりと明るい月が覗きます)

人未寝、(人はまだ寝ずに)

敲枕钗横鬓乱。(枕が斜めに、簪が横たわり、鬢の毛が乱れます)

起来携素手、(立って手を携え)

庭戸無声、(庭の戸から声もなく出て)

時見疏星渡河漢。(ふと見ると、天の川を流れ星が渡ります)

試問夜如何、(夜はどれほどかと尋ねると)

夜已三更、(すでに真夜中すぎ)

金波淡、(天の川は淡く)

玉繩低転。(北極星のまわりの星が低く移ります)

但屈指、(指を折って数えるのは)

西風幾時来、(いつ秋がくるのかと)

又不道、(そしてこれは言いません)

年暗中偷換。(暗いうちに歳月がすっかり流れてしまうとは)

(1) 唐代に始まった詞を洗練された韻文学に育てたのが韋莊^{いそう}であった。韋莊は唐王朝末期の混乱期に辛酸を嘗め尽くした文化人の一人で、蜀の地に国(前蜀)^{ぜんしよく}を構えた王建^{おうけん}の庇護を求め、宰相にまでなった。王建は、韋莊を始めとして唐の都から逃げたきた人々を保護し、唐の文化の伝統は蜀の地で受け継がれた。前蜀が亡んで後蜀^{こうしよく}に代わってからも高い文化水準が保たれ、後蜀の二代皇帝の孟昶は自らも詞を作るような風雅を愛する人であったが、文弱で贅沢に耽って国を亡ぼしたと評判ははなはだ芳しくない。(2) 蘇軾^{こう}は、杭州の副知事であったころから精力的に詞を作るようになり、従来の詞とは全く異なる豪壮な作品を生み出し、その代表作がこの後で見る「念奴嬌」^{ねんどきょう}(本章314ページ)である。しかし、優美な詞も決して不得手ではなく、この「洞仙歌」は孟昶自身の作と見まごうばかりで、前半の終わりの部分などはかなり官能的である。後半は後蜀の栄華も虚しく消え去ったことを哀しんでいて、郷里の旧君として孟昶に対して特別な思いがあったのだろう)

■赤壁賦

7月16日、蘇軾は長江に舟を浮かべ、赤壁（本章107ページ）に遊び、この賦を作った。

（賦とは詩や詞とは異なる韻文の一形式で、小川環樹・山本和義選訳『蘇東坡詩選』（1975年）の解説をそのまま拝借すると、「『賦』は楚辞の流れを汲んで、漢代に生まれた文学形式。問答形式をとって韻をふみながら華麗なことばを連ねる叙事文学で、朗誦されるものである」。歐陽脩は賦を外面を飾るものから内容重視のものへと変えようと努め、それを受け継いだのが蘇軾のこの「赤壁の賦」である）

壬戌之秋、げんぽう（元豊五年の秋）

七月既望、（七月の満月の翌日）

蘇子与客汎舟游于赤壁之下。そ（蘇先生は客と舟を浮かべ、赤壁の下に遊んだ）

清風徐来、（清らかな風が静かにきて）

水波不興、（波は立たず）

拳酒属客、（酒を挙げて客に勧めつつ）

誦明月之詩、（明るい月を待つ詩を朗誦し）

歌窈窕之章。（美しい人を求める古代の詩を歌った）

少焉、（しばらくすると）

月出於東山之上、（月が東の山の上に出て）

徘徊於斗牛之間、としやく ぎゅうしゆ（斗宿と牛宿の間をさまよい）

白露横江、(長江いっぱい露の気配が横たわり)

水光接天、(光が水に満ちて天と一つになり)

縱一葦之所如、(一本の葦のような舟が行くのに任せて)

凌万頃之茫然。ぼんげい ぼうよう(万頃の茫洋とした広がりを超えて行った)

浩浩乎如憑虚御風、ひろひろ(浩浩と虚空に乗って風をあやつるようにして)

而不知其所止、(その止まる場所を知らず)

飄飄乎如遺世独立、ふわふわ(飄飄と世間のことなど忘れて独りだけとなり)

羽化而登仙。(あたかも羽化して仙人になったかのようであった)

於是飲酒樂甚、(そこで酒を飲んで大いに楽しみ)

扣舷而歌之。(舟ばたをたたいて歌った)

歌曰:(その歌は)

「桂棹兮蘭槳、きお かい(桂の棹に蘭の槳)

擊空明兮泝流光。(明るい空間を撃ち、流れる光をさかのぼる)

渺渺兮余懷、はるか おも(渺渺なるかな我が懐い)

望美人兮天一方」。(美しい人を天の彼方に望み見る)

客有吹洞簫者、どうしょう(客に洞簫を吹く者がいて)

倚歌而和之、(歌とともにそれに和し)

其声嗚嗚然、ほわほわ(その声は嗚嗚然として)

如怨、(怨むかのよう)

如慕、(慕うかのよう)

如泣、(泣くかのよう)

如訴、(訴るえかのよう)

余音嫋嫋、(余韻は嫋嫋とつづき)

不絶如縷。(糸のように絶えることがなかった)

舞幽壑之潜蛟、(それは深い谷に潜む竜を舞わせ)

泣孤舟之嫠婦。(夫を失った舟上の女を泣かせるものであった)

蘇子愀然、(蘇先生は表情を改め)

正襟危坐、(襟をただし、きちんと坐り直して)

而問客曰:(客に尋ねた)

「何為其然也」。(これはどうなされたのですか)

客曰:(客は言った)

「『月明星稀，烏鵲南飛』、(「月明らかに星稀れに、烏鵲南に飛ぶ」)

此非曹孟德之詩乎。(これは曹操の詩ではありません)

西望夏口、(ここから西を望めば夏口)

東望武昌、(東を望めば武昌)

山川相繆、(山と川が互いにもつれ合い)

鬱乎蒼蒼、(暗くもりとしています)

此非孟德之困於周郎者乎。(曹操が周瑜のために苦しめられたのはここのではありません)

せんか)

方其破荊州、(曹操はそれまでに荊州を破り)

下江陵、(江陵^{こうりょう}へと下り)

順流而東也、(流れに従って東に向かい)

舳艫千里、(船を千里に渡って連れ)

旌旗蔽空、(旗は空を覆い)

釃酒臨江、(酒を漉^こして長江に注ぎ)

橫槊賦詩、(槊^{ほこ}を横たえてこの詩を賦したのです)

固一世之雄也、(まさに一時代の英雄であります)

而今安在哉。(いまどこにいるのでしょうか)

況吾与子漁樵於江渚之上、(まして、私とあなたは、長江の渚のあたりで魚を獲り木を切り)

侶魚蝦而友麋鹿、(魚や蝦に伴い、鹿を友とし)

駕一葉之扁舟、(ひとひらの舟に乗り)

拳匏罇以相属、(ひょうたんの酒を互いに挙げ)

寄蜉蝣於天地、(かげろうのような身を天地に寄せ)

渺滄海之一粟。(広く青い海のひと粒の粟のような存在でしかありません)

哀吾生之須臾、(我が一生が束の間であるのを悲しみ)

羨長江之無窮。(長江が無窮であるのを羨みます)

挾飛仙以遨遊、(空を飛ぶ仙人を両脇に従えてともに遊び)

抱明月而長終。(明るい月を抱いて永遠に過ごすなど)

知不可乎驟得、(にわかに得られるはずもないので)

託遺響於悲風」。(悲しげな風に余韻を託したのです)

蘇子曰：(蘇先生は言う)

「客亦知夫水与月乎。(あなたも水と月を知っていきましょう)

逝者如斯、(水はこのように逝き^い続けていますが)

而未嘗往也、(往^いってしまってそれきりということでは決してありません)

盈虚者如彼、(月はこのように満ちたり欠けたりしていますが)

而卒莫消長也、(ついには消え去ってしまったり大きくなりっぱなしということもありません)

蓋将自其变者而觀之、(そもそも変化するところから観みるなら)

則天地曾不能以一瞬、(天地は一瞬たりとも変わらずにいるということはありません)

自其不变者而觀之、(変わらないところから観みるなら)

則物与我皆無尽盡也、(物にしても私にしてもどれも尽き果ててしまうことはありません)

而又何羨乎。(何を羨むのでしょうか)

且夫天地之間、(天地の間にある物には)

物各有主、(それぞれの所有者がいます)

苟非吾之所有、(自分が持つものでなければ)

雖一毫而莫取。(毛筋一本だって取ることはできません)

惟江上之清風、(ただし、川のほとりの清らかな風と)

与山間之明月、(山の間の明るい月は)

耳得之而為声、(耳に得てその声を聞き)

目遇之而成色、(目に遇ってその色を見て)

取之無禁、(これをいくら取っても禁じられることはなく)

用之不竭、(これをいくら用いても^つ竭きることはありません)

是造物者之無尽蔵也、(これは造物者の^{むじんぞう}無尽蔵というものです)

而吾与子之所共食」。(私とあなたと一緒にこれを食らおうではありませんか)

客喜而笑、(客は喜んで笑い)

洗盞更酌。(盃を洗ってさらに酌んだ)

肴核既尽、(酒の肴は尽き)

杯盤狼籍、(杯や皿が散らかり)

相与枕藉乎舟中、(ともに枕となって舟に眠り)

不知東方之既白。(東方がすでに白むのも知らずにいたのだった)

(1) 同舟の者が洞簫どうしょう (笛の一種) を吹いたとの叙述がある。廬山ろざんからきていた道士ようせいしやうの楊世昌が洞簫を吹くことを本章 259 ページで見ているので、楊世昌が一緒であったと推測されている。(2) 「造物者の無尽蔵」。これこそが黄州にきて以来、己を新しくしようとさまざまに思索を重ねてきた一つの到達点であったといつてよいであろう。「雪堂せつどうの記」では「散人さんじん」と「拘人こうじん」を対比して、「散人」になるには知恵を去らなければならないといっていた。黄州にきた当初あんこくじは安国寺くわうに参禅して「空」の境地を得ようとした。ここに至って「空」ではなく「無尽蔵」を見出し、「散人」だろうが「拘人」だろうが誰であつてもいかなる境遇にあつても、その「無尽蔵」はいくらでも享受できると歌い上げた。一見すると安直な樂觀主義のようであるけれど、苦悩の末に見出したひとつの答えだったのだ。(3) かつて「書臨臯亭しよりんこうてい」(本章 96 ページ) で直感的

に記したことを発展させたと見ることもできるだろうか)

■念奴嬌

上の「赤壁の賦」では三国時代の英雄の名を出したものの、それは脇役でしかなかった。そこで、周瑜しゅう ゆを主役にした詞を別に作った。「赤壁懷古」せきへきかいこの副題がある。

大江東去、(大いなる長江ちやうかうは東に流れ行き)

浪淘尽、(浪は洗い尽してしまいます——)

千古風流人物。(千年にわたる風流な人々をも)

故壘西辺、(古い石垣の西のあたり)

人道是、(人はいます、これは)

三国周郎赤壁。(三国時代の周瑜の赤壁であると)

乱石崩雲、(崩れる雲のように乱れた岩)

驚濤裂岸、(岸壁を裂くように打ち付ける波は)

捲起千堆雪。(千段に積み重なった雪を巻き起こします)

江山如画、(画かのような江と山)

一時多少豪傑。(かのときにどれほど多くの豪傑がいたのでしょうか)

遙想公瑾当年、(遙かに想うのは、そのとき周瑜)

小喬初嫁了、(喬姉妹の妹を妻に迎えたばかり)

雄姿英発。(雄姿は英しく澁刺としていました)

羽扇綸巾、(羽根の団扇に綸子の頭巾)

談笑間、(談笑する間に)

強虜灰飛煙滅。(強い敵は灰となって飛び、煙となって消え去ったのです)

故国神遊、(所縁ある国に神を遊ばせると)

多情应笑我、(情ある人は私に笑いかけ)

早生華髮。(早くも白髪になりましたなあと言うことでしょ)

人間如夢、(人間世界は夢のよう)

一樽還酹江月。(ひと樽の酒を江の月に捧げようではありませんか)

(1) 後世の『三国志演義』などでは、赤壁で曹操の大軍を破った最大の功労者は諸葛孔明であったように描かれるもするが、実際は周瑜こそが立役者であった。この詞は周瑜を中心に置いている。(2) 「風流人物」とあるのは、日本語の「風流な人」とはかなり異なり、何物にも捉われない独立不羈の人物、曹操や周瑜のような人々を指す。(3) 「羽扇綸巾」(貴族がくつろいで過ごすときの服装)は、『三国志演義』などでは悠揚迫らぬ諸葛孔明の姿を描く常套語となっているが、蘇軾は周瑜を描写するのに用いている(ただし、ほとんどの解説書では、ここでもやはり諸葛孔明のことであるという解釈をとっている。そうだとしたら、周瑜の存在がかすんでしまって興味がかなり削がれるのではなからうか)。(4) この「念奴嬌」は、蘇軾の詞の最高傑作と評されることが多い。蘇軾は、酒席の余興から始まった詞を、文学的な鑑賞に十分耐

えうるものに変革すべく努め、「豪放派」の開祖とされ、この詞がその到達点であるとされる。「豪放派」はこの作品に見られるように、ごつごつとした印象の語句を使って堅い内容の詞を作る。一方で、蘇軾によって詞は結局のところ詩にされてしまったとする批判があり、「豪放派」を受け継ぐ者はそう多くはなかった。宋代の詞の本流を形作ったのは、蘇軾ではなくむしろ張先ちやうせんや柳永りゆうえいであった。蘇軾が杭州時代に張先と交流があったことはしばしば見えて、多数の歌妓を連れて西湖で舟遊びをする姿はまさに詞の名手にふさわしい。柳永は蘇軾よりも50年ほど先輩で、若い頃に科挙を受けたものの、色里の流行歌を作っているような者は朕の朝廷にはいらないと皇帝が不合格にしたという伝説がある。柳永は妓女のために詞を作る専門の作詞家になり、都の井戸端で柳永の詞を歌う女性の声が聞かれない日はないといわれるまでにその詞は人々に愛された。その後、50歳の頃に発奮して再び科挙を受け、短い期間ではあったが地方で官僚勤めをし、蘇軾が18歳のときに亡くなった。蘇軾のこの「念奴嬌」がいかにも傑作であっても、井戸端で歌われるようなものではなく、大衆が求める詞のあり方からはずれていたのだろう。とはいえ、蘇軾も優美で繊細な詞を多数作っていて、先に見た楊の詞（本章168ページ）の方が優れているようにも思える）

■念奴嬌

上と同じ「念奴嬌」の曲で8月15日の中秋節に詞を作った。

（この詞はかつて密州でやはり中秋節に作った詞「水調歌頭」すいちやうかとう（第5章123ページ）を踏まえ、地上と月の世界を行きつ戻りつする）

憑高眺遠、(高いところから遠く眺めると)

見長空万里、(見えるのは万里にわたる広大な空)

雲無留跡。(雲はどこにも跡を留めません)

桂魄飛来光射处、(月が飛び来て射す光)

冷浸一天秋碧。(ひやひやと満天の秋の碧を浸します)

玉宇瓊楼、(天の上の玉の宮殿へと)

乘鶯来去、(鶯に乗り)

人在清涼国。(人は清く涼しい国に来るのです)

江山如画、(月から見る江や山は画のよう)

望中煙樹歷歷。(望み見る霧の中に樹々が連なっています)

我醉拍手狂歌、(私は酔い、手を打っておかしげに歌い)

举杯邀月、(杯を挙げて月を迎え)

对影成三客。(私と影と月と三人になります)

起舞徘徊風露下、(秋風のもとで起って舞い、あたりを歩き)

今夕不知何夕。(この夕べは月の世界ではいつの夕べなのでしょう)

便欲乘风、(さあ、風に乗って)

翻然归去、(翻り飛んで帰りましょう)

何用騎鵬翼。(鵬の翼に騎らないでもよいのです)

水晶宮裏、(月の水晶宮で)

一声吹断横笛。(一声、横笛が吹かれます)

■夜坐与邁聯句

夜、臨^{りんこうてい}阜亭に坐して息子の蘇邁^{そまい}と交互に句を詠む^{れんく}連句をした。

(蘇軾の句を青字で、蘇邁の句を赤字で示す)

清風来無辺、(清らかな風が無限の彼方から来て)

明月翳復吐。(明い月が翳^{かげ}ったり雲からまた吐かれたりする)

松声満虚空、(松の声(上の風に対応)が虚空に満ち)

竹影侵半戸。(竹の影(上の月に対応)が戸から入り込んでくる)

暗枝有驚鵲、(暗^{かみぎ}りの枝で驚いて鵲が鳴き)

壞壁鳴饑鼠。(壊れた壁で餓えた鼠が鳴く)

露葉耿高梧、(露を帯びた葉が高い梧^{あおき}に輝き)

風螢落空廡。(風に飛ぶ螢が人のいない^{ひさし}廡に落ちる)

微涼感团扇、(微かな涼しさにもはや捨てられる团扇を感じ)

古意歌白紵。(無官の服のままていることを嘆く古い歌をうたう)

樂哉今夕遊、(それにつけても、この夕べの遊びの楽しさは)

復此陪杖屨。(こしてまた父上のお供ができるのだから)

伝家詩律細、(我が家に伝わる詩律は細やかであるが)

已自過宗武。(君はすでに杜甫の息子の宗武を凌ぐもがあるだろう)

短詩膝上成、(我が膝の上でこのように詩を作って(くて))

聊以慰懷祖。(祖先に対していさか鼻が高い)

(蘇邁はこのとき24歳であった。24歳といえば蘇軾が官職に就くために都に向かったときの年齢で、そのときの旅で詠んだ詩は第1章で見たように、すでに父の蘇洵を凌ぐものとなっていた。それと比べると(全く酷な比較だが)、息子の詩才は特別光るものではなかったようだ)

■次韻和王鞏六首

蘇軾に連座して遙か南方の賓州ひんに置かれていた王鞏おうきょう (字は定国あざな ていこく) (本章59ページなど) から送られてきた詩に次韻した。6首のうち5首を訳す。

其の一

貴君は、近くにある陽朔山ようさくざんのことを(詩中に)談じて、

一銭の価値も生まない山だという。

その巖いわおには頭が二つある毒蛇が潜み、

千仞せんの高さを飛ぶ鳥を落とす毒気を放っている。

極悪人を放逐するのによろしいところで、

舜しゆんのような聖人が登ったとの伝説があるのははなはだ訝しい。

この山に少しの間いるだけで、

鏡を見れば顔はもう真っ黒になっているほどに、

恐ろしいところなのだ。

苦い霧のために、飲むものも食べるものも味が変わってしまう。

貴君は三年もの間、そんなところで囚われ人となっている。

しかし、善い人は天地の徳を身に荷っているのだから、

決してそのようなところで死なないはずだ。

私はというと、黄州の岡のもとにいて、

枕に横たわって長江^{ちやうこう}の碧^{みどり}の流れを眺めている。

川の向こうには武昌山^{ぶしやうざん}があって、

いつも私と顔を向かい合わせにして立っている。

軟らかな土からは春の野菜が生じ、

蒼い崖を裂いて筍が出てくる。

私が貴君を巻き込んで陽朔山のもとに行かせてしまったのに、

私はこの地にきてかえって安らかに暮らしている。

遥かに聞くところでは、

そちらの近く^{たんき}に丹砂の産地があるとか。

だからいつか貴君も仙薬を得て、

その名を仙人の名簿の中に見ることになるだろう。

(丹砂は不老不死の薬の原料になると考えられていて、王鞏に送った手紙の中でもそ

れについて言及していた（本章 125 ページ）

其の二

若いときは、
刀剣を腰に帯びて従軍したら楽しいであろうと思っていた。
老いてからは、
剣を^と鎔かして鋤^とにして農事に服することとなった。
少しの武勲も挙げなかったのに、
朝廷は耕す土地を与えてくださった。
春は川の氷を砕いて紙を梳き、
秋は葦を刈って布を織り、
冬は^{くぬぎ}櫟の林を斬って炭とし、
夏には土手の竹から皮を剥き取る。
四季ごとに採るものがあり、
天の与えてくれるものは十分に満足させてくれる。
貴君は裕福な家に生まれたので、
そのような四季の仕事を学ぶ必要はなかつたらう。
貴君の左右におられる腕が細くて白い美女には、
薪を束ねるようなことはできるはずもない。
こんなことを私がいっているとは、

当の美女には聞かせないでほしい、
私だってわざわざ美しい方々を怒らせたくはないので。
笑ってしまうのは、
我があばら家には、
ぎゃあぎゃあ騒がしいだけの女どもがどっさりいることだ。

(王鞏が名家に育ったことは第5章321ページで見ている。そして、流謫の地にあつてもどうやら美しい侍女を多数抱えていたようである)

其の三

千年に一度だけ実を結ぶという伝説の桃にしても、
まずは寒い冬を耐えてから二月に花を咲かせる。
骨にまで至るような苦勞をしてこそ、
果てしない寿命が得られるのだ。
私は罪による死を免れただけ十分で、
この上さらに長生を求めるようなことはしない。
貴君のいる賓州はどこであろうかと、
棲霞楼せいかりうに昇って見るとしよう。

(棲霞楼は本章224ページで見ている)

其の四

近隣の人々にはそれぞれ異なる趣がある。
だから、互いに往き来するのがよろしかろう。
奇妙な人と思って厭わずに、
数回会えば自ずと親しくなるのだ。
また、何事もなく黙って坐わっているのもよい。
自分の内側から光がめぐりきて、また己を照らすのを覚えるであろう。
いずれにしても、
貴君が宮廷に堂々と立つ姿をきっとまた見ることになるであろう。

(この詩では、土地の人とも分け隔てなく交際するようアドバイスしている。蘇軾の
ように土地の庶民とも親しくするというのは、エリートである士大夫の誰もができる
ようなことではなかったのだらう)

其の五

普段から私は他の人々を軽んじてきたのだが、
老年に到ると、私のことを気に掛ける者など誰もいなくなっていた。
巧みな語を出したように思っていたのは自分だけで、
実際は本物の宝^{じゅず}玉と数珠玉の實^{たま}くらいに違っていたのだ。
せめてまずいことを言ってしまうないようにしようとしても、
我が癖を治す薬はどこにもありはしない。

子どもの出来の悪さときたら、

やはり陶淵明とうえんめいが嘆いた通りだが、

ただ妻が憤ましかであるのは、

馮衍ふうえんが妻のやかましさに悩まされたのとはえらい違いた。

私が貧乏であるのはなぜかと聞かれたら、

天の与えたものだと応えよう。

黄州に流されて初めて財布がからっぽになったのではないのだ。

(1) 陶淵明には子供の出来の悪さを嘆く詩がある。(2) 馮衍ごかんは後漢の人で、蘇軾自身がこの詩に付した注記で、「私の文章は馮衍に及ばないものの、意気と志では愧はじるものではない。当時の皇帝は優れた士を好んだものの、馮衍は不遇で都の遠くに置かれ、私と似ている。しかし、馮衍の妻はひどく嫉妬深く、この一点は私にはない。そこで私の方が馮衍より勝っているということになる」と記している。このことは、もしかすると妻の容認のもと王朝雲おうちょううんを深く愛するようになっていたことを示唆するものであろうか。宋代の士大夫が複数の女性を抱えることは珍しくなかったが、蘇轍のように妻以外の女性を（必ずしも妻の嫉妬深さが原因ではなくて）近づけなかった者もいた）

■ 酔蓬萊

9月9日の重陽ちやうようの節句じよだいじゆに徐大受あざな くんゆう（字は君猷）知事が酒宴を開き、そこでこの詞を詠んだ。序文がある。

私は黄州たくきよ謫居となって三度目の重陽の節を迎えた。徐知事は毎年樓霞楼せい か ろうで宴を開いてきたが、今年ことねは任期が満ちて、湖南に移ることを希望しているという。そのことを思うと寂しく、この詞を作った。

笑勞生一夢、(笑ってしまうのは、生きる苦勞もひとつの夢)

羈旅三年、(遠く三年の旅)

又還重九。(また重陽の節句となりました)

華髮蕭蕭、(まばらな白い髪)

対荒園搔首。(荒れた庭を見つ頭を搔きます)

頼有多情、(頼みとするのは(知事殿なご)の情の深さ)

好飲無事、(何事もなく飲むのを好み)

似古人賢守。(古いにしへの賢けん太たい守しゅに似ておられます)

歳歳登高、(毎年毎年(重陽の節句には)高いところに登り)

年年落帽、(毎年毎年帽子を落としてまいりましたのは)

物華依旧。(昔の結構な故事に従ってのことでした)

此会応須爛醉、(今日の会では大いに酔いましょう)

仍把紫菊茱萸、(菊の花と茱萸しゅゆの実を手にして)

細看重嗅。(細やかに見て重ねて香りを嗅ぎましょう)

搖落霜風、(間もなく葉を落とす風が)

有手栽双柳。(手ずから植えた二本の柳にも吹き寄せましょう)

来歳今朝、(来年のこの朝には)

為我西顧、(私のために西を見て)

酌羽觴江口。(川べりで杯を酌んでください)

会与州人、(私はこの地の人々とともに)

飲公遺愛、(知事殿を偲んで飲み)

一江醇酎。(川に酒を注ぎましょう)

(始めにある「きりよさんねん羈旅三年」は、知事の任期が通常3年であることと、蘇軾が黄州に流されて3年になることを兼ねているのだろう。「そうしゅ搔首」とは首がかゆくてか搔くわけではなく、思い悩む仕草を表す慣用句。重陽の節句に風に吹かれて帽子を落とす故事は何度か見ている。最後のところは、黄州で長江に酒を注ぐので、新たな任地である下流でそれを受け取ってほしいということ)

■記夢賦詩

蘇軾はときどき夢の中で詩詞を聞いたり賦したりしている。本当に夢に見たのか、想像を夢に託したのかはわからない。

私は科挙を受けるために蜀から都に行き、途中でか せいきゅう華清宮を通った。夢に、玄宗皇帝げんそうが「たいしん ひくんだいし太真妃裙帶詞」を賦すように命じるのを見た。目覚めてその詞を記憶して

いた。いまこれを書いて、ほんだいらん潘大臨に贈る。

その詞は、

百疊さらさら漪漪水皺、((貴妃の裳の大きさは)百疊もの漪漪と流れる水の皺)

六銖しゅ ひんひん縦縦雲輕。((重さはわずかに)六銖で縦縦として雲よりも軽いのです)

植立含風広殿、(風を含んで広い高殿にすくと立つならば)

微聞環佩搖声。(腰に着けた環が揺れる音が微かにこします)

元豊五年十月七日。

(蘇軾はかゆう嘉祐元(1056)年に、科挙を受験するために都に行った。この短文も一つの根拠となって、そのときの旅は長安ちやうあんを経由する陸路であったと知れる。華清宮は長安の東にある温泉地で、唐の玄宗皇帝が楊貴妃(太真妃)と遊んだところとして有名。潘だいらん あざな ひんろう大臨(字は邠老)は潘丙の兄の子(本章242ページ))

■後赤壁賦

10月15日に蘇軾は再び赤壁せきへきに遊び、この賦を作った。同行の者が2人いたとあり、1人は先の「赤壁の賦」と同じく道士の楊世昌やうせいしやうであることは、楊世昌の宛てた手紙の記述から明らかである。もう1人は誰だったのか。その者が魚を獲り舟を操ったとすると、先の「魚蛮子」ぎよばんし(本章302

ページ)に歌われていた漁師であつたりするのだろうか。

是歳十月之望、(この歳の十月の満月の日)

歩自雪堂、(雪堂せつどうから歩いて)

将帰於臨臯、(臨臯亭りんこうていに帰ろうとした)

二客従予、(二人の友が一緒に)

過黄泥之坂、(黄泥こうでいの坂を通った)

霜露既降、(霜や露の気配がすでに下り)

木葉尽脱、(木の葉はことごとく落ち)

人影在地、(人の影が地面にあつて)

仰見明月、(明るい月を仰ぎ見て)

顧而楽之、(互いに顧みて楽しみ合い)

行歌相答、(歩きつつ歌って唱和した)

已而歎曰、(ふと嘆息して言った)

「有客無酒、(友がいるのに酒がありません)

有酒無肴、(たとえ酒があつても肴がありません)

月白風清、(月は明るく風は清らかで)

如此良夜何」(この良き夜をどうしたらよろしいのでしょうか)

客曰、(友は言った)

「今者薄暮、(今日の夕方)

拳網得魚、(網を拳げて魚を得ました)

巨口細鱗、(口が大きく鱗が細かく)

状如松江之鱸。しょうこう (松江の有名な鱸に形が似ています)

顧安所得酒乎」(たまたどこで酒を得たらよろしいでしょうか)

歸而謀諸婦。(帰ってそのことを妻に相談した)

婦曰、(妻が言うには)

「我有斗酒、(わたくしに一斗の酒がございます)

藏之久矣、(これを久しくしまっておき)

以待子不時之需」(あなたさまが急にお求めになるのに備えておりました)

於是携酒与魚、(そこで酒と魚を携え)

復遊於赤壁之下。(また赤壁の下で遊ぶことになった)

江流有声、(長江は音を立てて流れ)

断岸千尺、(切り立った岸は千尺)

山高月小、(山は高く月は小さく)

水落石出。(水量が減って石が出ている)

曾日月之幾何、(日や月はあれからどれだけ巡ったのか)

而江山不可復識矣。かわ (江も山もまるで識らないところであるかのようだ)

予乃攝衣而上、(私は衣をかかげて陸に上り)

履巉巖、(陰しく切り立ったところを踏み)

披蒙茸、(草むらを開き)

踞虎豹、(虎や豹のようにわたかまる岩にまたがり)

登虬竜、(竜のようにねじくれた木に登り)

攀棲鶻之危巢、(鶻はやぶさの棲む危うい巢をよじのぼり)

俯馮夷之幽宮。(馮夷ふうい(水の神)の宮殿を見下ろした)

蓋二客不能從焉。(どうやら二人の友は付いてこられなかった)

劃然長嘯、(空気を裂くように長く嘯せうくと)

草木震動、(草木が震動し)

山鳴谷応、(山が鳴り谷が応え)

風起水湧。(風が起き水が湧いた)

予亦悄然而悲、(私はふと悄然しょうぜんとして悲しみ)

肅然而恐、(肅然そくそくとして恐れ)

凜乎其不可留也。(凜乎びくびくとしてもはやそこにいられなくなった)

反而登舟、(かえって舟に乗り)

放乎中流、(流れの中ほどに放ち)

聽其所止而休焉。(その止まるところにまかせて休んだ)

時夜將半、(時に夜はもう半ば)

四顧寂寥。(四方を顧みると静まり返っていた)

適有孤鶴、(たまたま一羽の鶴が)

橫江東來。(江を横切って東からやって来た)

翅如車輪、(翅つばさは車輪つばさように大きく)

玄裳縞衣、(黒い裳はかまに白い絹の衣)

戛然長鳴、(鋭く長く鳴き)

掠予舟而西也。(私の船を掠めて西へと飛んだ)

須臾客去、(間もなく友人は帰り)

予亦就睡。(私も眠りについた)

夢一道士、(夢に一人の道士を見た)

羽衣踟躕、(羽の衣を翻し)

過臨臯之下、(臨臯亭りんこうていの下を通り)

揖予而言曰、(私に会釈して言った)

「赤壁之遊樂」。(赤壁の遊びは楽しかったですか)

問其姓名、(その姓名を問うと)

俛而不答。(俯いて答えなかった)

「嗚呼噫嘻、(ああ、ああ)

我知之矣。(私はわかっております)

疇昔之夜、(昨日の夜)

飛鳴而過我者、(飛んで鳴いて私の前を通ったのは)

非子也耶」。(あなただったのでありましょう)

道士顧笑、(道士は顧みて笑い)

予亦驚寤。(私ははっと目を覚ました)

開戸視之、(戸を開いて道士を見ようとしたが)

不見其処。(どこにもいなかった)

(この賦を「後の赤壁の賦」といい、それに対して先の賦を「前の赤壁の賦」という。「前の赤壁の賦」は理屈を述べ、「後の赤壁の賦」は幻想的である。二つを合わせて「赤壁の賦」は完成するということなのだろう。なお5行目にある「黄泥の坂」は後に詳しく見ることになる)

■ 弔李台卿

蘇轍の娘と結婚することになった曹煥が、この年の5月、蘇轍のいる筠州に赴く際に黄州に立ち寄ってしばらく滞在した。曹煥は光州知事の曹九章(字は演甫)の息子で、蘇軾は詞を作って曹九章に送った。10月、曹九章からの手紙が届き、かつて黄州管轄内の麻城県で主簿を務めていた李台卿が亡くなったことを知った。李台卿とは生前にわずかな交流があったただけだったが、その人柄を想ってこの詩を作った。序文がある。

李台卿、字は明仲は、廬州の人である。風貌がひどく不細工で、変わり者で、人と群れることがなかった。しかし、博学で記憶力のよさは人の及ぶところではなかった。『春秋左氏伝』を好み、『史学考正同異』を著して新たに発見したところが多数あった。天文や暦も詳しく知り、千年間の暦を知り尽くしていた。私が黄州に謫居となったとき、李台卿は麻県県の主簿で、初めてその名を識った。間もなく李台卿は辞めて廬州に帰ったのだが、光州知事の曹九章から李台卿が亡くなった

ことを報^しらされた。李台卿は曹九章の妻の一族である。

初め私は貴君のことを知らなかった。

人々は貴君のことを、

病気になった鶴がたらんと頭を垂れたような姿をしているとか、

七つの穴が全て土煙に覆われたような顔をしているとか、

そんなことを言って笑いの種にしていた。

ある日、貴君は破れた衣をまとって私のところへきたのだが、

釣り糸を垂れる人であるかのように座っているだけだった。

しかし、容貌の醜^{いじ}さで名を残した古の醜^そ蔑と同じく、

たった一語を発するとそれは妙所を突き、

横顔をちらりと見ただけで賢人を見分けた古の褚^い裒^ちのように、

私はたちまち貴君に驚かされたのだった。

貴君はのろのろとさざ波の上を渡っているようであり、

実は極まりない大海の涯までも見ているのだった。

唐の太宗は、画に描いたような頑固一徹の大臣を、

軟弱で朕に媚びているようにしか見えないと言ったように、

士^{ひと}というものはもよとり軽々しくは料り知れない。

貴君が書物を看るのは、

月の光のように隅々までも照らさないところはない。

私は年齢とともに忘れてしまうことが多くなったのだが、
 貴君はどんどん若くなっていくかのようにより多く覚えるのだった。
 諸々の学問に通じ、博くかつ要を得ていた。
 しかし、残念なことに、言動に飾り気がなかったために、
 老年に至っても外に輝きを見せることがなかった。
 だから、その人生は世に識られず、
 すでに亡くなって、弔う者は誰もいない。
 私は詩を作って貴君を知る人々に贈ろうと思う。
 できることなら俗人どもの過ちを正したいものだ。

(余談になるが、科挙に合格して官僚になった人々は互いに姻戚関係を結ぶことに熱心で、蘇轍の6人の娘はいずれも官僚の息子や科挙に挑みつつある男児と結婚している。すでに見たように、1人は文同ぶんどうの息子の文務光ぶんむこうと、1人は王適おうてきと結婚していて、そしてここにもう1人、曹煥と結婚することになったのである。さらにあと3人が順次嫁いでゆく)

■曹既見和復次其韻

上の詩に曹九章そうきゅうしょうが和したので、それにまた次韻した。

造物者のすることはもとより小児の戯れ、
 ゲップをすると大風に、笑うと雷になり、

地上を震わせ、人々をやたらと驚かせてしまう。

人間どもは川でも湖でもやたらと走り回り、

網を投げたり釣糸を垂れたり忙しい。

偶然にも立派な魚を六匹も獲ったなら、俺は妙手の持ち主だと思ってしまうし、

たまたま空しく海辺に三年間もうずくまったままの者もいる。

長く貧乏するのは辛抱できなくはないとしても、

いつ死ぬのかということは料り知れない。

占ってみたところで、仏の眼でもなければ見えはしない。

り だいけい
李台卿君の学問は誰が嗣ぐのだろうか。

残念なことに、

李君の子息はなお年少であり、

李君を惜しむ私も曹君もすでに老い衰え、世に不要な存在となっている。

いろいろ我々が述べたところで空しく、

李君の学問を救えはしないけれど、

優れた仕事は後に必ずかがや耀くはずである。

貴君(曹九章)が吟じる五言詩は千金の香典よりも価値がある。

この私の詩は貴君だけが見て外に出さないでくれたまえ、

私がおかしなことを言っていると世間の連中からそし譏られたくないの。

(よくわからないが、この詩には世間に対する皮肉が籠められているのだろう)

■ 弔徐徳占

同じころにもう一つ亡き人を弔う詩を詠んでいる。序文がある。

私は初めは徐禧じょきのことを識しらなかつた。ただ、呂恵卿るけいけいの推薦によって、無官でありながら用いられたということだけを聞いていた。元豊五年三月、徐禧げんぼうがたまたま蘄水きすいに至ったときに、私が駅舎えきにいると聞いて訪ねてきた。語り合い、人に優れるところがあると知った。この歳の十月、徐禧わざわいが禍わざわいに遇った聞き、詩を作って弔うこととした。

(呂恵卿は改革派の中心人物の1人で、西夏せいしかとの戦争(本章192ページ)を主導し、徐禧はその呂恵卿に策を献じて用いられ、一旗挙げてやろうと前線に行つて戦没した。蘇軾が3月に蘄水に行つていたことは本章278ページで見ている)

優れた人が松を植えるのは、

いつしか門に影を落とすのを見ようと思うからだ。

松は成長が速いとはいえ、実は栽培が難しく、

水の流れが悪いと根が病気になつてしまつて、

残念ながら、寒さにも負けない堂々の姿を見ることはできない。

あるいは、松も役立ちそうな姿をしていると、

それが過ちとなつて斧で切られてしまう。

そうした災難あに遭つて初めて、

山林の内に入ればよかったと覚るのだ。

もとより本当の棟梁は、

どこぞの屋敷に植えられている木などは顧みないもので、

深い山にある大木を求める。

大きな家が傾こうとしているときに、

まわりで牛がわさわさ騒いだからといってどうにもならない。

何といっても、深い谷の奥にあって古い、

子孫が枝を繁らせるのを待つのがよいのだ。

死んだ者は悔いてももうどうにもならない。

私はただ後に残された者のために言うのである。

(この詩は何がほしいのかはなはだ不明瞭である。たぶん敢えてそうしたのでろう。ここでは隠された主旨がいくらか読み取りやすいように無理やり訳してみた。よりあけすけに言えば、徐禧は大言壮語して無定見の呂惠卿に用いられて空しく戦場に散ってしまったので、その子孫は、そうしたばかばかしいことにならないよう、十分に注意して己を成長させてほしいということであろう。そのようにあからさまにいつてしまうと当たり障りがあり、煙幕を張らなければならなかったのだ)

■書四戒

上の詩でも見たように、蘇軾はうっかりとしたことをいわないように注意していた。その他にも戒めとすることを、4箇条 32 文字にして、雪堂

せつどう

に掲げた。

(1) 出輿入輦、蹶痿之機

「輿に乗って出て、輦に乗って帰る」。そのココロは、「つまずいたり、萎えたり、足を駄目にしてくれるでしょう」

(2) 洞房清宮、寒熱之媒

「家が大きく、部屋が広い」。そのココロは、「風邪をひかせてくれるでしょう」

(3) 皓齒蛾眉、伐性之斧

「歯が白くて眉を長く引く美女」。そのココロは、「精力を伐り取る斧となるでしょう」

(4) 甘脆肥濃、腐腸之藥

「おいしい肉に濃い酒」。そのココロは、「腸を腐らせる薬でしょう」

この三十二字を私は雪堂の門にも窓にも座席にも衣服にも盆にも書き、立っても座ってもこれを見て、寢食これを念うようにしている。

元豊六年十一月、雪堂で書く。

■減字木蘭花

黄州知事の徐大受（字は君猷）はなかなかの風流人で、家には幾人もの歌妓がいた。上の第三の戒めを徐知事に伝えたかどうかは定かではないが、ある人の随筆に、蘇軾の詩に次のような題のものと記されて

いる。「鄂州の役人である張商英(字は天覺、号は無尽)が黄州に来た。黄州の徐知事には四人の侍女がいて、姓は孫、姜、閻、斉という。たまたま張夫人がその一人を連れて婿の家に行き、暮れ方に帰って来た。それは閻姫であって、徐知事が最も寵愛する侍女であった。よって絶句を作った」。その詩は意味が取りがたいので、ここでは慶姫(すなわち閻姫であると推測されている)に贈った詞を見ておこう。

(これは相手を喜ばせるために心地よい言葉を並べただけで内容は乏しい。敢えて堅苦しい読み下し文で訳してみた。こうするとわれわれ日本人には何やら立派げな作品に見えるから面白い)

天真雅麗、(天真 雅麗)

容態溫柔心性慧。(容態 溫柔にして 心性 慧)

響亮歌喉、(響き亮らかな歌の喉)

過住行雲翠不収。(行雲を過住て翠に収らず)

妙詞佳曲、(妙詞の佳曲)

轉出新声能断続。(新声を轉出して能断続す)

重客多情、(重客 多情)

満勸金卮玉手擎。(満たして金卮を勧め玉手にて擎げる)

■跋李康年篆心経後

武昌ぶしょうの役人である李康年りこうねんが『般若心経ほんにやしんぎょう』を篆字でんじで書き、その求めに応じて跋文を記した。

江夏こうか(武昌)の李康年いこうねんは古このことを好みしょうてん博学で、特に小篆くわについて非常に精しく知っている。その家族の忌日に『般若心経』を篆書で記して追福とし、私に跋文を求めた。

私は、この経は言語で表わされ文字で記されているとはいえ、文字を見て、言語で理解しようとしても、それによってわかるものではないと聞いている。篆書がいくら巧みであっても、それが理解の助けになることはなく、まして跋文がどうこうできるものではない。

人はその家族のために、仏の道に帰依することを願い、それぞれのできる範囲で仏事を行う。砂を集めて地面に經典を記すのも十分で、まして篆書がこれほど巧みであるのならいうことはない。ただし、私が恐れるのは、篆書が巧みであることだけを見て、本当に大事なことに目を向けないでいることだ。だから、私はこれを観る者のために、そうはならないようにこと書き記すのである。

元豊五年十二月十三日。

■李委吹笛

12月19日のちょっとした出来事を記録した詩。序文がある。

げんぼう せきへき
元豊五年十二月十九日、私の誕生日に赤壁の磯辺に酒を置いた。高い峰の
うげく かきさき たげなわ
下に踞り、鶴の巢を見上げた。酒酣のころに、流れの上から笛の音が起こつ
た。

かくこう ここうどう
友人の郭邁と古耕道は音楽をよく知っていて、
「この笛の声には新しい意匠があります。そこらの俗な笛吹きではありませんでし
う」

と、私に言った。

ぬし しんし りい
人をやって尋ねると、笛の主は進士(科挙の一次試験を通過したことのある者)李委で
あった。李委は今日が私の誕生日だと聞いていて、新しい曲『鶴南飛』を作った
ので、それを献じたいという。

李委を呼んだところ、青い頭巾を被り、紫の上着を着て、笛を腰にしていた。その
新曲を演奏してくれ、さらに快く数曲を吹いてくれた。音がよく通り、雲を穿ち石を裂
くばかりであった。酒席に並ぶ者はすっかり酔いしれてしまった。

李委は袖から美しい紙一幅を出し、

「私はあなたさまから何かを頂戴しようとする曲を献じたのではありませんが、ただ
一首の絶句なりを詠んでいただけたらと思っています」

私は笑って詩を作った。

貴君の曲に誘われ、

山の頂から一羽の鶴が南に向かって飛んだ。

私を載せ、南の空に遊び、九嶷きゅうぎに到った。

下界ではまた誰かが笛を吹いている。

曲の可憐さのあまり、

鶴は今度は亀茲きょじにまで飛ぼうとする。

(李委あざな こうたつ(字は公達)は蘇軾ごせきへきかの作った「後赤壁賦」を知っていて、鶴のイメージを音楽で表わそうと「鶴南飛」の曲を作ったのではなかろうか。この詩もまた鶴を歌って、黄州から九嶷へと飛んで行くという。九嶷は古代の聖天子しゆんの舜を葬ったところである。さらに次の行き先である亀茲は西域シルクロードの国)

■酔翁操詞

李委りいは笛の名手であったが、琴の名手である崔閑さいかん あざな せいろう(字は誠老)がこのころに黄州に来てしばらく滞在した。崔閑は若い頃は都に出て学問に励み、折々に琴を弾いて楽しんでいたのだが、後に廬山ろざんの玉澗ぎよくかんに隠棲して、玉澗道人ぎよくかんどうじんと呼ばれた。崔閑の求めに応じて作ったのがこの詞。序文がある。

滁洲じょの瑯邪ろうやの奥深い谷は山水が美しく、人気のない谷間に滝の音が響き、それは音階に適うかのようなのである。酔翁すいおう(歐陽脩おうようしゅうの号)はこれを喜び、酒を携えて聴きに行き、欣びのあまり帰るのを忘れるほどだった。

醉翁が滁州を去って十余年の後、好奇の士である沈遵ちんじゅんがこのことを聞いて瑯邪ろうげに行き、琴でその声を写し、その曲を「醉翁操すいおうそう」と名付けた。その節回しは自在に変化し、その音調は華やかにしてのびやかで、琴を知る者は絶品であった。

その曲には声はあっても辞ことばがなかったので、醉翁自身が歌詞を付けた。しかし、琴の音階と合わないところがあった。また、醉翁は楚辞そじの体裁で「醉翁引すいおういん」を作ったところ、好事家がそれによって曲を作った。それは辞と曲がまぼ釣り合っていたものの、琴は辞の制約を受けて自然でないところがあった。

それから三十余年が経ち、醉翁はすでに亡くなり、沈遵も没して久しい。ここに廬山の玉澗道人こと崔閑は琴の妙手で、沈遵の曲にぴったり合う辞がないのを残念に思い、この曲を譜とうばに写し、東坡居士とうばこじに辞を補うよう要請した。

(歐陽脩は30歳のときに夷陵いりように左遷され(本章220ページ)、その後中央に復帰したが、39歳のときに今度は滁州じょに左遷された。滁州の瑯邪ろうげのあたりの風光をことに愛してしばしば酒宴を開き、自ら醉翁すいおうと号して醉翁亭すいおうていを建てた。そのことを記した「醉翁亭の記」は現在でも漢文の教科書に載るほどに有名な文章で、簡潔で平易、かつ深い内容があることから、宋代の散文の規範となった。黄州に来てからの蘇軾の振る舞いは滁州の醉翁に見習うところがあり、また「醉翁操の詞」が「醉翁亭の記」を踏まえていることから、ここで「醉翁亭の記」を見ておきたい。

欧陽脩：「醉翁亭記」

滁州じょをめぐっては皆山みなである。

森や谷が最も美しいのが西南の峰々だ。望み見てこんもりとして深くすぐれた姿の山がある。琅琊山らうやさんである。

山道を行くと六里ないし七里、さらさらと水の流れる音が聞こえて来て、二つの峰の間から湧き出る泉がある。釀泉じょうせんである。

峰を回って道が折れ曲がる先に、翼を広げるようにして泉のほとりに立つ建物がある。醉翁亭すいおうていである。

醉翁亭を作ったのは誰か。山の僧の智僊ちせんだ。醉翁亭の名を付けたのは誰か。滁州の太守その人である。

太守は客人と連れ立ってここに来て飲む。少し飲むとすぐに酔い、しかも一番の年長だ。だから自ら号して「醉翁」というのである。

醉翁が思いを寄せるのは酒ではない。山水の内うちにいることだ。山水の楽しみを心に得るために、それを酒に含ませて飲むのである。

山に日が昇るとき、林の雲気は明るく開かれる。山に雲が帰るとき、巖いわおの穴は暗く塞がれる。明暗がこして変化するのは、山の朝と暮れである。

野の花が開いてかすかな香りを放ち、木が盛んに繁茂して深い蔭を作り、風が高く吹きわたって清らかな霜を降らせ、水が落ちて石が現れ出る。これは山の四季である。

朝に行き暮れに帰る、あるいは四季それぞれの景色は同じではない。だから、その楽しみは無窮である。

ここにおいて、担う者は路傍に歌い、歩く者は木の下に休み、前の者が呼べば後ろの者が応え、腰の曲がった老人がいれば手を引く童子がいる。往来して絶えることがないのは、滌ゆの人の「遊」である。

ここにおいて、溪に臨んで漁をすれば、溪は深く魚は肥えている。泉の水で酒を作れば、水は香しくて酒は清らかである。山の幸、野の幸を雑然と前に並べるのは太守の「宴」である。

ここにおいて、宴たけなわが酣たけなわとなつての楽しみは、楽器の糸や竹が生む音色にあるのではない。矢を射て当たるか外れるか、碁を打って勝つか負けるか、賞罰の杯が入り乱れ、立つ者もいて座る者もいて、騒がしく言い募るのは、大勢の客人の「飲」である。

ここにおいて、蒼い顔、白い髪で、この「遊」「宴」「飲」の間にあつて身を崩しているのは太守の「醉」である。

かくて夕日が山に入り、人影が散り散りとなつて、太守が帰るのなら、客人もそれに従う。樹林は陰翳を深く、上下に鳴く声は、遊ぶ人々が去ってからの鳥たちの楽しみである。鳥は山林の楽しみを知っていて、人の楽しみを知らない。

人々は太守の遊びに従って楽しむことを知っていて、太守の楽しみは人々が楽しんでいるのを楽しむところにあるのを知らない。

酔えばその楽しみを人々と一緒にし、醒めればそれを文章にして述べる。それをするのが太守である。

太守とは誰なのか。廬陵ろりょうの歐陽脩である。

(1) 左遷された者は悲嘆に沈む——かつての常識（というよりは人間の自然の心理）

を覆したのが欧陽脩である。地方に飛ばされたなら、その地の課題に鋭意取り組み、土地の人々の喜びを自分の喜びとする——そのような新たな常識を実践して見せたのが欧陽脩であり、それを文章で表わしたのがこの「醉翁亭の記」である。少年蘇軾が憧れた4人のスーパースター（はんちゆうえん 范仲淹、かんき 欧陽脩、ふひつ 韓琦、ふひつ 富弼）も、そかん 伯父の蘇軾も、郷里の大先輩の「だいにん 大任」も「しょうにん 小任」も皆がこの新常識を共有していた。(2)「醉翁亭の記」の冒頭にある「滁州をめぐっては皆山である」(環滁皆山也)は宋代の文章のあり方を端的に示すものである。何の飾りもない原文の5文字を生み出すのに、実は欧陽脩は苦心に苦心を重ねた。始めは滁州をめぐる数々の山々を苦心して描き分け、推敲を繰り返した末に全てを削ってここに至った。最も大切なことを簡潔に伝えることを理想としたのである。欧陽脩が何度も書き換えたことについては次のような記録がある。「欧陽脩は文を作り終わると、それを壁に貼り、書き改めて最善を尽くしてからようやく人に示した」(かえん 何蘧著『しゅんしよきぶん 春渚紀聞』)

瑯然、(からから 瑯然と)

清園、(さやさや 清園と)

誰弾、(誰が弾(のか))

響空山、(ひっそりとした山に響き)

無言、(ことば 言はありません)

惟翁醉中知其天。(ただ醉翁だけが醉中にその天の音を知ったのです)

月明風露娟娟。(月は明るく風ははっきりとして清らかです)

人未眠、(人(醉翁)はまだ眠らずにいると)

荷蕢過山前、(竹籠を荷って山の前を過ぎる人がいます)

曰有心也哉此賢。(醉翁は言います「心あるかな、この賢者は」と)

醉翁嘯詠、(醉翁が吟唱すると)

声 and 流泉。(流れる泉がその声に和します)

醉翁去後、(醉翁が去った後は)

空有朝吟夜怨、(空しく朝に吟じ夜に怨む泉の声があって)

山有時而童巔、(山では時に従って葉が落ち)

水有時而回川。(水は時に従って川を巡るだけです)

思翁無歳年、(醉翁を思っ長い歳月がたち)

翁今為飛仙、(今や醉翁は仙人となり)

此意在人間、(ただ(瑯琊を愛した)意^{こころ}だけが人間世界にあって)

試聽徽外三両弦。(それは琴の弦に聴くことができるのです)

■黄泥坂詞

臨臯亭^{りんこうてい}から東の坡^{おか}に行くには途中で坂を登り、それを黄泥坂^{こうでいはん}といった。

年末にその坂を詞に詠んだ。

(題に「詞」とあるが、既存の曲に合わせて歌うタイプの「詞」ではなく、朗誦するものであるようだ。詞中に頻出する「兮」^{けい}は語調を整える合の手で意味はない)

出臨臯而東驚兮、(臨臯亭を出て東にせかせかと兮)^{イエーイ}
 並叢祠而北轉。(こんもりとした祠のところで北に曲がります)^{ほくら}
 走雪堂之陂陀兮、(雪堂に行くにはでこぼこの兮)^{イエーイ}
 歷黃泥之長阪。(長い黃泥の坂が間にあります)^{こうでい}
 大江洶以左繚兮、(左側で、長江が湧くようにまわり兮)^{ちようこう イエーイ}
 渺雲濤之舒卷。(雲と波が巻き付いています)
 草木層累而右附兮、(右側で、草木が重なり兮)^{イエーイ}
 蔚柯丘之葱蒨。(柯丘がどっしりと構えています)^{かきゆう}
 余旦往而夕還兮、(私は朝にここをいき夕べにここを帰兮)^{イエーイ}
 歩徙倚而盤桓。(歩くのはためらったりぐずぐずしたりです)
 雖信美不可居兮、(ここは実に美しいけれどずっといられるところではなく兮)^{イエーイ}
 苟娛余於一盼。(見えるものをとにかく楽しみたいのです)
 余幼好此奇服兮、(私には幼いころからおかしな趣味がありまして兮)^{イエーイ}
 襲前人之詭幻。(昔の人の奇怪なところを真似てきました)
 老更變而自哂兮、(老いてますます変で、自分で笑ってしまい兮)^{イエーイ}
 悟驚俗之來患。(人々をびっくりさせてばかりではまずいということを知りました)
 積宝璐而被繪絮兮、(まともな服などは捨ててしまって綿のどてらをひっかけ兮)^{イエーイ}
 雜市人而無弁。(土地の人に雑ざって見分けがつかえません)
 路悠悠其莫往來兮、(世間の路は遙かに長いけれど、往來することはなく兮)^{イエーイ}
 守一席而窮年。(ここらをちんまり守って年を終えようとしています)

時遊歩而遠覽兮、(時にふらりと歩いて遠^{イエーイ}を見ても兮)

路窮尽而旋反。(路が行き止まりになるとすぐに引き返します)

朝嬉黄泥之白雲兮、(朝には黄泥の坂の上の白^{イエーイ}い雲を喜び兮)

暮宿雪堂之青煙。(暮れには雪堂に宿って青い煙を上げます)

喜魚鳥之莫余驚兮、(うれしいことに、魚や鳥が私を驚かせることはありませんし兮^{イエーイ})

幸樵蘇之我媪。(幸いにも、村人は私を阿呆扱いてくれます)

初被酒以行歌兮、(酒を飲んで歩きながら歌^{イエーイ}って兮)

忽放杖而醉偃。(杖を放り投げ、酔って倒れ伏してしまいます)

草為茵而塊為枕兮、(草を敷物にし、土^{イエーイ}くれを枕にし兮)

穆華堂之清晏。(それで立派な建物で安らかに眠っている気分です)

紛墜露之湿衣兮、(露が落ちてきて衣^{イエーイ}を湿らすと兮)

升素月之团团。(まん丸の白^{イエーイ}い月が昇ってきます)

感父老之呼覚兮、(ふと感じるのは、老人たちが呼び覚^{イエーイ}ます声兮)

恐牛羊之予踐。(牛や羊が私を踏んつけてしまうのを心配してくれたのです)

於是蹶然而起、(私はさっと起き上がり)

起而歌曰、(立って歌います)

月明兮星稀、(月^{イエーイ}は明るく星は稀に)

迎余往兮餞余歸。(余^{わたし}が往^ゆくのを迎え兮 余^{わたし}が歸^{かえ}るのを餞^{むか}へ)

歳既晏兮草木腓、(歳^{おと}はすでに晏^{イエーイ}り兮 草木^{きば}は腓^むみ)

归来归来兮、(帰^{かえ}る帰^{かえ}る兮^{イエーイ})

黄泥不可久嬉。(黄泥は久しく嬉ぶべからず)

(最後の歌にある「月明星稀」は曹操そうそうの詩にあり(本章310ページ)、「归来」は陶淵明とうえんめいの「ききよらい 歸去来の辞」にある(本章264ページなど)。蘇軾は臨臯亭と東の坡との日々の往復を楽しみ、これがいつまでも続くことを望む気持ちがありつつも、そのようには決してならない(なつては困る)とも思っていた。なお、このころに岐亭きていに行つて陳慥ちんぞう (方山子)さんし(本章32ページ)と会っているようだ。4回目の岐亭訪問である)

■正月三日点燈会客

元豊6(1083)年、蘇軾48歳。

黄州に来て3度目の正月を迎え、1月3日、臨臯亭りんこうていに集まった客人とともに灯籠をともした。話題は1月15日の上元じょうげんの節の都の賑わいに及んだのだろう、蘇軾はこの詩を作つた。

長江ちやうかうの上を吹く東風のために、浪は天に触れるばかり。

寒さはなおも無頼、

春が妍うつくしくなろうとするのを駄目にしてしまおうとしている。

寒さよけに、

雲夢うんぼうの羔兒酒こうじしゅを開いて味見をしたり、

錢塘せんとうの葉玉船やくぎょくせんをさっと注いだりする。

春の初めに養蚕市ようさんいちに遊んだのは遠い少年時代、

ここは我が故郷ではない。

ば こうがい
都の馬行街の灯籠の記憶ははっきりと残っているが、

それだってもう昔のことだ。

冷ややかな露に湿った雪、

梅の花が密やかに開くのはやはり春であるからだろう。

まだ早いけれど、燈火を掲げて上元の思いをなすでしょうか。

（「雲夢の羔兒酒」や「錢塘の薬玉船」は、それぞれの土地にそういう名の酒や薬があったのだろう。蘇軾の故郷では養蚕に必要な道具類を売る「蠶市」さんしが賑やかに開かれたことは第2章66ページの詩で見ている。馬行街は都で最大の繁華街で、上元の節には無数の灯籠が飾られた。それは間違いなくこの時代の地球上で最も明るい夜景であった）

■六年正月二十日復出東門仍用前韻

1月20日に郊外に出て春を尋ねるのはもはや恒例行事となり、本章141ページおよび226ページで見た詩と同じ韻をまた用いて詩を作った。はん潘丙、郭遵、古耕道の名は明記されていないが、たぶん同行したのだろう。

黄州の町はあまたの山が環めぐる中。

東の門を出て、前の川を渡り、

我が身をちつぽけな村に置く。

私は、狭い畑を得て、どうにか一生食べて行けそうな算段がついた。
 旧くからある巢に積もった塵を鳥が掃除するのを繰り返し見た。
 川べりの沙で鷗とすっかり慣れ親しんだだけでなく、
 いつも釣り糸を垂れる岩場は私の温もりを覚えてくれている。
 今日この一月二十日に東の風(春風)と逢う約束もすでに長く、
 梅はいつも花の魂を呼び戻してひそやかな香りを漂わせてくれている。

■子瞻患赤眼

このころ蘇軾は眼病を患い、風邪もひいたようだ。後に次のような短文を記している。

私が赤目を患ったとき、ある人は^{なます}膾を食べてはいけなかったと言った。私はそれに従おうとしたところ、口がそれはだめだと言った。

「おいらはあんたのために口になっている。あいつはあんたのために眼になっている。あいつにはよくして、おいらにはなおざりというわけなのかい。あいつが患ったからといって、おいらに食べせないとは、ひどいではないか」

それで私は決めることができなくなった。

口は眼に言った。

「こんどおいらが患ったら、あんたが物を視るのを禁じてやるからな」

昔、^{かんちゆう}管仲はこう言った。

「お上の威令を病のように畏れるのは民として上の部類である。自分の思いに従って流れてしまうのは民として下の部類である」

またこうも言った。

「のんびり楽するのは猛毒である。それに耽ってはならない」

『礼記』にはこうある。

「君子はきちんとしていると日に日に立派になり、安楽にしていると日に日にだめになる」

この語を皆が目立つところに書き記したという。

そこで私は、

「お上の威令を病のように畏れる」

と、自分のためにここに記しておく。

(つまり、口の言い分をきかずに、節制して脛を食べるのをやめたということであるう)

■次韻孔毅甫集古人句見贈五首

孔平仲（字は毅甫あるいは毅父）（本章 240 ページで登場）が昔の人の詩から句を拾い集めて再構成した詩を送ってきた。それに次韻した。

（昔の人の詩句を再構成する例としては、陶淵明の「掃去來の辞」の語句を使った蘇軾自身の作を本章 267 ページで見ている。しかし、そのような行為はあくまでも遊びの範囲であると蘇軾は捉え、この詩も遊びで応えたもの。よって訳も遊びである）

其の一

まこと羨ましい、

君が戯れに他人の詩を呼び集め、

町の子供を顎でこき使うのと同じようにしているのは。

天の彼方を飛ぶ気高いおどり鴻鵠を、

そこの家で飼われている鶏とペアを組ませたりもしている。

しかし、どうなのだろう、

そんなことをされたのでは、

韓愈かんゆはたまげず笑い、杜甫とほはがっくりと泣くのではないのかな。

そんなことになって君は家でくつろいでいられるかな。

世の人が好い句よだとするものは世の人のものなのだ。

明るい月がどの家にも射し込むのと同じく、

君一人が独占していきりまわしてよいものではないだろうに。

(蘇轍の詩は、孔平仲が集めた句からキーワードを抽出して、戯れの苦言を呈しているようだ。そうした高度な技を訳文に反映させることはとてもできない)

其の二

駱駝らくだのこぶの肉がどれほど旨いものか僕は知らないけれど、

それを鶏や豚の肉に雑せてしまったら、

まったくもって残念としか言いようがない。

君は居ながらにして、

しんけい 猩の唇とか熊の掌とかの最高の珍味を集めたわけだが、

道端で拾ったへっぽこな槍と、

名工が鍛えた名剣とをいっしょくたにするようなことをしたのは、

何にもならない。

四の五の言わずに僕にまかせてくれたらよい、

君が気を失うくらいにみごとに使いこなしてみせるだろう。

其の三

天下に杜甫の詩を学ぶ者は多いけれど、

せいぜい皮に触れるくらいで、

深く骨まで理解する者はまずいない。

目の前に巨大な山が聳え立っていて、

よちよち歩きの羊が、その険しさに恐れ入るしかないようなものだ。

杜甫の詩はどれも名章、俊語に満ちている。

当時いかなる情でそれを用いたのか、

誰もわかつちやいないのだが、

君の前生はきっと杜甫であったのだろうね、

手当たり次第に使いこなしてしまうのだから。

其の四

詩人は自然から詩句を彫り出す。
 最も肝腎なところを^{えぐ}抉り出すと、
 鬼神もそれに応じて泣くという。
 そうした詩句を千回も万回も繰り返し^{もくじほ}黙誦するのがよい。
 右から悲しい句を取り出し、
 左から愛すべき句を取り出し、
 いつも心を豊かにしていただけるだろう。
 いつしか君と会ったら、ともに一杯やって、
 「僕は眠くなったから、君はもう帰りたまえ」
 とだけ言って、詩については一切何も語らないつもりだ。

其の五

^{ろうそく}蠟燭は光を出すために自身の身を焼いてしまわなければならない。
 象は牙のために、^{かわせき}翡翠は羽根のためにその身を失ってしまう。
 多く言うのは窮するもとど昔から決まっている。
 かすかにほのめかすことで事態を解きほぐすこともある。
 愚かな者は、
 とにかくやたらとたくさんよさそうなものを集めたがるだけで、

何が本物なのかわかっていない。

千章万句を並べたところで、

どうせ自分のものではないだから、

やめた方がよいと君に言いたいのだが、

すでに手遅れみたいだね。

(蘇軾は集句という行為を頭から否定したわけではないだろう。原作を十分に理解しないで珍妙な対比をしてみせたり、むやみと名句同士を並べたりするのは、原作者を悲しませるものだと言っているのだろう)

■食柑

黄州のあたりに柑橘類が豊富であることは本章 119 ページで、また、東の坡おかに柑橘類を植えたいと思っていたことは本章 158 ページでそれぞれ見ているが、これは柑橘類を食べた詩。

唐の皇帝が薄絹むかぬに包んで臣下みかんに蜜柑を賜ったということを知ると、

朝廷おを逐われた身でありながら、

林の下で呑気に蜜柑を食べるのはいささか恥じらいを覚えずにはいられない。

冬でも青々とした葉を付けたままの枝を剪きって、盤ばんに盛られた金色の実、

手に取って香り高い皮を剥く。

清らかな泉の水が、さらさらと齒はに流れ、

香る霧が、さやさやと鼻に吹きかかる。

客人は蜜柑を持ってきてくれて殷勤に私に勧めてくれるのだが、

千人の召使いに譬えられる蜜柑であっても、

私の貧乏はどうすることもできないだろう。

(千本の蜜柑が千人の召使いに相当するという故事はやはり本章 158 ページにある)

■大寒歩至東坡贈巢三

巢谷（字は元修）^{そうこく あざな げんしゅう} という眉山眉山^{び びざん} 出身の者が訪ねてきた。大寒の日とともに東の坡^{おか}に行き、この詩を贈った。

(巢谷も蘇軾好みの「異人」^{いじん} である。初めその名を穀^{こく}といい、科挙を受験するために都に行ったところ、武芸の方に心を魅かれ、そちらで身を立てようと考え、各地を旅して武芸者と交わりを結び、韓存宝^{かんそんほう} という者から兵書を教わった。宋は夏国^かと戦争を起こして失敗し（本章 192 ページ）、作戦に関わった韓存宝は敗北の責任を問われて死を覚悟し、「自分が死罪になるのを恐れはしないが、妻子を飢え死にさせるのは忍びない。ここに数百両の銀がある。家に届けてくれまいか」と巢穀に託した。巢穀は名を変え、秘かに韓存宝の故郷に行ってその銀を渡し、しばし身を隠していた。己に罪が及ばないことを聞いてようやく身を顕わし、蘇軾を訪問した。巢谷は前年の秋にすでに黄州^{たい}にきて、三男迨の勉強の指導を蘇軾から頼まれたという説もある)

春の雨であるのに、暗い塵のように降り注ぎ、

春の風であるのに、人を倒さんばかりに吹いてくる。

^{おか}
東の坡の我が家には幾つかの部屋がある。

君が誰かの隣に住むとしたら、ここ以外にどこがあるろうか。

見たまえ、

^{ベッド}
牀にはぼろぼろの綿を詰めた布団がある、

^{かまど}
壊れた竈には湿った薪が積んである。

君は一度も「寒い」とは言わないのは、

哀しいかな、

僕が貧乏であるのを知っているからだ。

僕にだってなけなしの酒がある。

^{ひさこ}
たった一つの瓢にあるだけだから、

僕の頬を赤くすることもできないけれど、

これを独りで飲んでしまうのはまことに不人情というもの、

君の唇を少しでも潤おしてくれたまえ。

僕の知り合いには、

いまや莫大な俸禄をもらって、

馭者でさえも酒を飲み過ぎて豪華な敷物に吐瀉して平然としているとか。

そんな連中は知りもしないのだ、

僕と君がこうして冬の蟬のように呻吟しているなどとは。

僕も君も己の力を尽くし、天を怨むことはない。

僕も君もれっきとした天の民だ。

そのうち柳に花がつくのを見るだろう。

そうになったら、

天の与える無^む辺^{へん}の春を享受しようではないか。

(この詩のキーワードは終わりに出てくる「天民^{てんみん}」と「無^む辺^{へん}の春」であろう。「天民」とは天のもとに生まれ、天の法則に従って生きる民で、天のもとでは誰もが平等である。「無^む辺^{へん}の春」とは無限に広がる春である。それを享受するとは、「赤壁^{せきへき}の賦」で提示された「造物者の無^む尽^{じん}蔵」を我がものとして受けるということである。この詩は後に石に刻まれて成都^{せいと}の州庁に置かれたという)

■元修菜

これも巢谷^{そうこく あざな げんしゅう}(字は元修)に贈った詩。序文があり、その中に引かれている故事については説明も織り交ぜて訳す。

野菜で旨いものといったら、我が故郷^{そうきょう}の巢菜^{そうげんしゅう}がある。友人の巢元修(巢谷)はこれが好きで、私も好きである。

昔むかしのこと、孔坦^{こうたん}がとある楊^{よう}さんの家を訪ねた。楊さんは留守で、九歳の息子が応対した。息子が楊梅^{やまもも}の実を出してもてなしたところ、孔坦は楊梅にひっかけて、「これは君の家の果物だよね」と言った。すると息子は即座^{くじやく}に、「孔雀がおじ

さんの家の鳥だとは聞いておりませんけれどね」と答えた。

巢元修は、「孔雀が孔坦の家の鳥なら、巢菜こそは我が家の野菜ですな」と言った。それで私は巢菜を「元修菜」と呼ぶことにした。

私は故郷を離れて十五年になり、「元修菜」を食べたいと思っても得られずにいた。たまたま巢元修が黄州にきたので、この詩を作り、巢元修が故郷に帰ったならばこの詩をその息子に見せて、「元修菜」を東の坡おかに植えられるようとりはからってほしいと頼むものである。

旨いものといったら、君の家の野菜だ。

旺盛な成長力は、緑を畑一面に敷き詰めたようになる。

豆の莢さやは円くて小さく、そこからふっくらとした小さな芽が出る。

これを植えるのは秋の雨の後で、

霜がさかん降るころにぐんぐん伸びる。

花が咲こうとしても萼がくがなくて、青虫がたくさんついているような感じになったときに、

青い裾スカートをはいた女性たちが畑に出て、せっせと葉を摘み取る。

蒸すなり茹でるなりすると、その色と香が盆いっぱいりに満ちる。

酒を垂らして鹽鼓しおみそとあえてもよいし、橙だいだいを細かく切っても、薑しょうがや蔥ねぎを加えてもよい。

これさえあれば鶏やら豚やらの肉はいらない。

問題はあつという間になくなって、

箸が行き場なく中空でさまよくなることだ。

春が終わる頃には葉が枯れ出し、
 煙る雨の中で畑を耕せば、
 自然の潤いによって化して泥の中へと溶け込む。
 植えてから終わりまで、人の労力に忘れないことはなく、
 人の力と土の力によって成長する。
 私は老いて故郷の家を忘れ、
 子供等の言葉は蜀音しよくおんではなく楚音そおんに変わってしまった。
 それでもこの野菜のすばらしさだけは、いつも私の胸の中にある。
 君は帰ったならば、その子に頼んでくれたまえ、
 袋にたっぷり入れて送ってほしいのだ、
 決して箱に詰めて封をしてはいけない。
 漢の時代に、
 張騫ちやうけんは馬に食わせる苜蓿うまごやしを西域から移植し、
 それは白菜のように人が食べることもできた、
 また馬援ばえんは薏苡とくいを載せて西域から還り、
 それは大いに連なって繁るようになった。
 ならば、この野菜を蜀からここに移すなら、
 東の坡の下の痩せた土地も稔り多いところとなって、
 黄州の人々はこの菜を指さして、
 私と君の両翁の功績であると長く語り継ぐであらう。

(巢谷は、対岸に住む^{おう}王兄弟を訪ねた後、一旦故郷に帰ったようだ)

■聖散子叙

巢谷(字は元修)は「聖散子」という秘伝の薬方を知っていて、黄州
界隈で疫病がはやった際に蘇軾がその薬を試しに用いてみると著しい薬
効があった。これは「聖散子」を世に広めようとして書いた宣伝文。

(医術に関わるこの文章は、中国の古い医術に関して全くの無知である訳者には解し
難いところが多々あり、大きな誤りをしない程度に大略を汲み取って訳す)

昔、『千金方』(唐代の孫思邈が編んだ医学書)にある「三建散」の条を読んだところ、
「胃病も熱病もいかなる病も治さないことはない」とあった。孫思邈が特にこのよう
に記しているのは、この薬の効果が尋常ではなく、危急を救うのに非常に験^{しるし}があ
ると考えたからだろう。優れたものの効き目は普通の理屈にはよらないところがあ
って、人智では計り知れないものがある。いま私が蓄えるところの「聖散子」はほと
んどこの類なのであろうか。

古来、病を論じるときは傷寒(熱病、疫病)を最も危急とし、その症状の微妙な差異
によってある治療法で救えるものと救えないものがあったとした。しかし、「聖散子」は
一切を問わない。男女によらず、症状が危急に至った者でも、続けて数回服用
すれば、汗が出て気が通じ、飲食がやや進むようになり、気分がはっきりと回復
する。他の薬を併用する必要はない。軽い症状の者は少し汗をかいて恙なく治る。

薬の性質としては少し体を熱く、飲むとすぐに病毒による不快な感じがすっきりとする。ほとんど理解できないほどの効き目がある。

もしも疫病がはやったならば、大釜でこの薬を煮て、老人も子供も誰でも大きな蓋さかぎで一杯飲むなら、疫病が身体に入り込むのを防ぐことができる。普通の病気ではないときにも、空腹時に一服すれば、飲食が倍に進み、百病ともに生じない。まことの世を救う道具であり、家の宝である。

「聖散子」の薬方がどこから出たのかは知らないが、私は眉山びざんの人である巢谷君から教わった。巢谷君は多くを学び薬方も好み、「聖散子」の薬方は惜しんでその子にも伝えずにいた。私は強く求めてこの薬方を得た。私が黄州たぐきよ謫居になったときに疫病がはやり、この薬を人々に与えたところ、それによって数えきれないくらいたくさんの方が救われた。

巢谷が最初に私にこの薬方を授けてくれたときに、ほかの人に伝えないと長江ちやうかうの水にかけて誓った。しかし、私はこっそりこれを洩らし、蕪水きすいの人である龐安時ほうあんじ君に伝えた。龐安時君は今の世に善い医者として名が聞こえ、善い医書も書いているので、後世にもこの薬方が伝わるようにと書いてこれを授けたのだ。そうなれば巢谷君の名もこの薬方と同じ不朽のものとなるであろう。

(蘇軾が蕪水あざな 蕪水あんじようの医者、龐安時(字は安常)の治療を受けたことは本章 280 ページで見ている。聖散子は実際によく効き、しかも蘇軾が大いに宣伝に努めたことから、広く使われるようになった。ここではいかなる疫病にも効くと書いてあるが、もちろんそのような万能薬があるはずもなく、ずっと後に都で疫病がはやったときに、やた

らと聖散子を用いたために救えなかった者が大勢いたという残念なことも起こった)

■杜処士伝

葉の宣伝文を見たついでに、葉の名前をふんだんに盛り込んだ全編馱洒落のかたまり、終始言葉遊びという戯れの文を見ておこう。執筆年代は確定されていないが、黄州時代のものであろうと推測されている。杜というある庶民の伝記であるかのように見せかけ、さも意味ありげな議論を展開しているが、全て出鱈目である。冒頭の「杜仲は郁裏の人である」というところからして、「杜仲」と「郁李仁」という葉の名の語呂合わせである。こうしたお寒い馱洒落を無理に訳したところで意味がないので、原文を前半の5分の1ほどを掲げ、葉の名前(もしくはそれと同音)の部分を赤色で示す。

杜仲、郁裏人(=郁李仁)也。

天資厚樸、而有遠志、聞黄環名、従之遊。

因陳(=茵陳)曰「願輔子(=附子)与半夏、幸仁(=杏仁)憫焉、使得旋復自古揚權(=羊角)」

環曰「子言匪実(=樞実)、宜蚤休、少従容(=松蓉)、将訶子矣」

仲曰「人之相仁、雖不百合、亦自然同(=自然銅)、況吐新意以(=薏苡)前乎。

吾聞夫子(=附子)雌黄冠衆、故求決明於子、今子微(=紫葳)銜吾、為其非儕

乎」

(以下略)

(語彙が豊富で言葉を自在に操ることができる蘇軾ならではの遊びである。先に見た回文の詞といい、蘇軾は逆境にあっても心に余裕があった(ありすぎた?)。この他にも、現在の政治状況を皮肉のような架空の伝記も作っている)

■東坡

この頃の日常のひとつま。

雨が東の坡おかを洗って、

月の光が澄みわたると、

市人しじん(町中の人)はすでに行き尽くし、

野人やじん(郊外の農夫)ばかりが行く。

犖確ころころと石だらけの坡おかのとつきの路みちを嫌いはしない、

鏗然からからと杖を曳く音が愛おしい。

(市人と野人を対比させ、蘇軾自身はもちろん野人の一人である。「坡のとつきの路」とは先に見た黄泥坂こうでいはん(本章 347 ページ) である)

■与子由書

黄州から弟の蘇轍に宛てた手紙が幾つか残されている。人間の本性およ

びその修養について記したものをここでまとめて見ておこう。

(1)「心不異口、口不異心、心即是口、口即是心」

心は口と異なることなく、口は心と異なることなく、心はそのまま口で、口はそのまま心である——近ごろこの禅語めいたものをこしらえましたが、これは君の人となりを表すものです。要するに、君は己を欺く世間の連中とは違っています。この言葉を兄に当てはめようとしても、それはできません。人が水を飲むと、冷たいのか温かいのかすぐにわかります。死と生とが入れ替わるのも、禍わざわいと福とが交互に起こるのも、それと同じなのでしょう。会って話せないのが残念です。

(2)「任性逍遙、隨縁放曠、但尽凡心、別無勝解」

本性に任せてぶらぶらする、縁に従って広く放つ、俗な心を消し去る——このほかに「勝解」しょうかい(最善の解法)はない。

このことをもって自分自身を顧みると、俗な心を消し去るということが「勝解」であるのは実ははっきりとしています。ただし、この「勝解」はあると思えばあり、ないと思えばないようで、言葉によって伝えられるものではありません。ですから人を教え導く師もここまでしか言っていないのです。

譬えるなら、眼の(視界を遮っている)翳かげを取り除くなら、眼は自ずからはっきりと見えるようになります。医師はただ翳を取り除く薬を用いるのであって、はっきりと見えるようにする薬を用いるではありません。はっきり見えることを求めるのなら、きっとまた

そこに髻が生じてしまうでしょう。もとより、髻の中にあってはっきり見えることを求めることはできませんし、髻とは別にはっきりと見えなくさせているものがあるわけでもありません。

世間の愚昧な人は、ぼんやりとして何も認知していないのが仏の境地であるかのように言います。もし仏の境地がそのようなものであるのなら、猫や犬が熟睡して、腹を揺らし鼻ですうすう息をし、土やら木やらと同じような状態になっているときは、まさしく毛筋一本ほどの思念もないのですから、猫や犬は仏の境地に入っているのでしょうか。

およそ学ぶ者は、妄を^{もう}観て^む愛欲を除くことを、大より小に至るまで、全てを忘れずに毎日毎日行ってやむことはありません。

君が教えてくれたのは、つまりは以上のようなことでしょうか。

ここまで書いてきたところで、塙の向こうで怒りに任せて夫婦者が殴り合いの喧嘩を始めました。罵り声は火を噴くようで、猪の叫び、犬の吠え声のようです。ここからもわかるのは、猪の叫び、犬の吠え声のうちにも、一点の光明がはっきりとあるのでしょう。譬えていうと、大河の本性は、砂を飛ばし石を走らせる激しさの内にあるのでしょう。普段の静かな流れを見ているだけではわからないのです。今日の喧嘩からもいささか得られるものがあります。

元豊六年三月二十五日。

(3)「草木之長、常在昧明間」

ある人が僕に言います。

「草木が成長するのは常に夜明けのころだ。早く起きて観察すると、筍が最も甚だしくて数寸も伸びる」

「夏と秋の境目で、稲がまさに穂を出すとき、夕暮れに月が出ると、露の珠が根元に生じ、それを押し上げる者がいるかのように次々に上ってゆく。あるものは茎の中心にあり、あるものは葉の末にある。そして、稲の穂が出て実を結ぶ。観察するとその通りになっている」

この二つの事は君の養生の説と符合するように思うので、書いてお知らせします。

(これらの文章はいずれも弟からの手紙に記してあったことを踏まえて書かれているのだろう。よくわからない箇所があるのは、(こちらの読解力のなさだけでなく) 致し方ないところであるのだろう)

■ 日日出東門

黄州にある東門とうもんから毎日出て歩いていることを歌った詩。

(黄州の東門は本章 351 ページの詩題にもあったようにこれまで何度か見てきた。それはどこにあったのか。黄州の町は州庁のある府城ふじょうとその東側の東城とうじょうに分かれていたようだ。府城は城壁に囲まれ、東城はどうやら囲まれていなかったようだ。東門は府城と東城の境目にあり、それは乾明寺けんめいじ(その名は本章 57 ページから何度か出ていて、城壁の外側にある) の前から五十歩とところだという。東の坡は東門を出て北東側おか

にあるようだ。これまでの詩文とこの詩から推測するに、蘇軾が臨阜亭りんこうていから雪堂せつどうに行くには、府城に入らずに黄泥阪こうでいはんを上って東の坡に到る道と、府城を經由して東門を出て東の坡に到る道があったのだらう)

日に日に東門から出て、
 歩いて東城を尋ねて遊ぶ。
 東門にいつもいる門衛が、
 「あちに行って何を求めておられるのかね」
 と、笑って問いかけてきた。
 私が答えるに、
 「求めるものなどないさ。
 ここに駕るのは心の憂いを写すため。
 思いに適うところがあると、返るのを忘れてしまい、
 路が行き止まりになったら、そこでおしまいさ。
 遥かに想像するのは百年先、
 黄州の爺さんたちが、
 かつてここを僕が往き来していたことを語ったりするのもかね。
 大昔から、賢人も達人も誰もがこの路を通ったものだ。
 この路というのは、町から出て行く路のことだ。
 かつてかの町に住んでいた謝安しゃあんという人が亡くなると、

葬送せいしゅうもんの列は西州門から出て行った、
謝安に可愛ようどんがられていた甥の羊曇は、
その日からこの路を決して通るまいと心に決めた、
しかし、ある日、酔っていつの間にか西州門にきて倒れ伏し、
醒めてそこが西州門であると知ると、
羊曇は号泣した。
人の一生は百年、
豪壮な家で裕福に暮らしても、
千年後にはいかなる人も山丘さんきゅう(墓場)に帰っている。
まあ、君はいつもここにいるわけだから、
酔いから醒めていちいち私のために泣いてくれたりはないだろうね]

■記所作詩

上の詩に関連する短い文章。

私の詩に、

日日出東門、(日に日に東門を出て)

歩尋東城遊。(歩いて東城を尋ねて遊ぶ)

城門抱関卒、(城門ほうかんの抱関そつの卒は)

怪我此何求。(此こゝに何を求めるのかと我を怪あやしむ)

吾亦無所求、(吾に亦求める所なし)

駕言写我憂。(駕してここに我が憂いを写す)

というのがある。

章惇はこの詩を見て参寥に言った。

「前に『歩』とあって後には『駕』とある。最初は歩いていたはずなのに、なぜか馬車に駕っている。前と後ろでひどくちやくちやではないか」

私は参寥からこのことを聞いて言った。

「私は尻をもって輪となし、神をもって馬となし、それに駕して歩くのだ。前と後ろでちゃんと辻褄が合っているのさ」

参寥は言った。

「貴公が文章を飾って理屈を超えようとするのは孫綽にそっくりだ。『流れに枕するのは耳を洗うため、石で漱ぐのは歯を礪くためだ』と孫綽が言い逃れをしたのは、きっと貴公の入れ知恵だったんだろうね」

(1) 親友の参寥師(道潜)はこの年の3月末頃に黄州にきたようだ。この文書からすると、参寥はその前に都で章惇に会ったのだろうか。蘇軾は章惇の誘いを2年前に断っているが(本章84ページ)、参寥に向かって蘇軾の諷刺をケチをつけるくらいであるから、章惇は引き続き蘇軾のことを気の置けない友人であると考えていたのだろう。

(2) 蘇軾の作品には、前後で辻褄が合わなかったり、同じ語を繰り返したりするなどの瑕がよくある。瑕を糊塗する屁理屈を蘇軾がこねたので、参寥は有名な孫綽の故事を引いて笑った。孫綽は若い頃に、隠者になる志があると友人に語り、「石に枕

し、流れに漱ぐ」と言おうとして「流れに枕し、石に漱ぐ」と言い間違え、それを指摘されると、あくまでもこれでよいのだと強弁した。夏目漱石のペンネームはこの故事に由来する)

■和黄魯直食筍次韻

こうていけん あざな ろ ちよく たけのこ
黄庭堅（字は魯直）から 筍 を食べる詩が送られてきたので、それに次韻した。

（黄庭堅は第5章 275 ページなどですでに登場している。黄庭堅の詩は、時に難解な語句を蘇軾以上に駆使して晦渋であり、この詩も2人の間ではそれがごく普通であるのだろうが、難しくて何を言いたいのかさっぱりわからない。この訳文は晦渋さを100倍希釈している）

たっぷり食べて肉をごっそり残す人もあれば、
野菜の切れ端さえなくて食に餓えている人もいる。

食べ物のことで喜んだり怒ったり、

ごたごたとしたありさまは、

ちようさん ぼ し
「朝三暮四」の猿と変わらない。

そこに一人だけ覚醒しているのは、

りり はくか
凜凜しい白下の貴君で、

いっばん
一日に一飯の暮らしは在家の僧と同じ、

至^{しらく}楽とは不^ふ壊^えの道心であるとしている。

前の世では貴君はきっと書物を食らう虫だったのだろう、

今の世でその罪を償うために筍を齧っているのだ。

酒樽にも俎板にも何もなく、筍以外のものは雑えない。

しかし、霜や雪に被われた筍を見るがよい、

幼いときから早くも脱俗の姿、

それをどうして乱暴に食べてしまえるのかな。

三度その香りを嗅ぐなら、口にするのは忍びないではないか。

筍は朝に皮をはらりと解くなら、

風雷に迫る勢いで伸び上がるのだ。

貴君に願うのは、

竹筒に飯を盛って、五色の糸で縛り、

私のことを思って、水に投じてくれたまえ。

（「白下」とあるのは、黄庭堅の勤務地である太和^{たいわ}県の古い地名。最後のところは、不幸にして投身自殺した屈原^{くつげん}を弔うために始まったとされる端午の節句の行事を踏まえている。蘇軾は自分の境遇を屈原になぞらえたのである）

■書謗

謗^{ダマ}についての一文。これはずっと後に書かれたものだが、その前半部分を訳す。

私が黄州たくきょに謫居していた間に、曾鞏そうきようは母の喪に服して臨川りんせんに帰り、そのままその地で亡くなった。すると、人々が私と曾鞏が同じ日に死んだと妄みだりに言い伝えた。唐とうの時代りがに、李賀が天帝に召されて死んだといわれたように、二人は天帝に召されたのだ人々は嘆しよした。先帝しんそう(神宗皇帝)はこのことを聞いて慨嘆しよくし、蜀人の蒲宗孟ほうそうもうに真相を尋ねられた。

(1) 曾鞏が亡くなったのは元豊 6 (1083) 年 4 月で、65 歳だった。曾鞏は蘇軾と同時に科挙に合格した人。そのときの試験委員長であった欧陽脩おうようしゆうは、二次試験の答案で最も優れた論文は、自分の弟子である曾鞏が書いたものではないかと思ひ、一番と二番の成績を入れ替えて発表したところ、曾鞏が首席になってしまったというエピソードがあることは第 1 章 64 ページで見ている。唐と宋の散文の名手として特に優れた 8 人(唐の韓愈かんゆ、柳宗元りゆうそうげん、宋の欧陽脩そうじゆん、蘇洵そうじゆん、蘇軾そうあんせき、蘇轍そう、曾鞏、王安石)を唐宋八大家そうはちたいかというが、宋代の 6 人のうち王安石以外は欧陽脩とその近い人々である。

(2) 唐代の李賀は優れた才能と独特の感性がありながら、不遇のまま 27 歳で若死にしたので、天帝に召されたといわれた。曾鞏と蘇軾の 2 人の才人も不遇であった(両人とも改革に批判的であった)から、同時に天帝に召されたという噂が生まれた。(3) 蘇軾が死んだとの噂に神宗皇帝が驚いたことは、少し後の時代に書かれた随筆『春渚紀聞』(何蘧著)に次のように記されている。「皇帝は食事をしようとして何度も嘆息し、『才難』とつぶやき、ついには食事をやめて起った。意こころはなはだ喜ばないようであった。「才難」とは「蘇軾のような才能のある者は他には得難い」という意味であ

るが、「才能がある故の苦難」と読んでみたくもなる。(4) 皇帝は噂の真偽を同じ蜀出身の蒲宗孟に尋ねた。先に「馭者でさえも酒を飲み過ぎて立派な敷物に吐く」(本章359ページ)と皮肉をいつていたのは蒲宗孟のことだという説がある。(5) 同郷の大先輩である范鎮はんちん(第5章154ページ、本章98ページ)も噂を聞いて蘇軾の身を案じた一人で、黄州に人を遣わして真偽を確かめた。蘇軾は范鎮に手紙で応え、「春から夏にかけて、病気がちで赤目も患い、門を閉ざして人に会うこともなく過ごしておりましたところ、噂を伝える者はついには私が死んだとまで言い出し、人々を心配させてしまいました。全く笑うべきことです。普段から私の毀誉褒貶に関するものはほとんどがこの類です」と記した。(6) この噂は、黄州における蘇軾の動静が都の人々の関心事となっていたことを示すものであるが、蘇軾のことを快く思わない者も多かった。それは政治的に対立する改革派の人々ばかりでなく、保守本流の中にも蘇軾の振る舞いに眉を顰める者もいた(例えば大学者の程頤てい い)。この後で見る「牛酒帖」ぎゅうしゅちょう(本章406ページ)に記されているようことを伝え聞けば、生真面目な者が「罪を得て謹慎中であるのにけしからん」と憤慨するのも至極当然のことであつたらう。(7) 神宗皇帝はこれより1年ほど前に蘇軾を朝廷に呼び戻そうと考えたものの、側近の者によって阻まれたということがあつたようだ。公的な記録によるものではないので真偽のほどはわからない)

■臨江仙

この詞には「夜、臨阜りんこうに帰る」との副題がある。

夜飲東坡醒復醉、(夜、東の坡で飲んで、醒めてまたまわってくる酔い)

歸來彷彿三更。(帰りましたのはぼんやりとして真夜中)

家童鼻息已雷鳴。(小僧たちの鼻息はすでに雷鳴)

敲門都不応、(門を叩いても応じる者がないので)

倚杖聽江声。(杖に身を寄せて長江の音を聴きます)

長恨此身非我有、(長く残念なのは、この身が我がものではないこと)

何時忘卻營營。(いつしかあくせく生きることを忘却できるのでしょうか)

夜闌風静縠紋平。(夜はさらにふけ、風は静かで、川にはさざ波も立ちません)

小舟從此逝、(小さな舟でここから逝き)

江海寄余生。(我が余生を長江から海へと寄せましょう)

(翌朝、この詞と蘇軾の衣冠が岸辺に遺されているのを町の人が発見し、蘇軾は舟に乗って黄州を去ってしまつと騒ぎになった。知事の徐大受が慌てて搜索に乗り出したところ、当の本人は臨臯亭で大いびきをかいて眠っていた——と、まことしやかな話
が作られた。この詞が、曾鞏と同じ日に死んだという噂のもとになったという説もある)

■南堂五首

臨臯亭の南に3部屋を増築して南堂と名付けた。建築の支援をしてくれ

た人（蔡承禧）への謝札を兼ねてこの詩を詠んだ。

其の一

長江に沿う山は町の西側に並び、
 そのために川の堤の半分が隠されている。
 なぜかこの町の建物は西向きに建っていて、
 ただ南堂だけが西南に向いている。
 だから、千の帆が浅い谷間を去ってゆくのを、
 寝そべったままで見ることができる。

其の二

老年に及んでもなお眼力はあるし、
 病がちではあっても髪は毛はまだ真白ではない。
 だから、南堂に作った明るい窓辺で小さな字を書き、
 さらには、南堂の小部屋で丹砂から薬を作っている。

其の三

かつては夜の雨には、
 面倒でも寝床を移さなければならなかった。
 雨の音が愁いの声となって我が心を傷めるのを嫌ったのだ。

南堂に新たに葺いた瓦に響く雨音を聴くようになってからは、
蓮の香を聞くような心持ちでいられるようになった。

其の四

田舎の暮らしであるから蜂の巣を割いて食を補い、
子供らのために小さな畑を新たに拓いて野菜を作る。
南堂に客人を容れられる部屋ができたので、
門の外に友人の車がきても困ることはなくなった。

其の五

床を掃き、香を焚き、扉を閉して眠る。

なつ ござ夏莫座は水のようにひんやりとし、カーテン帳は霧のようである。

客人がきて夢から覚め、

はてここはどこかと思っていると、

西の窓の向こうで、

浪が天と触れ合っている。

■満庭芳

この詞には次のような序文がある。

おう
王長官という人がいる。官職を棄てて三十三年になり、黄州の人々は王先生と呼んでいる。陳慥ちんぞうが王長官を送って私のところに来たので、この詞を賦した。

(陳慥ほうざんし (方山子) (本章 32 ページ) が長江ちやうこうの南に行くついでに王長官を連れて蘇軾のもとを訪れたようだ)

三十三年、(三十三年)

今誰存者、(今もいるのは誰なのでしょう)

算只君与長江。(数えますに、王長官と長江だけ)

凜然蒼檜、(しゃきとした蒼い檜あお ひのきの)

霜幹苦難双。(霜に耐えた幹に並ぶ者は誰いません)

聞道司州古県、(聞くところでは、王長官のお住まいは古い所縁のあるところ)

雲溪上、(溪の上に雲がかかって)

竹戸松窓。(竹を戸に松を窓としています)

江南岸、(長江のこの岸辺に)

不因送子、(送られてくるのでなければ)

寧肯過君邦。(私のところを過ることなどありません)

縱縱。(縦縦ぼらぼらと)

疏雨過、(まばらな雨が過ぎると)

風林舞破、(林が風に舞い)

煙蓋雲幢。(霧の蓋が雲の旗となって流れます)

願持此邀君、(願いが叶って王長官を迎えて)

一飲空缸。(ひとたび飲むや、酒の瓶はもう空っぽです)

居士先生老矣、(とうぼ こじ東坡居士は老いました)

真夢裏、(まことにこれは夢のなかなのでしょ)

相對殘缸。(残った瓶に向き合います)

歌舞斷、(歌と舞いが終って)

行人未起、(行く人がまだ起たないうちに)

船鼓已逢逢。(船では太鼓がとんとん逢逢と鳴らされます)

(最後は、出発を促す太鼓の音が無情にも鳴っているということ)

■好事近

黃州知事の徐大受 (じょたいじゆ あざな くんゆう字は君猷) が知事としての任を終えて発つことになり、その送別の詞。

(詞の中に「半年の離別」とあるのは、とりあえず家族を黃州に残し、半年間だけ離れる心づもりであったからだという)

紅粉莫悲啼、(こうふん紅粉(美しく化粧した歌妓)よ、悲しく泣くのはおやめなさい)

俯仰半年離別。(半年間の離別など、上を見て下を見る間のこと)

看取雪堂坡下、(せつどう おか見てください、雪堂の坡の下で)

老農夫淒切。(老いた農夫(蘇軾のこと)が寂しげにしているのを)

明年春水漾桃花、(来年、春の水に桃の花がただよころ)

柳岸隘舟楫。(柳の岸边にたくさんの舟が着くことでしょう)

從此滿城歌吹、(町中から歌があふれ出し)

看黃州闐咽。(黃州に(知事の帰還を歓迎する)音楽が満ちるのです)

(徐知事のもとに多数の歌妓がいたことは本章 338 ページで見ている)

■遺愛亭記

徐大受^{じょたいじゅ}知事が黃州を去った後で、巢谷^{そうこく} (本章 358 ページ) に頼まれてこの文章を代筆した。

漢^{かん}の時代^{かぶ}に何武は地方官を歴任し、その地^{かくかく}にいる間は赫赫の名(特別に評判となるような名声)を挙げることはなく、その地を去った後になってから人々は何武のことを思うのが常であった。これを「遺愛」(愛を遺す^{のこ})といった。

君子は道理に従って行動を起こし、道理が窮したところで止まる。外物の必要性に応じて事^なを作し、外物の必要性がなくなれば元に復す。それだけのことであるので、赫赫の名が挙がるようなことはないのである。

東海郡^{とうかい}の徐大受は黃州知事となって、一度も怒ったことがなく、しかし民は知事の命に背くことがなかった。一度も監察したことがなく、しかし役人は知事の眼を欺

ことがなかった。日々何事もなく、知事はただ詩歌を嘯詠するだけだった。毎年春になると、知事は眉山びさん県の蘇軾あんこくとともに安国寺あづまやに遊び、竹林の間にある亭で酒を飲み、亭の下にある茶の木の葉を摘まんで煮て飲んだ。

徐大受が黄州を去ると、安国寺けいれんの僧、継連はその亭の名を蘇軾いあいに請い、「遺愛てい亭」と名付けた。

このとき巢谷しよくが蜀からきていて、蘇軾の客人となり、蘇軾を通して徐知事に会っていた。徐知事から巢谷に、「遺愛亭」の由来について書くよう依頼があった。しかし、巢谷は愚かで不器用な旅人で、徐知事のことをよく知っているわけではなかった。そこで人々が語る言葉を集めて蘇軾に託した。よってこの記が作られたのである。

(継連の名は「安国寺の記」(本章46ページ)ですで見ている)

■ 鷓鴣天

夏の終わりの東おつかの坡でのある一日をさらりとスケッチした詞。

林断山明竹隱牆、(林が途切れ山が明るく見えるここに、竹に隠れた垣根)

乱蟬衰草小池塘。(たくさんたの蟬、衰えゆく草、小さな池があります)

翻空白鳥時時見、(空に翻る白い鳥は、時々姿を見せ)

照水紅蕖細細香。(水を照らす紅い蓮からは、たどよう細やかな香り)

村舎外、(村の家並みの外)

古城傍。(古い城のかたわら)

杖藜徐歩転斜陽。(杖をついてゆるゆると歩(う)ちに日が斜めに転じます)

殷勤昨夜三更雨、(昨日の夜中の雨はまことに思いやりがあって)

又得浮生一日涼。(浮世の一日の涼さがこして得られたのです)

■水調歌頭

黄州はよく左遷の地になったようだ。郷里の先輩である「小任」こと任しやうにん 劼にんが一時期黄州に置かれたのも政権の中枢部に嫌われたからであったし(第3章25ページ、本章179ページなど)、蘇軾と同じ時期にも張懷民ちやうかいみん (字あざな 夢得ぼとく または 偃生あくせん) という人物もここに流されていた。張懷民は長江ちやうこうを南に一望する亭あずまやを建て、蘇軾が「快哉亭」と名付けた。これはその快哉亭を詠んだ詞。

(張懷民と張夢得は別人だという説もあるが、ここでは本名と字あざなであるとの説に従う。蘇軾の詞を読む前に、弟の蘇轍が快哉亭の由来を記した「黄州快哉亭記」を先に見ておきたい。

蘇轍:「黄州快哉亭記」

長江ちやうこうは西陵峽せいりやうきやう(三峡の最下流さんさつりやう)を出ると、初めて平地を得て、流れは奔放、勝手放題に広がり、南からは湘江、沅江が合流し、北からは漢水が合流し、その勢いはますます漲みなぎり、赤壁せきへき

の下に到るに及んで、海と比べられるまでに波の流れが満ち溢れる。

せい が ちようほうとく たくきよ あずまや
清河出身の張夢得は黃州に謫居する身となり、住まいの西南に亭を作って長江の景勝

を眺められるようにしたところ、我が兄の蘇軾はそれに「快哉亭」の名を付けた。

亭から見えるのは南北百里、東西三十里で、そこにおいて濤瀾が洶湧し(大波が湧き立ち)、

ふううん かいこう
風雲が開闔する(風と雲が開いたり閉じたりする)。昼間は亭の前で舟が出没し、夜間は亭の

ぎょりゆう ひとぶ せいのろ
下で魚竜(水の怪物)が悲しげに嘯く。一瞬ごとに光景が変化し、目を駭かし心を動かすの

で、じっと視ていられない。しかし、張夢得は數物の上でこれを遊び、目を挙げるだけでその
全貌を見てとるのである。

ふしやう こうりやう そうもく
西には武昌の諸山があって、岡陵が起伏し、草木が行列する。朝靄が消えて日が出ると、
漁師や木こりの家が、指さして数えられるほどにくっきりと現れ出る。

こうしたことから、亭にいれば「快哉」(すばらしいではないか)と叫ぶようになるのである。

このあたりにある長い洲の岸辺と古い城の墟は、かつて曹操と孫権が睨み合ったところで、

しゅうゆ りくせん
周瑜と陸遜が馳せまわったところだ。こうした人々の風儀の遺跡は俗世の人々に「快」とい
わせるに十分なものがある。

さらに昔のこと、楚の襄王は宋玉と景差を従えて蘭台の宮殿(黃州の北西 100km 余りのところに

あった)に昇ったところ、風が颯然と吹いてきたので、襄王は襟を広げて風を入れ、

「快いかなこの風は。私はこの風を庶民とともに楽しむことができるであろうか」

と言った。

すると、宋玉は言った。

「これは大王様のための『雄風』であります。庶民がともに楽しむことができるものではありません

せん」

宋玉のこの言葉はきつと諷する(皮肉を籠める)ものであったのだろう。そもそも風に「雌風」「雄風」の違いがあるのだろうか。人には厚遇と不遇の変化がある。襄王が楽しんでいるのと、庶民が憂いているとの違いは、人の厚遇と不遇の変化によるものである。風とは何の関係もない。

ひと
士は世に生まれて、その心の中に自ら得ていないものがあると、どこに行こうとも苦しまずにはいられない。心の中が坦然としていて(平らかで安らかである)、その本性が外物によって傷つけられていないのであれば、どこに行こうとも「快」でないことはない。

いま張夢得は謫居となってもそれを憂いとすることはない。出納事務の余りの時間を竊んで、山水の間に己を解放させている。これはその人の中に人を超えたものがあるからなのだろう。草を扉とし破れた甕を窓とするような濫褻家であっても、「快」でないことはない。まして、長江の清流で心を洗い、西山の白雲に挨拶し、耳と目で景勝を窮め、自らに適うようにしているのであるから、「快」でなからうはずがないのである。

もしもそうでなければ、山の連なりも、切り立った谷も、横たわる林も古い木も、それを振わず清らかな風も、それを照らす明るい月も、そのどれかが騷人(憂愁の詩人)や思士(苦悩の人)が悲傷憔悴して耐え難くするもとなつて、見ても「快」とすることなどとてもできないのである。

元豊六年十一月一日、趙郡の蘇轍が記す。

(宋代以前の人々は、流謫の身となると、この文の終わりにあるように、美しい風景を見ても「快」とはせずに悲傷憔悴して悲嘆の詩文を作った。歐陽脩が滁州に流されたときに書いた「醉翁亭記」(本章 344 ページ)は悲嘆をしない新しい士大夫のあり方

を端的に示したもので、「快哉亭記」はそれを受け継ぐものであるとってよいだろう。
そして、次に見る蘇軾の詞も歐陽脩への敬慕の念に満ちていて、歐陽脩が建てた平山堂へいざんどうと黄州の快哉亭とを渾然一体のものとして詠んでいる。平山堂は長江の遙か下流の揚よう州しゅうにあつて、これより4年前に立ち寄って詩を詠んでいる（第5章348ページ）。そのときには歐陽脩が平山堂で詠んだ詞から「手づから種うえる堂前の楊柳ようりゅう、別れ来て幾度いくたびの春風はるかぜ」の句を引いていたが、ここの詞では同じ詞から「山色有無さんしょくうむの中」の句を引いている)

落日繡簾卷、(落ちゆく日のもと、刺繡のついた簾を巻くと)すだれ

亭下水連空。(亭の下は空に連なる水)

知君為我、(あなたは私のために)

新作窓戸湿青紅。(新たに窓に青や紅を施してくださり、その漆がまだ湿っています)

長記平山堂上、(いまでも覚えているのは平山堂の上で)

歌枕江南煙雨、(江南の地の煙った雨を見たこと)

杳杳没孤鴻。(遙か遠くに孤独の鴻おおとりが消えてゆきました)

認得醉翁語、(ここから見るのはまさに醉翁すいおう(歐陽脩)の言葉そのまま)

山色有無中。(山の色はあるかなしかのなかにあります)

一千頃、(一千頃の広がり)けい

都鏡浄、(全て鏡のように浄らかで)

倒碧峰。^{みどり}(碧の峰が逆さまに映ります)

忽然浪起、(忽然として浪が起り)

掀舞一葉白頭翁。(白髪の翁のひとひらの小舟が舞い上がります)

堪笑蘭台公子、(笑ってしまうのは、^{らんたい}蘭台に登ったかの^{そ じゆう}高貴な人(楚の襄王))

未解莊生天籟、(^{そうじ てんらい}莊子の天籟を理解することもなく)

剛道有雌雄。(風に雌雄があるという説を聞いたのでした)

一点浩然氣、(^{こうぜん}(天籟を起こす)浩然の氣は一点から起こって)

千里快哉風。(千里をわたる^{かいさい}快哉の風となるのです)

(1) これまで度量衡の単位について注記することはほとんどなかった。「一頃」がどのくらいの広さで、「千里」がどのくらいの距離であるかを詮索したところで意味がないと思うからだ。「千」という数字が広く遠いイメージを生み出せばそれでよい。

(2) 「天籟」とは莊子がいう万物が共鳴する「宇宙のオーケストラ」。風に雌雄の差があるとかないとか実にちまちましたことである。「浩然の氣」とは^{もうし}孟子がいう天地間に満ちる正しいエネルギー。「天籟」と「浩然の氣」が一体となって、快哉亭の前を吹く風となっているというのがこの詞の結び(「一点 浩然の氣、千里 快哉の風」)。この詞は「赤壁の賦」や「後の赤壁の賦」と同じ思想のもとにある

■郭忠恕画賛

張懷民^{ちようかいみん} (字は夢得あざなまたは偃佺^{ぼうとく}) が所蔵する画あくせんに描き添えた文。

右は張懷民かくちゆうじんが所蔵する郭忠恕かくちゆうじゆの画いた「山水屋木」(山水と家屋と樹木)の一幅である。

郭忠恕は字を恕先じゆせんといい、字の方でよく知られている。洛陽らくやうの人である。

郭忠恕は若い頃から文章に優れ、古い書体や文字の学問に通じ、儒家の九つの經典をよく理解していた。七歳で少年のための科挙を受けるよう推薦を受け、後

漢国かんこく(五代十国時代の地方政権の一つ)の劉贊りゆういんが王となったときに属官に召された。

しかし、董喬どうせうと争い事を起こし、職を辞して去った。後周朝こうしゆうちゆうの初代皇帝によって

『周易』を講義する博士として招かれ、(そのまま宋朝に仕え)宋の世の最初の頃に、

符昭文ふしやうぶんと朝廷で言い争いをし、乾州けんに左遷された。そこでの任期が満ちると、それからは仕えなかった。

岐き、雍ゆう、陝せん、洛らくのあたりを広く自由に歩きまわり、人に逢うと相手の身分が高からうが低からうが、自分のことを「猫」マオ(吾輩は猫である)と自称した。美しい山水に遇うと十日もそこに留まった。あるときは穀物を絶ち、夏の炎天下でも汗をかかず、極寒の頃に氷に穴を開けて水浴びをした。

画を最も得意とし、「山水屋木」の妙を挿んだ。画を求める者があると、必ず怒って追い払った。画を描く気になると、たちまち自分から描いた。

郭從義かくじゆうぎが節度使として岐山きざんにいたとき、郭忠恕を招いて山の亭あずまやに留め、そこに白い絹の画布と墨と絵具を用意した。数カ月ほど経ってから、酔いに乗じて、画布の隅に遠山の数峰を描いた。郭從義はそれを宝とした。岐山には画を好む金持ちの息子がいて、くる日もくる日もよい酒を用意して郭忠恕をはなはだ厚くもてな

した。これをしばらく続けてから、自分の希望を言い、一匹の絹を差し出した。郭忠恕は、小さな子供が糸巻きを持って風鳶たこを上げているありさまを描き、数丈の長さの線を引いて一匹の絹を満たした。金持ちの息子は怒り、郭忠恕との交わりを絶った。

張忠恕はよく人足のような庶民を連れて町の店に繰り出して飲み食いし、

「わしと遊ぶのは諸君等のような者だ」

と言った。

宋の太宗皇帝たいそう（二代皇帝）は郭忠恕の評判を聞き、宮城に呼び寄せた。宦官の竇神興とくしんこうが管理する官舎に宿泊した。郭忠恕の髯ひげは長く美しかったのだが、突然それを剃ってしまったので、竇神興が驚いてそのわけを尋ねると、

「いささか貴殿ひそみの鬚ならに倣ったまでです」

と、答えた。竇神興は激怒した（宦官は去勢されているために鬚が生えない。そのことをあからさまにいうのは極めて侮蔑的である）。

郭忠恕は国子監こくしかんの役人に任命され、太学たいがくの官舎に宿泊するようになり、ますます酒をほいままにし、政治向きのことについて放言し、ひどく誹謗の言があった。それが朝廷に聞こえ、杖刑じょうけい（棒で叩く刑罰）を受けて登州とうしゅうに配流せいりゅうとなった。齊州せいしゅうの臨清りんせいにまで行くと、護送の役人に向かって、

「わしは逝ゆくぞ」

と言って、地面に穴を掘り、顔を容れらるまでになると、そこに首を突っ込んで死んだ。道の傍らに仮に埋葬し、数カ月後に知り合いがきて改葬しようとする、衣服

と夜具だけが^{し かい}あった。きっと尸解した(仙人になった)のである。

画賛に曰く。

長松攬天、(高い松が天を突き刺し)

蒼壁挿水。^{あお}(蒼い岩壁が水を差し扶む)

憑欄飛觀、(高い樓閣の欄干にもたれ)

縹緲誰子。(遠くを眺めるのは誰か)

空蒙寂歴、(がらんとして寂しく)

煙雨滅没。(全ては霧雨の内に消える)

恕先在焉、(張忠恕はこの画の中にいて)

呼之或出。(呼べば現れ出るであろう)

(蘇軾はまことに「異人」^{いじん}好きである。画賛でありながら、ほぼ郭忠恕の伝記になっている。昇仙した郭忠恕であるから、自分が描いた画の中にいても不思議ではない。誰もが呼び掛ければ現れ出てくれるのではなく、張懷民や蘇軾のような人でなければならぬのだろう)

■帖贈楊世昌

^{しよく}蜀出身の道人、^{ようせいしやう}楊世昌 (本章 291 ページなど) に贈った短い文章。これによると楊世昌は5月9日に黄州を去った。

私は黄州たくきょに謫居めんちくとなり、綿竹ふとごんの武都山の道士あざな、楊世昌しきやう、字は子京ろざんは、廬山から私のところへきた。その人は山水を善く画き、鼓と琴を得意とし、天体の運行や人相ないしは画を見て占うことに詳しく、朱砂しゅさを用いた薬方にも通じて、高い技芸の持ち主である。明日はここを去るというので悲しくてならないのだが、僧侶は同じところに三日宿らぬとはまさにこのことなのだろう。

元豊六年五月八日、東坡居士記す。

寄周安孺茶

周安孺しゅうあんじゆが贈ってくれた茶に寄せた詩。蘇軾の詩ではこれが最長の作とされる。

(蘇軾が茶を詠んだ詩はすでに幾篇か見ているが、広範な知識を凝縮して難解な上に、訳者が茶に関して無知であることから、残念ながらもなはだ不正確な訳であった。この詩はそれらよりはまだしも理解しやすく、不正確さは何害か減じたであろうか。周安孺がどういう人であるのかはわかっていないようだ)

天の屋根の下は広大で、植物にはどれほどの族ぞくがあるやら。

茶は靈品として、平凡な草木を遙かに超えた存在とされる。

茶の名は、古くは周公しゅうこうが書いたもののなかに初めて見え、

『桐君葉録』に記載されて次第に広まった。

最初に茶を賦ふに詠じたのが誰かという、

今に伝わるものでは杜^と毓^{いく}のものがある。

唐^{とう}の人は初めはまだ茶を好んではいなかったが、

陸羽^{りくう}が茶を論じた書物^{ちやきやう}『茶経』を著すと、

常伯熊^{じやうはくゆう}、李季卿^{りきけい}といった人たちが、

陸羽の高い品行を慕って清らかな流れを作り、

天下^しの士が茶を嗜むようになり、

さらには一般の風俗となり、

中国国内で珍重されるだけでなく、

広く外国にも売られるようになった。

ここに鹿門山^{ろくもんざん}の佳士^{ひじつきやう}である皮日休は、

目に触れないものはないくらいに知識が豊富で、

陸龜蒙^{りくきもう}に出会うと、茶について幾篇も唱和し合った。

皮日休^{いざん}は頤山の下に庭を作り、

陸龜蒙^{しやうこう}は松江のほとりに隱棲し、

それぞれ興が湧けば筆を揮って燦然^{さんぜん}と輝く筆跡を遺した。

私はといえば、

もとより愛好するものは少なく、

茶を嗜好^{あつ}することも篤いわけではなかった。

若い頃から都でうろろろするようになり、

王侯の門に出入りできるような者ではなかったのだが、

ときには立派な家を構えた人に呼ばれ、

立派な衣服を着けた人々とまじわることもあった。

贅沢な料理は口に合わなくて、

ただ「小竜」(茶の品名)をしばしば試みると、

糞土の中に珠玉を見るような思いがし、

「団鳳」や「葵花」(どちらも茶の品名)などは魚の目に雑じる真珠のようであった。

貴人はそれぞれに好んで誇るものがあり、

愛玩する茶を箱に入れて緘かんをしていた。

「日注」(茶の産地)などはさほどではなく、

「双井」(茶の産地)なども名ばかりが高いと知った。

ここに研究、検討を重ね、至味とされるものの五つ六つを知るようになった。

その後は地方に出て、幽独の僧を尋ねると、

高人はもとより暇が多く、茶の探究もすこぶる深いものがたつた。

聞くところでは、

早春の日の出のところに茶籠を携えて茶葉を摘みに行き、

まだ雷が驚かせて葉を開かせる前であることから、

摘めるのは両手に満たないほどであるのだが、

戻って清らかな水で洗って蒸しあげると、

香は葉に留まったままとなる。

それをすくりに布で包んで水気を取って軽く、

火で慎重に焙って縮める。

骨折ることを憚らなければ、

蓄えて時を経ても廃れることがないのだが、

汚れのない漆の茶筒、二重の竹籠を用いる必要がある。

最も畏れるのは梅雨の湿気で、

人がおきび燠火で暖めなければならなくなる。

茶の性はごうこう剛耿で、

高潔な人が穢れた俗世に置かれてはならないように、

ささいな塵芥に触れさせてもいけない。

晴れ上がった空のもと、からりとした屋敷の内で、

石臼で軽やかな緑の葉を磨り潰し、

日長いちにち、閑な客人ともに、

にゅうせん乳泉(新鮮な水)で新たな香りを生じさせると、

その香りのこまやかさは蘭の花のお株を奪い、

その色の若々しさは秋の菊よりもまさる。

びん閩の地では茶の品種を誇って競い合い、

その表面は粥のようになめらかで豊潤で、

中でも「葉家白」(茶の品名)は「中山の酒」(酒の品名)よりも濃密であると喧伝して
いる。

ともあれ、一杯の茶を深く飲んで、午後の窓辺で春の眠りに入ると、

清らかな風が両腋に吹いてきて、

おおとり
鴻鵠を凌いで大空を飛んでいるような気分になる。

我が茶の楽しみはますます深まり、

水が肝要であることから『水経』(地理書の古典)もしばしば読み、

陸羽はちゅうらいせん中冷泉(の水)が一番で、次がこうおうこく康王谷(の水)であるという。

私はかつてはぼい藝培の水を嘗めようと、

かめ
瓶を持たせて僮僕を走らせたこともあったが、

このごろは老いて、しかもものぐさになったので、

細々したことまでは望まないようになった。

美も悪も両方ともに忘れてしまったし、

無理に追求しようとしてもそれはできない。

だんだんと我が蜀の地の習慣に戻り、

生姜と塩をまぜて白く攪拌して飲むようになった。

茶を飲むのは心を物の束縛から放とうとするため

口や腹の欲を満たすためのものではない。

食べるのも味わいの薄いものでよく、

日々の食はあらづ荒搗きの米だ。

外物を慕うことはすでになくなり、

もはやそれに束縛されることはない。

少し前のこと、ゆったり散歩していて、

たまたま天峰山てんほうざん（東の坡おかのあたりのどこかであろう）の麓にさしかかると、
山の畑にちょうど春の風が吹いて、茶の芽が一斉に萌え出していた。
ここは田舎の地で誰も私に気を遣う者はないのだが、
そこの息子呼んで客人としてもらい、
葉を採取して一服させてもらった。
その茶葉は包んで厨房の戸棚にぽんとしまっておき、
もとより茶の優劣をとやかきうことはなく、
ただ睡りからの目覚めが速いのを喜ぶだけである。
このところは、長い夏の日中は人間世界に炎毒が満ち、
閑な私にはすべきこともなく、
午飯には野菜をたっぷり食べ、北の窓辺でごろりと横になると、
微かな風が竹を動かす。
茶釜にたっぷり湯を沸かし、
人の世はまことにあくせくしているが、
茶を飲むと、意こころは爽やかにひょうぜんなり、飄然として仙人になったよう、
頭は軽く、髪を洗ったような快さだ。
昔の人にもいろいろな癖があったけれど、
私のこのような癖はまあまあゆるされるものであろう。
かの劉伶りゅうれいなどは酒好きのあまり、
麴こを枕まくらに酒糟さけのかすを布団ふだんにして眠るといったけれど、

それよりはきっとましなのだ。

■東坡羹

蘇軾は書画であろうが健康法であろうがいろいろなものを深く探究し、料理にも創意工夫を重ねた。先に「二紅飯」なるものを見たが（本章284ページ）、「東坡羹」というものも考案し、そのレシピを記した文章がある。

（レシピの記述法など定まっていなかったからであろうか、このレシピに基づいて東坡羹を作ろうとたくさんの人が頭を悩ませ、しかしこれぞまさしく蘇軾が作ったそのものというものは再現できていないようだ。ここでは嘘が半分に満たない程度に要約して訳す）

東坡羹は東坡居士が野菜を煮て作る羹である。魚肉を用いずに自然の旨味を出す。その作り方は、まず白菜、蕪、大根、薺などをよく揉んで数回洗ってあくを取り去る。油を少し塗った釜の上に碗を載せる。釜で湯を沸かし、その中で野菜を煮る。上の碗には米と少量の生姜を入れて蒸す。碗は釜を蓋するように載せる。釜の湯が触れないようにする。触れると油気が生じるし、熱が除かれにくくなる。それらを火の上に置いて蒸すのだが、普通に飯を炊くのと同じように、急ぎ過ぎではない。野菜からの湯気が十分に米を行き渡るようにさせないと米が上手には炊けない。もし上記の野菜がなければ、瓜でも蓮でも刻んで入れる。赤豆と米を半々ずつ混ぜてもよい。

応純おうじゆん道人とぎざんが廬山ろざんに行くので、これを山中の好き者に広めてもらうことにした。

東坡羹しょうかの頌歌：

甘苦嘗從極廻回、(甘いと苦いはぐるぐる巡り)

鹹酸未必是塩梅。(人間世界の辛酸はちょうどよい塩梅というわけにはいかない)

問師此個天真味、(天の与える真の味を師に問うなら)

根上来麼塵上来。(野菜の根は塵から出てくる)

(応純しょうくは蜀出身の僧であるらしい)

■琴詩

琴についての詩。序文がある。

武昌ぶしやう県の主簿しゅぼの呉亮ごりやう(字は君采くんさい)が、その友人の沈君ちんの十二琴じゅうにきん(十二絃の琴)についての説と、高齋先生こうさい(趙抃ちやうべん)の文章を携えてきてくれた。私は沈君しのことを識らなかったが、その書を読むと、その人を見て、その十二琴の声を聞くような気がした。

私はかつて高齋先生に従って遊んだことがあり、家宝としている琴を見せてもらった。銘がなく、識しるされたものもなく、いずれの時代のものであるのかわからなかった。

そこで、呉亮と沈君の二人に願うのは、高齋先生に頼んでその琴を見せてもらい、

一緒に演奏して声を和していただきたい。

元豊六年閏六月二十四日に記す。

(趙抃は第5章 223 ページなどで見ている)

もしも琴の上に琴の声があるのなら、

箱の中に納められているときに、

琴はどうして鳴らないのか。

もしも琴の声は君の指の先にあるというのなら、

君の指の上からはどうして聴こえてこないのか。

(この詩は沈君の説に応じたもので、琴の声はどこから生じるのかといったことが論じられていたのだろう。武昌県には王齊愈^{おうせいゆ}、王齊万^{おうせいまん}の兄弟が住んでいて、蘇軾は7月6日に王兄弟を訪ね、自家製の酒を振る舞われて大酔し、昔の人の詩句を集めて竹を歌った詞を作っている)

■跋吳道子地獄変相

唐代の画の名人である吳道子が描いた地獄の画に書き添えた跋文。

(吳道子^{ごどうげん} (吳道玄) の画については第2章 29 ページ以降、何度も詩文で触れられている)

吳道子は画聖である。新意を法度の内より出し、妙理を豪放の外に寄せた(奔放^{ほうど})

自在に新味を生み出しているように見えて実は理に適っているという意味)。いわゆる、刃の余りの地に遊んで、斤を運らせて風を成すということである(達人は刃や斤のような道具をあたかも何気なく遊んでいるように使いこなすという意味)。

『地獄変相』を観ると、業を造った原因はそこには見られず、罪を受けているありさまだけが見られ、悲しい限りだ。ここに清浄な一念を起すなら、因果の理から脱け出ることができるのだろうか。それとも、路傍の草が野火に焼き尽くされるのを恐れるだけなのだろうか。春風が吹いて草はまた生じてくるのか。

元豊六年七月十日、黄州の臨臯亭で画を借りて観る。

(刃や斤を使いこなす達人は『莊子』の寓話に登場する。刃の達人はたちまち牛を解体し、斤の達人は鼻の先に止まった蠅を真っ二つにする。「路傍の草」とは地獄で罰せられるわれわれのこと)

■跋先君与孫叔静帖

蘇軾の父の蘇洵が孫馨(字は叔静)に与えた手紙に書き添えた跋文。

嘉祐、治平年間に我が父は『太常因革礼』の編集に携わった。父は都の多数の学者に問い合わせ、それに応じてもらったのだが、その中で孫馨兄弟が篤学で文章が優れ、父は非常に褒めていた。

父は没してすでに十八年、私は黄州に謫居となり、孫馨が都から蕪州に向かう途中でわざわざ道を枉げて寄ってくださった。孫馨は我が父の手紙を出して示して

〈ださり〉、私はこれを頂戴したいと願った。孫髡は承知されなかったのでついに返した。

父は平生から手紙の往還は稀で、弟子に教えるのも口で授けることが多かった。ただこの真筆があるのは、まことに孫髡のことを厚く善としていたからである。元豊六年七月十五日。記す。

『太常因革礼』は宋代の礼法の変革を記した書物。蘇軾兄弟が制科を受験した時期に、蘇洵は朝廷から特別に官位を授かってこの書物の編集に当たった)

■書劉庭式事

ある人物の事績を記した文章。

かつて私が密州みつにいたとき、劉庭式りゅうていしきが副知事せいだった。劉庭式は齊の人で、弟の蘇轍が齊州しやうしよきの掌書記しょうしきとなったときに、その土地の人が劉庭式について語っていることを聞き、私に教えてくれた。以下はその話。

劉庭式は礼学に通じた学究の徒で、まだ科挙に合格する前に、郷里のある娘を娶う話が進み、約束はしたものの結納は交わしていなかった。劉庭式は科挙に合格したが、その一方で、娘は病気になって両目の視力を失ってしまった。娘の家は農家で、ひどい困窮に陥り、婚約についてあえてまた言うことはなかった。ある人が、劉庭式に妹の方を娶うよう勧めると、劉庭式は笑って言った。

「私は結婚するとすでに心は決めたのだ。失明したからといって、我が初心に背くことはできない」

劉庭式はその娘と結婚し、生涯を共にすることになった。

劉庭式の妻は密州で亡くなり、劉庭式は妻を喪ってからというもの是一年を超えても哀しみが衰えず、再び娶ることもなかった。

私はたまたま劉庭式に尋ねた。

「哀しきは愛から生まれ、愛とは色しき(主に外面に引かれる情)から生まれるものであるでしょう。あなたは眼の見えない女性を娶り、一生を共にしようとしました。それは信義として立派ですが、愛は何から生まれ、哀しきは何かから出るのでしょうか」

劉庭式は言った。

「私が知るのは、我が妻を喪ったということだけです。眼が見えても我が妻であり、眼が見えなくても我が妻です。色によって愛が生まれ、その愛によって哀しみが生まれるのであれば、色が衰えると愛は弛み、哀しみも忘れられましょう。町で袖を振って誘い、目配せをして心を引き寄せようとする女性を、妻にするようなことでよろしいのでしょうか」

私はその言葉に感じて言った。

「あなたは、きっと名を挙げるか富貴になる人です」

ある人がそれは言い過ぎではないかと言ったので、私は、

「そんなことはありません。昔、晋国の羊しん祐ようは夏侯かこう霸の娘を娶りました。後に、夏

侯霸が晋国に背いて蜀国に降ると、夏侯霸の親類縁者は皆夏侯霸と縁を切りましたが、羊祜だけはその妻をそのまま家に置き、ますます礼をもって接しました。このことから君子は羊祜が気高い人物であると知りました。その後、羊祜は晋国の元勳となりました。いまの劉庭式はほとんどこれに近いものです。高位に昇らないとしても、必ず道を得るに違いありません」

と言うと、人々は憮然として、私の言葉を信じなかった。

昨日ある人が廬山ろざんからきて、このように言った。

「劉庭式はいま廬山たいへいざんにいて、太平観の監査をしています。顔色は輝くばかりで、紫の光が射し、急な坂の上り下りも自在に歩き、六十里の道を飛ぶように往復しています。穀物を絶ってすでに数年になります。このようなことができるのは、道を得たからなのでありましょうか」

これを聞いて私は非常に喜んだ。私が言ったことは妄言ではなかったのだ。

このことを手紙に書いて密州の趙杲卿ちやうこうけいに寄せることにした。趙杲卿は密州で劉庭式と親しく、かつて私が言ったことを聞いていた者の一人である。科挙の一次試験に合格した郷貢進士きやうこうしんしで、振る舞いがきちんとした人物である。

元豊六年七月十五日、東坡居士記す。

(趙杲卿は第4章30ページなどに登場している。劉庭式のことは同じ時代の別の人の随筆『夢溪筆談』ゆめけいひつだんにも記録されていて、それによると、婚約者は隣家の娘で、劉庭式が科挙に合格して郷里に帰るまでの間に、娘は父が亡くなり自分も盲目になるという不幸に襲われた。家は貧窮に陥り、娘は固く辞退したのだが、劉庭式は約束通り結

婚し、常に妻と手を携えて歩き、数人の子を育て、妻が亡くなると劉庭式は悲しみの
余り呆然とし、字を書いても誰も判読できなかつた。そして劉庭式の善行が世に知れ
たのは蘇軾の文章による、とある。なお、本文中に引かれた晋国の羊祜については第
5章95ページなどで別のエピソードを見ている)

■孔毅甫妻挽詞

ここまでにてびたび詩の贈答があつた孔平仲こうへいちゆう（字は毅甫あるいは毅父あぎな きほ）
（本章240ページなど）の妻が亡くなり、その挽詞を作つた。

貴君の細君は、

結納を交わしたときの最初の喜びを永く記憶し、

偕老同穴の契りを永く結ぼうと心に期していた。

夫として選んだのは晋の温嶠しん おんきやうのような素敵な人であり、

子を産んでは晋の王濟おうさいよりも勝つた。

貴君と細君は親友同士のような気高い風儀を見せ、

さらに、古来の義を守つて兄弟のようであつた。

貴君が「吏隱」の精神を貫けば細君も従い、

困窮も榮達ももとより気に掛けなかつた。

しかし、どうしたことであつたのか、

病のためにたちまち一世を終えてしまった。

細君の部屋はひっそりとして窓は閉ざされ、

ただ粉黛^{ふんたい}の香が衣服に残っている。

たとえ百年の寿命を満たすことができて、

いつかはきつと逝^ゆかなければならぬ路^{みち}である。

有限の身をもって、無益の涙を長く流してよいものではないだろう。

貴君の文は古今を照らすすばらしさがあり、

脆^{もろ}い山の岩とは比べものにならない。

千字の文字を細君に捧げるのがよく、

墓に百金を埋める必要などはない。

((1) 温嶠や王濟はよい夫、よい子の代表例としてその名が挙げられている。その事績をいちいち顧みなくてもよいだろう。(2) 夫婦は親友のようにそして兄弟のようであれというのは一つの理想であった。(3) 「脆い山の岩」とは反語のようであるが、それ以上に孔平仲の文は不易であるというのだ。哀悼の文さえあれば、莫大な費用をかけて葬るには及ばないというのが結びである。この時代には、葬儀にひと財産を投じてしまうほどに「厚葬^{こうそう}」の弊害が目立つようになってきていた)

■牛酒帖

蘇軾は人気者で、書いたものはほんの切れ端でも珍重された。その一例として、先にも引いた何^か籧^{えん}の随筆『春渚紀聞』に記録された短文を見ておこう。

(何遠は蘇軾より一代代ほど若く、蘇軾の友であった章惇と直接の交流があった。

何遠は蘇軾の熱烈なファンで、事績を熱心に調べ、その記事は信頼に値するとされている)

先生(蘇軾)が東の坡おかにいたころは、いつも大勢の者が集まって酒を飲み、戯れに筆を執り、坐客を楽しませた。そのため先生が書いたものが多数伝わっている。とりわけ畢少董ひつしょうくんが所蔵する一帖は、酔いに任せた墨跡が躍動し、語も特別に味わいがある。

今日は数人の友と酒を飲んだ。そこにちょうど純臣じゅんしんがやってきた。秋の熱さはまだやまない。酒は白く濁っている。何という酒だか知らぬが、腹に入ったが最後、たちまち閻魔大王えんまに会わなければならなくなるようなしろものだ。純臣と飲むことになったものの酒の肴がない。西隣りの家にたまたま足が病気になった耕牛がいたので、これを炙って食べた。飲んで酔っ払い、東の坡おかの東から真っ直ぐに出て、春草亭しゅんそうていにまで至り、そこから帰った。時はすでに真夜中だった。

春草亭というのは郡城の外にある。先生は友人と酒を飲んで、私的に耕牛を殺し、酒に酔った勢いで城壁を越え、夜の禁令を犯して帰ったのだらう。純臣とはいかなる人であるのかわからないが、普通に町中を往き来するような者ではなかったのだらう。

(お上に内緒で酒を造ることも牛を屠ることも禁止され、夜間に門が閉ざされた城内に入ることも禁止されていた。蘇軾はそれらの禁をことごとく犯したと、何遠は推測

している。春草亭は後の文章（本章474ページ）にも出てきて、黄州の府城（郡城）の外にあったようだ。東門（本章369ページ）を守る馴染の門衛がすでに門を閉ざしてしまったので、どこかで城壁を乗り越えた何遠こうでいはんは考えたのだろう。しかし、黄泥坂こうでいはんを下れば城内に入ることなく臨臯亭に帰ることができるので、夜の禁令は犯さなかったと見ることもできるのではなかろうか。純臣とは誰かの字あざなであろうが、例によって「異人」の一人なのだろう。なお、このときに食べた牛は、黄州特産の水牛（本章19ページ）であったのかも知らない）

■節飲食説

飲食に節制すると三つの得するという「三養説」を記した短文。

東坡居士は昔も今も、朝夕の飲食は一杯の酒と一椀の肉だけである。立派な客人をもてなすときにはもう一品だけを加え、それより減らすわけでもなく増やすわけでもない。私を招いてくれる人があると、あらかじめこのことを告げ、もし主人がそれに従わずに過剰にもてなすときには、いつも通りのところで止める。

これには三つの効用（三養）がある。一に分に安んじて福を養える。二に胃を寛ゆるくして気を養える。三に費えを省いて財を養える。

元豊六年八月二十七日。

（上に見た「牛酒帖」にあるように劇飲するときは必ずしも一杯に限定されるものではなかったのだろう。「気」とは物質とエネルギーが一体化したようなもので、こ

では生命力と読み替えても悪くはないのだろう)

■上張安道養生訣論

上の文章にもあるように、蘇軾は^き氣を養う健康法に強い関心があり、黄州にきてからは時間に余裕があり、さまざまな実践に努めた。そうして得られた^{ようじょう}養生の秘訣を、恩人である^{ちようほうへい}張方平（字は^{あざな}安道^{あんどう}）への手紙に記した。

（道家は「^{たんでん}丹田」を重要な場所とし、以下の本文では、丹田に「^き氣」を送り込む方法が養生の要として説かれている。丹（練り上げた^き靈妙な薬）を耕す場所であるから丹田という。臍の下三寸にあるとされるが、人体をいかに解剖しても丹田に相当する器官は存在しない。実践的には、丹田の有無によらず健康増進に資する呼吸法でありマッサージ術であるのだろう)

このごろはすこぶる養生に留意しています。書物を読むと、大勢の^{ほうし}方士が養生について書いていて、その方法は数十から百もありましょうが、その中で簡単でいやすいものを選び、人に問い、自分で行ってその効果を試しています。特に効果が^{そらごと}あれば虚語ではなかったと知れます。その効果は、初めのうちは気付かない程度でも、百日余りにわたって続けると、量り知れないくらいになります。薬も合わせて用いるとその力は百倍にもなります。これを知り合いの者に伝えようとしても、その妙処は言葉では形容し難いところがあります。その大略だけなら示すことができま

しょうか。もしこれを信じて行なうなら、きっと大きな益があります。

毎夜、子の刻の後【原注：三更三四点ないし五更の後（いずれにしても真夜中）】に衣を被って床の上に起き上がり、東もしくは南に向いて座り、叩齒（歯を叩き合わせる）を三十六回行い、握固し【親指で第三指を抑えるか、第四指で親指を抑えるかして手を固く握って腰と腹の間で構える】、閉息し【これは道家の要の妙処で、まず目を閉じて思慮を退け、雑念を掃き去り、心を澄ませて諸念が起こらないようにし、自然と息の出入りが調うようにしてから、口と鼻を閉じる】、そして五臓を内観します。肺臓は白、肝臓は青、脾臓は黄、心臓は赤、腎臓は黒と見ます【常に五臓の図を壁に掛け、心の中に五臓六腑の形状を熟知しておく】。次に心臓を炎える火と見て、その光明を丹田の中へと移します。腹が満ちて気が極まるのを待っておもむろに息を吐きます【耐えられなくなったら吐くだけのこと】。息が整ってきたら、舌で唇と歯の間を触れ、唾液を十分に出します【もしも鼻汁が混じっても、それも使う。塩辛いのを嫌わなければ自然と甘くなる。これも真の気で棄ててはいけない】。唾液はまだ飲み下さずに、同じことを三回繰り返し、唾液が口と鼻に満ちたなら、頭を下げて飲み下し、気を丹田に送り込みます。十分に注意を払って、唾液と精気を下すと谷谷と音がして、ただちに丹田に入るようになります。これを繰り返して、飲み下すこと三回で止めます。そして、左右の手で両方の脚心【ここが湧き出す重要な場所で、氣訣の妙処】（土踏まず）と、臍の下、腰と背の間を摩ると、暖かくなってきます【ゆっくりとさするとわずかに汗が出る。息が切れるようではいけない】。次に両手で眼、頬、耳、項を熱くなるで擦ります。鼻の左右を五六回擦り、髪を百

回余りくけず梳り、そして横になって明るくなるまで眠ります。

この法は至って簡単で、いつも怠らずに行い続けると大きな効果があります。ために十日ないし二十日ほど行ってみてください。精神がこれまでとは同じでなくなり、臍の下が熱く、腰や脚が軽快になったと感じます。さらに続けるなら、仙人になるのも遠くないでしょう。

息を止めるのは少しずつ長くするのがよいでしょう。脈で時間を計り、五つ数えて一息することから始め、私はこのごろは百二十まで息を止められます。それを二十回繰り返しています。ただしあまり長く息を止めると気が錯乱し、ときには一気に噴き出して、かえって害になるので、どうぞ慎んでください。また夕食は少なめにしてください。食べても腹の中に広い空間があると、気が回転できます。昼間も閑があれば、時々目を閉ざして「内観」を行い、唾液を飲み込み、耳や目を擦って気の働きを助けます。

清浄であることが一番です。清浄であれば功が見えやすく神仙の術に至りましょう。よくないのが、一に忿躁ふんそう、二に陰険、三に貪欲がりようせいとくです。貴公は雅量清徳でありますからこの三つはないと思いますが、そっと申し上げておきます。

こまごまとしたところは、他日またお会いしたときに申し上げよう。文章で秘訣を書くのは、枝葉の言葉やら言うに言えない言葉がたくさんあって、いまはただ要点を記すだけです。長生の根本は言葉を煩わすものではないのでしょう。どうかこれは深く秘めて、凡庸の徒には見せないでください。天の至道を泄らすことになりますので。

(言葉では伝えにくいと蘇軾自身がいう秘訣を書いた文章を、「凡庸の徒」にも及ばない訳者が正しく翻訳するのは逆立ちしたところで無理な話だ。前半は林語堂『蘇東坡』に訳があるのを参考にしたが、原文の逐語訳ではない達意の訳(林語堂は英語で書いた)であるので、それに従わなかったところもある)

(ちょうどこのころ、閏6月21日に富弼ふひつが亡くなっている。80歳だった。これで蘇軾が8歳のときに懂れた4人のスーパースター(范仲淹はんちゆうえん、富弼ふひつ、韓琦かんき、歐陽脩おうようしゆう)は皆他界した。黄州謫居の身で時代の移り変わりをとりわけ感じたことだろう。後に蘇軾は富弼の詳しい伝記を執筆する)

■次韻子由種杉竹

弟の蘇轍は前に「東軒記」(本章135ページ)で見たように、休憩の場として作った建物の脇に杉と竹を植えていた。それを詠んだ詩に次韻した。

諸役人が帰ると、

役所はがらんとして、檐のきで雀が騒ぐだけとなる。

門を閉じ、独り宿直する長い夜に、

君はこの詩を詠んだという。

梨と棗を同時に植えるとよいというのは聞いた気がする。

杉と竹はどうなのか。

杉と竹は、同じ日数を刻んでも成長するであろう。

杉も竹も、その高潔な精神は酒に酔うこともなく、
壮健であることは雪や霜に損なわれることもない。

杉と竹は、互いに潤し合うのだ。

杉と竹が清らかな大きな蔭を作るようになるのを、
君はゆるゆると待つ気であるようだけれど、
人々は君が田舎でいつまでもくずくずしているのを、
空しく嘆いているのだ。

■初秋寄子由

秋の初めに弟に寄せた詩。秋に感傷的になるのは蘇軾の常のようだ。

もろもろの川は日夜に流れ逝く。

万物も、己もまたそれに従ってただ去りゆくばかり……

それでも、昔からの心がここにある、

それだけはもとのところをそのままに守っている。

憶えているよね——

都の懐遠かいえん駅のあの下宿で、

秋の始めの暑さの中で門を閉ざし、

野菜の汁をすすりながら書物に向かい、

汗を揮って君と勉強していたときのことを。

たちまち秋の風が厳しく吹いてきて、

窓辺から落ち葉が入り込んできたよね。

君は立ち上がって^{あわせ}袴の着物を尋ね、

そして感に堪えない風で僕の手を執り、

「^{しゝがんだの}『朱顔恃むべからず』(若さは永遠ではないという^{おうようしゅう}歐陽脩の言葉)、

この語は疑いようがありません。

別離はたぶん免れないでしょう。

功績を挙げ栄誉を得ることはきっと期し難いものです」

と言った。

このときからすでに僕は悲しみの内にあり、

ましていまや君も僕もこのように衰老してしまった。

失った^{みち}途はもはや追うことはできないし、

道を学ぶことが遅かったのは恨むばかりだ。

すでに君と相談しているように、

僕は田を買うことにした。

春にはそこに家を建てることだってできるだろう。

だから――

いま^{せつどう}雪堂は風雨の中で夜を迎えているけれど、

その雨音は、

僕には早くも「^{たいしょう}対牀の声」をなしていると聞こえてくるのだよ。

(1) 兄弟の合言葉は「夜雨対牀」(牀^{やうたいしやう}を並べて一緒に夜の雨に耳を傾ける)である(第2章21ページ)。そのことを弟が言い出したのは、制科^{せいこ}を受けるための勉強を、都の懐遠駅の下宿で一緒にしているときであった。(2) 蘇軾は先に見たように沙湖^{さこ}のあたりに田を買おうとしていたが(本章280ページ)、本格的に農地を買って官界からすっかり退くことも検討していた。それが実現して弟もともに住むようになれば、「夜雨対牀」は常に兄弟のもとにあることになる)

■聞子由為郡僚所拊恐当去官

弟は兄よりも剛直で、役所の同僚と何やらよろしくないことがあり、そのために官職を去るのではないかと兄は心配し、この詩を作った。

(詩題にある「拊^{くん}」の原義は「拾い集める」。ここでは、ちょっとした言動を拾い集めて人を罪に陥れるという意味合いで使われているようだ)

若いころから僕等が学問に向かったのは、
我が一身のためではなく、
もとより志すところがあったからだ。
我が思いが必ず実現するわけではなく、
己が用いられるか捨てられるかは己の関知するところではない。
天は初めは僕等を助けるかのようで、
後に広大な成果を生むとのしるしが現れ出たと僕らは見た。

せっかく天が与えてくれたのなら、それに背かないで、
 我が身を棄てて機会を活かすつもりでいた。
 僕は大きな過ちをしてしまうとは全く知らずに歩みきて、
 ただただ狼狽する事態となってしまった。

こんな僕であるから、

君に言えることは何もない。

こしき
 甌を落として割ってしまったならば後悔しても遅い。

君は僕よりはわずかに免れているけれど、

全く安心できるものではない。

罪を畏れてよく謹み、敢えて退くのもよいだろう。

もしも人が疑いを抱くのなら、

君のために僕も罪を得てもよい。

その時がきたなら、帰ればよいのさ、

おか 東の坡で すき 一緒に耒を手にしようではないか。

（蘇轍はもしかしたら東の坡で弟と並んで土を耕す姿を本気で想像したのかも知れない。それはまさに「ぐうこう耦耕」（本章469ページ参照）が実現するものとして、実は心躍るものであったのではなからうか。しかし、それは「もとより志すところ」と反するものであった。弟は大きなトラブルになることを回避し、いん筠州にそのまま留まった）

■次韻王鞏南遷初歸

遠く南方に流されていた王鞏（字は定国）（本章 59 ページ）は罪を赦されて都に帰ることになった。王鞏の作った詩に次韻した。

其の一

貴君に問うのは、

南方の賓州ひん たくせんに謫遷されてから、

野の葛を幾尺ばかり食べたのかな。

賓州で逢う人は、髪が黄色で眼が碧あおいとか。

そこでの三年間は過ごし難いものがあって、

座ってただ天の壁を見つめていたという。

しかし、帰ってくるに当たって、

貴君の容貌はもとのままで、言辞も的を破る勢いがある。

詩も酒も決して止めることはしないし、ときには禪寂ぜんじゃくに入ることもする。

私が期待するのは、

天より二羽の鳧けり くつを履として賜り、

大臣となって朝廷に出入りすることだ。

（むかし王喬おうきょうという仙人が、鳧を履として空を飛んで皇帝にもとにきたことは第 1 章 58 ページで見ている。王鞏と王喬で音が以ていることからこの故事を用いたのだろう）

其の二

昔のある人は、元の家に戻ってきてみると、
 竹が太さを一尺ほども増し、何事も以前と変わってしまっていて、
 川の流れの碧さだけが元のままだと嘆いたとか。
 私が貴君と痛飲して貴君の家の壁に書いた字はそのままあるだろうし、
 貴君を迎える父君の友人には大臣も名将も混ざっているだろう。
 何よりも三本の槐えんじゅは老いてますます盛んに茂っているし、
 貴君が家に着く春には楊やなぎの絮わたが静かに庭を満たしていることだろう。
 一生のなかほどで微小なところに沈んだとて、
 その先はまるで違ったことになるのだ。
 何よりも貴君は堂々の先祖が守ってくれているではないか。

(王翬が名門の出身で、庭に家の繁栄を祈った三本の槐が植えられていることは第5章 321 ページの「三槐堂さんかいどうの銘めい」で見ている)

■孔毅甫以詩戒飲酒問買田且乞墨竹次其韻

孔平仲こうへいちゆう (字は毅甫あるいは毅父) (本章 254 ページなど) から送られてきた詩に次韻した。孔平仲からの詩には、飲酒を戒め、田を買おうとしていることについて問い、竹の墨絵を請うことが詠み込まれていた。

(先に「牛酒帖ぎゆうしゅちゆう」で見たような乱暴な飲み方をしているということが孔平仲の耳に

も入ったのだろうか。蘇軾は農地の獲得にかなり本気で取り組み、この地に顔のきく陳
慥ちん（方山子）ぞう ほうさん し（本章 32 ページ）の後押しを得て候補地を見つけ、樂京がくけい（本章 63 ページ）
とも相談して、長男の蘇邁そまいに実地に見に行かせ、さらには都にも行かせて農地の獲得
（すなわち官界からの完全な引退）の実現性を探らせていた。それも孔平仲の耳に入
ったのだろう）

酒中の真とは、

さてさて何が好いのか。

かの有名な孟嘉もうかは酒好きの賢人だったけれど、

まだ酒の道みちまでは聞いていなかった。

酔うと一万の思慮しよが一掃されて空くうになる。

しかし、醒めた後には、

によきによきと思慮しよくそが宿草しゆくそう（多年生の草）のように生え出てきてしまう。

十年かかって酒で全てを洗いつくしてこそ、

真まことと妄まがこととが見えてくるのだ。

酒がわからない者は、石像の女、あるいは焼け焦げた種——

そのココロは、子を産まないし、芽は出ない、

つまり、何も生み出すものがない。

我が身は酒を貯たくわえる瓶——

そのココロは、満ちているときは人に楽しみを与え、からっぽになったら倒れてしま

う。

武昌(王兄弟の家)で痛飲したのは私がそつたいと思ったのではない。

私の本性として人との衝突は避けるので、

相手に合せるがためにあれこれ悩ましいことになりもするのだ。

我が身中にある一寸四方の田(すなわち心)は耕して尽きないものだ。

どうして千金を費やして百頃ばかりの田を買う必要があるのか。

貴君の家の松は大きく、十畝もの広さの蔭を作っているとか。

その下に一つの庵(いおり)を置いて私に貸してくれるのなら、そこで心を洗えるだろう。

書物を枕にして熟睡し、いくら呼ばれても起きないのだ。

貴君は学問を好み、しかもあれこれ雑多に忙しくしている。

それを憐れんで、

貴君の新しい詩と交換に墨で竹を描くでしょうか。

(三つのテーマを盛り込み、しかも次韻するという制約から、まとまりなくごたごたした感じになっている。酒については慎む気はないと返事し、田を買うことについては話をはぐらかし、竹の画については孔平仲の意向に沿うと返事したのである)

■范蜀公呼我卜鄰

蘇軾が田を求めていることは大先輩の范鎮(はんちん はんしよくこう)(范蜀公)(本章98ページなど)

の耳にも達し、我が家の隣に住んだらどうかという誘いが再び范鎮からあった。それについて記した短文。

范鎮は私を許州きょしゅうに呼んで隣に住んだらどうかと言ってくれた。

許州にはたくさんの公卿こうけい(朝廷に名を連ねるような人々)がいるのに対して、いまの私は、蓑を着て竹の笠を被って東の坡おかのあたりをふらふらしている身である。とても公卿とのお付き合いなどはできない。

長く放浪を続けていると、何か病気があっても気付かずについて、休養をとったとたんにいろいろな病気が生じたりする。州や県を長きちんと治めないうと、何事もいい加減になり、それはそれで事なくすんでしまうのだが、たまたましっかりした役人がくると、たくさんの弊害が明らかになって、何カ月かかってもきちんとした状態に治すことができない。

断固として退かない覚悟こそが重要なのである。これはいわゆる「一勞永逸いちらうえいいつ」(ひとたびの苦勞によって永い楽しみがある)である。(いまの私はそのようなことはとてもできないので許州には行けない)

(范鎮に対しては、「お誘いいただきましたが、息子がすでに田を得ましたので、残念ながら応じられません」との手紙を書いている。ただし、この時点ですでに田を買ったのかどうかは必ずしも明らかではない。最終的には常州じょうしゅうに田を得たことを次章で見ることになる)

■西江月

9月9日の重陽ちやうやうの節句せいかくに棲霞楼で座中の人々を喜ばせるために作った詞。

棲霞楼は本章 224 ページなどで見ている。

点点楼頭細雨、(点々と楼閣に注ぐ細かな雨)

重重江外平湖。ちやうこう(長江の外に幾重にも重なる平らな湖)

当年戲馬会東徐。じよ げぼたい(あの年の重陽の節句は徐州の戲馬台で)

今日淒涼南浦。(そして今日はこの寂しい水辺です)

莫恨黄花未吐、(黄色い菊の花がまだ開かないのは残念でも)

且教紅粉相扶。あか(紅い装いの女性が支えてくれましょう)

酒闌不必看茱萸。しよ ゆ(酒宴のさなかに茱萸の実に長寿を願ったところで)

俯仰人間今古。(一度うなずく間に今はもう昔になってしまいです)

(徐州に戲馬台という有名な遺跡があることは第5章 273 ページで見ている)

■録趙貧子語

また一人「異人いじん」が蘇軾そしの前に現れた。趙貧子ちやうひんしという人の言葉を記録した文章。趙貧子(趙の貧乏先生)は仇名である。

ちやうひんし
趙貧子がある人に言った。

「あなたの精神は完全ではありません」

その人は承服しないで言った。

「私の友は立派な車に乗ってたくさんの従者を従え、大軍でさえも蟻の群れのようにみなして指揮しています。私はとていば、富貴などは米糠こめおがのように見て、生死も昼夜の交替に変わらないと達観しています。これでどうして精神が完全でないと言うのですか」

趙貧子は笑って言った。

「それは血気に助けられ、議論に激発して思うまでのこと。完全なる精神の功ではありません」

翌日、趙貧子はまたその人に尋ねた。

「あなたの御両親は御存命ですか」

「だいぶ前に死にました」

「夢に見ることはありますか」

「よくあります」

「その夢の中では、あなたは御両親が亡くなったことを知っていますか。それとも生きておられると思っているのですか」

「夢では二人とも生きています」

「父母が生きているのか亡くなっているのか、考えるまでもなくわかることです。日中にあなたに問えば、即座に応えましょう。夜に夢に見ると、亡くなった人が生きています。死と生でさえ、夢を見ているときと覚醒しているときとは異なります。外物がもしもあなたを惑わしても、あなたがそれに気付くのは、父母の生死よりも難しいのではないのでしょうか。あなたは自分の精神は完全だとして学ばずにいる

のは、憂うべきことではないでしょうか」

私はこのごろこの言葉を聞いたので、これを記録しておく。

(趙貧子とは誰なのか。弟の蘇轍が「かいしやちようせいでん 丐者 趙生伝」に書いている丐者 (こじき 乞食) の趙きち吉である。参考として「丐者趙生伝」を見ておこう。

蘇轍:「丐者趙生伝」

こうあん いん 高安(筠州)の趙さんは、ぼろぼろの衣服にぼさぼさ頭、身体を洗ったことなどない。飲酒を好み、酔うと町の人を罵ったり殴ったりする。物好きな人が呼んで話をすると、無茶苦茶な言い方で悪事をばらしたりする。一度も会ったことがない相手でも、普段の善行や悪事、病気などを言い当ててしまう。それで人々は「あれは有道の者ゆうどう(最高の徳を得た人)ではなからうか」と言う。

げんぼう 元豊三年、私は高安に左遷となってから、途で趙さんを見ても、その物狂いを畏れて敢えて挨拶することはなかった。

その年の暮れのこと、趙さんが会いにきたので私は尋ねた。

「あなたはかつて人に要望することはなかったと聞きます。今日がどうして私のところにきたのですか」

趙さんは、

「あんたを見たかったのだ」

と言い、しばらくしてこう言った。

「あんたは道が好むが要を得ておらん。陽の気が下らず、陰の気が昇らずにいる。だから

肉が多くて浮つき、顔が赤くてぶつぶつがあるのだ。水を全身の骨にかけたらよい。十日もすればもろもろの疾やまい^が去るだろう。一年間息やすみらずに行えば、俗世を超えることもできなくはないだろう」

私はその説を用い、言った通りであるとわかったが、息やすみってしまって長く続かなかった。だからその妙を究めることはなかった。

あるとき、趙さんが、

「今夜はあんたのところに泊まろうと思う」

と、言ったので、私はそれを許したのだが、夜になって来なかった。後でそのわけを尋ねると、

「わしはあんたを他所に遊びに連れて行こうとしたのだが、あんたが驚いて、気が変になってしまってもいかんと思ってやめたのだ」

「あなたはどこに行くのですか」

「わしはいつも泰山たいざんの下に行っておる。世間でいうところの地獄と同じだ。あんたがそこを見たら、もう仕官をする気がなくなるだろう」

「それはどうしてですか」

「地獄にいてのは大半が僧と官吏だからだよ。僧は決まりを破るし、官吏は物を貪る。それだけのことだ」

「あなたがそこに行くと、向こうの人はあなたに挨拶するのですか」

「わしにはあの連中が見えるが、あの連中はわしを見ることはできない」

そして嘆息して、

「これも邪よこしまな術だ。正しい道ではない。あんたは自分の気を養い、気と性が完全になったら、出処進退は考えるまでもなく正しくできるようになるだろう」

「気を養うことは以前に教わりました。性を養うのはどのようにしたらよいのでしょうか」

趙さんは答えてくれなかった。

またある日、趙さんは唐突にこう尋ねた。

「あんたは夢を見るかね」

「見ます」

「亡くなったお父さんを見ることあるかね」

「あります」

「夢の中では、お父さんが生きているのか亡くなっているのか、楽しいのか憂うのか、わかっておるかね」

「わかっておりません」

趙さんは笑い、

「あんたは以前に性を養うことを尋ねた。いま夢と覚めているときの違いをあんたと話した。それはつまり性が完全ではないということだ」

私ははっとして趙さんの言葉が優れていることを知った。それから趙さんが特別な術を持っていなくても、生死を知る者であると知った。

趙さんは両眼かげともに翳みがあつて、はっきりとは物が視られない。しかし、ときに翳を除くことができ、そのときは瞳は碧色になる。臍みどりから上は骨が亀の甲羅のようになっていて、心臓ほこより下は骨が鋒のように出っ張っている。あばらの両側が合うところには指が入るくらい隙間があ

る。

趙さんはかつて自分の干支を言い、それによると百二十七歳である。家はもと代州だいしゅうにあり、名は吉きちで、五台山ごたいざんの僧そうに仕えのだが、それを続けられずに四方の旅に出た。少年の頃は素行が悪く、不法行為ふぼうしやうをししばしば行った。揚州ようしゅうの蔣君しやうくんとともに学び、蔣君は趙さんを嫌い、毒薬をその目に塗った。それで腎じんができたのだ。しかし、趙さんによると、蔣君はちゃんと理に従したがわなかったので、殺すことができなかったのだ。

このころ、兄あにの蘇軾そしつは黄州わうしゅうに謫居たくきょしていた。趙さんは書を求めて黄州に行き、一度会あい、兄が易えきに詳しいことを喜び、半年ほど滞在した。兄が黄州を離れると、それについて興国こうこくに行き、楊絵ようかいと会い、そこに留とどまった。趙さんは鳥や獣を好み、いつも何かしら連れていて、興国では騾らばを飼かい、騾のせいで怪我をし、それで死んだ。楊絵は棺くわんを用意して葬まうった。

元祐元年げんゆう、私と兄は都みやこに帰還きげんし、蜀しゆの地ちから僧そうの法震ほうしんが会あいに来てこのように言った。
「愚僧ぐそうがこのたび長江ちやうかうを下くだって旅たびをしておりますときに、雲安うんあんに至いたりますと、旅館りやうかんである乞食きじきに会い、それが言うには、『わしは趙てうという者ものだが、黄州わうしゅうで蘇公そこうと知り合った。わしのためによりしく言ってくれ』と」

私は驚おどいて乞食きじきの容貌ようぼうを尋たずねるとまさに趙さんであった。

ちよど興国の知事しゆげんはくである朱彦博しゆげんはくの子こがその場に居ゐり合せたので、興国に帰かへってこの話を父ちちに伝え、趙さんの墓はかを開ひらいてみたところ、棺くわんはからっぽで、ただ一本の杖じやうと、両脛りやうけいの骨ほねだけがあった。

有ゆう道どうの者ものは、そのことを他人たにんが知るのを嫌きらうと、私は聞きいている。それでひどい言葉を投げつけたり汚くらしい行為ゐをしたりして自らを晦くますのである。しかし、完全に覆くい尽くすことはでき

ないので、その徳が時折外に出てしまう。趙さんを見ると、田舎じみて鈍く、怒りに満ちて、自らを晦ましているようにはとても見えない。しかし、その言うことは時に道に合致している。道に関して見るところがなければ、たぶん術も大したことにはならないのだろう。術が精妙に至っても、まだ道を尽したことはないのだろう。長く生きて術に通じても、古代の真人しんじん(完全な有道者)について語ることはできないのだろう。それでも道教の書物にはこう書いてある。「尸仮しかの下げの者(昇仙した中では下級の者)は脚の骨を一本留める」。とすると、趙さんはそうなのだろうか。

蘇軾と蘇轍の兄弟を比べると、つい相違する点にばかり目が向いてしまうが、実際は共通するところの方が多い。この「丐者趙生伝」は兄が書いた「方山子伝」ほうざんしでんと雰囲気が共通し、蘇轍も「異人」いじん好きであったのだろう。蘇轍が書いた人物伝は3篇しかなく、その中に巢谷そうこく(本章358ページ)を描いたものもある。「巢谷伝」そうこくでんは15年先に読むことにしよう

■延年術

これも「異人」いじんについて記した文。

私がこれまでに聞いたところでは、世の中の道人で長生きの術を得たとする者として、趙抱一ちようほういつ、徐登じょと、張元夢ちようげんぼうなどがいたが、いずれも百歳近くまで生きたものの、つには死んで普通の人と異なるところはなかった。

黄州に来てから、浮光ふこうに朱元経しゅげんけいという人がいて、他の人と非常に異なり、尊師と

して仰ぐ人がはなはだ大勢いた。しかし、ついには病気で亡くなった。死んだときは中風の震えがあった。ただし、^{こうはく}黄白の術(錬金術)をよくし、また薬も作った。朱元経の作った金は官に納められた。

世の中には果して人とは異なる者がいるのだろうか。いるけれども普通の人は見ることができないだろうか。それならいないのと同じではないだろうか。昔の人が記したことの虚実はわからない。現在見るところと大差がなく、好事家が話に尾ひれをつけたのだろうか。

■十拍子

暮秋に作った詞。

白酒新開九醞、(この白い酒は新たに開いた^{きゅうりん}九醞の美酒)

黄花已過重陽。(この黄色い花はすでに^{ちゅうよう}重陽を過ぎてしまった菊)

身外儻来都似夢、(自分の身の外からくるものは全てが夢に似て)

醉裏無何即是郷。(酔えばここがたちまち^{ユートピア}無何有郷)

東坡日月長。(東の^{おか}坡ではゆったりと歳月が流れます)

玉粉旋烹茶乳、(玉のような茶の粉を^に煮ればたちまち乳のよう)

金薤新搗橙香。(薤を^{にん}刻み^つ橙を搗いて香りを合わせます)

強染霜髭扶翠袖。(白い髭を無理やり染めて^{みどり}翠の袖をまといましょうか)

莫道狂夫不解狂。(狂った人は己の物狂いがわかりません)

狂夫老更狂。(物狂いは老いてますます狂うのです)

■子由作二頌頌石台長老問公手写蓮經字如黑蟻且誦万遍脅不至席二十余年予亦作二首

蘇軾兄弟は罪を得て以来、それまで以上に深く仏教を学ぶようになり、弟の方がより強く仏教に引かれて行ったようだ。詩題は「弟が石台長老せきだいを頌める二首の頌詩しょうしを作った。長老は法華經ほっけきょうを手づから写してその字は黒蟻のようで、それを誦すること一万遍で、その間は寢床で眠ることなく二十余年に及んだ。私もまた二首を作る」。2首のうち1首を訳す。

其の二

眼も心も両方とも虚しく円いものだ。

眼と心を閉ざして床につかないこと二十年に及んだ。

「吾が師は眠らなかつたのではない」

私がおのうように言つて、誰が信じるだろうか。

吾が師においては、睡蛇すいじょ(睡眠の煩悩)などは死んだのであるから、常に安眠を得ているのである。

(この詩の終わりは原詩では「試將燒卻看嗔無」で、岩垂憲徳・釈清潭・久保天随『蘇東坡詩集』(1927年)は「殆ど語を成して居らぬ」と評している。蘇軾の詞句はしば

しば難解であるのだが、漢学がすこぶる盛んであった時代の碩学がこのようにいうのだから、確かに意味不明であるのだろう。蘇軾は逆説的なことをいうのを好み、ひねくれた末に誰にもわからない（この場合は弟はわかったのかも知れない）ところにまで行ってしまうこともあるようだ。上の訳は口から出まかせの100%誤訳印である）

■和蔡景繁海州石室

蔡承禧（字は景繁）が海州にある石室（自然にできた石の洞窟）について詠んだ詩を送ってきたのでそれに和した。蔡承禧は蘇軾と同じ年に科挙に合格した人で、南堂の建設を支援した（本章377ページ）。海州は蘇軾もかつて立ち寄ったことのある海辺の町（第5章5ページ）。蔡承禧は前の年から海州も管轄する地域の役人になっていた。

（詩の冒頭にある「芙蓉仙人」とは石延年（字は曼卿）のことだと蘇軾自身が注記している。石延年は一時期海州の副知事を務め、そのときのことがこの詩に詠まれている。石延年は大の酒豪で詩や書に巧みであった。歐陽脩の友人で、歐陽脩は石延年の墓表を書いているので、その一部を参考までに読んでおこう。

……石延年は自ら豪気であるとして、書物を読むときも一字一句を吟味するようなことはしないで、昔の人の奇節、偉行、普通でない功績を慕い、世俗をちまちましたものと見下し、我が意を動かすに足りないとした。己はいまの時代に合わない、ひたすら酒を飲んでまぎらわした。劇飲して大酔することを好み、酔っては乱いままに振る舞った。それですます

世と合わなくなった。石延年とともに遊ぶ人はその物事にこだわらないところを愛したのだが、その才能に用いるべきものがあるのを知らなかった。四十八歳で都で亡くなった……風貌は堂々とし、酒を飲むことを喜んで、自ら豪傑だとして、規律によって正すことができないような振る舞いをした。その普段の生き方を見れば、出处進退に関わる大きな節度においては一つも理にもとるところはなかった。人と接するときは、賢となく愚となく皆と喜びを尽した。天下の是非、善悪を判断するときに、石延年に意に適う者は幾人もいなかった。その文章は力強く、その意気とびったりするものだった。

……その友、歐陽脩がその墓に表して曰く、

「ああ、石延年は自らを高く見せかけることはしても、身を屈めて世間に合わせるようなことはしなかった。自身を重んじた士^しというべきであろう。士の自負するものが大きければ、自身を顧みて重しとするであろう。自身を顧みて重しとするならば、世間に合わせるのはますます難しくなる。大事を行って奇功を立てようとするならば、石延年のように自身を重んじて世間と合い難い士を得なければならない。昔から特に優れた人は必ず世から抜きん出た志の持ち主であった。己を損ない我が生涯の跡を汚すよりは、世間にその名が聞こえる功績を挙げられずに終わるのを苦む方を選ぶのだ。あるいは老いてまさに死のうとするときに幸いにも巡り合って、世に少々の施しを遺す者もいる。しかし、石延年は、世と合い難く、世に施すこともなく、不幸にしてさらに不幸にも五十歳に至ることもなかった。これは石延年の運命であったのか。哀しまずにはいられない。

石延年は48歳で亡くなった。蘇軾がこの年48歳であることを思うと、以下の詩の味わいがいささか違ってくるであろうか。なお、本章232ページの紅梅の詩で、「桃か

と見れば緑の葉がなく、杏かと思えば青い枝がある」と紅梅について詠んだ昔の詩を批判していたが、その詩の作者が実はこの石延年である)

芙蓉仙人はかつて海州に遊び、
蒼い藤が翠の岩壁にまどわりついて路すらもない山を見て、
戯れに、桃の種を黄色い泥で包み、岩の間に雨のように撒き散らした。
それによって、何も無い山に錦繡をまどわせ、
天上から無数の花が海を照らす光景を作ろうとしたのだ。
今日では、桃の花が開き、
その間に、車を容れられるくらい大きさの石室がある。
いずれの年にか、雷がここから仙人の納まる玉棺を飛び出させたのか。
抜け出た跡は、仙界の靈巖な堂宇を覗き見る趣がある。
かつて芙蓉仙人はこの山で酔い続けること千日、
いまに至るも石の間には飲み残しの酒が染みついている。
芙蓉仙人は去って五十年、
花は老い、石室はからっぽ、
手づから植えた松が空を覆い、蒼い髯を垂らしている。
ここに蔡君が芙蓉仙人のために酒を注ぎ、
伴いきた女性に胡琴を奏でさせると、
氷のように澄んだ音が巖の間から響きわたり、

たちまち海の波が呼応し、松が舞い出した。

このような遊びは芙蓉仙人以来のこと、

さすが酒で伍する者なき蔡君である。

蔡君は断岸より臨んで朝日を呼び出し、

紅い波と碧の絶壁が互いに呑んだり吐いたりするありさまを現出させた。

ここに蔡君は己の内に語を尋ね、

杖で銅鼓を叩きつつ声の限りを尽くして詩を朗誦した。

そのときの長篇の詩を書いて、蔡君は遠く私のところに寄せた。

一唱三嘆し、心がぎりっとひきしまり、

折から長江の風が我が顔に雨の滴を飛ばしたのは、

あたかも海の波をかぶりつつ胡琴の音を聴くかのようなのである。

私は老病の身で門を出ることもなく、

海州の山の石室を尋ねることなどはできない。

ここでは桃の花は門の外で自ずと開いて自ずと落ち、

部屋の隅に置いた酒の甕は塵にまみれたままだ。

まわりに柳を植えた小部屋で、心を洗って仏道に帰する日々、

かつての歳月は夢の中のことと一笑に付し、

今も昔も一瞬のことと思うのである。

貴君に頼むのは、

どうかこの詩を石に刻むようなことはしないでくれたまえ。

海が山に、山が海に変わるのも朝から日暮れまでの間のことなのだから。

■王定国詩集叙

都への帰還を許された王鞏（字は定国）（本章417ページ）は長江のすぐ南にまで戻ってくると、賓州に流されていた間に詠んだ詩を集めて蘇軾に送った。その詩集に蘇軾は序文を書いた。

太史公（司馬遷）は孔子が編集した詩歌の古典『詩経』についてこのように論じた。

「『詩経』に納められた『国風』百六十篇の詩は男女の情を歌いながらも淫靡に流れていない。『小雅』七十四篇の詩は怨みつらみを歌いながらも規範を乱すものではない」

私はこのことを考えるに、『詩経』の中でもやや時代が下って詠まれた「変風」や「変雅」について司馬遷は識るだけで、『詩経』の中でも初めのころの「正風」や「正雅」についてきちんと見ているとはいえない。先王（古代の聖王）の徳の余沢が衰えた後になって、「変風」の詩が情から発せられた。衰えたとはいえ余沢は枯渇し尽したわけではなかったので、なお礼や義の内に留まっていた。留まるところがなくなったのよりはまさっていたというだけのことである。

もしも人の本性から発して忠や孝に留まる詩があるのならば、「変風」、「変雅」と一緒に語ることはできない。古今の詩人は大勢いるが、杜甫を第一とするのは、流落して飢えと寒さに苦しみ、ついに国に用いられなかったにもかかわらず、食

事の際にも国君のことを忘れることがなかったからだ。

王鞏は私のために罪を得て、遠く海辺の地に流されて五年、一人の子は貶所で亡くなり、一人の子は故郷で亡くなり、王鞏もまた病気でほとんど死そうになった。王鞏は私のことをひどく怨んでいるだろうと思い、取えて手紙で暮らし向きを問うようなことはしなかった。

ここに王鞏は帰還を赦されて江西(長江の南)に至り、嶺外(山の彼方の南の地)で作った詩数百首を私に寄せてきた。その詩はどれも清澄にして平静、そして豊融で(穏やかで和らいている)、藹然とよく治まった世の音色があって、王鞏が詩によっていっているところのものは、志を得て道を行く者がいうところのものと異なることがない。中には憂いに塞がり嘆きを発する作もあるが、それは嶺外の地に死んだならば、天子の恩に報いることができず、父祖の名を辱めてしまうのを恐れたものである。孔子は「天を怨まず、人を尤めず」と言った。王鞏は私を怨まないのであるから、まして天を怨んだり決してしない。私は王鞏の詩巻を置いて嘆息し、その人の理解が浅すぎたことを残念に思った。

思えばかつて王鞏は彭城県(徐州)にいる私を訪ねて、十日ほど留まり、詩のやりとりをしてほとんど百余篇に及んだ。私はその多さに苦しみ、その速さを畏れ、その巧みであることに感服した。ある日、王鞏は顔復と泗水に遊び、桓山に登り、笛を吹き酒を飲んで、月の光の中を帰ってきた。私は黄樓の上で酒を用意して待ち、「李白が死んでから、世にこの楽しみをする人がいないこと三百年になる」と言ったのだった。

今や私は老いて詩は作らないし、病気で酒も止め、門を閉ざして外に出ることもない。門の外は数歩ですぐに長江であるのだが、もうひと月余りも長江のほとりにも行っていない。ぼんやり 眊眊と過ごしてまことに一人の老農夫でしかない。

王鞏は詩はますます巧みで、酒を飲むことは衰えず、至るところで山水の景勝地を窮め、困苦し老いたことをもってその生き方を変えることなどしない。今から後に私が王鞏に畏服するのはその詩によるだけではないのである。

(蘇軾は、王鞏に手紙を書かなかったとか、老いて詩を作らないとか、必ずしも事実ではないことを記しているのは、例によって見てくれを飾ったもの。徐州知事であったときに王鞏が訪ねてきたことは第5章 298 ページ以下で見ている。「李白が死んでから三百年」というのは第5章 308 ページにある)

■記承天寺夜遊

ちょうかいみん あざな ぼうとく あくせん 張懷民 (字は夢得または偃佺) (本章 384 ページ) と しょうてん 承天寺に遊んだことを記した小文。承天寺は りんこうてい 臨臯亭の南東の ちやうこう 長江の岸辺近くにあった。

げんぼう 元豊六年十月十二日の夜、衣を解いて眠ろうとすると、月の光が戸から入り込んできた。よろこ 欣び、起って行くことにした。

ともに楽しむ者がいないことを念い、承天寺にまで至り張懷民を尋ねた。張懷民もまだ寝ていなかった。

ともに承天寺の中庭を歩いた。庭は水を張ったかのように明るく透き通っていた。

水中に藻や荷あさぎがゆらゆらと交差すると見えたのは、竹や木の影であった。

夜に月がないわけではない。庭に竹や木がないわけではない。ただ、私や張懐民のような閑な人が少ないだけである。

■記故人病

ある友人の死に遭遇して記した短文。

元豊六年十月十二日、夜の最初の太鼓が鳴った後で、友人が病気になったと
いうので急いで視みに行く、すでに物をいえなくなっていた。死と生が争い、陰の
気と陽の気が争い、友人の苦しみは鋸で木を切るよりも甚だしいものがあった。私
はもう助からないと知り、黙って安らかな死を祈るだけだった。

ああ、哀しいではないか。これは何の罪によるのか。酒色の娛たのしみによるのか。昔
の人は「美食は毒、快樂は猛獣の爪や牙」と言ったが、それは虚言ではないの
だ。

翌日、若い者に会い、このことをもって戒めると、若い者は笑って言った。

「そこまでいいですかね。なんとも野暮ではありませんか。僕はもとより色を好みま
すよ。死の痛みなど怖がったりするものですか」

「死は怖くないのと君はいうのだね。道で物乞いをする者は、地面に伏して大声で
このように叫ぶよね。『どうか一椀のご飯をお恵みください。きつと千斛こくの米をお返し
します』(物乞いの常套句で、来世において大きな酬いがあるという意味)。それを聞くと町

の人はみんな嘲笑うだろう。千斛の米を返せるのだったら、どうして一碗の飯がなかつたりするものかと。子供だっただませやしない。君は死など恐れないという。それでいて、生きて色を好むという。どうして私を欺けようか

今の世の強かりをいう者はだいたいこの若者と同じである。

「戒かいは定じょうを生じ、定じょうは慧えを生ず」(戒律にやうじやうは入定(悟りに近づく(瞑想))を生じ、入定は偉大な智慧を生じる)とは変わることはない至言である。戒律に従わなくても悟れるかのようにいうのは妄言である。智者のように見えて実は痴れ者であり、覚めているようでいて実は夢の内にあるのだ。悲しいことだ。

(前の文章と同じ日付で、同じ夜に二つのことが起こったのだろうか)

■書唐林夫恵諸葛筆

宣州せんしゅうの諸葛氏しよあつが作る筆は天下の名品とされた(本章80ページ)。唐垌とうとう (字あざなは林夫りんふ) (本章181ページ) が諸葛氏の筆を贈ってくれたのでその謝礼としてこの短文を書いた。

唐垌が諸葛氏の筆、二束を送ってくれた。一束が十種の筆で、どれも精妙を極めていいる。唐垌のように書を善くする者でなければこの筆は使いこなせない。唐垌は私に行書と草書を求めてきたので、この数枚の紙に書いてみた。

元豊六年十月十五日、酔中に題す。

(酔中といっているのは、上手には書けていない言い訳としたのだろう。蘇軾は書の

道具についても造詣が深く、黄州時代に書いたとされる短文をいくつかここで見ておこう)

■書名僧令休硯

黄岡県(黄州)の役人である段^{だん}▲(▲は王の右に与)が古い硯を贈ってくれたのでそのことを記した。

黄岡県の主簿の段君は、かつて都にいたときに、書物を筆写する者のところで一つの風字硯(古代の硯の一種)を得た。

硯の下に、「祥符己酉、これを信州鉛山の観音院で得た。名僧令休の手元にあったものだ。明年夏に鵝湖山で刻み記す」と刻まれている。硯の横には、銭易が題して「荒靈」の二字を刻んだ。それは歙州の石である硯の蓋の美しさをいうのだろう。

「己酉」は今から七十四年前で、令休とはどこの僧なのか。禅月大師の貫休は信州の人であるから、令休はあるいはその兄弟なのか。鉛山にいたのだろうか。「荒靈」の二字はその意味がよくわからない。

段君がこの硯を私にくれたので、このことを書いてその謝礼とする。

元豊六年冬至の日に書く。

(1) 蘇軾は硯に刻まれた文字に興味を抱いた。令休とは誰なのか、貫休の兄弟ではないかと推測している。貫休は五代十国時代の著名な僧で、成都を中心に栄えた前蜀

国の王に招かれて、文化保護政策を説いた（本章 307 ページで触^{いそ}れた韋^{せんえき}荘とも詩のやりとりがあった）。錢^{せんえき}易は五代十国時代に杭州を中心に栄えた呉^{ごえつ}越^{ごえつ}国の王の息子である。唐の文化の伝統は呉^{なんとう}越^{なんとう}国や蜀^{なんとう}国、あるいは南^{なんとう}唐^{なんとう}国（上の詩の諸^{しよかつひつ}葛^{しよかつひつ}筆は南唐王の庇護のもとで技術を高めた）に引き継がれたのだった。(2) この書^{げんゆう}状は、段君から別の人の手に渡り、7年後の元祐^{げんゆう}5（1090）年4月18日に蘇^こ軾は再びそれを見ることになる。そのとき蘇^こ軾は知事として杭州にいた。蘇^こ軾の書は人々に好まれ、人から人へと渡っていったのである）

■書龐安時見遺廷珪墨

医者^{ほうあんじ}の龐^{あざな}安^{あんじよう}時（字は安常）（本章 280 ページなど）からもらった廷^{ていけいぼく}珪^{ぼく}墨について記した短文。

（廷^{ごだいじつこく}珪^{なんとう}墨は、五代十国時代の南唐国で王のための墨を作る役人であった李^{りていけい}廷^{りていけい}珪^{りていけい}が開発した墨。宋代において第一の墨とされた）

私はたくさんの墨を蓄えている。その中の数^{すうがん}丸^{がん}は李廷珪が造ったものであるとされている。色や形状は確かに他の墨と異なっているのだが、歳月を経るうちに多くはその真の風合いを失ってしまい、疑わしくて廷珪墨であるとは決めかねている。

この廷珪墨はある人が二代にわたって蓄えていたものである。不幸にも重い病に罹り、医者^{ほうあんじ}の龐^{あざな}安^{あんじよう}時の治療を受けた。龐安時は一銭も取ることなく、この墨だけを求めた。龐安時はこれを得ると私に与えてくれ、その代わりに数^{すうふく}幅^{しよ}の書^{しよ}を求めた。

龐安時き すいは蕪水の人で、医術の学は妙所しよくに至り、立派な行いがあり、蜀の人である。單驥たんじようにかなり似ている。珍しい病氣よも善く治療する。字は安常あんじようである。古今の医学書にも通じ、漢代かんだいに張仲景ちようちゆうけいが『傷寒論』しようかんろん（疫病に関する古典）を書いて以来の傷寒に関する種々の本を極めて詳しく比較検討した書物を編んでいる。傷寒の治療に関してはこれによって万全を尽くすことができる。

■書懷民所遺墨

張懷民ちようかいみん（字は夢得あざなまたは偃佺ぼうとく）あくせん（本章 384 ページなど）が墨をくれたのでその謝礼。

世間の人が墨を論じるとき、多くの人は黒さを貴び、光沢についてはあまりいわない。光沢があっても黒くなければ、それは棄ててしまってもよいものである。黒くて光沢がないのは寂しくは榮えるところがないので、やはり用いるに足りない。光沢が清らかで浮き上がることがなく、小児の瞳のように澄んでいるのは佳よい墨である。

張懷民が贈ってくれた二枚の墨には、表には「清煙煤法墨せいえんばいほうぼく」、裏には「道卿既黒どうけい き こく而光」と記されている。まさに黒にして光る佳よい墨である。書をもって謝礼とする。

■養生難在去欲

黄州知事の楊案ようさい（字は君素あざな）、副知事の張公規くん そらが集まった折の会話のひとこま。

(楊^{じょだいじゅ}案は徐大受 (本章 381 ページなど) の、張^{もうしん}公規は孟震 (本章 114 ページ) の後任である)

昨日、知事の楊案と副知事の張公規が迎えを寄越したので、出かけて安^{あんこくじ}国寺に遊んだ。座中、気を整え生を養うことについて議論になった。

私が、

「どのお考えも十分だとは思えません。難しいのは欲を去ることでしょう」

と言うと、張副知事が、

「漢の時代の英雄である蘇^{そぶ}武は、異国の地で捕虜となったときに、雪を嚙^{もう}み、毛^{せん}氈を食らい、背中を踏まれて血を流してもへこたれた言葉は一語も漏らしませんでした。生死の境を超えたというべきでしょう。しかし、異国の娘に子を孕ませるということは避けられませんでした。異郷の地で困苦のなかりにあってさえそうなのですから、飾り立てた部屋の内にあってはなおさらです。このことから欲望を消すのは難しいことがわかります」

集まっていた人々は皆大いに笑った。私はこの言葉の理^{ことわり}を愛し、ここに記しておく。

■洗兒戯作

上の文に欲望を消すのは難しいとあるのを自ら証明したわけではなかろうが、蘇^{おうちようらん}軾に四番目の男児が生まれた。母は王朝雲で、子の名を遯^{とん}とい

う。記録にある限りでは蘇軾には4人の男児があり（女兒はいなかったようだ）、遯が最後の子であった。子が生まれて3日目に「洗児」という行事をすることは第4章194ページで見ているが、遯の洗児に際して蘇軾はこの詩を作った、

人は皆、子を育てて聡明であることを望む。

私は聡明であるとされて一生を誤ることになった。

我が子に望むのは、ただ愚かつ魯であること。

その上で、災いもなく難もなく、公卿に至ることだ。

（愚も魯も意味はほぼ共通しているが、愚は頭の鈍いことをいい、魯は合せて動作ものろくさいことをいうようなニュアンスがありそうだ。息子は馬鹿で阿呆でよいといっているながら、高位に昇ってくれと望んでいるので、「戯れの作」と題したのだろう）

（この翻訳で大いに頼りにしている書物の一つに李之亮箋注『蘇軾文集編年箋注』（2011年）があるが、この詩にある「私は聡明であるとされて一生を誤ることになった（我被聡明誤一生）」の句を、蘇軾の一生を象徴とするものとして序文の題名として選んでいる。その序文の主旨に合わせるには、「私は聡明の運命を荷わされて一生を誤ることとなった」と訳した方がよりよいだろう。さほど聡明でなければ、もともとの農民として、あるいはしばしば記しているような「異人」の一人として一生を送ったのだろう）

■徐君猷挽詞

黄州知事であった徐大受（字は君猷）（本章 381 ページ）は夏に新たな任
地へと長江を下って行ったのだが、不幸なことに旅の途中で亡くなり、
棺を乗せた船が冬に黄州に戻ってきた。蘇軾はこの挽歌を作った。

貴君は一艘の船に乗って南に旅し、

ついに帰らなかった。

我等の悲しみは、長江と赤壁によって照らし出されている。

見れば、長江を往還する人々は貴君のために涙を流してはいない。

しかし、貴君が黄州を治めた功績は欺けはしない。

思い出すのは、

雪の後で一人ふらりときて柳を植えたこと、

竹の間を往き来して茶を飲んだこと……。

貴君とともに酒を囲んだ友はみな散り散りとなり、

昔を悲しみ、新たに愁うのはただ私だけなのか。

（先に徐知事の送別の詞で「半年の離別」と詠んでいたが（本章 381 ページ）、全く思
いもよらぬかたちでの半年後の帰還となってしまった。徐知事の棺が黄州に戻ってき
たのは、家族がここに残っていたからである。蘇軾はこれから先のことについて、徐
知事の弟の徐大正の相談に乗っている。徐知事の故郷は遙か遠くの閩中で、そこに帰
って葬儀を行うだけでも大黒柱を喪った一族にとっては一大事である）

■生日王郎以詩見慶次

12月19日は蘇軾の誕生日。それに合わせて、弟の娘の婿である王適おうてき あだな（字は子立しりゅう）（本章171ページなど）が祝いの詩を送ってきたので韻した。

「折楊せつよう」の新曲（耳に馴染む俗な曲の例）には万人が集まる。

「于菀ういう」の曲（独創的な高尚な曲の例）に和すのは貴君だけだ。

美しい玉ぎよくは奥深くまわられていても必ずや売れる。

手当たり次第に投げ売りするようなものとは全く違うのだ。

貴君はしばし私に従って旅をし、

かつて江南こうなんの町で芙蓉に囲まれた。

いまは我が弟に従って儒学に励み、

貴君の弟ともにいずれ天下の士となるであろう。

松柏も谷を暗く塞ぐ霧を嫌わずにいるならば、

ついに大建築を支える梁はりとなるまでに成長する。

貴君の議論は鉤かんなから出る切り屑のように尽きることがなく、

貴君の詩は連なる珠たまに似て妙味がある。

我が誕生日に、遙か遠より、

老いてもなお枯れぬようにと長寿を祝ってくれたことに感じ、

何か返そうとするのだが、

君の詩に及ぶものは作れないので、

けんけい
建溪の茶をいささか切り分けて贈ることにした。

(王適は科挙に落ちているので、この詩の大半は王適を励ますものとなっている。湖州で王適とともに無数の蓮を見たことは第4章 375 ページにある)

■ 読仲閔詩巻因成長句

黄州で付き合う人々は広範囲に及び、仲閔ちゆうびん(恐らく字で、姓は伝わらない) という詩を得意とする実業家もいた。その詩集を読んでの感想。

麦の秋(麦の収穫期)に、

西の風(秋の風)が麦畑に吹き寄せるのを見るをは嬉しいものだ。

これによって老いた農夫は年々の苦労を忘れるのだ。

手足を泥まみれにして、

たま
珠のような麦の粒を人よりも倍収穫しようと、

二年越して努めてきた。

貴君はいまや壮年で仕事に励んでよく稼いでいる。

私はといえば、田畑を耕すのに苦労している。

竹に囲まれた雪堂せつどうを照らす月だけは、

愁いに沈む私を憐れんで、清らかな光を注いでくれる。

(恐らく同じ時期であったのだろう、仲閔は、収穫を終えたばかりの新しい麦で団子

を作って蘇軾に贈っている。蘇軾は返礼の詩を作り、その中で、「しこたま麦を買い込んだと聞かすが、それは飢饉がきて値が上がるのを待ってのことか」というようなことを冗談半分、皮肉半分でいっている)

■書贈何聖可

何^{かせいか}聖可に贈った短文。何聖可は黄州^{こうおか}黄岡県の人であること以外は不明だが、後にまた登場する。

一年がここに暮れようとしている。

雨と風は寂しい。竹作りの部屋の紙の窓辺で、燈火が青くまたたいている。このよ
うなときに私はいつも少しばかりの佳^よい趣^{おもむき}を覚える。

その半分以上を黄岡の何聖可に寄せて与えようと思う。

一緒に享受するには佳^よい客を選ばなければならない。もしもそういう人でないならば、すぐに人を使わして誘いを取り消さなければならない。

(蘇軾に見込まれた何聖可はきっと急いでやってきたのだろう)

■夢中作祭春牛文

立春に土で作った牛の像を道に並べて豊凶を占う行事があることは第5章 93 ページで見ている。その土牛は用が済めば壊されて棄てられてしまう。天帝は土牛のそうした運命を憐れみ、土牛を祭る文を書くよう蘇

軾に依頼した、という話。

元豊六年十二月二十七日、天がまさに明けようとするころ、夢に見たのは——
数人の役人が一幅の紙を持ってやってきた。その上に題して『春牛しゅんぎゅうを祭る文』とあり、それを書いてほしいとの依頼であった。

私は筆を取ってさらさらと書いた。

「春はすでに至り、もろもろの草が伸び出した。ここに土牛どぎゅうを持ち出して、農事に励めと戒める。土牛は派手な色の衣をまとっているが、もとは泥から出たものだ。土牛が成ると毀こわされるのはほんの短時間のこと。喜んだり怒ったりする間もないではないか」

役人は微かに笑って言った。

「最後にあるのは、牛は怒っているということなのだろうか」

傍らのもう一人が言った。

「それでもよいではないか。もう目覚めてしまうぞ」

(天帝の遣いの者は、蘇軾の書いた祭文に若干の不満があったものの、蘇軾が目覚めてしまうのを恐れてそのまま持ち帰った)

■喜王定国北帰第五橋

おうきょう あざな ていこく
王鞏おうきょう (字は定国) (本章 435 ページなど) はこの年の終わりから翌年の初めに都に到着した。その報せを聞いての詩。

はくろ

白露の季節、

折からの秋の風が南方の悪い気を洗い流してくれ、

貴君は帰還の旅に上った。

夢は巡り廻り、

再び都の人々と会えば誰もが凄然とした思いになる。

訪れる者もなくさびれてしまっていた貴君の家も、今日からは見違えるようになり、

向こうでは杖をついていた貴君も、これからは若返るばかりだ。

世の辛苦を経験した貴君は熱さに触れる前に手を縮めることを覚え、

こうして帰ってきたものの、貴君が取じるのは、

まだ皇帝の恩に報いられずにいること。

都の第五橋の水に照らされるのは、

唐代の老いた鄭虔ていけんのような人ではないのだ。

(第五橋は唐の都の長安ちやうあんにあったことがよく知られているが、同名もしくはそれと比せられる橋が王翬の屋敷の近くにあったのだろう。鄭虔げんせうは玄宗皇帝のもとで文人として評判が高かったが、安祿山の乱に際して賊軍の捕虜となって職を授けられ、そのため
に乱が平定された後は罪人とされ、失意のまま亡くなった)

■率子廉伝

おうきやう

そつ し れん

い じん

王翬に関連して率子廉という「異人」の伝記を見ておこう。

率子廉こうざんは衡山の農夫である。愚か者の朴念仁で、不遜な振る舞いをするので、人々は「率牛そつぎゅう」と呼んでいた。晩年は南嶽観なんがくかんに属する道士となった。南嶽観の西南七里しきよかくに紫虚閣しんがあり、晋の時代に魏夫人ぎが仙人になる修行をしたところだという。南嶽観の道士たちはそこが荒れて寂しい場所であるので、敢えてそこに住もうとする者はいなかった。しかし、率子廉だけは喜んで行き、ただ黙ってそこに居て、何をしているのかを見に行く者はいなかった。ひどく酒が好きで、しばしば山の林で酔い伏し、雨風が激しくなっても知らずにいて、虎や狼がその前を通っても害することはなかった。

もとの礼部侍郎れいぶじろろうの王祐おうこが都を出されて長沙ちやうさの知事になったときに、皇帝の詔を奉じて南嶽観いので禱り、紫虚閣を訪れた。そのとき率子廉はちょうど酔って起つことができなかった。王祐をじろっと見て、「田舎道士は酒を愛するのに、いつもいつもそれが得られるわけではありません。得られるとすぐに酔っ払ってしまいます。殿様、どうか大目に見てくだされ」と言った。王祐は率子廉いのが異(常人ではない)であると察し、車に載せて連れ帰った。率子廉は王祐のもとにひと月余りいたが、ぼんやりとしてものを言わないので、また山に送り返した。そのときに王祐は率子廉に、「先生は光を隠して内側を照らしておられるのでしょうか。私はそれを測り知ることができませんでした。詩をお贈りしたいと思います」と言った。しかし、王祐はそのことを忘れてしまった。

ある日、王祐が昼寝をしていると、夢の中に率子廉がきて詩を求めた。そこで二

首の絶句を作った。率子廉は絶句を板に書いて紫虚閣の上に掲げた。道士たちがそれ見て驚き、「率牛はこれをどこから得たのか」と言い合った。

たいへいごうこく

太平興国五年六月十七日、率子廉は人を使わして道観の人々に言った。「わしはいま行くところだ。紫虚閣に人がいないわけにはいかない。すぐに後を継ぐ者を派遣してくれ」。道士たちは王祐の詩を得てからは率子廉をやや異とするようになっていたので、このときは驚き、「いまこの暑さのなか、率牛はいったどこに行くのだろうか」と言って、急いで見に行くと、率子廉はすでに死んでいた。皆は驚き、初めて大いにこれを異とした。「率牛は死ぬ日を知っていたのだ」と言って、南嶽の下に葬った。

それからいくばくも経たないうちに、なんだい南台寺の僧のしゅちやう守澄が都から帰ってきた。守澄は都を出たときに、なんくんもん南薰門の外で率子廉に会った。雰囲気が実に清らかで、守澄は率子廉に、「どうして山から出て来たのか」と尋ねた。率子廉は笑って「閑なので遊びにきただけだ」と言い、山の人々への手紙を託した。守澄は帰ってから率子廉が死んだことを知り、その手紙を改めて確かめると、それは率子廉が死んだ日であった。その墓を開いて見ると、杖と履き物だけがあつた。

とうぼ こじ

東坡居士が思うに、

「士ひと(ひとかどの人間)は何かしら持っているものがあつて、それが小さな技であっても、軽々しくは外に出さないものだ。まして至人しじん(最高の脱俗者)であるならなおさらだ。至人はもとよりなれるようなものではなく、至人を識しるのは難しい。王祐が道を得た人ではなかったならば、率牛が異であるのを知ることはできなかつただろう」。

東坡居士はかつて「三槐堂の銘」を作った。そのときに王祐さんかいどう めいはただ単に子孫に余慶を遺しただけの人ではなく、ほとんど道を得た者であろうかと考えた。率子廉のことを知るに及んで、ますますそれは確かであると信じるようになった。

王祐の詩はその全篇を見ることはできなかったが、このことを書いてその曾孫おうの王鞏きやうに送り、王祐の詩を求めてその家集を補うようにし、あるいは石に刻んで紫虚閣の上に置いてもらいたいと思う。

(王鞏の依頼で「三槐堂の銘」を書いたことは第5章321ページで見た。そこには王鞏の曾祖父の王祐が子孫の繁栄を願って庭に3本の槐えんじゆを植えたことが書かれていた。この「率子廉伝」は王祐のエピソードを伝える。これは蘇軾こが湖州知事であったときに執筆されたものであると推測されているが、蘇軾が「東坡居士」を号するのはそれより後の黄州にきてからであるから、後世の人が蘇軾の自称を書き換えたことになる(それは普通によくある)。しかし、王鞏が都への帰還を果たしたこのころの時期に書かれたとしてもよいのかも知れない)

■贈楊者

蘇軾のもとにはいろいろな人が訪ねてきた。そのなかに、鳳翔時代ほうしやうに扶風ふ県の公営の旅館(鳳鳴駅館ほうめいえきかん)ふう(第2章51ページ)で会ったことのある楊者ようきがいた。蘇軾は楊者に会うと、鳳鳴駅館で作った詩を再び贈った。経緯を記した序文がある。

せいしよく

西蜀の楊耆は、二十年ほど前に会ったとき甚だ貧乏であった。いま会うとやはり貧乏である。昔と何が異なるかという、顔がやつれ白髪になったことだけだ。

女性は容貌の美醜にかかわらず富む者は優美であるという。男子は賢であろうが不肖であろうが貧乏であると田舎びてしまうともいう。たまたま時代にうまく合うと造作なく当世風の士となる。

かつて扶風の宿で、夜に外からの歌声を聞いた。はなはだ悲しげであったので、起きて声の主を呼んで尋ねた。すると、その者は、昔は富んでいたがいまは貧乏になってしまったと言った。私は身につまされ、一緒に酒を飲み、詩を作った。

今日は冷たい雨が降り続き、かのときのことがまざまざと思い出される。楊君の困窮はもとのままだ。そして私も楊君と同じ故郷を離れた旅の身である。よって、そのときの詩をまたここに書いて楊君に贈る。

小さなこの村にも、

わずかばかりの雨が秋の涼しさを送ってくれたこのときに、

旅の宿では、

夜長に愁いてずっと嘆き続ける人がいる。

眠れぬままに、馬がまぐさを食らうのをただ見つめていると、

虫が悲しげに歌い、それにまた虫が応える。

天候はこれからは寒くなり、

実らなかった穂は畦に横たわるようになるだろう。

歳が暮れようとするが、

はた お
機織り機は糸がないためにおなしく壁に立てかけたたままとなるのだろうか。

君にもう一杯の酒を勧める。

しばしここで眠ろうではないか。

人間界の貧富など、

どうせ大海の波のようにあてどないものなのだ。

■与楊耆秀才釀錢帖

蘇軾は楊耆のために一筆記し、それを持って黄州の知人のもとをまわるよういった。

楊耆秀才は学問を志したが、まだ成就するに至らず、旅の囊の中は空っぽである。潘原君、郭遵君、公頤君、何聖可君、韓君がそれぞれ五百銭を出してくれたらと思うのだが、どうだろうか。

(潘原、郭遵、何聖可の名はすでに見ているが公頤は不詳で、韓はこの後の詩に見える韓毅甫であろう (本章474ページ))

■和秦太虚梅花

げんぼう
元豊7 (1084) 年、蘇軾 49 歳。黄州で4回目の正月を迎え、黄州暮らしは足掛け5年となった。いつものように1月20日に潘・郭・古の諸氏

と郊外に出て梅を見たのかどうか、伝わる詩がないので、恐らくは行かなかったのだろう。これは秦観（字は太虚）（本章105ページなど）から送られてきた梅の詩に和したもの。

宋代そうだいに入ってから、梅を詠んでの絶唱といえば、

西湖せいこの孤山こざんに棲み、骨までも枯れているといわれた林逋りんぼの詩。

貴君の詩はそれをも圧倒しようか。

東坡先生とうぼの心はすでに火の消えた灰となっていたはずなのに、

貴君の詩の愛すべきによって、

花に悩まされ、あれやこれやと乱れ初め、

黄昏時を待って馬にまたがることとなった。

残りの雪は消えるのが遅く、月の出るのは早く、

川べりの千本の梅の樹は春の暗がりのなかにある。

竹の向こうに一枝だけ斜めに見えるのはさらによ好い。

西湖の孤山といえば、かつて酔って眠ったところ、

山の梅は、美女スカートの裾に点々と散ったのを払わずにいるかのようであった。

あれから万里の彼方に放逐された私のもとにも春はきてくれたけれど、

孤山の梅は人を見送ること十年、

その繰り返しのうちに老いたであろうか。

去年の梅の花が開いたころは私は病気がちで、

今年は花と向かい合うことができたものの花は早々に去ってしまう。

雨と風が春を巻き取って帰ってしまうのか……

梅の香りもそっくり拾い集めて天へと持ち去って行く。

(林逋は蘇軾より 70 年前に生まれた人で、孤山に隠棲し、清らかな詩を詠んだ。1 年前のこの時期は眼病を患うなど蘇軾は不調であった (本章 352 ページ))

■再和潜師

前年から黄州に滞在していた参寥師さんりょう (道潜どうせん) (本章 372 ページなど) が秦観しんかん
(字は太虚あざな たいきょ) の梅に詩に和したので、蘇軾がさらにそれに和した。

(この詩も前の詩と同様に、杭州の寒梅こうを念頭に置いて詠んでいる (参寥はそちらの人である)。なお、参寥も趙吉ちょうきち ちょうひんし (趙貧子、本章 422 ページ) も黄州に長く滞在したが、蘇軾のところには居候したわけではなく、参寥は仏教の、趙吉は道教の寺院にそれぞれ寄寓したようだ)

造化たひの工(天帝)は、

枯れたもろもろを蘇らせてやろうとまだ決めていないうちに、

まず寒梅に向かって合図を送る。

江南こうなんの地には雪がなく、

春のうちから早くも熱の毒気が生じてしまうので、

氷のような梅の花で熱の悩ましさを除こうとするのだろうか。

風が清らかで月が落ちて人の姿のないときに、

早朝の鐘とともに装いを整えて、

梅の花は開く。

そこに二羽の白鷺が飛びきて、

羽と花が清らかな好さを競い合う。

呉山道人(参寥)の心は水に似て静寂で、

眼には掃うべき塵もない。

似ても似つかぬ多情なる身の私に妙語をもって寄せるのは、

いかばかりの縦横の気を具えているのかと試めすのであろう。

東坡居士の習気(俗気)は除いても尽きることがなく、

凝りもせずに長々と詩を作ったり乱れた草書を書いたりしている。

長い梅の枝を揺り動かし、落ちてくる花びらを食べてもみようか。

飢えの堪えがたさに天に向かって叫ぶような真似はしないですむように。

(参寥と唱和する詩は概ね仏説を踏まえて難解であることが多い)

■師中庵題名

春のある日の遊びを記した短文。

元豊七年二月一日、東坡居士は徐大正、参寥師と雪堂から歩き、柯氏の池を
通って乾明寺に行き、竹林を見て、乳母の任氏の墓に詣で、茶畑の手入れをし、

さらに趙氏の園に至って梅堂を探り、尚氏の屋敷に行き、老いた枳が竜のように
 曲がりくねっているのを見てから定恵院の僧舎に憩い、任公亭と師中庵で茶を飲
 んだ。かくて後日、酒を携えて春をここに尋ねようと約束した。

(徐大正(字は得之)は先に亡くなった徐大受前知事の弟。この遊びは雪堂からおお
 むね南へと歩んだものだ。柯氏の池、乾明寺、定恵院などの名は先に見ている。黄州
 で乳母の任氏を葬ったことは本章 115 ページで見たが、その墓は乾明寺の近くにあつ
 たことがここから知れる。「枳」は慣例に従って「からたち」としたが、似た別種であ
 るようだ。任公亭と師中庵は郷里の大先輩である任伋(字は師中)に所縁の場所(本
 章 180 ページ)。「後日の約束」は 1 カ月後に果たされる)

■代滕甫弁謗乞郡状

ここまでその名を挙げることはなかったが、黄州にいる間に頻繁に手紙
 のやりとりをした相手に滕甫(字は達道)がいた。蘇軾より 16 歳年長
 で、朝廷の要職にあつたが、やはり改革を批判して都から放逐された。
 この前の年の 11 月に都への帰還が叶い、岐亭のあたりを通って都に行
 くとき聞いて蘇軾は出向いたが、わずかの差で会えなかった。滕甫が都に
 戻ると、滕甫を嫌う人々が画策して、たまたまその親類に罪人が出たこ
 とと結び付けて、遠く筠州に流してしまおうとした(筠州には蘇轍が
 いる)。蘇軾は滕甫のために無実の弁明をする文章を代筆した。

わたし

臣が聞いておりますには、賢人であろうが愚人であろうが、人情として、天を恐れ父の厳しさを憚るものであると。しかし、痛み苦しむときは父を呼び、窮まり差し迫ったときには天に叫びます。身の内より情が発して、言葉を選ぶことなく呼んだり叫んだりするのであって、憚り畏れる心がなくなったわけではありません。

わたし

いま臣が患いますのは痛み苦しむのにとどまらず、憂うのは窮まり差し迫るよりもなほだしいものがあります。君父くんふに呼び叫なばずして何人なんびとのところところに走って赴いたらよろしいのでしょうか。伏して聖慈せいじを望み、少しく憐察れんさつを加えていただきたく思ふのであります。

わたし

臣はもとより學術がなく、また材能ありません。ただ忠義の心があることだけは生れてより自負するものであります。

昔しゆんじゆう、(春秋時代の)季孫きそんはこのように言いました。「君主に礼ある者を見たなら、孝子が父母を養うようにその者に仕えよ。君主に礼のない者を見たなら、鷹はやぶさや鷲じゆが雀を追うようにその者を誅殺せよ」

わたし

臣は不肖ではありますが、この言葉をきちんと踏まえるようにしてまいりました。道みち(正しく普遍的な道徳)をひたすらに信じて真直ぐに進み、他の人々も己のようになっていると考えておりました。すでに聖主せいしゅに深く知っていたくことを蒙りましてからは、他の人々との交わりを結ぶようなことは考えませんでした。そのためか、愚かしい考えがうごめいて、ついには仇怨を積むこととなってしまいました。ひとたびお傍そばから離れ去ってすでに十二年、(私を誹謗する)言辭ごんじが、水が潤し浸すようにあまねく行き渡ったのでした。臣がひそかに国に反する者と一党となり、罪人を見逃していると

わたし

言う者さえ出るありさまとなりました。もしもその通りであるのならば、死刑となってもその罪を塞ぐことはできません。

伏して心の内で思いますに、漢の宣帝は英主でありましたが、ほんの言葉の端を耳にしただけで楊惲を誅殺してしまいました。唐の太宗は唐朝を興した帝王でありましたが、たった一つの詞を耳にしただけで劉洎をやはり誅殺してしまいました。古より忠臣、烈士が時運に遇って君主に仕えることができて、しかも禍を免れた者は果たしてどれほどの数がいたのでしょうか。

臣だけは皇帝陛下が一部始終を照察してくださり、愛惜し保全することをこれまで蒙ってまいりました。これはすなわち、陛下の聖なる度量が宣帝、太宗を超えておられ、なおかつ臣が時運に出会いましたのは古からかつてないものであったからで、日月が上にある限りは、何ら憂い虞ることはないのであります。

ただ気になりますのは、世には臣を憎む者が大勢いて、臣が天より授かりました命が至って薄いことであります。積もる毀りは骨をも消滅させ、巧みな言葉は金をもとろかすものであり、三人が同じことを言い募るなら、いかに落ち着いた人でも驚き立つといえます。それらしいことを人々が言い続けるなら、時がくれば自ずと真実が明らかになるはずではありまして、陛下におかれましてもあるいは赦し難く思われるやも知れません。ここをもって今はまだ何事も無い間に、少しばかり危惧する詞を申し述べる次第です。

晋朝の王導は王敦の従弟で、王敦は国に反逆しましたが、王導は元臣のまま害われることはありませんでした。唐朝の崔造は源休の甥で、源休は国に反逆しま

したが、崔造は宰相のまま廢されることはありませんでした。臣^{わたし}と国に反するとされている者との関係は、路ですれ違う者と変わらぬ程度の淡いものでしかありません。それでありながら寛大な朝廷において、臣^{わたし}にとって終身の累^{わざら}いとなってしまうのは悲しいことであります。

およそ仕官した士で、貴い位の人と少しでも親類関係があり、あるは半面識でもありましたならば、あちこちで特別に優遇され、人もまた批判がましいことは言いません。臣^{わたし}は陛下の中興の治の初めに知っていただきましたが、衆人の知遇に遇よりも前に、臣^{わたし}は容赦なく毀られ、恣^{そし}に踏み潰されてしまい、もはや何かを申し上げるすべもありません。臣^{わたし}は涕泣して自ら傷むばかりであります。

いま臣^{わたし}はすでに善地に安んじ、清班^{せいはん}を忝うしています(遠く追放されたことを逆にいっている)。敢えてこれよりほかに僥倖を求めるものではありませんし、さらに登用していただくことを思うものでもありません。ただこれまでの患難の後で積もる憂いが心を傷め、風波の間を移動する間に、怖れる思いが疾^{やま}いと成ってしまいましたので、敢えて陛下^{わたし}が臣の余生が幾ばくでもないことを憫まれて、かつての特別な御恩をさら究めていただきますようお願い願うのであります。もしも臣^{わたし}を淮浙^{わいせつ}の間の小郡に移していただきましたなら、少しばかり先祖の墓所の近くになり、漸^{ようよ}う退隱を謀れることとなりましょう。さらにいつの日にか、枯れ朽ちた余りの身で、天日の表^{てんじつ}(皇帝の顔)を仰ぎ見ることができましたなら、その後は田野に退き隠れ、自ら老臣と称して、かつての出会いの始終を語り、もって郷里の父老に誇るつもりです。区々たる願いはそれで永久に終わるものであります。伏して陛下に願います。この志を憐れ

み、その愚を察して、罪を赦されますように。

わたし 臣は恩に感じ罪を知り、いせつへいせい 激切屏管の至りであります。

(この文章は人のために書いたものでありながらも、散文の名手である唐宋八大家のとうそうはちたいか名品を集めた『唐宋八家文読本』に納められているのは、皇帝に提出する文章の手本とされたからだろう。皇帝に判断の変更を乞うので、非礼にならぬよう細心の注意を払わなければならない。一読して知れるように、蘇轍が兄のために皇帝に差し出した文章(第5章404ページ)と似ている。この弁明書が皇帝の心を動かしのだろうか、5月23日に滕甫は筠州よりもっと都に近いこ湖州知事に改めて任命された。湖州といえば蘇軾も一時期そこの知事となった風光明媚なよい土地である。なお、蘇軾は滕甫のために以前にも皇帝に差し出す文章を代筆しているので、滕甫は作文が得意ではなかったのかも知れない。蘇軾と滕甫の間では頻繁に手紙が往き来しながらも詩の贈答はないようなので、滕甫は詩も得意ではなかったのかも知れない(とはいえ科挙に合格した人であるから並みの人よりは詩文に長じていたはずである))。

■次韻曹九章見贈

そうきゅうしょう あざな えん ぼ 曹九章(字は演甫)(本章332ページ)から詩が送られてきたのでそれに次韻した。

きよはくぎく 昔、蘧伯玉が五十歳になったとき、

「我が四十九年は間違っていた」といった――

私はこの人を師と仰ぎたい。

五十本ある占いの竹の棒を、
すでに四十九本まで使ってしまった——

我が命運は窮まったのか。

そんな私であるのに、

貴君一人だけがともに学びたいといってくれるのなら、

一切出し惜しみすることはない。

しかし、いまの私がしていることといったら、

剣を売り牛を買って老いるだけ。

さらに疑いようもなく確実なのは、

銭を得たなら酒を買うこと。

いつの日か鶏や豚を煮て一緒に村の祭りを楽しむなら、

貴君と千篇の詩を唱和するであろう。

(蘧伯玉は孔子と同じ時代の人)

■書淵明帰去来序

前の詩で「剣を売り牛を買って老いる」と詠んだ。これは、本来は、戦争が終わった後ないしは戦乱を避けて、武器を手放して平和に暮らすことをいうが、蘇軾は公の仕事を放棄して田園に生きる意に転用している。そうした生き方の先達はむろん陶淵明である。黄州において陶淵明につ

いて書いた短文をさら三篇まとめて見ておこう。

世俗にこのような笑い話がある。

ある書生(科挙の受験勉強をしている者)が役所の庫に入ったところ、銭が積んであるのを見てそれとはわからずにいた。ある人が不思議に思って、「まさかあれが銭であるのがおわかりにならなかったのですか」と尋ねると、書生は言った。「銭であろうかとは思ったのですが、銭というものは紙にちんまり包んであるものであって、ああもどっさり積んであるのが不思議で、違うものに違いないと思ひまして」。(書生といものは貧乏で、せいぜい代筆などでわずかな謝礼を稼ぐくらいであるから、たくさん銭を見たことがないというオチ)

私はたまたま陶淵明の『^{ききょらい}歸去来の辞』を読んだところ、そこに「幼稚盈室、瓶無儲粟(子供たちは部屋にどっさりいるのに、^{かめ}瓶には米の蓄えがない)」とあった。これによって、なるほど世俗の笑い話は実際にあるものなのだと知った。瓶に米を蓄えたところではなはだわずかなものでしかない。陶淵明は普段から瓶の中のわずかな米しか見ていなかったのだ。

^{ごかん}後漢の^ぼ馬皇后の女官は、馬皇后が着ている^{たいれん}大練(粗い絹の織物、馬皇后は日頃から質素な暮らしを心がけていた)を見て、変なものを身に付けていると思った。晋の^{しん}患帝は^{けい}飢饉で民衆が餓死したと聞くと、「米がないのなら、肉の^{スープ}糜を食べればよいだろうに」と言った。

よくよく考えれば、これらはみな同じ理屈からきているのである。

ついてながら、おうようしゅう 欧陽脩はこのようなことを言っていた。

「とう もうちょう (唐)の孟郊の詩に『びん 白髮辺有糸、不堪織寒衣(鬢の辺りには糸(白い毛)があるけれど、冬の衣を織るほどではない)』とあるが、たとえ織れたところで、どれほどのものになるうか」

以上、もの好きな人の笑いに供するまで。

(貧乏に関係するいくつかの話と並べ、陶淵明も笑いの種にしているのだが、この当時、蘇軾も同様に暮らし向きで、強い親近感を持ったのだろう。晋の恵帝の話は、マリー・アントワネットが民衆が餓えていると聞いて、「パンがなければケーキを食べればいいじゃないの」と言って、民衆の怒りの火に油を注いでフランス革命が勃発する要因となったという話と同様、かなり眉唾ものである)

■題淵明詩

これはとうえんめい 陶淵明の詩に添えたごく短い文章。それを味わうために、蘇軾が引いているもとの詩と、関連する『ろんご 論語』の文章を先に見ておこう。陶淵明の詩は、「ききよらい 歸去來の辞」を書いて最終的に隱棲するよりも前の39歳の作。『論語』に記されている事柄は孔子が61歳の頃のこととされる。

きう 陶淵明:「癸卯の歳、春の始め、田舎で懷古する」其の二

先師有遺訓、(孔子が遺した教えに)

憂道不憂貧。(「道を会得できないことを憂い、貧乏であることを憂うな」とある)

瞻望邈難逮、(その教えは遥かに仰ぎ見るだけでとても及ばないのだが)

軫欲志長勤。(長く努力しようとだけは思っている)

秉耒歛時務、(鋤をとって春の農作業を歎び)

解顏勸農人。(顔をほころばせて農民に仕事を勧める)

平疇交遠風、(平らな田畑に遠くからの風が吹ききて)

良苗亦懷新。(良い苗から新しい芽が育まれる)

雖未量歲功、(まだ今年の稔りのほどは量れないけれど)

即事多所欣。(目の前のことがたくさん欣びとなる)

耕種有時息、(耕したり植えたりしつつ時に休息するのだが)

行者無問津。(そこに渡し場を問う旅人は現れない)

日入相与歸、(日が落ちると人々とともに帰り)

壺漿勞近隣。(酒壺をもって隣人を労う)

長吟掩柴門、(長く吟じて柴の戸を閉ざすと)

聊為隴畝民。(いささか田畑に生きる民になれるのだ)

(この詩の途中にある「津しん(渡し場)を問う行者たびびと」は次の『論語』の一節に基づく)

ちようそ けつでい
長沮ちようそと桀溺けつでいが並んで耕していた。孔子がそこを通りかかり、(弟子の)しる しん
子路に津しる しん(渡し場)を尋ねさせた。

長沮は言った。

「あの手綱を持つ者は誰かね」

子路は言った。

こうきゅう
「孔丘です」

ろ
「魯国の孔丘かね」

「そうです」

「あれなら津を知っておろう」

子路は桀溺に尋ねた。

桀溺は言った。

「そなたは誰かね」

ちゆうゆ
「仲由です」

「魯国の孔丘の弟子かね」

「そうです」

「いま天下はどことも洪水のようになっている。誰がそれを変えられるというのかね。悪人を避けるようなあの人物というよりも、世を避ける人物といった方がよいのではないのかな」

そう言って土をかぶせる仕事をやめなかった。

子路は孔子に告げた。孔子は憮然として言った。

「鳥や獣とは一緒に群をなすことはできない。私は世の人と一緒にいるのでなくて、誰とともによろずるのか。天下に道があるのなら、私は敢えて変えようとはしないのだ」

（これは『論語』の中でも特に有名な一節である。孔子は長沮、桀溺という2人の隠者に出会い、隠者は、天下を変えようとしているくらいの人なら、人に渡し場を尋ねなければならぬほどの無知であるはずがないと、渡し場への道を教えなかった。孔

子は、隱者の生き方は鳥や獣と同じであると強く否定した。長沮、桀溺は理想の隠者とされ、並んで耕す「耦耕」^{ぐうこう}は、世が乱れたときに賢者が採る生き方を象徴する語となった。先の陶淵明の詩では、陶淵明は長沮、桀溺のように農地を耕しつつも、まだ完全に隠棲したわけではなく、津を問う者（孔子）が来たなら、それに従いたいという思いを含ませているのだろう)

陶淵明の詩にいう。

平疇返遠風、^{へいちゆう えんぷう かえ}（平疇 遠風 返し）

良苗亦懷新。^{りやうびゆう また しん いた}（良苗 亦 新を懐く）

^{いにしへ}古の並んで耕し（耦耕）、杖を突き立てて草を刈る隠者でなければこの語をいうことはできない。

私のように代々の農民でなければ、この語の妙所^しを識ることはできない。

（東^{あか}の坡を耕す蘇軾は代々の農民であると堂々といっている）

■書淵明義農去我久詩

^{とうえんめい}陶淵明の作品を読みたいと思ったなら、現代のわれわれなら現存する全作品をネットで容易に閲覧することもできる。蘇軾にとってはたやすいことではなかった。岐亭^{きてい}の胡定之^{こていし}が万卷の書物を所蔵していて気安く貸

してくれるということが本章 119 ページにあったが、陶淵明の作品集を手にするにはいささか労力を要したということがこの短文に記されている。

私は江州の東林寺に陶淵明の詩集があると聞き、人を遣わしてこれを求めようとした。すると、江州の李知事がすくりに一部を送ってくれた。字が大きく、紙が厚く、非常に喜ぶべきものである。

体調が佳くないときに、いつもこれを手に取って読むのだが、一篇だけにしておく。読み尽くしてしまったなら、その後では自分の思いを慰めるものがなくなってしまうのを恐れるからである。

(これは陶淵明の詩の「義農去我久(義農 我を去ること久し)」の句に書き添えたもの。義農とは伝説上の古代の帝王で、人間に農業を教えたとされる。江州の東林寺は廬山にある有名な寺)

(本を得るのが難しかったということでは、恩人の欧陽脩は若い頃に非常に苦勞している。そのことを記した文章を参考までにここに掲げる。)

欧陽脩:「記日本韓文後」(日本韓文の後に記す)

私は年少のころは漢東(随州)に住んでいた(欧陽脩は4歳で父を喪い、随州の叔父に養われ、母から文字を教わった)。漢東はひどい田舎で、学者はいないし、我が家は貧乏で、蔵書はなかった。州の南に豪族の李家があり、その息子の李堯輔はなかなか学問を好み、

子供のころよくその家に遊びに行った。一間に壊れた筐はこが置いてあり、古い書物を貯えていた。開けてみると、唐の時代の『昌黎先生文集』六卷しやうれい（韓愈かん ゆの文集）があった。脱落があったり入れ違ちがいがあったりで、順序が乱れていた。李氏に乞こうてこれを持って帰って読んだ。その言葉しんごうが深厚ゆうはくで雄博ゆうはくであるのを見たものの、私はまだ幼く、その意味を十分に知ることができなかった。ただそれが浩然こうぜんとして涯はてしなく、愛すべきであるのを見てとっただけであった。

そのころは、天下の学問をする者は、楊億ようおくや劉筠りゅういんの作風をいまの時代の文であると、それを上手うまに書く者が科挙に合格し、名声をほしいままにし、世間よこに対して誇り、栄さかえを得ていた。韓愈かん ゆの文章について言う者は一人もいなかった。

私は科挙を受け、都みやこの礼部らいぶで行われる詩賦の試験に挑もうとした。十七歳のときに、州で行われた一次試験を受けたものの落ちてしまった。家にあった韓愈の文集を手にとって読み、大きく溜め息をついて、「学ぶ者は必ずこれを目標にすべきである」と考え、いまの時代の人がどうして韓愈のことをいわないのか不思議に思った。しかし、我が身を顧みると、まだ韓愈の文章を学んでいる余裕はないのだった。何かにつけ自分独りで次のように思った。科挙に合格して俸禄を得て親を養うのだ、もし俸禄を得られるようになったならば、きっと韓愈の文を読むことに力を尽し、本来の志を遂げよう。

その七年後に、科挙の進士科に及第らくきやうし、洛陽らくきやうで官職に就つとむと、そこには尹洙いんしゆらがいて、一緒に古文こぶん（韓愈が提唱した復古調の、実は新しい文体）を作るようになった。私は所蔵する『昌黎先生文集』を出して補綴し、ほかの人の家にある古い本を求めて校定した。その後、天下の学ぶ者も次第しだいに古いにしへに赴おもむくようになり、韓愈の文体が世に行われるようになった。それ

から三十余年、韓愈の文でなければ学ばないほどにまでなった。実に盛んになったのである。

道は遠く昔に行われて近い時代に滞ることがあり、あるいは、昔はゆるがせにされて今は貴ばれることがあるのは、世間の人の好き嫌いによってそのようになるだけではなく、しかるべき理由があるのだろう。昔、孔子や孟子こうし もうしの学問がすたれた時代もあったが、しかしそれは千世、万世にわたる師法である。韓愈の文も二百年にわたって顧みられることがなかったのだが、いまでは大いに行われている。これは好き嫌いが上下するだけによることではないのだ。時間が経つことでいよいよそれが磨滅すべからざるものであることが明らかになったのであって、しばし蔽われていたといえどもついに無窮に輝くのは、まさしくそれが正しいものであるからなのだ。

私が初めて韓愈の文を知ったのは、埋もれ棄てられていたときに当たる。私はもとより時代の流行を追って地位や利益を得ることなどは取るに足りないと考えていた。韓愈の文を学ぶのは、それで名誉を得たり地位を得たりするためのものではない。長くこれを志していたのである。私が官に仕えて昇進することを喜びとはせず、退くのも恐れないのは、志が最初から定まっていて、学ぶものがきちんとしているからである。

私が蔵する韓愈の文集はもとは蜀しよくの地から出たものだ。文字は今世の俗な本よりも精緻であるが、脱漏や誤謬が非常に多い。この三十年間に、善い本を持つ人があると聞くと、必ず求めて改正した。ただし最後の巻が欠けていて足りないのを、今もって補わずにいる。それは原本を変えてしまうことを憚るからだ。私の家には万卷の書物があるが、この『昌黎先生文集』ふるだけが古いままのものである。

ああ、韓愈の文の道は万世にわたって尊ばれるものであり、天下に伝えて保つべきものである。私はこの本が前々から家にあることをもって特に大切に思うのである。）

■上巳日与二三子携酒出遊随所見輒作数句明日集之為詩故詞無倫次

先に参寥さんりょう師、徐大正じょたいせい（徐大受じょたいじゆの弟）と遊び、再び同じように春を尋ねようと約束していた（本章458ページ）。3月3日、催閑さいかん（字は成老あざな）も加えて酒を携えてあちこち見て回り、その先々で数句の詩を作り、翌日に一つにまとめた。必ずしも時間順に並んではないと詩題で断っている。

空は一面の薄い雲、

それでも雨にはならないので、

暁から杖をついて、千の花の乱れる土手を歩く。

柯か氏の丘の林の奥で独り笑う海棠、

その侮ることのできない姿をかつて私は詩に詠んだ。

卯酒ぼうしゅ（朝酒）を三杯もひっかければ人はたちまち酔い、

竹林に棲む老人に請うて枕を借りると、

春の睡りはすぐに正午になる。

この主人は書物などは読まないはずなのに、

誰に教わったのか、

昔の風流人の故事に倣って門を閉ざして私を留めようとする。

のき からたち どうかかえ
 簷から出る 枳の株は十囲もあり、

その影こそが 眞実を写すのだろう、壁に千の竜が舞っている。

竹林の外には 東の坡に作った 塘が通じ、

今では幾尺もの深さになっていて、

ときに酒を携えてそこで農工の苦を労うことがある。

流れる川のあたりを 尋ねようと 東門の外を行くと、

壊れた垣根、古い堀のあたりに、

誰にも世話されずに下に 臥して 桃李が開き、

鷓鴣が向き合って格好のよさを競っている。

春の晴れ着が泥に汚れるのも構わずに、

道端に草を敷いて勢い付けに酒樽をまた開く。

再び衣服をまくり上げ、

春草亭のあたりを通り、

門を叩いて 韓家(韓穀甫)の農地に入る。

井戸の 轆轤の縄は切れ、底には深い 碧の水がある。

鞦韆が垂れ下がっているので、

これに乗る女性はどこにいるのだろうかと、

水を請うふりをして門より声をかけてみるが 応じる声はなく、

小さな桃の枝が 簾の前あるだけだ。

南に行って古い見晴らし台に上り、

ちようこう

長江の断岸に臨むと、

雪をはらんだ雲が空に翻って、

上が下やら下が上やら、くらくらとする。

知り合いが我等に羹^{スープ}を振る舞ってくれるが、

誰のためにいつ煮たものなのか、

煙は消えて火は冷えてしまっている。

荒れた急な道を助け合って下ると、

花を隔てて女性たちが楽しそうに話している。

町のはずれの僧房に立ち寄り、

落ち行く日を追うようにして残った酒を片付ける。

主人が足を洗って眠るよう勧めてくれたので、

床に倒れ込んだが最後、

鐘の音も耳に入らぬままに朝を迎える。

なんと門の外は一尺の深さの泥で、

夜中にひどい雨が降ったのを初めて知る。

普段から私は、行く先々で何一つとして成し遂げたものはないのだが、

今回の遊びだけはなぜか天も阻むことがなかった。

これはまことに我が友が決して窮迫することがないお蔭であるのだろう。

友とすべき君子を神が与えてくれているのだ。

(注意深い読者ならば、ここに詠まれた鞞^{フランコ}を以前に見ていることを思い出すであろう)

う)

■記游定恵院

上の詩で見た遊びを記した文章もある。詩と文とで違うところがあるのは、上の詩題に「りんじな倫次無し」とある所以なのであろう。

じょうえいん黄州の定恵院の東の小さな山の上に、一株の海棠があり、よく繁茂している。毎年、盛んに開くときに、必ず友人と連れ立って酒を置き、花のもとで酔うことすでに五回となった。今年さんりょうは参寥師および二、三の友と訪れた。

あるじ園の主はすでに替わっていた。主は市井しせいの人であるが、私のために海棠の木を大切にしてくれている。この山には老いたからたち枳の木がたくさんあり、樹皮がごわごわとし、きんみく筋脈が露わで老人の首のようである。花は白くて円く、大きなたま珠が重なり合うように咲き、香りもたずまいも非凡である。この木は人に喜ばれるものではなく、ややもすると伐られてしまうのだが、主人はやはり私のために伐らずにいてくれている。

ここで飲んでから、しやう尚氏の屋敷に行って休憩した。尚氏もまた市井の人である。居処きょじょは清潔でよく整い、呉越ごえつのあたりの隱棲者の住まいに似て、竹林も花圃もどれも喜ぶべきものがある。酔ってしょうばんかく小板閣の上に臥せた。

ようやく目覚めたころに、一行中のさいかん らい崔閑が雷氏の琴を弾くのそうそうを聞いた。錚錚として暁の月の下を悲しげに吹く風のように、人間世界にいる気がしなかった。

はな
 宗の光が泛び出る。

香る霧(春の霞)^{もやもか}が空濛と立ちこめ、

月が回廊のあたりを廻る。

心配なのは、

夜の深さに花が眠ってしまっていること。

ことさらに高く蠟燭^{ろうそく}を焼いて、

紅^{よそおい}の粧を照らし出すとしよう。

■謝量移汝州表

しんそう
 神宗皇帝が蘇軾を赦して都に呼ぼうとしているという話は何度か噂として流れたようだが、この年の1月25日、皇帝は蘇軾^{けんこうすい ぶ いんがいうらうじょ}を検校水部員外郎汝州^{しゅうだんれんふくし りょうい}団練副使に量移するとの命令書に署名した。蘇軾の罪が確定したときに与えられた肩書(本章1ページ)と比べると地名だけが異なっている。

「量移」とは、遠方に流されていた官員が、罪を赦される前段階として都に近いところに移動させられることをいう。この報せが蘇軾のもとに届いたのは、3月5日から3月8日の間であったようだ。先に見た「定惠院に遊ぶ記」にはこれから黄州を離れるような気配は全くなく、後で見ると3月9日にすでに黄州を離れる用意が始まっている。皇帝の命令書が届くと、蘇軾はすぐに感謝状を書いて朝廷に提出した。

わたししよく

臣軾は申し上げます。

わたし じょしゅうだんれんふくしほんしゅうあんちふとくせんしよこうじ

臣に「汝州団練副使本州安置不得僉書公事」を特に授けるとの正月二十五日

こうめい わたし うつ
の誥命を、臣は伏して奉ります。都にやや近い地に遷して、永久に棄るものではないということをお示くださいました。我が罪は万死に当たるとすでに甘んじておりましたので、この御恩は実に生き返るよりも大きなものがあります。謹んで訓辞に服し、ただ感涕あるばかりです。

わたししよく せいこうせいきょうとんしよとんしよ

臣軾、誠惶誠恐頓首頓首。(ひたすら恐縮する意)

おも わたし
伏して念いますに、臣は先に実態を過ぎた地位、他の人を超えた俸禄を頂戴しておりました。兄弟ともに進士合格を竊み取りましたところ、衣冠(官僚)はこれは盛事であるとして、たちまち館職を頂戴し、都を出て諸郡を治めることとなりました。しかし、わずかな善いこともなく、記録すべきことは毛筋ほどもなく、重罪を蒙って、まさ
まさか
に処刑の鉞を我が血で濡らすべきに至りました。

わたし
有り難い思し召しを蒙りましたのは(死罪にならずにすんだことをいう)、臣の平生のあり方からして愧じるばかりでありました。一人我が影を憐れみ、川のほとりに我が命を寄せたのであります。我が魂は驚き入ったまま定まらず、夢の中でも常に縄で縛られておりました。人間でないほどまでに憔悴し、心を失うまでに惑い狂い、妻や子はひそかに冷笑し、親類も友人も交わりを絶つに至りました。毎年病気にかかり、人はすでに臣は死んだと言い伝えました。飢えと寒さに攻められ、臣はこの先も生きるのを嫌いました。

草むらに捨てられた賤しい微々たるこの存在が、まさか朝廷の記録簿になお記

載されていて、痛恨の苦しみを開いて、また用いて試してみるなどということがあろうとは思ってもみませんでした。

これは皇帝陛下の「湯徳日新、堯仁天覆」(古代の聖天子のように日々に新たに天を覆うばかりに広がる仁徳)に遇うものであると伏して感じるものであります。いま皇帝陛下は新たに廟を建てられて歴代皇帝を祀られ、官制を改正して今後の範となる型を作られ、百の眠っていたものが次々に興り、多くの才能はある者が集まって官位を授かり、共に千年に一度の聖世との出会いを欣んでおります。そこに一人の男が顔を覆って天下の隅で泣いているのを憐れ難く思われて、一滴の水を枯れた草木に注がれたのでありましょうか。

臣の身を顧みますに、死をもって御恩に酬いようとしてもその方途はなく、いま身を殺しても何の益もありません。天に向かって我が思いを言おうとしても、口に出すならなお我が身を苦しめることになりましょう。ただこのような思っだけはありますので、いつの日にか果たしたいと思います。

臣、無任。(歓喜に耐えないの意味)

(このときの量移の命令について『西塘集 耆旧統聞』という随筆に、次のような話が記録されている。

蘇軾が黄州に謫され元豊年間の末に、汝州団練副使に移された制詞に云うには「蘇軾

は謫居すること久しく、咎を念うことすてに深い。人の才能は実に得難いものであるから、

終身これを棄てたままにしておくのは忍ぶことができない」とあり、蘇軾のこの部分に非常

に嘆服し、きっと王震が起草した詞であろうと考えた。元祐年間の初めに蘇軾が朝廷に入ると、王震と同僚になった。そのとき王震の詩に和した蘇軾の詩に次の句があるのは量移の命令を受けたときのことを詠み込んだものであろう。

清篇帯月来霜夜、(清篇が月を帯びて霜の夜に来ると)

妙語先春発病顔。(その妙語は春に先んじて病いの顔を発いてくれた)

この詩の全体は次の章で見ることになる。『西塘集耆旧続聞』は陳鵠の著作で、陳鵠がいかなる人であるのかは詳しくは知られていないが、蘇軾から 100 年ほど後の人である。従って必ずしも確実な話ではないのも知れない。

ついでながら『西塘集耆旧続聞』には次のような興味深い逸話も記録されている。

朱載上がかつて黄岡県にいたときに、蘇軾は黄州に謫居となった。蘇軾がまだ朱載上のことを知らずにいたころに、ある客人が朱載上の次の詩句を誦した。

官間無一事、(官は間で一事無く)

蝴蝶飛上階。(蝴蝶は上階に飛ぶ)

蘇軾は驚いて言った。

「どの人の作品ですか」

客人が朱載上の作だと答えると、蘇軾は再三称賛し、幽雅の趣を深く得たものだと言った。

後に蘇軾は朱載上と会い、朱載上はその門弟となった。

ある日、朱載上が蘇軾のもとを訪ね、来たことを伝えてもらったのだが、長い時間が過ぎ

ても蘇軾は奥から出てこなかった。さらに待とうとして、しかし倦み疲れ、やはり去ろうとして、また奥に我が姓名の伝えてもらおうと、ようやく蘇軾は出てきて、長く待たせてしまったことを謝り、

「たまたまいささかの日課を勤めているうちに失念してしまいました」

と言った。坐が定まり、ほかの話が終わってから、朱載上は尋ねた。

「先生のおっしゃる日課とはいかなるものでしょうか」

「かんじょ『漢書』の抄録です」

「先生は一度書物を開いたなら、終身忘れることがないと伺っております。手ずから抄録なさる必要があるのでしょうか」

「そうではありません。私は『漢書』を抄録すること三度目となります。最初は一段のことを三文字にしてその題とし、次には二文字にし、今回は一文字にしているところです」

朱載上は膝を進め、

「先生はどのように抄録なさっているのでしょうか。よろしかった教えていただけますでしょうか」

蘇軾は老いた召使に机上にあった一冊を取ってこさせた。朱載上がそれを見ると、その意味がまるでわからなかった。

蘇軾は言った。

「試しにそこにある一字の題をおっしゃってみてください」

朱載上がそうすると、蘇軾はその声に応じてすぐに数百字を誦し、一字の過ちもなかった。

数回同じように繰り返したが、皆同じであった。

朱載上は辞去すると嘆息すること久しく、

「先生は真まことに人間界に降りた仙人のような天才である」

と言った。

前に李定りていの話（本章5ページ）でも見たように、蘇軾の記憶力は尋常ではなかった。だからこそ故事をてんこもりにした詩もたちどころに作れるのである）

■別文甫子弁

「量移りょうい」の命令は朗報とはいえ、手放しで喜べるものではなかった。上に見た感謝状じょうしゅうだんれんふくしに「汝州団練副使」の後ろに「本州安置不得僉書公事ほんしゅうあんちふとくせんしよこうじ」とあり、指定された場所以外のところには住んではいけないし、公の事は何もしてはならないという制約はそのまま、つまり、罪が赦されたわけではなかった。この先、たとえ公職に復帰できたとしても、また同じようなことになってしまう恐れもあった（実際、蘇軾の感謝状が朝廷に届くと、その字句を細かく詮索して蘇軾は何も反省していないと難癖を付ける者がいた）。それはそれとして、蘇軾は汝州に移る準備を大急ぎで進め、黄州の人々に順次別れを告げた。真まっ先に蘇軾の頭に浮かんだのが長江ちやうこうの対岸に住む王齊愈おうせいゆ あぎな ぶん ぼ（字は文甫）とその弟（本章54ページ）で、すぐにこの文章を送った。

私が黄州に到着したのは元豊三年二月一日であった。このとき家族は南京応天なんけいおうてん

府にいて長男の邁^{まい}だけが一緒であった。黄州には旧くからの知り合いは一人もいなかった。

私はしばしば杖をついて長江^{ちやうこう}のほどりに行つては、雲^{なみ}や濤^{はるか}の渺然なる彼方を望み見ていた。このとき長江の南^{おつ}の地に王兄弟がいることなど知りもしなかった。

十日余りして、長い髯^{ひげ}の人がわざわざ立ち寄ってくれた。それが王齊愈^{おうせい}の弟^{おとう}の王齊万^{せいまん}であった。留まって語ること半日に及んだ。

王齊万^{せいまん}がいうには、

「間もなく寒食^{かんしょく}です。ひとまず車湖^{しゃこ}に帰ります」

そこで私は川岸まで送った。弱い風に細かい雨が降り、王齊万^{せいまん}は木の葉のような小舟に乗って長江を横切つて去つて行った。私は夏隩^{かいくび}尾の高い丘に上り、舟が武昌^{ぶしょう}の船着き場に着くのがぼんやりと見えるまで眺め続け、それから還つた。

以来、互いに往き来し、四年の間に百回以上にもなるであろうか。ついには近くに田を買つてそこで老いを送ろうと思つたこともあつた。しかし、それは果たせなかつた。

近ごろ突然、汝州^{じょ}に量移^{りやうい}させられることになり、間もなくここを去る。後にまた会えるとは限らないと思うと、何につけても寂しく感じられ、懐^{おも}いに耐えることができない。

「仏僧は同じ桑の下に三晩宿ることをしない」(執着心が生じるからである)というのは理由があることではなからうか。

元豊七年三月九日。

(この文章を読んでから、黄州に到着したころの詩文にまた立ち戻ると、より情感深く味わうことができるであろう)

■満庭芳

黄州を経たのは1カ月ほど後のこと。この詞には次のような序文がある。

元豊七年四月一日、私は黄州から汝州に行くことになり、雪堂^{せつどう}で近隣の二、三人と送別会をした。たまたま李翔^{りしょう}が江東^{こうとう}から来ていて座中に加わったので、この詞を書いて渡した。

(李翔^{あざな} (字は仲覽^{ちゆうらん}) は楊会^{ようかい}の使者として時折黄州に来ていた。楊会は、蘇軾^{そく}がかつて杭州を去る直前に新知事として赴任してきた人で(第4章192ページ)、このときは興^{こう}国軍の知事をしていた(「軍」は行政単位の一つ)。興国は黄州から長江を数十キロほど下ったところにある(それで「江東」といっている)。李翔が今回来ていたのは、蘇軾が黄州を発つてもしも弟のいる筠州^{いん}に行くのなら途中で興国に寄ってほしいという楊会の希望を伝えるためであり、この詞はそれへの返事となっている)

歸去來兮、(^{とうきんめい}陶淵明は言いました)「^{かえりなんいざ}歸去來兮」)

吾歸何處、(私はどこに帰るのでしょうか)

万里家在岷峨。(家は万里の彼方の岷河^{びんが}、峨眉^{がびさん}山のあたり)

百年強半、(人生は百年、その大半が過ぎてしまい)

来日苦無多。(これから来る日々はさほど多くはありません)

坐見黃州再閏、(黃州で二度の閏月うるうづきを見て)

兒童尽、(子供等はみな)

楚語吳歌。(この地の言葉や歌に慣れました)

山中友、(山中の友は)

鷄豚社酒、(鷄に豚に村の酒を携えて)

相勸老東坡。(老いた東坡居士とうぼ こじに勧めてくれます)

云何。(私は何をいいますか)

当此去、(ここを去って)

人生底事、(人生に何があるのでしょ)

来往如梭。(往も来も梭ひが飛ぶようなもの)

待間看秋風、(秋風が吹くのを看るころには)

洛水清波。(洛陽らくやう(汝州の近く)の川に清らかな波が立っていることでしょう)

好在堂前細柳、(雪堂せつどうの前にあるあのなよなよとした柳は)

忘念我、(きっと私のことを念うでしょうから)

莫翦柔柯。(柔らかな枝をどうか切らないでおいってください)

仍伝語、((楊絵への)言伝は)

江南父老、(長江の南にいる父老(楊絵のこと)よ)

時与曬漁蓑。(漁師の蓑をともに日に乾かしましょう)(共に釣をする＝歓談する意)

(1) この詞の前段にいう「山中の友」とは送別の宴に集まった黄州の人々。人生の困難な時期に親しくした人々との別れは悲しいものがあつたであろう。(2) 愛着の籠った雪堂はんだいりんは潘大臨はんたいに託した。潘大臨はしばしば登場してきた潘丙の兄の子で、先に見た「雪堂の記」(本章241ページ)は潘大臨との問答がもとになって書かれたものであつたので、託す相手として最もふさわしいと思つたのだらう。(3) 蘇軾が去つた後、雪堂は教育の場として使われたようだが、黄州の東の坡おかが蘇軾の詩文を愛する文人墨客が訪れる名所と化すにつれて雪堂は重要な観光資源となつた。これより86年後に東の坡おかを訪れた陸游りくゆうは次のように記している。「朝、東坡とうばに遊ぶ。黄州の城門から東は、岡が高くなつたり低くなつたりしているが、東坡まで来ると、平坦で広く開けた地形で、東の方にやや高くなつた岡がある。三間の構えの家屋があり、亀の頭のように突き出した部屋があつて居士亭こじとよばれている。亭の下に南に面した堂があり、なかなか立派で、四面の壁にはみな雪景色が描いてある。堂のなかには蘇東坡の像が置かれてあり、烏帽子えぼしと紫の裘かわごろもを着け、筇杖きょうじょうを横に構えている。これが雪堂である。堂の東に大きな柳があり、公が手ずから植えられたものといひ伝えている。堂の真南に橋がかかつていて、札に「小橋」と書いてある。「小橋 流水を忘るる莫かれ」の句から名付けられたものである。その下にはもともと小川はないのであるが、雨が降ると、細い流れができる。昔は平たい石を流れの上に敷いていただけにすぎなかったが、近ごろになつて幅を広くして木の橋をかけ、屋根で覆ってしまったので、いささか気分を害してしまう」(岩国秀夫訳『入蜀記』(1986年、平凡社))。雪堂に置かれていた蘇

軾の像は、これぞ蘇東坡というイメージとして定着していったものである（水戸黄門の旅姿のようなものか）。「堂の東の大きな柳」は上の詞にある柳である（本物かどうかはわからない）。東の坡がおか観光地化し、大衆受けするよう「気分を害する」加工が施されたいったことがわかる）

■記張君宜

蘇軾は黄州を去るまでに間に、人々から請われるままに数々のものを書き残した。潘大臨には『赤壁の賦』を書いて渡し、4月6日には安国寺のあんこくじ継連の望みに応じて『黄州安国寺の記』（本章 46 ページ）を作り、4月7日にこの文書を記している。

近世の医者である仇鼎は病気を治療すること当時第一とされた。仇鼎が死んでからはそれを継ぐ者がいないのだが、いま張君宜の能力はほとんど仇鼎に負けないほどである。仇鼎は性格がじゆんしゆく純淑ではなく、世間の人を畏怖させていた。張君宜は心のほどが平安で、人を救うことを専らとしているので、治療の効果は仇鼎を遠く超えるものがある。

元豊七年四月七日。

（蘇軾はサービス精神旺盛であるから、地域の医者に対してご祝儀気分でこのような文章を書いたのだろうか。さらに妓女にもサービスしたというエピソードが、先に見た『春渚紀聞』に記録されている。

蘇東坡先生が黄州にいた間のこと、人々が集まって宴会を開くと、先生は酔った勢いで墨をしたらせて書をしたため、それを惜しむことなく人に与えた。接待に出た妓女にも、扇に書いたり、帯に画を描いてやったりした。

李琪りきという妓女がいて、なかなか賢く、書を読んでよく理解し、先生も李琪の顔を見ると喜ぶのだが、李琪は先生から何も頂くことがなかった。先生が汝州じょに移ることになり、まさに出発しようというときの送別の宴で、酒酣たけなわのときに李琪は觴さかずきを捧げて蘇軾に再拝し、領巾ハンカチを取り出して書を乞い願った。蘇軾は少しばかり李琪を見ていたが、李琪に墨をするよう命じ、墨が濃くすり上がると、先生は筆を執り、大きく書いた。

東坡五歳黄州住、(東坡居士は黄州に住むこと五年)

何事無言及李琪。(どうして李琪について言うことがなかったのか)

ここで筆なげうを擲って手を袖に入れ、座客と笑談した。

人々は先生の書いたものを見て、

「語が平凡に見えます。それに一篇の詩はまだ終わっていません。どうということなのでしょう」

と言い合った。

いよいよ宴会が終わりそうになったときに、李琪がまた挨拶して、続きを願った。先生は大笑いして言った。

「ほとんど忘れて出て行くところだった」

書を継いでこう記した。

恰似西川杜工部、(それはつまり、杜甫が蜀とほしよくにいたときに)

海棠雖好不留詩。(すばらしい海棠があっても詩に詠まなかったのと同じである)

一座の者は喝采し、酔いを尽して散会となった。

杜甫は蜀の地にしばらく滞在して数多くの詩を残したが、蜀の名花である海棠を詠んだものはないという。蘇軾が蜀の人で、こよなく海棠を愛していることを黄州の人々は皆知っていた。だから、この即興の詩は李琪に対する大変な賛辞であると感嘆したのである)

■別黄州

蘇軾はいよいよ黄州を去り、この詩を残した。

痛みかつ傷だらけの老馬であるこの私は、

もはや手綱を付けられての活躍などできるものではない。

それでも君王は馬の亡骸を包むための使い古しの帷とばりをくださった。

同じ木の下に三泊すると去り難い愛着が生じるというのに、

私は五年もの間、黄州にいた。

酒樽の前に置くこの身を、

そのまま保っていることができたのを喜びましょう。

昔のある人は、腸はらわたの内に五千巻の書物が詰まっているといったが、

私の腸はせいぜい米を入れ込んでいるだけだ。

汝州じょの人間は瘤こぶが多いといわれているから、

瘤を隠すような衣を作っておく必要があるだろう。

我が身は江湖こうこ(田舎の地)に投げ捨てられたはしたものの、

終いには失われることはなかった。

これからはもう人のことをあげつらうようなことはいわないでいよう。

((1)「使い古しの帷」とは、昔の名将が、辺境の地で命を落として襤褸布にくるまれてその地に葬られても国のために捧げる命であるから何も悔いはないといった故事に基づく。(2) 汝州の人には瘤が多いとあるが、前に商州しょうの人には瘤が多いという話を見ている(第2章56ページ)。風土病のようなものであるのか、土地への偏見であるのか、同じようなことがいわれていたのだろう)

■過江夜行武昌山聞黄州鼓角

蘇軾は船で黄州を発ち、対岸の武昌ぶしょうに渡った。最後まで別れを惜しんだせいか、すでに夜になっていた。黄州の町から夜風つゆのぶえに乗って太鼓や角笛の音が聞こえ、この詩を詠んだ。

清らかな風が水とともに戯れ、月は山に^{ふく}銜まれようとしている。

この夜に、

私は呉王^{こ おうけん}峴^{ぶしやう}(武昌の山の中の高い峰)の下へと渡りつつある。

よほど情が深いのか、

黄州^{こ かく}の鼓角が、

遠い距離をも辞さずに、私を送って南へとやってきてくれる。

聞えるのは『^{しゅつさい}出塞の曲^{どけ}』(塞を出て敵地に向かう勇壮な曲)、

川の音と雑じり合って、悲壮にして雄健である。

^{と ほ}杜甫は、「国中に戦の角笛の音が響くいま自分はどこに行くのか」と、嘆いた。

ならば、この私は……

^{かわ わに}江の鼉は憤り、竜は愁え、そして私のために曲調が変わる。

私はきっと覚えていよう、

^{かわべり}江辺の枯れかけたあの柳の樹を。

互いにまだ死なずにいられたなら、

真の顔見知りとしてまた逢おうではないか。

いつの年にか小舟に乗って長江を遡ってきたときに、

黄州の人々よ、

またこの曲を吹いて迎えてくれたまえ。

(杜甫は安祿山の乱の余燼がおさまらない時期に、放浪の旅人となって、「我が道はついにどこにゆくのか」と悲壮な句を吐いた。それと比べたら蘇軾の境遇は遙かに穏や

かなものではあるはずなのだが、それでも「江の鼉は憤り、竜は愁え」というように激しい感情の起伏があった。罪が赦されないままに都に近くにいるよりは、完全に政界を離れて東の坡で農民として生きた方がよいのではないかと、きっと思ったことだろう)

■再書贈王文甫

蘇軾は車湖^{しゃこ}の畔^{おか}に住む王齊愈^{おうせいゆ}兄弟のもとに行き、そこで二泊した。車湖を離れるに当たってこの文章を残した。

昨日は大風で、行こうとしてもできなかった。今日は風がなく、行くことはできるのだが、私の意^{こころ}は留まりたいと思っている。

王齊愈は私を行かせたいと思っているのか。王齊愈は私の意^{こころ}に会うように風水を操ることができたりするのか。そうであるのなら、客人を何年でも留めておける準備をいまずくにするべきである。

■自興国往筠宿石田駅南二十五里野人舍

蘇軾は長江を下って弟がいる筠州^{いん}を目指した。そこには別れをなお惜しむ人々が多数同行した。王齊愈^{おうせいゆ}兄弟、潘丙^{はんへい}ら潘一家^{はんかこう}の面々、郭遵^{かくじゆん}、陳慥^{ちんざう}（方山子^{さんし}）、参寥師^{さんりょう}（道潜^{どうせん}）、趙吉^{ちようきち}といった面々である。その全てが官職に就く者ではないいわゆる「異人^{いじん}」揃いであった。「異人」に囲まれた蘇軾こ

そは己を新たにしようと思命にもがいた末の到達点であったのではなからうか。

蘇軾は楊絵の求め（本章 485 ページ）に応じて興国こうこくに行き、楊絵と会って沈酔するまで飲み交わした。本章 427 ページで見たように趙吉はそのまま興国に留まった。一行には楊絵も加わって陸路せきでんで石田せきでん駅せきでんに行き、その南二十五里やじんで野人（土地の農家）の家に宿をとった。

かわ
溪のほとりの青い山は三百量の大きさ。

かる うわぎ
軽い衫うわぎをつけた身を馬に乗せて、

筆をさっとひと抹なすりするように、その前を走る。

よ
山に倚りかかる竹のもとに人家があり、

私の渴きを知って道の横に冷たい水が湧いている。

草鞋は軽く、竹の杖でつく土は軟らかい。

がま おしろ
蒲の薦も松の床も香りよく手触りもよい。

ふうろ
夜深く風露が中庭に満ち、

ただ一匹の螢が明滅するのを見る。

■跋先君書送吳職方引

せきでん ようかい じ こ ご
石田せきでん駅せきでんのあたりで楊絵ようかいは引き返したようで、一行は慈湖じこに行き、そこで吳ご子し上じょうに会った。吳子し上じょうのもとには、蘇軾その父ふの蘇洵そが吳子し上じょうの父ふのた

めに書いた「送別の辞」が遺されていた。蘇軾はそれを見てこの文章を書き添えた。

私の伯父^{そかん}（蘇渙）は（呉子上の父の）呉中復^{こちゅうふく}とともに科挙に合格した。私は呉子上とともに科挙に合格したので、二代にわたる「同年^{どうねん}」となった。互いに深い契りがある。

我が父がまだ家にいたとき、父のことを知る人はほとんどいなかった。呉中復は我が父の文章を携えて都に行き、欧陽脩^{おうようしゅう}に見せた。欧陽脩はそれで初めて我が父のことを知った。

呉中復と欧陽脩は交わりを結ぶことが長く、欧陽脩が夷陵^{いりょう}に流されたときに呉中復に贈った詩に「落筆妙天下」（筆を下せば天下一）の語があった。

私は黄州より汝州に遷るに際して舟で慈湖を過り、呉子上とその弟は我が父のこの文を出して見せてくれた。私は泣いてこれを書いた。

元豊七年四月十四日、蘇軾謹んで記す。

■記參寥童丘答問

慈湖までで一行の大半は帰ったようで、残った陳慥^{ちんざう}（方山子、号は童丘^{りゅうきゅう}）、參寥師^{さんりょう}（道潜^{どうせん}）とともに程氏の草堂を訪れた。程氏とは、才学徳行がありながらも仕官することを求めなかった程師徳^{ていしとく}であろうと推測されている。草堂での楽しい問答を蘇軾は記録した。

慈湖じこには程氏ていの草堂がある。二つの山の間から滝が流れ出て、草堂の後ろに落ちる。それは山に掛かる布、あるいは風の中の雪、あるいは鶴の群れが舞うかのようだ。

参寥さんりょうは草堂の主人に老いをこの地で養うことを乞い、主人はそれを許した。

私が、

「そのときには、お布施集めの発起人として名を連ねるとしましょうか」

と言ったところ、陳慥は、

「施主の筆頭は私ですな」

と言ったので、参寥は首を振り、

「まあ、この滝を一口で呑み干された後で、そしていただきますでしょうか」

と言った。陳慥はよい切り返しができずに黙ってしまった。

■岐亭五首

4月23日、蘇軾きゆうこうは九江に近い瑞昌ずいしやう県に到着し、陳慥ちんぞう（方山ほうさん子し）もここで帰ることになった。別れに際して、5年の間に陳慥との交流の折々に詠んだ詩を書いて贈った。序文がある。

元豊げんほう三年正月、私は始めて黄州たくに謫せられた。

岐亭きていの北二十五里の山の上に至ると、白馬かさに乗り、青い蓋かさを連ねて迎えにきた

者がいた。私の古い知り合いの陳慥であった。陳慥のもとに留まること五日、一篇の詩を賦して去った。

明年正月、陳慥の家に会いに往った。陳慥は人を遣わして途中で私を労わり迎えてくれた。私は長らく殺生をしていなかった。陳慥が私を歓待するために殺生をするのではないかと恐れ、前の詩の韻を用いて詩を作り、陳慥に殺生を戒めた。陳慥はそれからは殺生をしなくなり、岐亭の人々にも見習う者が出て、肉を食べない者が多くなった。

その後、しばしば往って会い、往くたびに必ず詩を作った。詩は必ず前の韻を用いた。

私は黄州にあることをおよそ四年(足掛け五年)、岐亭に三回往って陳慥に会い、陳慥は七回来て私に会った。一緒にいたのはきつと百日余りになるであろう。

元豊七年四月、私は汝州じょに量移りょういとなり、長江わいが、淮河わいがを経て洛陽らくよう(汝州は洛陽に近い)に行くことになった。見送る者は慈湖じこまでで終わった。陳慥だけは九江きゅうこうまでできた。また前の韻を用いて詩を作った。

通算五篇としてこれを陳慥に贈る。

其の一

昨日は陰気な雲が重く垂れこめていた。

今日は東の風(春の風)が雪を融かして水にする。

遠くの林は木々がこんもりと暗い。

近くの家からは湿り気を帯びた煙が上がっている。

その下に俗世から隠れた君子がいて、

自得の境涯を楽しんで歌っている。

寒さを冒して私がやって来るのを知って、

酒を用意し、はなはだ意を傾けて迎えてくれる。

てのひら
掌を撫ぜただけで近隣の人々が動き、

村を巡ってがらう
鵝やら鴨やらを捕えてくる。

台所でがらう
鏘と器の音が響いていたかと思うと、

カーテン
幔幕を照らすばかりに野菜や果物が並べられる。

よもぎ
萋蒿はうまいものだと聞いてはいたが、

ここで初めてその新芽が赤いのを見る。

さかづき
盞を洗ってがらう
鵝黄(美酒の名)を酌み、

刀を磨いてゆうはく
熊白(熊の脂身のような美味な肉)を削る。

すくに私は酔い、座ったまま眠って被り物を落としてしまう。

醒めたのはもう夜中になろうというころ、

しゅうしゅう
唧唧と銅の瓶から湯の湧く音がしている。

黄州は遠いからどうかいいうのではない、

ただそこに友人がいらないのを恐れるのである。

しかし、ここに安心して一緒にあるじ
いられる主がいる。

主にとってもこのような客人はいないであろう。

静かなこの庵で朝を迎えると、
まわりにはただ山の峰が集まっているのが見えるだけだ。

(これは黄州に到着する直前の詩。ここで本章 32 ページの「方山子伝」^{ほうざんしでん}を見直すと、
2 人の出会いの場面の記述が若干異なっていることがわかる)

其の二

私は籃かごの中の蛤を哀れむ、
口を閉ざしてわずかに残った水を護ろうとしている。
私は網の中の魚も哀れむ、
口を開いてわずかな湿り気を吐いて身を濡らそうとしている。
蛤も魚も腸きを刳かれて苦痛を病む。
そのようなことをしたもてなしは、分を過ぎたものとして私はいただくことができない。
まだ会って寒暖の挨拶もしていないのに、
このことを私は是非とも頼むのである。

昔、盧懷慎ろかいしんは客人を迎えると、
あたかも鴨を蒸しているような音を、豆を煮る鍋で立たせたのだが、
客人は皆笑いを我慢し、ついには冪カーテンを開けて知れてしまった(貧乏暮らしが露見した)。

昔、王武子は毎回、刀を血で赤く濡らして食事の用意をし、
武帝ぶていを迎えたときには琉璃るりの盆に蒸した豚肉を載せて出した。

肉に白いものがかかっているので武帝が尋ねたところ、
 人の乳であるとの答えに、武帝は(気分を害して)中座して帰ってしまった。
 盧懷慎は貧乏であったけれども長生きをし、
 王武子は豪勢な暮らしをしたが死ぬ前から神を泣かせた。
 先生は万金の壁たまのような立派な人であるのに、
 ただこの蟻の一穴のような欠点(殺生)がある。
 一年も一回の夢のようなもの、
 百年の一生も一時の旅のようなもの。
 何が肝要であるのか——
 この詩篇を棄てずに、貴君の詩集の末尾にでも入れておいてくれたまえ。

(この詩は黄州に来た翌年の正月、本章 145 ページで見た「岐亭道上で梅花を見て戯
 れに季常に贈る」の詩と同じときの作である)

其の三

貴君の家には蜂が巣を作り、
 毎年たくさんの蜂蜜がとれる。
 私の身は、鼻を穿たれて縄を付けられた牛だ、
 舌を出していさか自身を潤おすことしかできない。
 二年の間に三度貴君の門を過り、
 この訪問は真に心に得るものがある。

貴君は昔の侠客の劇孟げきもうに似て、
緩急の際に門を叩けばすくに応じてくれる。

貴君の家には頬に紅をさした女性がいて、
上手りよくとうこうに「緑頭鴨」の曲を歌ってくれる。

すだれ簾を隔てて見ると、花のような霧がその髪にまわりついている。

貴君は私のために酒を取り、
親しく茶の包みを開いてくれ、
そして女性の白い手を煩わして茶を煎れてくれる。

楽しいかな、

貴君には何事もなく、
十年の間、頭にさく幘（正式な場でのかぶりもの）を載せることなく暮らしているのは。

門を閉ざして子供等と遊び、
孫の泣く声、笑う声が雑りあっている。

西の方では苦しい戦が行われていて、
よい将軍がいらないことに困っている。

貴君はしよかつこうめい（諸葛孔明）はちじん ずの八陣図を開いて、
攻守交替するありさまを論じる。

貴君自身が戦に行く必要はない、
ただ坐して兵法を教授すればよいのである。

（この詩は、黄州に来て2年目の冬、本章205ページで見た「牛尾狸を送られ徐使君ぎゆうびり じょしくん」

に与える」の詩と同じころの作で、このとき李常りじょうもきて3人で大いに酔ったようだ

其の四

酸っぱい酒は麴湯しうがヌーブのようであるし、

甘い酒は蜂蜜の汁のようである。

黄州の町に三年いて、

酒を飲んでも(ろくなのがないので)喉をちよいと湿らせるだけだ。

酒を選ぶことができたなら、

よく酔うことができるだろうにと、

いつも庄茅柴あつぼうさい(黄州の人々が私的に作る酒)を思うのだが、

密造酒の禁令は日夜厳しくなり、

西鄰りては役人に踏み込まれ、

ちょうど酔っていた主人は食事をひっくり返して逃げ、

酒を入れた甕かめは砕かれてしまった。

貴君の家はさほど大きくもなく、

壊れたところを覆う幕もないのに、

どこからこの酒を得ているのだろうか。

素面しらふの者は君が赤い顔をしているのを妬ましく見ている。

きっと世間の好事家が、

かの李白りはくに千石の酒を供したようなことを貴君にしているのだろう。

貴君のおかげで私も三日間酔うことができ、
ぼさぼさに乱れた頭に被り物を載せることもない。
夜更けになると、
隣の家の甕かめから酒の熟した音が漏れるの聞いて、
垣根を超えて盗みに行った昔の下僕のようなことをしてみたい気にもなる。
頭は禿げて歯が抜けるような年になってもこんなさまの私を見て、
貴君の召使たちにはさんざ笑われている。
三年の間にすでに四回ここにきて、
年々貴君はこの悪い客に遇っている。
人生は二つの履物はきものを履きつ、ぶす間のもの、
こうしてしばしばぐることを嫌わなideくれたまえ。
(この詩は、本章 347 ページで見た「黄泥坂こうでいはんの詞」と同じころの作であるという)

其の五

枯れた松から膏あぶらを採ることができただろうか。
檜かれた竹から汁がしたたることがあるだろうか。
枯れた松と檜れた竹とが出会い、
互いに哀れみ、互いに湿らせ合うことができただろうか。
私と貴君との交遊は、
一体何の得るところがあったのか。

幸いにも、心法しんぽう(仏教の真髓)を語り合うことができるのなら、

頭の上が燃えようかどうということはない。

願うのは、

雲を穿って飛ぶたか鶴となること。

人に食べられてしまう鴨にはなりたくない。

私の旅はすでに初夏に及び、

別れの酒を温める火が幔幕に映る。

我が故郷はどこか、

西を望めば千山が赤く染まっている。

私の遊たびはどこで終わるのか、

東には万頃ばんけいの広さに波が白く泛んでいる。

貴君との飲びが再びまたあるだろうか。

起って舞えば、花が頭に落ちてくる。

いま行こうとして、

苦しくて何も言えない。

だからといって、子供のように泣きはしない。

私にはもとより非とすべきことが多い。

貴君とて一つの欠点もない人間ではあるまい。

それぞれに別れの言葉を思い、

他の人々を退けて戸を閉ざし、

がらんとした部屋で向かい合う。

きょはく 虚白(何もない透明)は道(みち 最高の真理)の集まるどころ、

——もはや何も語らずにいよう。

(蘇軾の黄州での日々は、このようにして陳慥との出会いに始まり、陳慥のとの別れに終わり、ここに新たな游たびが始まったのである)